すぐに起こるはずのこと

ヨハネの黙示録　第1巻

ゴットホルド・ベック著

イエス・キリストの黙示。これは、
すぐに起こるはずの事をそのしもべたちに
示すため、神がキリストにお与えになった
ものである。そしてキリストは、その御使いを
遣わして、これをしもべヨハネにお告げになった。
（ヨハネの黙示録　1・1）

まえがき

ゴットホルド・ベック

ヨハネの黙示録は、初代教会の人々の間で何よりも大切にされました。しかし黙示録の内容と文章は、現代の私たちには難解なところがあり、誤解も多く、霊的に正しく読み解くことは、かなり困難になっています。しかし、この黙示録の中にこそ、末の世にある私たちにとって、何よりも必要なことが示されているのです。私たちはこの黙示録に、もっと注意を向け、深く深く読みこむべきではないでしょうか。

この本は、単に出版するためだけに書かれたものではなく、吉祥寺のキリスト集会で毎週火曜日に開かれている婦人のための学び会で、約1年半ほどの間に学んだヨハネの黙示録についてのメッセージの原稿をまとめて収録したもので、第1巻には初めの3章分が収められています。

このメッセージはカセット・テープにも収録されていて、藤本賢二さんのお父さんの藤本淳之助さんは天に召される寸前まで、このヨハネの黙示録のメッセージを毎日テープから聴き取って書き続けておられました。また、悩みを持ったキリスト集会の柿沼信子さんは、仕事で困難な状況に直面し、「主イエス様が早く来ないと困っちゃう」と言いました。このように毎日期待をもってイエス様を待ちのぞむ人々は、大いに祝福されます。

最近、交通事故で重傷を負われた清水総子さんから、次のようなお便りをいただきました。

「あまりに大きな主のご栄光を一人でも多くの方々に知っていただきたく、証しをいたします。

自分では書けませんので、主人の洋一に口で伝えて書いてもらいました。六月十三日、金曜日朝四時半、主人と私は車で福岡から御代田に向けてスタートしました。前日あまりよく眠れず、山口を過ぎたあたりで主人に運転を替わってもらいました。うつらうつらして目覚めたとき、小谷のドライブ・インの近くでした。休憩しようとドライブ・インに向かいましたが、車のスピードが落ちません。朝食の時間帯でもあり、ドライブ・インは車で混雑していました。突然、『ブレーキがわからない』という主人の声が聞こえ、私の中には祈りも叫びもありませんでした。アクセルを踏み切った状態で三台の車にぶつかり、四台目のトラックに斜めに突っ込むように激突しました。まず主人が運転席のドアを開けて外へでました。猛烈な勢いで白煙が噴き出しました。私はベルトを外し、体を外へ出そうとしましたが、自分の全身の機能が働かないことがわかりました。主人はなぜ私が外へ出ていかないのかわからず、うろうろしていました。声を出すのもやっとの中で、運転席から助手席のドア・ロックを外してもらい、引きずり降ろされるとき、あまりの痛みに『だれか助けて！』と叫んだのを覚えています。横たえられて、平らな地面に心から感謝しました。救急車が来るまでの間、ハレルヤ、主はすばらしい、という思いが行ったり来たりしていました。怪我をしたのは、私一人だけでした。救急車で運ばれた病院には、脳外科が備えられていました。しかもその日は十時から脳外科の手術が予定されていて、担当の先生がなぜか七時半には出勤しておられました。救急車が着くと同時に、手術予定の患者さんのために用意されたＭＲＩ、ＣＴ検査、脳波、Ｘ線検査などの全ての用意を私のために用いてくださり、ただちにドリルで頭の骨に穴が開けられ、そこに金具を取り付けて、牽引治療が始まりました。その治

療までの三時間半、生まれてから経験したことのない激痛に苦しんだ時間でした。特にＭＲＩの中での四十分は、苦しみの中でただ聖歌二二九番の「驚くばかりの恵みなり」を何十回となく、うめきながら賛美していました。

呼吸が止まる状況の中で、私は自分の全てが主に覆われていました。集中治療室に運ばれて、頭のボルトに五キロ半の重りがのせられ、首から下は傾斜をつけて、反対方向へ伸ばされました。

イエス様は三本の釘で打ちつけられましたが、私は二本でした。

イエス様は体重を支えるすべがありませんでしたが、私の下にはベッドがありました。

そしてイエス様は、苦みの葡萄液を私のために残されました。いま、朝に、昼に、夜に、その苦みでイエス様が共にいてくださいます。

『がんばらなくていい、この病院で一番のわがままでいい、私がこれをした』というイエス様の声が聞こえます。十三日には五キロ半だった重りが、十五日から八キロに増量されました。夕方の六時から朝の四時まで、激痛の中でもだえ苦しみました。涙も出ない痛みでした。四時にふと、イエス様の『もういいよ』という声が聞こえました。ナースコールを押して、『これ以上痛いと背骨がねじれます』と言いました。当直の看護婦さんが先生に電話をしてくださり、やっと痛み止めが処方されました。そして重りが七キロに減らされました。何というすばらしい喜び、平安、感謝……たった七キロと八キロの違いで、天国とこの世を体験しました。それからずっと、この部屋にイエス様がおられます。痛む時、イエス様が痛んでおられます。イエス様に包まれたこのすばらしさは、私にとって何ものにも代えられません。

救急車、警察や病院の方の話でも、私の他に人身事故が起こらなかったのは不思議だと言われました。最後の大型トラックとの衝突も、あと少し角度が違えば夫婦で即死だと言われました。エンジンが火を吹かなかったのも不思議だと言われました。それほどの衝突でありながら内臓の損傷も骨折もありません。主人は鞭打ち症にもなりません。すべてがイエス様の御手の内でした。

ここにこうして静まったとき、去年の暮れからイエス様が私に示してくださったスケジュールの意味が、一つ一つ見えてきました。

『あなたの家を整理せよ』。この御声を何度聞いたことでしょう。九州の家にあるものを、一つ一つ処分しました。今まで捨てられなかった食器、家具、思い出の品、衣類、全部捨てました。聖書と、聖歌と数冊の本以外、何も要らない。はっきりとわかりました。そこに、娘のめぐむの結婚問題が起こりました。娘のお相手の方を主は必ず救ってくださるとわかっていながら、そのお約束を心の片すみで信じきれていない自分がいました。

そんなとき、バンコクのよろこびの集いで、ベックさんとお話する機会がありました。聖書を読んでいて二年ほど前から、列王記の中の王が『高き所だけはそのままに残した』という所が気になっていました。主に従いながら、王が取り除かなかった『高き所』の意味が、わかりませんでした。『高き所』とは、高ぶりだろうか、ごう慢だろうかと、ずっと主に尋ねてきました。そのことをベックさんに聞いてみますと、『妥協だよ』とおっしゃいました。そして、『列王記を深く読んでごらん。王の母親の名は書かれているけれど、父親の名はほとんどないよ』ともおっしゃいました。それだけでしたが、耳鳴りがしました。母親の妥協が主の前にどのように罪になって

いくかを恐れました。

今度事故に会った旅行は、六月十三日中に御代田について、十四日はよろこびの集い、そして十五日にはめぐむのお相手のご一家の方々とお目にかかる予定でした。まだイエス様のことをご存じない方々ですので、救いを切実に祈るとともに、『主よ、あなたが全てをご支配ください。私はどうしたらいいかわかりません。お助けください。私自身はどうなってもかまいません』と祈り続けてきました。『大切な娘が、本当に必要な主の祝福を得られないまま、結婚式をあげようとしています。今、娘のめぐむにただ一つ必要なのは、イエス様の愛だけです。あなたが喜ばれないのでしたら、私を止めてください』と祈っていました。

この事故は、完全な主のご愛です。私はその栄光を見ました。私は車からひきずり出された時、目は開けられないのに、全てが輝いていました。そして主の足元に、小さな輝くハンカチのような布に包まれためぐむを見ました。今、主の全てを確信できます。

ベックさんにお願いがあります。めぐむから結婚式の日取りを変えてもよいと主人に連絡がありました。私は、この病院の、主の栄光がみちている所で、めぐむの結婚式に立ち会いたいです。ベックさん、何とか一日ご都合をおつけください。主が許されれば、両方の小さな家族だけで式が挙げられます。この病院のある西条の地は、私と主人の洋一にとって、イエス様の命だけで歩み始めたエデンです。めぐむも、ここからスタートしてほしい！

主の御心が成るように祈りつつ……。

追伸　頚椎がうまく脊椎の場所に降りてきています。みんなの顔が見たいよう～。」

こういう心構えがあれば、もう十分です。どういう状況にあっても、このような心構えを持つ人は、幸せではないでしょうか。

イエス様と共にあり、イエス様を待ち望む人々には、大きな大きな祝福が、用意されているのです。

目次

すぐに起こるはずのこと　ヨハネの黙示録　（第1巻）

まえがき……ゴットホルド・ベック　6

第1部　（黙示録対応章・節）

1　イエス・キリストの黙示……15
2　天に秘密をあらわすひとりの神……1・1～3……35
3　主なる神のあいさつ……1・4～8……46
4　パトモスで与えられた幻……1・9～20……62

第2部

1　七つの教会への手紙……97
2　初めの愛とエペソの教会……2・1～7……130

3　苦難に会うように定められていたスミルナの教会……2・8〜11……181
4　世俗化したペルガモの教会……2・12〜17……211
5　霊を見分けることを示されたテアテラの教会……2・18〜29……240
6　実は死んでいるサルデスの教会……3・1〜6……280
7　勝利を得る者の誉れフィラデルフィヤの教会……3・7〜13……312
8　満足し、自信を持っている
　　イエス様なしのラオデキヤの教会……3・14〜22……347

写真特集　よろこびの集い　トロントーシアトルーバンクーバー（カラーページ）……161

基礎的なみことば……392
「実を結ぶ命」「光よあれ」「神の愛」「絶えず祈れ」のおすすめ……394
キリスト集会、家庭集会のご案内……400

第1部

1　イエス・キリストの黙示

1　黙示録の概略
1　著者
2　書かれた時代
3　受けとり手
4　特徴
5　解釈の方法
6　目的
7　内容
2　十の賛美の歌

この本で、ヨハネの黙示録を皆さまとごいっしょに学んでいきたいと思います。しかしこの学びは、決して私たちの好奇心を満足させるためではありません。また、記された預言によって将来を占うためでもありません。もちろん、いくつかの預言や未来について記されていることがらは、知る価値が十分にあるでしょう。しかし、これらをあまり強調しすぎると私たちは律法的になったり、自分の努力や力に頼るようになり、それは大変危険なことです。大切なのは、まず何よりもイエス様ご自身であり、次に私たちのうちにおられるイエス様であり、そして、同じ信仰を持つ者同士、兄弟姉妹のうちにおられるイエス様です。

ヨハネがまず最初に見たのは、来るべき将来のことではなく、イエス様ご自身でした。イエス様の啓示によって、ヨハネはちりの中に倒れ伏してしまいました。私たちもまた、このような経験をしなければなりません。このような啓示を受けてはじめて、私たちはイエス様のために戦う者となることができるのです。イエス様を仰ぎ見て、戦いのための備えをすることができるのです。イエス様こそが、私たちのすべての問題の解決ですから、私たちはまず何よりもイエス様についてはっきりと知らなければなりません。そしてはじめて、将来のこともはっきりと見ることができるようになります。イエス様は復活なさったお方であり、勝利を得られた王の王です。ですから、これから起こる将来のすべてのことは、イエス様が主であられることの結果です。

この黙示録が書かれた目的は、まず何よりもイエス様の偉大さを証しすることです。ですから、黙示録の中にでてくる七つの封印や七つのラッパ、七つの災害などについてあれこれと議論するよりも、イエス様の偉大さをはっきりと知ることの方がはるかに大切です。

福音書の中で、私たちは救い主としてのイエス様を知りましたが、黙示録では、王の王、主としてのイエス様を知るようになります。

福音書では、イエス様の愛を知りましたが、黙示録では、イエス様の真の偉大さを知るようになります。

福音書では、イエス様の優しい眼差しに出会ってペテロは泣きました。しかし、黙示録では、ヨハネはイエス様の燃える炎のような目に出会って、死人のようになったのです。

福音書で、ご自分の群れをお呼びになったイエス様は、黙示録では、剣のように恐ろしい声でお語りになります。

福音書では、イエス様は小羊であり救い主と呼ばれましたが、黙示録では、イエス様は王の王であり、裁き主と呼ばれます。

黙示録は、イエス様の「大いなる戦い」を伝えています。イエス様の支配に対して反抗するものに、イエス様の戦いが宣告されているのです。黙示録の目的は、天のみ座におられて全てを支配なさるイエス様を証しすることです。

ですから、あなたがたは、心を引き締め、身を慎み、イエス・キリストの現われのとき
あなたがたにもたらされる恵みを、ひたすら待ち望みなさい。　（Ⅰペテロ　1・13）

このみことばの意味は、「イエス・キリストの現われがこの世における唯一の望みであることを真剣に受けとめなさい」ということです。黙示録は、復活され、天に引き上げられた「イエス

様の啓示」です。イエス様は世界の支配権を持っておられます。黙示録が書かれたのは、私たちがこのようなイエス様に目を向けるためです。ヨハネはイエス様の足元にひれ伏しました。私たちもまたこのような態度をとらなければなりません。このような態度をとるとき、私たちはイエス様をよりよく知ることができ、そのことによって自分の内側が変えられていくのを体験するのです。このようにして私たちは、兄弟姉妹としてのより親しい交わりを持つことができ、イエス様の再臨に対しての備えができるのです。

ダマスコへの途上で、パウロにイエス様が「現われ」られたとき、それは彼にとって「啓示」そのものでした。

私はそれを人間からは受けなかったし、また教えられもしませんでした。ただイエス・キリストの啓示によって受けたのです。（ガラテヤ　1・12）

この「啓示」を知らない人、つまり、みことばによってイエス・キリストが主であることを知らされたのでない人々は、主イエス様を本当の意味で知っているとは言えないでしょう。

ではこれから、黙示録について七つの点から考えてみましょう。

1　黙示録の概略

1　著者

まず最初に、黙示録の著者について考えてみましょう。

イエス・キリストの黙示。これは、すぐに起こるはずの事をそのしもべたちに示すため、神がキリストにお与えになったものである。そしてキリストは、その御使いを遣わして、これをしもべヨハネにお告げになった。（黙示　1・1）

ヨハネから、アジヤにある七つの教会へ。常にいまし、昔いまし、後にこられる方から、また、その御座の前におられる七つの御霊から。（黙示　1・4）

私ヨハネは、あなたがたの兄弟であり、あなたがたとともにイエスにある苦難と御国と忍耐とにあずかっている者であって、神のことばとイエスのあかしとのゆえに、パトモスという島にいた。（黙示　1・9）

これらのことを聞き、また見たのは私ヨハネである。私が聞き、また見たとき、それらのことを示してくれた御使いの足もとに、ひれ伏して拝もうとした。（黙示　22・8）

黙示録の著者は、いつも自分のことを「私ヨハネ」と名乗っています。このヨハネがイエス様の弟子であり、使徒ヨハネであったことは疑いありません。その当時、ヨハネという名前の人はほかにもいたのですが、パトモスという島に流されていたのはこのヨハネだけでした。古代教会の言い伝えによれば、この事実について疑いを持つ人は一人もいませんでした。

また二世紀の初め頃には、黙示録ほど熱心に読まれた書物はなかったと言われています。これもまた、黙示録の著者が弟子のヨハネだったもう一つの証明になると思います。もし著者がヨハネでなければ、それほど熱心に読まれることはなかったでしょう。

テルトゥリアンという教父の伝えるところによれば、ローマ皇帝ドミティアンはヨハネを尋問し、棒でたたき、煮立った油で痛め、パトモスへ流刑にしたということです。ヨハネは黙示録17章において、七つの山に建てられた都について語っていますが、これはローマのことです。ヨハネはこの七つの山の富について語り、また、ここで多くの血が流されたことについて語っています。ヨハネは将来のできごとについて語っていますが、その背後には彼自身がその当時受けていた苦しい迫害があったのです。

2　書かれた時代

二番目に、黙示録が書かれた時代について考えてみたいと思います。この黙示録が書かれたのは、紀元九十五年でした。皇帝ドミティアンは紀元八十一年から九十六年までローマ皇帝として

君臨していました。黙示録の2、3章の記述から、それまでにもすでに迫害がくわえられ、殉教者がでていたことがわかります。ヨハネは、まもなくイエス・キリストを信じる人々に対する大迫害が起ころうとしていることを知っていました。すでに、主を信じる信仰者とローマ帝国との衝突が始まっていたのです。キリストを信仰することと、皇帝をあがめることとは両立しなかったのです。特に13章において、私たちは皇帝崇拝に対する戦いがあったことを知ることができます。これより以前、皇帝ネロ（紀元五十四～六十八年）もクリスチャンを迫害しましたが、それはローマ帝国内だけに限られた、地域的な迫害でした。それに、ネロが迫害した理由は、クリスチャン達が彼を崇拝しなかったからではありませんでした。初めて皇帝崇拝をクリスチャン達にも要求したのは、ドミティアンの時代からです。黙示録の中で取り扱われている一つの大きな問題は、「崇拝を受けるべきお方は誰か」、「礼拝を受けるべきお方は誰か」ということです。黙示録の中で、「崇拝」という言葉は二十四回でてきます。この対象が、獣、すなわち悪魔であるのか、それとも小羊、つまりイエス様であるのかが問題なのです。ドミティアンは自分に対する崇拝を強要した最初の皇帝でした。このことから、ヨハネはまったく新しい時代が近づきつつあるのを見てとったのです。そこで、ヨハネは当時のクリスチャン達にそのための備えをさせようとしたのです。

3　受けとり手

第三に黙示録の受けとり手について考えてみましょう。小アジアにある七つの教会が、まず最

初の受けとり手でした。ヨハネは自分の最後の奉仕をこれらの七つの教会のために捧げたのです。「七」という数字はいつも完全をあらわす数字です。したがって私たちは、黙示録が当時の七つの教会にあてられただけでなく、あらゆる時代のあらゆる国の教会にあてられていることを知ります。七つの教会は、全教会史を通して出てくるあらゆる教会を代表しています。七つの教会はほとんど似通ったところに建てられていて、たとえば、ラオデキヤの教会とペルガモの教会とは二二五キロメートルしか離れていませんでした。しかもこの地方は当時の文化の中心であり、また、商業とあらゆる宗教の中心地でもありました。ペルガモ、エペソ、スミルナの町々は、ローマ皇帝のために神殿を建設する特権を与えられていました。エペソは、たちまちにしてローマ皇帝に忠実な町となり、神殿の守護者となったのです。

パウロは三年間エペソで働きました。エペソは異邦人の町であったばかりでなく、キリスト者が大勢いる町でもありました。エペソにおけるキリスト者の数が次第に増加したので、エペソにある異邦人の神殿はだんだん荒れ廃れてしまったと伝えられています。

その当時、エペソにいたキリスト者にとっての危険は、異邦人の敵対的態度からくるものではなく、逆に人々の寛容な態度からくるものでした。人々はキリスト者に対して非常に寛容な態度をとりましたが、また同時にキリスト者からも寛容な態度を期待したのです。しかし、ここに危険がありました。「妥協」という危険です。従って、黙示録は偽使徒について（黙示2・2）、偽ユダヤ人について（黙示2・9、3・9）、偽預言者について（黙示2・20）、見せかけの生活について（黙示3・1）、うわべだけの豊かさについて（黙示3・17）、警告しているのです。教会

は、その周辺の人々に対して「見せかけの教会」であってはならないのです。

4　特徴

第四の黙示録の特徴について考えてみましょう。黙示録はすべての預言書の最後に位置する預言書です。私たちが創世記と黙示録を比較してみるとき、このことがはっきりします。

創世記では、天地の創造が行なわれましたが、黙示録では、天地が消え去り、新天新地の創造が語られています。

創世記では、太陽と月の創造がありますが、黙示録では、これらのものが消え去ります。

創世記では、人間の住む所はエデンの園ですが、黙示録では、天の都です。

創世記では、アダムの婚姻について書かれていますが、黙示録では、第二のアダム、すなわち主イエスの婚姻について書かれています。

創世記では、サタンの出現が語られていますが、黙示録では、サタンへの最終的な裁きのことが語られています。

創世記では、苦しみの始まりが語られ、黙示録では、もはや涙のないことが語られています。

創世記では、罪の呪いが語られ、黙示録では、呪いが取り除かれたことが語られています。

創世記では、人がいのちの木から遠ざけられたことが記され、黙示録では、人が再びいのちの木へと導かれるべきことが記されています。

創世記では、アダムとエバはキリストと教会を象徴するものとして記され、黙示録では、キリ

ストが花嫁である教会と一つになるべきことが記されています。

創世記では、罪のはじまりのことが記され、黙示録では、罪が取り除かれたことが記されています。

創世記では、人が自分の名をすべてのものの上に置こうとしたことが記され、黙示録では、神の御名がすべてのものの上に置かれるべきことが記されています。

黙示録は新約聖書の他の手紙と同じように、その当時のキリスト者の多くの問題に対する答えとして書かれたものです。そして黙示録には、今日の私たちに対しても当てはまることが記されています。黙示録の主題は、あらゆる時代のあらゆる国民にあてはまるのです。

黙示録は旧約聖書全体を背景に持っていますが、旧約聖書のどの箇所から引用されたか、ということは特に記されていません。黙示録は全体で四百四節ありますが、旧約聖書からの引用は約六百箇所あると言われています。イザヤ書から約百十箇所、詩篇から約百箇所、ダニエル書から約七十箇所、エゼキエル書から約六十箇所、ゼカリヤ書から約三十箇所です。黙示録では、これらの旧約聖書の箇所は、大胆にも省略されたり、補足されたり、ほかの言葉とつなぎ合わされたりして、自由に引用されています。しかし、旧約聖書からの引用がこれほど多くの箇所にわたっているにもかかわらず、黙示録はそれ自身でまったく独自の新しい書物となっているのです。

黙示録はかつてなされた神の約束の成就の書物でもあり、また、来るべき約束の成就の書物でもあります。ちょうど、種から育った木が実りをつけるように、預言よりも預言の成就こそが実りです。この意味で、約束の成就を記している黙示録は、私たちに豊かな実りを約束するものと

いえるでしょう。

さらに、黙示録のもう一つの特徴として、繰り返し「主の日」について語られていることがあげられます。この「主の日」とは戦いの日のことです。この日には、主がその敵を打ち負かしてくださるのです。以上が、黙示録の主な特徴です。

5　解釈の方法

第五に私たちは、黙示録の解釈の仕方について考えてみましょう。黙示録はすべての人のために解き明かされなければならない書物だと言えます。二世紀の頃には黙示録ほど広く伝えられ、また愛された書物はなかったほどだったにもかかわらず、今日、主の次のご命令が守られることがいかに少ないことでしょう。

「この書の預言のことばを封じてはいけない。」（黙示　22・10）

黙示録の解釈にはいくつかの方法がありますが、ここではおもに四つの方法についてみてみましょう。

第一の解釈の方法は、霊的な解釈の方法です。この場合にはすべての事柄は文字どおりには解釈されないで、常に象徴的、霊的な解釈がなされます。これによると、黙示録の主な内容はあらゆる時代の教会の、悪魔に対する戦いであるということになります。

第二の解釈の方法は、黙示録に記されているあらゆる事柄が、すでに起こった過去の事柄であ

る、というものです。従って、例えば6～11章のできごとは、ネロ時代にキリスト者が実際に体験したことになります。もしそうなら、これはすでに過去に起こってしまったことなので、もはや私たちが未来にこのようなできごとを予想する必要はないということになります。

第三の解釈の方法は、黙示録に記されているあらゆるできごとは、今まさに起ころうとしていることである、と解釈するものです。この方法によれば、黙示録に記されていることは、皇帝ネロの時代からこの世の終わりに至るまでのできごとである、ということになります。このような解釈をとる人々は、黙示録のあらゆるできごとに対して、歴史上の事件をすべて当てはめて解釈しようとします。例えば宗教改革、第一次世界大戦、また第二次世界大戦が黙示録の特定の記事に結びつけられます。この方法によって、これらの人々は千年王国がいつ始まるかを計算しようとします。今までに二百種類に及ぶ年表が計算されてきましたが、これらすべての計算は、一度も実際と合致することがありませんでした。

第四の方法は、終末論的な解釈の仕方です。この解釈によれば、4～22章のできごとは、すべてまだ起こっていない、ということになります。1～3章までに記されていることは、おもに地上の教会に対して語られたものであり、4、5章は、天にある教会について語られています。そこに登場する二十四人の長老とは、使徒時代から新約時代にわたって天にあげられた信者たちのことです。従って、いわゆる教会の携挙は3章と4章の間で行なわれていることになります。そして、4章から19章にいたるすべてのできごとは、実は、きわめて短い期間のできごとを記していることになります。この期間は、教会時代の終わりからイエス・キリストの再臨にいたるまで

の間ですが、それはたぶん七年間ぐらいであると思われます。

以上四つの解釈の方法にはそれぞれに真理の一面が含まれていると思われますが、私は最後の終末論的解釈が正しい解釈だと信じています。

6　目的

六番目に、黙示録が書かれた目的について振り返ってみましょう。当時、小アジアにある諸教会では、信者たちが苦難に対しての備えをするために、確固とした信仰の基礎に立つことと目を醒ますこととが求められていました。黙示録は繰り返して、「小羊である主イエスに従い通す者は勝利に導かれる」といっています。「小羊」という言葉は、黙示録に二十八回でてきます。小羊なるイエス様は、再びこの地上に来られますが、それは罪の問題を解決するためにではなく、ご自身の権威を明らかにするために来られるのです。イエス様は、教会を建てるために再び来られるのではなく、新しい天と新しい地とを創造されるために来られるのです。ですから、黙示録が私たちに伝えてくれるのは、「イエス様が再び来られる」ということと、「イエス様が唯一の支配者である」ということです。

イエス様は、クリスチャン達の苦難と試練のまっただ中において、ご自身が再び来られること、そしてご自身が唯一の支配者であることを、主を信じる人々に啓示されたのです。

彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。

（黙示　21・4）

もはや、のろわれるものは何もない。神と小羊との御座が都の中にあって、そのしもべたちは神に仕え、…もはや夜がない。神である主が彼らを照らされるので、…

（黙示　22・3、5）

神の都には悲しみも苦しみももはや存在せず、主のしもべたちは主に仕え、主が永久に支配者となられることが約束されているのです。

「黙示録はイエス様のことを何と言っているのだろうか」。私たちがこのように問い続けながら黙示録を読むならば、私たちはいつも黙示録から啓示を受けることができます。

イエス様は、神の国の王であり、裁き主であり、世界の支配者であるお方です。イエス様は隠れたことを明らかにすることがおできになるただひとりのお方です。なぜならば、イエス様はすでに暗闇を通られたからです。黙示録は私たちに、混沌の中にも隠されている光があることを示しています。人間は混沌の中にあっても、やすらぎを与えられています。これが黙示録の主題なのです。イエス様はすべてを超越しておられますが、それでも、小さな私たちのことをもよく考えていてくださるお方なのです。

7　内容

七番目に、黙示録の内容について考えてみましょう。黙示録は三つの部分に大別して考えるこ

とができます。

「そこで、あなたの見た事、今ある事、この後に起こる事を書きしるせ。」
（黙示　1・19）

第一の部分は、ヨハネが見たこと、つまり1章に記されている、天に上げられたイエス様のことです。イエス様は1章では「裁き主」として記されています。

第二の部分は、ヨハネが現に見ていたことです。これは2章と3章に記されています。ここでイエス様は「教会の審判者」、また、「教会の主」として記されています。

第三の部分は、ヨハネが見た、後に起こるべき事柄です。これは4章から22章までに記されています。ここにおいて、私たちは「勝利をおさめられた主」としてのイエス・キリストを見ることができます。

また私たちは、この黙示録を別の仕方で分けてみることもできます。第一に、「恵みの啓示」としての部分です。これはイエス様ご自身の啓示のことであり、1章9節から3章22節までです。

第二に、「支配の啓示」としての部分です。つまり、すべてを統べ治められるイエス様のことであり、これは、4章から19章10節までです。

第三に、「栄光の啓示」としての部分で、すべてのすべてとしてのイエス様のことが記されています。これは、21章と22章に記されています。

黙示録から、将来起こるべきできごとのすべてを知ろうとするならば、それは非常に難しいこ

とでしょう。しかし、私たちがキリスト者として今日どのような態度をとるべきかを知ろうとするなら、黙示録は、それをはっきりと示していることがわかるでしょう。黙示録は「目をさましていなさい。イエス様は今日にもこられるかも知れないから。」と告げています。イエス様を待ち望んでいる人たちは、この世で最も幸せな人々です。私たちの主がおいでになる、という勝利の歌が私たちの心に満ちあふれていなければなりません。黙示録ほど、悪魔の力と、その手段について詳しく記している箇所はほかにありません。しかし、私たちは天に上げられた神の小羊であるイエス様が、悪魔をはるかに越えておられることを見るのです。イエス様はご自身に対して企てられるいかなる悪魔の反抗も、ことごとく滅ぼしてしまわれます。ですから、黙示録全体を通して、イエス様の前に捧げられる礼拝と賛美は絶えないのです。

2　十の賛美の歌

最後に、黙示録に記されている、「イエス様に捧げられた十の賛美の歌」をごいっしょに読んで、私たちも主を賛美しましょう。

第一の賛美の歌

イエス・キリストは私たちを愛して、その血によって私たちを罪から解き放ち、また、私たちを王国とし、ご自分の父である神のために祭司としてくださった方である。キリストに栄光と力とが、とこしえにあるように。アーメン。　（黙示　1・5、6）

第二の賛美の歌

聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな。神であられる主、万物の支配者、昔いまし、常にいまし、後に来られる方。（黙示　4・8）

主よ。われらの神よ。あなたは、栄光と誉れと力とを受けるにふさわしい方です。あなたは万物を創造し、あなたのみこころゆえに、万物は存在し、また創造されたのですから。（黙示　4・11）

第三の賛美の歌

あなたは、巻き物を受け取って、その封印を解くのにふさわしい方です。あなたは、ほふられて、その血により、あらゆる部族、国語、民族、国民の中から、神のために人々を贖い、私たちの神のために、この人々を王国とし、祭司とされました。彼らは地上を治めるのです。（黙示　5・9、10）

第四の賛美の歌

ほふられた小羊は、力と、富と、知恵と、勢いと、誉れと、栄光と、賛美を受けるにふさわしい方です。（黙示　5・12）

御座にすわる方と、小羊とに、賛美と誉れと栄光と力が永遠にあるように。
（黙示　5・13）

救いは、御座にある私たちの神にあり、小羊にある。
（黙示　7・10）

第五の賛美の歌

アーメン。賛美と栄光と知恵と感謝と誉れと力と勢いが、永遠に私たちの神にあるように。アーメン。
（黙示　7・12）

この世の国は私たちの主およびそのキリストのものとなった。主は永遠に支配される。
（黙示　11・15）

第六の賛美の歌

万物の支配者、常にいまし、昔います神である主。あなたが、その偉大な力を働かせて、王となられたことを感謝します。諸国の民は怒りました。しかし、あなたの御怒りの日が来ました。死者のさばかれる時、あなたのしもべである預言者たち、聖徒たち、また小さい者も大きい者もすべてあなたの御名を恐れかしこむ者たちに報いの与えられる時、地を滅ぼす者どもの滅ぼされる時です。
（黙示　11・17、18）

第七の賛美の歌

今や、私たちの神の救いと力と国と、また、神のキリストの権威が現われた。私たちの兄弟たちの告発者、日夜彼らを私たちの神の御前で訴えている者が投げ落とされたからである。兄弟たちは、小羊の血と、自分たちのあかしのことばのゆえに彼に打ち勝った。彼らは死に至るまでもいのちを惜しまなかった。それゆえ、天とその中に住む者たち。喜びなさい。しかし、地と海とには、わざわいが来る。悪魔が自分の時の短いことを知り、激しく怒って、そこに下ったからである。（黙示　12・10～12）

第八の賛美の歌

あなたのみわざは偉大であり、驚くべきものです。主よ。万物の支配者である神よ。あなたの道は正しく、真実です。もろもろの民の王よ。主よ。だれかあなたを恐れず、御名をほめたたえない者があるでしょうか。ただあなただけが、聖なる方です。すべての国々の民は来て、あなたの御前にひれ伏します。あなたの正しいさばきが、明らかにされたからです。（黙示　15・3、4）

第九の賛美の歌

ハレルヤ。救い、栄光、力は、われらの神のもの。神のさばきは真実で、正しいからで

7　主のために苦難を負うこと

第七に、神のしもべたちとは、イエス様のために苦難を負う人々です。1章9節に、ヨハネ自身も「イエスにある苦難と御国と忍耐とにあずかっている者」であると言っています。

ここまでごいっしょに学んできましたように、私たちはこれらの「神のしもべの特徴」に照らして、自分たちがどうであるかを考えてみるべきです。私たちはただ救われただけでは十分ではありません。私たちは「神のしもべ」となって、イエス様に用いられる者とならなければならないのです。

黙示録は、世界の歴史が決して偶然によってつくられたものではなく、すべてが神によって導かれていることを示しています。私たちの目には悪が勝利をおさめているかのように思われることがあるかも知れませんが、神のみことばによって、私たちは、この悪の世の中においても神がすべてを支配なさっておられることを知ります。すべての人々は、結局はイエス様の足元にひれ伏すことになるのです。

黙示録1章1節に、この黙示は神の御使いによって告げられたことが記されています。イエス様の誕生もまた、御使いを通して告げられました。イエス様の荒野での試みの時にも、御使いがそば近くにつき従っていました。ゲッセマネの祈りの時、イエス様は御使いに励まされたことが記されていますし、イエス様の復活の朝に、イエス様の復活を証ししたのも御使いでした。御使

いが遣わされたのはいつもイエス様に仕えるためであり、また、イエス様にとっての神の道具としてでした。しかし、黙示録では、イエス様ご自身が啓示を与えておられるのです。イエス様ご自身がヨハネの頭に手をおかれ、教会のまっただ中を歩かれ、また、教会の中の信者たちと交わりをお持ちになっておられるのです。新約聖書全体には御使いについての記述が百七十五箇所あり、黙示録では御使いについて六十七箇所の記述があります。しかし、神がご自身をお現わしになられるのは、常にイエス様を通してであって、御使いを通してではありません。

2　黙示録の特徴

黙示録の特徴は、神のみことばとイエス様の証しと預言のみことばによって書かれていることです。ですから黙示録は、ヨハネ自身の思想を記したものではなく、ヨハネが見たこと、聞いたことを証ししているのです。この書物の目的は、祝福を与えることです。ですから、そのために三つのことが要求されています。読むこと、聞くこと、守ることです。黙示録全体を通読するためには、一時間と十五分もあれば十分です。しかし、ただ読み流すだけではなく、読んだ後、正しく聞くことを学ばなければなりません。正しく聞くことから、みことばを守ることがはじまるのです。

しかしマリヤは、これらのことをすべて心に納めて、思いを巡らしていた。…母はこれらのことをみな、心に留めておいた。（ルカ　2・19、51）

「見よ。わたしはすぐに来る。この書の預言のことばを堅く守る者は、幸いである。」
（黙示　22・7）

あなたに罪を犯さないため、私は、あなたのことばを心にたくわえました。
（詩篇　119・11）

黙示録1章3節に、「時が近づいているから…」とあります。ギリシャ語では「時」を表すために二つの言葉があります。一つは「クロノス」です。「クロノス」と言うときには、時間の長さを表します。もう一つの言葉は「カイロス」です。「カイロス」はある特定の時点をさす場合に使います。黙示録で「時が近づいている」というとき、この時は「特定の時」を表わす「カイロス」が使われています。この特定の時とは、神の支配が完全に実現されるその時を指しているのです。その時とは、イエス様の再臨の時です。イエス様が再臨なさり、信者たちをご自身のみもとに引き上げられる日は、今日であるかも知れません。黙示録を通して主は、私たちもまたイエス様を待ち望むものとなることを願っておられるのです。

3　黙示録の目的

今まで学んできたことをまとめますと、黙示録には、三つの目的があります。

第一の目的は、私たちが悪魔と罪とこの世によって盲目にされないで、すべてのものをはっき

りと見ることができるように私たちを備えさせることです。サタンとその道具とを明らかにすることが、黙示録の書かれた目的です。

第二の目的は、私たち信者にイエス様への服従の道を守るように勧めることです。そのために黙示録の中では、信仰、忍耐、忠実という言葉が繰り返しでてきます。

第三の目的は、私たちにイエス様の勝利を見せることです。いまは私たちには悪魔の勝利しか見えないかも知れません。しかしその中にも、隠されているイエス様の勝利があるのです。イエス様の御座が集会の中心に、また、私たちの生活の中心になければなりません。イエス様のご支配こそが黙示録の中心的な主題です。

イエス様が私たちの心の内に住んでくださることは大切です。しかし、それだけでなく、主が私たちのすべての生活の支配者となってくださらなければなりません。大部分の信者はこのことを望んでいません。大部分の信者は自分が困った時、必要な時だけイエス様を呼び求めますが、自分自身の支配権を主に明け渡すことを望んでいません。

私たちの生活のうち、ほんのわずかでも主に捧げられていない部分があるならば、それは悪魔がつけいる絶好のすきになります。もしイエス・キリストが、私たちの主として私たちを本当に支配し、導き、満たすことがおできになるなら、私たちの生活は祝福され、実を結ぶものになります。

3　主なる神のあいさつ

黙示録1章4節から8節まで

1　イエス様の人格についての事実
　1　忠実な証し人
　2　死者の中から最初によみがえられた方
　3　地上の王たちの支配者

2　イエス様のみわざへの賛美
　1　イエス様が私たちを愛してくださった
　2　イエス様が私たちを罪から解き放ってくださった
　3　イエス様が私たちを王とし、祭司としてくださった

3　イエス様の再臨への備え

この章で学ぶ黙示録の1章4節から8節までは、黙示録の「あいさつ」に当たるところです。黙示録の受けとり手はアジアにある七つの教会でした。その当時小アジアには七つ以上の教会がありました。しかし七つの教会を語ることによって、実はすべての教会のことが述べられているのです。「七」という数字は完全を意味する数字です。黙示録の中には七という数字は五十四回出てきます。その当時のすべての教会は、まことの主から離れてこの世の王に仕える危険を持っていたのです。

[4]ヨハネから、アジヤにある七つの教会へ。常にいまし、昔いまし、後に来られる方から、また、その御座の前におられる七つの御霊から、[5]また、忠実な証人、死者の中から最初によみがえられた方、地上の王たちの支配者であるイエス・キリストから、恵みと平安が、あなたがたにあるように。イエス・キリストは私たちを愛して、その血によって私たちを[6]罪から解き放ち、また、私たちを王国とし、ご自分の父である神のために祭司としてくださった方である。キリストに栄光と力とが、とこしえにあるように。アーメン。[7]見よ、彼が、雲に乗って来られる。すべての目、ことに彼を突き刺した者たちが、彼を見る。地上の諸族はみな、彼のゆえに嘆く。しかり。アーメン。神である主、常にいまし、昔いまし、後に来られる方、万物の支配者がこう言われる。「わたしはアルファであり、オメガである。」

（黙示　1・4～8）

ヨハネは、当時の主にある兄弟姉妹、教会に恵みと平安とを祈り求めました。はじめに恵みが

求められ、その次に平安が祈られていますが、この順序は大切です。恵みの体験なしには本当の平安もありません。恵みの体験は、「自分の罪が赦されている」という確信によって与えられるものです。恵みと平安とは、値なしに与えられるものです。これらは、昔いまし、後にこられる方から与えられるものです。このお方は、出エジプト記3章14節に「わたしはある。」と言われたお方なのです。神はいつでも「わたしはある。」と言われるお方です。神にくらべれば、この世の王などはないに等しいものです。絶対の存在であり、永遠にあるお方です。この常にいますお方は万物の支配者です。すべての者をみ手の内におさめておられるお方です。このお方には、おできにならないことは何一つありません。この方は途方にくれることもなく、弱り果てることもなく、行き詰まることもありません。この万物の支配者である主なる神が、私たちに「恵みと平安を与えよう」と言っておられるのです。

4節にある「七つの御霊」という言葉は、「一つの御霊」の満たしを意味しています。エペソ人への手紙4章4節に「御霊は一つです。」と書いてあります。七という数字は完全を意味する数字ですから、七つの御霊とは、ひとりの神のいろいろな姿の現われ方を意味しています。イザヤによれば主の霊の現われ方は七通りあることがわかります。

その上に、主の霊がとどまる。それは知恵と悟りの霊、はかりごとと能力の霊、主を知る知識と主を恐れる霊である。（イザヤ　11・2）

黙示録を見ますと、問題に満ちている教会の上に、神の御霊の満たしが現われていることがわ

かります。問題の満ちるところに、神の霊が満たされるのです。ですから、主なる神の御霊が力強く働かれるところにおいては、私たちの問題もまた解決されていくことがわかります。

1　イエス様の人格についての事実

黙示録のあいさつは、父なる神、子なる神、聖霊なる神からのあいさつです。そしてその中で、特にイエス様の人格と、イエス様のみわざがほめ賛えられています。イエス様の人格とそのみわざについては三つのことが言われています。まず、第一に、「忠実な証し人」であり、第二に、「死者の中からよみがえられた方」であり、第三に、「地上の王たちの支配者」です。

1　忠実な証し人

まず第一に、「忠実な証し人」としてのイエス様のことを考えてみましょう。イエス様は私たちへの証し人として父なる神のみ前にお立ちになってくださいます。イエス様は私たちへの愛のゆえに、私たちの罪をあがなうために十字架について死んでくださったのです。イエス様の血潮は、イエス様が十字架の死にいたるまでも父なる神に忠実であられたことを証明しています。イエス様に特徴的なことは、死にいたるまでも父なる神に忠実であられたということです。

2　死者の中から最初によみがえられた方

「最初によみがえられた」ということは、支配権を与えられているということです。特にご自

身の後から生まれてくる兄弟姉妹たちに対して支配権を持っておられることを意味します。

なぜなら、神は、あらかじめ知っておられる人々を、御子のかたちと同じ姿にあらかじめ定められたからです。それは、御子が多くの兄弟たちの中で長子となられるためです。

（ローマ8・29）

イエス様は教会のかしらであり、多くの兄弟姉妹たちの長子なのです。

3　地上の王たちの支配者

神とサタンとの戦いは、目に見えない世界で行なわれています。私たちの戦いも、多くは目に見えない世界における戦いです。

私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです。

（エペソ6・12）

しかし、悪魔はこの戦いにおいて、しばしばこの世のものを道具として用います。特に、地上の王が悪魔の道具として用いられます。イエス様は、すべての敵がご自身の足元にひれ伏してしまうまで、ご自身に敵対するものと戦われるのです。

2　イエス様のみわざへの賛美

このイエス様のあいさつに対する教会の答えは、イエス様と、イエス様のみわざへの賛美でした。

それはまず第一に、イエス様が私たちを愛してくださったことへの賛美でした。第二に、イエス様が血を流して私たちを罪から解き放ってくださったことへの賛美でした。そして第三に、イエス様が私たちを王として、また祭司としてくださったことへの賛美でした。

1　イエス様が私たちを愛してくださった

私たち信者は、イエス様の愛によってこの世から選び出されたのです。イエス様の愛が私たちの喜びの土台です。「イエス様に愛されている」ということが、私たちの心からの喜びでなければなりません。その喜びは、イエス様が私たちを愛してくださった、というだけでなく、イエス様が今日も、また、これからも「永遠に愛し続けてくださる」ことへの喜びです。黙示録の3章19節を見ますと、罪を犯したラオデキヤの教会をも、主は変わらず愛しておられることがわかります。イエス様の懲らしめは、主の愛の証拠です。イエス様は万物の支配者であり、王の王であるばかりでなく、私たちを罪から解き放ち、いまも私たちを愛していてくださるお方なのです。イエス様に愛されているということは、なんと幸せなことでしょう。イエス様との交わりの土台はイエス様の愛にあるのです。

2　イエス様が私たちを罪から解き放ってくださった

次に、イエス・キリストがその血によって私たちを罪から解き放ってくださったことについて考えて見ましょう。イエス様が私たちを愛してくださることが確信できるのは、イエス様が私たちを罪から解放してくださったことによってです。イエス様との交わりの土台は、私たちが罪からの解放を与えられていることにあります。確かにイエス様は、すべての人のために十字架におつきになられました。しかし、イエス様の十字架は、罪からの解放のただ一つのよりどころとして、すべての人に「個人的」に体験されなければなりません。

罪とは何であるか、ということを知る人だけが、イエス様の十字架を通して、罪からの解放を体験することができます。そしてまた、イエス様の十字架による解放を体験した人だけが、罪とは何であるかを本当に知ることができるのです。

罪とは、人を縛りつける力であり、そして救いとは、人を縛りつけている力から人を解放して自由にする力です。罪に縛られている奴隷は、自分の解放のために何をすることができるでしょうか。もちろんそのような人は自分のために何もできません。ただ主なる神だけが、そのような人を解放することができるのです。イスラエルの民は、小羊の血によってエジプトから解放されました。小羊の血が解放のための代価として支払われたのです。そしてイエス様の十字架による解放のための支払いは、ただ一度だけ行なわれて、それによってすべてが解決されたのです。

ですから、今すでにキリストの血によって義と認められた私たちが、彼によって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。（ローマ　5・9）

キリストは聖なるものとされる人々を、一つのささげ物によって、永遠に全うされたのです。（ヘブル　10・14）

イエス様の血による罪からの解放は、すでに完成していることです。しかし、罪からの聖めについては、みことばによって日々新たにそれをいただくことが大切です。

キリストがそうされたのは、みことばにより、水の洗いをもって、教会をきよめて聖なるものとするためであり…（エペソ　5・26）

罪の赦しの確信こそが、罪からの本当の解放なのです。

幸いなことよ。そのそむきを赦され、罪をおおわれた人は。（詩篇　32・1）

3　イエス様が私たちを王とし、祭司としてくださった

このことは、イエス様の私たちに対する愛の現われであり、また、私たちを罪から解き放ってくださったことの目的です。私たちイエス様を信じる者が、イエス様に愛され、そして罪から解放されているのは、私たちが主なる神に仕えるようになるためです。「主なる神に仕える」ということこそが大切なのです。私たちは決して救われるために救われたのではありません。救いによって、祭司の民がつくり出されたのです。イエス様によって救われた人々は、王となり、祭司となって主なる神と人とに仕える者になるのです。祭司とされた人々は、他の人々をも、イエス

様のみもとへ連れてこようとします。このために、祭司とされたすべての人々は、他の人々のために祈るようになります。祭司とされた人々の特徴は、主なる神に対して祈り、他の人々のために主なる神にとりなしの祈りをすることです。祭司とされた人々は自分を忘れ、イエス様が自分のまわりの人々の生活の中心になるように祈ります。ヨハネは、アジアにある七つの教会が、このような意味において祭司の民であると言っているのです。祭司であることの特徴は、まず第一に、神の前に祈り人として、そして礼拝者として立つということです。

黙示録1章20節には、「燭台」について述べられています。燭台はいつも幕屋の中に置かれていたものでした。これと同じように、祭司たちの務めも、まず第一に、目立った所で行なわれるのではなく、人の目に見えない隠れた所で、つまり、神だけが臨在しておられる幕屋の中で行なわれました。しかしそれと同時に、祭司はまた、人の前に立って主なる神の口となる務めも持っていたのです。つまり祭司は、祈り人、また礼拝者であると同時に、預言者であり、また証し人でもあるのです。すべてのキリスト者は、神の前に立ち、祈り人、そして礼拝者となるように召されており、また同時に人の前に立ち、イエス様を証しする者として召されているのです。5節と6節にあるように、私たちがイエス様に愛され、罪から解き放たれ、そして祭司として召されているということは、すばらしい体験です。このすばらしい体験から、「キリストに栄光と力とが、とこしえにあるように。」という賛美が生まれてくるのです。愛され、解き放たれ、召されているその当時の信者たちは、キリストに栄光と力を与えるために、ローマ皇帝に与えるべき栄光と力を無視しなければならなかったのです。キリストを信じあがめることは、皇帝を拒絶する

ことです。これは彼らにとって、戦いであり冒険でした。イエス・キリストを信じ、あがめる者は迫害を覚悟しなければなりませんでした。主なる神に祈る人は、必ず「神の口」にさせられます。そしてそれは、必ず迫害を受けることになったのです。しかし、キリストに栄光を与えることは、ヨハネの心からの願いでした。

「栄光」という言葉は黙示録の中で十七回出てきます。イザヤ書53章2節に同じ意味の言葉が出てきます。「輝きもなく」となっていますが、原語によると「栄光がなく」という意味です。

イエス様がこの世に来られたときは、見るべき何の栄光をもお持ちになりませんでしたが、天に上げられた今は、限りない栄光を持っておられます。すべてのものが崩れさっても、二つのものは必ず残ります。つまり、信ずる群れには「恵みと平安」が残ります。そしてイエス様のためには「力と栄光」が残ります。

この5節、6節に出てくる賛美は、黙示録における最初の賛美です。ヨハネはパトモスという島にいました。そして主なる神は、このパトモスという島をご自身のご臨在によってエデンの園に変えられたのです。パトモス島で一人とり残されたヨハネの苦しみと悩みは、主なる神のご臨在のゆえに、たいへん軽いものとなりました。ヨハネが自分の主と主の流された血潮のことを思うとき、ヨハネの苦しみと悩みはぬぐい去られて、ただ感謝だけが残ったのです。使徒の働き16章25節に、パウロとシラスは牢屋の中で賛美の歌を歌ったとあります。もし私たちが、目の前にある苦しみを見ないでイエス様の愛だけを見つめるなら、私たちもまたヨハネのように歌うことができます。このことをヨハネは七つの教会に間接的に伝えようとしたのです。

3　イエス様の再臨への備え

最後に、イエス様の再臨への備えについて考えてみましょう。7節にはイエス様の再臨のことが書かれています。

見よ、彼が、雲に乗って来られる。すべての目、ことに彼を突き刺した者たちが、彼を見る。地上の諸族はみな、彼のゆえに嘆く。しかり。アーメン。　（黙示　1・7）

「見よ。彼が、雲に乗って来られる。」それは、イエス様が大きな力と栄光とともに来られることを意味しています。ヨハネはまるで、イエス様がもう来られたかのように、確信を持って「見よ」と言ったのです。このイエス様の再臨は、預言者たちによってすでに預言されていたことでした。

見よ。神である主は力をもって来られ、その御腕で統べ治める。見よ。その報いは主とともにあり、その報酬は主の前にある。　（イザヤ　40・10）

良い知らせを伝える者の足は山々の上にあって、なんと美しいことよ。平和を告げ知らせ、幸いな良い知らせを伝え、救いを告げ知らせ、「あなたの神が王となる。」とシオンに言う者の足は。…見よ。わたしのしもべは栄える。彼は高められ、上げられ、非常に高くなる。多くの者があなたを見て驚いたように、――その顔だちは、そこなわれて人のよう

ではなく、その姿も人の子らとは違っていた。――そのように、彼は多くの国々を驚かす。王たちは彼の前で口をつぐむ。彼らは、まだ告げられなかったことを見、まだ聞いたこともないことを悟るからだ。

（イザヤ　52・7、13～15）

私がまた、夜の幻を見ていると、見よ、人の子のような方が天の雲に乗って来られ、年を経た方のもとに進み、その前に導かれた。この方に、主権と光栄と国が与えられ、諸民、諸国、諸国語の者たちがことごとく、彼に仕えることになった。その主権は永遠の主権で、過ぎ去ることがなく、その国は滅びることがない。

（ダニエル　7・13、14）

このように昔の預言者たちは、早くからイエス様の再臨について預言していました。また、イエス様ご自身も、再臨について約束しておられます。

そのとき、人の子のしるしが天に現われます。すると、地上のあらゆる種族は、悲しみながら、人の子が大能と輝かしい栄光を帯びて天の雲に乗って来るのを見るのです。

（マタイ　24・30）

イエスは彼に言われた。「あなたの言うとおりです。なお、あなたがたに言っておきますが、今からのち、人の子が、力ある方の右の座に着き、天の雲に乗って来るのを、あなたがたは見ることになります。」

（マタイ　26・64）

また、イエス様の再臨は、御使いたちによっても証しされています。

ガリラヤの人たち。なぜ天を見上げて立っているのですか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たときと同じ有様で、またおいでになります。（使徒　1・11）

そして、使徒たちもイエス様の再臨を宣べ伝えました。

そういうわけですから、あなたがたの罪をぬぐい去っていただくために、悔い改めて、神に立ち返りなさい。それは、主の御前から回復の時が来て、あなたがたのためにメシヤと定められたイエスを、主が遣わしてくださるためなのです。このイエスは、神が昔から、聖なる預言者たちの口を通してたびたび語られた、あの万物の改まる時まで、天にとどまっていなければなりません。（使徒　3・19～21）

イエス様は再び来られます。この希望が私たちに生きる力を与えてくれます。そして私たちは、喜びをもって主の再臨を待ち望むべきです。7節にすべての者たちが彼を見ると書いてありますが、この場合のイエス様との出会いは、実は、恐ろしい出会いなのです。しかし、聖書の中には、イエス様とのもうひとつの喜ばしい出会いのことも書かれています。黙示録22章4節に、神のみ顔を仰ぎ見る、喜ばしい出会い、神のしもべたちの最高の喜びの時が記されています。しかし、

1章7節の場合は、裁きの出会いであり、恐ろしい主なる神のみ顔を見なければならない、と言っているのです。これについて、黙示録6章とルカの福音書から少し見てみましょう。

地上の王、高官、千人隊長、金持ち、勇者、あらゆる奴隷と自由人が、ほら穴と山の岩間に隠れ、山や岩に向かってこう言った。「私たちの上に倒れかかって、御座にある方の御顔と小羊の怒りとから、私たちをかくまってくれ。御怒りの大いなる日が来たのだ。だれがそれに耐えられよう。」（黙示　6・15～17）

そのとき、人々は山に向かって、「われわれの上に倒れかかってくれ。」…と言い、丘に向かって「われわれをおおってくれ。」と言い始めます。（ルカ　23・30）

ここで語られている恐怖は、恐ろしくて見ることのできない主のみ顔を見なければならない、その恐ろしさです。福音を聞こうとしない人々は、その日にはこの恐ろしい神のみ顔を見なければならないのです。恵みの時の特徴は、福音を「聞く」ことです。なぜなら、私たちはこの目でイエス様を「見る」ことはできないからです。「見る」時には、すでに恵みの時が過ぎ去っているのです。ですから主のみ顔を見なければならない時は、裁きの時なのです。イエス様が地上にそのみ姿を現わされる時には、すべての人々が、一瞬の内にひざまづくことになります。「地上の諸族は、みな彼のゆえに嘆く」と書いてあります。そのときには、すべての人々が自分の罪を認めることになります。時はすでに遅いのです。聖書の中には、その時には悔い改めも、回心も、

また、これから恵みを受けることも記されてはいません。いつか必ず、人はイエス様の前にひざまづかなければなりません。ある人は喜びながら、またある人は歯がみしながら、ひざまづかなければならないのです。

イエス様がすべてのものの上に立っておられるということは、永遠の昔から、永遠にわたって変わらない事実です。イエス様を信じる人々は、すべてこの事実に対して、1章7節の最後にあるように「アーメン」と言っているのです。キリスト者は「アーメン」をもって、自分たちが信じていることを告白します。

主のみことばはいつも、私たちに応答を求めています。主のみことばによって、主への祈りと、主との交わりが生まれてこなければなりません。主なる神はいつも私たちからの答えを待っておられます。主なる神のみことばは私たちの生活の中で心から愛され、ほめ賛えられ、真に生きて働くものとならなければなりません。8節では、4節にあるのと同じように、「常にいまし、昔いまし、後に来られる方」ということが強調されています。この節でも、父なる神とイエス様との一致を見ることができます。この節で、父なる神は「来られる」といっておられますが、父なる神はイエス様を通しておいでになるのです。イエス様は父なる神のすべてを代表しておられます。父なる神は、イエス様をあらゆる点においてご自身の権威ある代表者として定めておられるのです。

父は御子を愛しておられ、万物を御子の手にお渡しになった。（ヨハネ　3・35）

父なる神とイエス様とは、分けられない関係をもっておられます。コリント第2の手紙5章19節に「神は、キリストにあって、この世をご自分と和解させ」とありますが、ここに出てくる「キリストにあって」という言葉は、主なる神が過去において「キリストにあった」ということであり、現在も「キリストにある」という意味であり、これからも「キリストにある」という意味です。7節にあるイエス様の再臨は、教会を花嫁として迎えられるのではなく、メシアとしてこの世を裁かれるためにこられる再臨なのです。このとき、次のみことばが成就します。

そのとき主は、神を知らない人々や、私たちの主イエスの福音に従わない人々に報復されます。そのような人々は、主の御顔の前とその御力の栄光から退けられて、永遠の滅びの刑罰を受けるのです。（IIテサロニケ　1・8、9）

「見よ、わたしはすぐに来る。わたしはそれぞれのしわざに応じて報いるために、わたしの報いを携えて来る。」（黙示　22・12）

これらのことをあかしする方がこう言われる。「しかり。わたしはすぐに来る。」アーメン。主イエスよ、来てください。（黙示　22・20）

イエス様の現われを喜びをもって慕い求めている人々は幸いです。

4 パトモスで与えられた幻

黙示録1章9節から20節まで

1　ヨハネに与えられた使命
　1　主にある苦難にあずかる
　2　み国に共にあずかる
　3　忍耐を共にする

2　ヨハネに現われたイエス様
　1　七つの金の燭台
　2　人の子のような方

3　ヨハネが聞いたイエス様のみ声
　1　ヨハネの上にみ手がおかれ、みことばが語られた
　2　初めであり、終わりであり、生者と死者のかぎを持つお方
　3　み使い、つまり教会の象徴

[9]私ヨハネは、あなたがたの兄弟であり、あなたがたとともにイエスにある苦難と御国と忍耐とにあずかっている者であって、神のことばとイエスのあかしとのゆえに、パトモスという島にいた。[10]私は、主の日に御霊に感じ、私のうしろにラッパの音のような大きな声を聞いた。[11]その声はこう言った。「あなたの見ることを巻き物にしるして、七つの教会、すなわち、エペソ、スミルナ、ペルガモ、テアテラ、サルデス、フィラデルフィヤ、ラオデキヤに送りなさい。」

[12]そこで私は、私に語りかける声を見ようとして振り向いた。振り向くと、七つの金の燭台が見えた。[13]それらの燭台の真中には、足までたれた衣を着て、胸に金の帯を締めた、人の子のような方が見えた。[14]その頭と髪の毛は、白い羊毛のように、また雪のように白く、その目は、燃える炎のようであった。[15]その足は、炉で精錬されて光り輝くしんちゅうのようであり、その声は大水の音のようであった。[16]また、右手に七つの星を持ち、口からは鋭い両刃の剣が出ており、顔は強く照り輝く太陽のようであった。

[17]それで私は、この方を見たとき、その足もとに倒れて死者のようになった。しかし彼は右手を私の上に置いてこう言われた。「恐れるな。わたしは、最初であり、最後であり、[18]生きている者である。わたしは死んだが、見よ、いつまでも生きている。また、死とハデスとのかぎを持っている。[19]そこで、あなたの見た事、今ある事、この後に起こる事を書きしるせ。[20]わたしの右の手の中に見えた七つの星と、七つの金の燭台について、その秘められた意味を言えば、七つの星は七つの教会の御使いたち、七つの燭台は七つの教会である。」

ヨハネの黙示録1章1節から8節までは、黙示録の序文でした。私たちはこれから9節以降で黙示録の本論を学びたいと思います。前に述べたように、黙示録全体は三つの部分に分けて考えることができます。この三つの部分は1章19節に要約されています。つまり、「あなたの見た事、今ある事、この後に起こる事を書きしるせ。」という三つの部分です。したがって、第一の部分はヨハネがすでに「見た事」です。その内容はヨハネがパトモスで与えられた幻です。それを私たちはさらに三つに分けて考えてみましょう。

第一は、ヨハネがパトモスで与えられた使命であり、第二は、ヨハネに現われたキリストであり、第三は、ヨハネが聞いたイエス様のみ声です。

1　ヨハネに与えられた使命

1章9節では、ヨハネは自分のことをあなた方の「兄弟」であると言い、自分が使徒であるということを強調していません。それはヨハネの間違った謙遜さから出たのではなく、ヨハネが「兄弟」という言葉を最もすばらしい言い方だと考えていたからです。使徒たちは確かに特別の使命を帯びていましたが、彼らは決して人の上に立とうとはしませんでした。なぜなら、彼らは自分たちがただ神の声にすぎないということをよく知っていたからです。使徒の働き2章に「そこで、ペテロは十一人とともに立って、声を張り上げ、人々にはっきりとこう言った。」と書い

てありますが、これは使徒ペテロが特別の使命を持っていたにもかかわらず、決して他の兄弟たちをだしぬいて彼らの上に立とうとはしなかったというういい実例です。

さらにヨハネは次の三つの意味で、当時の信者たちの友であると言っています。つまり彼は、イエスにある苦難、み国、忍耐に共にあずかる者だと言っているのです。

1　主にある苦難にあずかる

主にある苦難に共にあずかる者として、ヨハネはその当時パトモスに追放され、孤独でした。だから、彼には苦難がどのようなものであるかがよくわかっていました。しかし主のご臨在があれば、どのような苦難も耐えがたいものではないこともよく知っていたのです。

ヨハネと同じように、パウロもシラスも、かつて捕らわれの身でありながら、主なる神に賛美の歌を歌いました。

真夜中ごろ、パウロとシラスが神に祈りつつ賛美の歌を歌っていると…（使徒　16・25）

またイエス様も、「あなた方は世にあっては患難があります。」と言っておられます。イエス様に忠実に従っていく人たちは、誰もが必ず患難にぶつかったのです。しかし、ヨハネやパウロやシラスのような人々は、どのような患難や苦難にぶつかってもくじけることがなかったのです。

2　み国に共にあずかる

ヨハネはさらに「み国に共にあずかる」者でした。イエス様こそが世界の主であるというのがヨハネの確信でしたから、そのように述べ伝えたのです。そのために彼は憎まれ、迫害され、そして追放されました。しかし彼は、イエス様と悩みを共にする者は、イエス様と共に支配もするということを知っていました。

もし耐え忍んでいるなら、彼とともに治めるようになる。もし彼を否んだなら、彼もまた私たちを否まれる。（IIテモテ　2・12）

そこで、私は、あなたがたのうちの長老たちに、同じく長老のひとり、キリストの苦難の証人、また、やがて現われる栄光にあずかる者として、お勧めします。（Iペテロ　5・1）

3　忍耐を共にする

ヨハネはイエス様にある苦難とみ国にあずかる者でしたが、さらに、「忍耐を共にする」者でもありました。しかし、この場合の忍耐とは、ただ単に苦しみを耐えるというだけでなく、「耐え忍んで主を待ち望む」という意味での忍耐です。したがって、私たちもヨハネと同じように主を待ち望むものでなければなりません。迫害は、裏切りや、脱落をともなうものですが、一面では団結を強めるものでもあります。真のキリスト者は、ヘブル人への手紙13章14節にあるように、「後に来ようとしている都を求めて」います。

私たちは、この地上に永遠の都を持っているのではなく、むしろ後に来ようとしている都を求めているのです。（ヘブル　13・14）

もし、私たちがこの世にあってキリストに単なる希望を置いているだけなら、私たちは、すべての人の中で一番哀れな者です。（Ⅰコリント　15・19）

もし私たちに、イエス様に対する生き生きとした「待ち望みの信仰」がなければ、私たちの信仰生活は本当に惨めなものです。このような「待ち望みの信仰」こそが教会が主の花嫁である証拠です。なぜなら、黙示録22章17節に、「花嫁も言う。『来てください。』」とあるからです。ところが当時、信者たちの間にこのような待ち望みの信仰が衰え果ててしまっていました。実は、それこそが黙示録2章と3章が書かれた根本的な理由でした。ですから、イエス様は、ヨハネをただ一人パトモスに導かれ、主なる神だけとの交わりに入るようにされたのです。そして、その交わりを通して、イエス様はヨハネに新しい啓示を与え、その啓示をヨハネを通して教会に与えようとされたのです。ですから、人間的に見ると、ヨハネをパトモスに追放したのはローマ皇帝でしたが、実はそのことの背後にはイエス様が立っておられ、このことを通してご自身に属する人々に新たに語りかけようとされたのです。

神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。（ローマ　8・28）

あなたがたは、私に悪を計りましたが、神はそれを、良いことのための計らいとなさいました。それはきょうのようにして、多くの人々を生かしておくためでした。

（創世記　50・20）

さて次に、私たちは10節の「御霊に感じ」という言葉について考えてみましょう。そのためにはまず、ローマ人への手紙8章9節にある「御霊の中にいる」という言葉との違いを知る必要があります。

けれども、もし神の御霊があなたがたのうちに住んでおられるなら、あなたがたは肉の中にではなく、御霊の中にいるのです。キリストの御霊を持たない人は、キリストのものではありません。

（ローマ　8・9）

すべてのキリスト者は「御霊の中にいる」のです。そしてそれは、いつもそうあるべき状態です。しかしヨハネが書いている「御霊に感じ」という言葉は、キリスト者にとってはまったく特別な、また新しい経験でした。それは新たに主のみ声を聞くときにのみ経験される「特別な体験」です。私たちもヨハネのように主の前に静まって、主からの語りかけをいただき、御霊に感じる体験を持つことが必要です。

同じ10節にある、「主の日」という言葉についても少し考えてみましょう。聖書の中で「主の

日」という言葉は何箇所も出てきますが、いつも二通りの意味で使われています。

まず、イエス様の再臨と裁きを意味する日を「主の日」と言っています。

主の日が夜中の盗人のように来るということは、あなたがた自身がよく承知しているからです。

（Ⅰテサロニケ　5・2）

しかし、主の日は、盗人のようにやって来ます。その日には、天は大きな響きをたてて消えうせ、天の万象は焼けてくずれ去り、地と地のいろいろなわざは焼き尽くされます。

（Ⅱペテロ　3・10）

これらの箇所では、「主の日」とは、つまり「イエス様の再臨と裁きの日」です。

もう一つの「主の日」は「主のよみがえりの日」、つまり安息です。そして10節の「主の日」とは、この二番目の意味での主の日、すなわち主のよみがえりの日、安息のことです。

当時、「主」という言葉はよく使われていました。しかしほとんどの場合、「主」という言葉はイエス様を指すのではなく、ローマ皇帝を指していたのです。このような歴史的背景を考えるとき、ヨハネが「主の日」という言葉を使っているのは深い意味があります。なぜなら、「主の日」というきわめてキリスト者的な言葉を使うことによって、ヨハネは自分にとって「主はイエス様だけであり、ローマ皇帝ではない」ことを暗黙の内に宣言していたのです。

その日、ヨハネは自分の後ろからラッパの音のような大きな声を聞き、非常に驚きました。そ

こでヨハネは、自分の見たことを巻物に記せという使命を与えられたのです。主なる神がいったん声に出してみことばを語られたからには、神は必ずご自身のみことばをなしとげられます。そしてそうなれば、神のみことばを与えられたすべての信者たちは責任を免れることはできません。

黙示録であげられている七つの都市はすべて、その当時の皇帝崇拝が行なわれていた中心地でした。ですから、これらの都市に住んでいるキリスト者にとって最も大切なのは、皇帝崇拝に屈服することなく、どのようにして神のみことばだけに従っていくかということでした。主は、ヨハネのためにみことばを与えられたのではなく、ヨハネを「通りよい管」として用い、これらの都市にある教会、キリストの群れのためにみことばを与えられたのです。

2　ヨハネに現われたイエス様

12節に、ヨハネは「語りかける声を見ようとして振り向いた。」とありますが、これは彼が自分自身の考え、自分自身の思い煩い、自分自身の願い、疲れ、気落ちなどを振りすてて、イエス様の方に向きを変えたということです。私たちもヨハネのように、これらのものを振りすてなければ主のご栄光を拝することはできません。ヨハネが見たものは、何も言わなくても多くのことを語っていました。

1　七つの金の燭台

ヨハネが振り向いて最初に見たのは、語りかける声ではなく、七つの金の燭台でした。七つの

燭台とは、七つの教会のことでした。

考古学的な発掘によって、エペソの教会から大きな燭台がいくつか発見されましたが、これらの燭台は、当時のローマ皇帝の肖像を照らすためのものだったと想像されています。しかし、ヨハネが見たのは、燭台のまん中に立っておられる、ローマ皇帝とはまったく異なったお方でした。七つの燭台は七つの教会であり、そのまん中に立っておられるお方は、七つの教会のかしらである方、つまりイエス様だったのです。

イエス様がまん中にお立ちになり、イエス様のご支配が明らかにされる所だけが本当の教会です。燭台は光源を支えるだけのものであり、光そのものではありません。光そのものは、もちろんイエス様ご自身です。

イエスはまた彼らに語って言われた。「わたしは、世の光です。わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです。」（ヨハネ　8・12）

イエス様こそが世の光そのものです。すべてのキリスト者は、光を証しする者であり、光を保つ燭台です。イエス様に属する者はイエス様を証しする者でなければなりません。私たちの生活の中心にはイエス様だけがおいでになるべきで、私たちの生活の中心にほかの何ものもあってはなりません。燭台は光がなければ何の役にも立ちません。キリスト者の群れの使命は、イエス様の光を輝かすことです。

それは、あなたがたが、非難されるところのない純真な者となり、また、曲がった邪悪

な世代の中にあって傷のない神の子どもとなり、いのちのことばをしっかり握って、彼らの間で世の光として輝くためです。そうすれば、私は、自分の努力したことがむだではなく、苦労したこともむだでなかったことを、キリストの日に誇ることができます。

（ピリピ　2・15、16）

教会、キリスト者の群れは、聖霊によって火をともされ、この世を照らしだすための燭台でなければなりません。テサロニケという町にある教会の信者たちは、このような燭台でした。パウロは彼らについて喜んで次のように書いています。

あなたがたも、多くの苦難の中で、聖霊による喜びをもってみことばを受け入れ、私たちと主とにならう者になりました。こうして、あなたがたは、マケドニヤとアカヤとのすべての信者の模範になったのです。主のことばが、あなたがたのところから出てマケドニヤとアカヤに響き渡っただけでなく、神に対するあなたがたの信仰はあらゆる所に伝わっているので、私たちは何も言わなくてよいほどです。私たちがどのようにあなたがたに受け入れられたか、また、あなたがたがどのように偶像から神に立ち返って、生けるまことの神に仕えるようになり、また、神が死者の中からよみがえらせなさった御子、すなわち、やがて来る御怒りから私たちを救い出してくださるイエスが天から来られるのを待ち望むようになったか、それらのことは他の人々が言い広めているのです。

（Ⅰテサロニケ　1・6～10）

彼らは本当に模範的なキリスト者でした。彼らは「世を照らすための燭台」でした。燭台の使命は夜の闇を照らすことです。そして燭台は金でつくられていました。このことはすべてが神によって造られていることを意味しています。

2　人の子のような方

13節にはヨハネが「人の子のような方」を見たと書いてあります。この「人の子」という表現はダニエル書にも出てきます。

私がまた、夜の幻を見ていると、見よ、人の子のような方が天の雲に乗って来られ、年を経た方のもとに進み、その前に導かれた。この方に、主権と光栄と国が与えられ、諸民、諸国、諸国語の者たちがことごとく、彼に仕えることになった。その主権は永遠の主権で、過ぎ去ることがなく、その国は滅びることがない。（ダニエル　7・13、14）

私が目を上げて、見ると、そこに、ひとりの人がいて、亜麻布の衣を着、腰にはウファズの金の帯を締めていた。そのからだは緑柱石のようであり、その顔はいなずまのようであり、その目は燃えるたいまつのようであった。また、その腕と足は、みがきあげた青銅のようで、そのことばの声は群集の声のようであった。（ダニエル　10・5、6）

ヨハネは長く足まで垂れた衣を見て、平和と威厳とを感じました。しかしこの衣は、大祭司を意味するものではなく、裁き主を意味する衣です。ダニエル書7章9節には「その衣は雪のように白く」とあり、それは主なる神のことを指していますが、黙示録ではイエス様を現わしています。そして「白い」とは、この方の天的な性質を現わしています。黙示録で私たちは、イエス様を人として、また神として見ることができます。「雪のように白い髪」とは、イエス様の永遠性と限りない知恵を現わしています。

さらに「燃える炎のような目」は、イエス様が裁き主としてすべてを見通される力を持った方であることを意味しています。イエス様は決してごまかされることのない裁き主です。私たちの生活がイエス様の前にあり、イエス様のご支配のもとにあるかどうかを主はよくご存知です。

神のことばは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髄の分かれ目さえも刺し通し、心のいろいろな考えやはかりごとを判別することができます。

（ヘブル　4・12）

また、イエスはご自身で、人のうちにあるものを知っておられたので、人についてだれの証言も必要とされなかったからである。

（ヨハネ　2・25）

イエス様はペテロも、ユダも、パリサイ人もよく知っておられました。主の目は燃える炎のような目です。

15節に、「その足は、炉で精錬されて光り輝くしんちゅうのようであり…」とあります。このことは何を意味しているのでしょうか。鉄はすべてを砕くものですが、炉で精錬された真鍮とは鉄よりもさらに砕くもの、つまり何者も逃れられない裁きのことを意味しています。裁きの中に入る者にはもはや救いはありません。救い主イエスを拒んだ人に対しては、イエス様は裁き主となります。イエス様が足元に踏み砕いた所には、ただ灰が残されるだけです。

あなたがたはまた、悪者どもを踏みつける。彼らは、わたしが事を行なう日に、あなたがたの足の下で灰となるからだ。（マラキ　4・3）

旧約聖書には、主なる神がご自身に敵対するものを足の下に踏みつけられる、あるいは踏み砕かれるという言葉がよく出てきます。

あなたによって私たちは、敵を押し返し、御名によって私たちに立ち向かう者どもを踏みつけましょう。（詩篇　44・5）

神によって、私たちは力ある働きをします。神こそ、私たちの敵を踏みつけられる方です。（詩篇　60・12）

彼が民の悩む者たちを弁護し、貧しい者の子らを救い、しいたげる者どもを、打ち砕きますように。（詩篇　72・4）

イエス様の足の下では、人間的な誇りは陶器が砕かれるように打ち砕かれてしまいます。イエス様の足は、悪者に対する断固たる裁き、また、人間に対しての神の正義を現わしています。

旧約聖書に記されている「祭壇と洗盤」は、同じ青銅でできていました。「金」は常に絶対的な「神の義」を現わし、「鉄」と「青銅」は神の義にもとづく罪に対しての裁きを現わしています。モーセがイスラエル人を罪から救うために造った蛇も、青銅でできていました。火で精錬された銅は、神の怒りを現わします。

15節の後半に「大水の音のような声」が出てきますが、これはイエス様の全能の力を現わしています。この方の声に対抗できる声はこの世にはありません。すべてこの世の声は神の前に死に果ててしまわなければなりません。イエス様がこの世で語られた時でさえも、悪霊はイエス様の声を恐れ、風や海はイエス様の声に従い、また死人は墓の中から呼び戻されたのです。イエス様のみ声を聞き、これに従う人は、主の完全な救いと守りを体験することができます。

イエス様の声はまた、私たちの毎日の生活をも導こうとされます。主の声の前には、この世の勝利の歌も、この世のしがらみも、まったく虚しいものとなってしまいます。15節にある主の声は、最も高い所に座しておられる裁き主の審判をも象徴しています。

続いて、16節に、「七つの星を持った右手」という言葉が出てきますが、この右手はかつて釘を打たれ、その釘あとを残しているイエス様の手です。この釘あとはよみがえられたイエス様の手に残されたものでした。

それからトマスに言われた。「あなたの指をここにつけて、わたしの手を見なさい。手を伸ばして、わたしのわきに差し入れなさい。信じない者にならないで、信じる者になりなさい。」

（ヨハネ　20・27）

右の手とはまた、支配し、ことを行なう手を意味しています。イエス様の右の手にはすべての支配権が握られているのです。

当時の貨幣の中には、ローマ皇帝が七つの星を右手につかんでいる像が彫られているものがありました。それはローマ皇帝が全世界の支配権をつかんでいることを象徴していました。七つの星をつかむ者が最高の位につく者を指すことを、その当時の人々は誰でも知っていました。しかし、ヨハネの見た方はローマ皇帝ではなく、七つの教会を通して支配されるイエス様でした。イエス様こそが完全な力を持っておられるからです。また、この16節にある右の手とは、私たちがイエス様の手の中に守られ、またイエス様の右の手に支えられているということを意味しています。この右の手は完全なる守りであり、私たちのあらゆる行為とあらゆる決定に際して導いてくださろうとしている手です。

主は、私の力であり、ほめ歌である。主は、私の救いとなられた。喜びと救いの声は、正しい者の幕屋のうちにある。主の右の手は力ある働きをする。主の右の手は高く上げられ、主の右の手は力ある働きをする。

（詩篇　118・14～16）

また、16節にある「口から出ている鋭い両刃の剣」とは、イエス様が聖なる主であり、容赦ない裁き主であることを表わしています。

ギリシャでは二種類の剣が使われていました。一つは敵を倒すためのもので、これは長い剣でした。もう一つは獣の体を開くためのもので、これは短い剣でした。ヘブル人への手紙4章12節に「神のことばは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く」とありますが、この場合の剣は、体を切り開く短い剣のことです。黙示録の場合も、問題とされているのは戦いではなく、裁きです。というのは、イエス様はもはや勝つために戦う必要がないからです。イエス様はすでにゴルゴダの丘の十字架において完全な勝利をおさめられたのです。イエス様はご自身のみことばによって、ご自身に従わなかったすべての人々を裁かれます。イエス様のみことばは刺し通し、切り裂く剣のようなみことばです。イエス様は私たちを知り尽くし、私たちの罪を明るみに出されます。イエス様は、ご自身に属する者たちがご自身の手から離れ、もはやイエス様によって導かれようとしないときに、そのような人々を惜しむことができません。イエス様のみことばはすべてを裸にしてしまいます。そのみことばは、偽りの贈り物によって弱めることはできません。主はだれがご自身と結びついているかをよく知っておられます。

救いのかぶとをかぶり、また御霊の与える剣である、神のことばを受け取りなさい。
（エペソ　6・17）

黙示録2、3章を読むと、イエス様がいかに鋭くご自身のみことばをもって教会に切り込んで

おられるかがわかります。16節の後半にある「強く照り輝く太陽のような顔」とは、勝利者の象徴です。

主よ。あなたの敵はみな滅び、主を愛する者は、力強く日がさし出るようにしてください。

（士師記　5・31）

そのとき、正しい者たちは、天の父の御国で太陽のように輝きます。耳のあるものは聞きなさい。

（マタイ　13・43）

このイエス様の光輝くみ姿は、私たちに、暗い夜のあとで主なる神の最後の勝利が現われることを語っています。イエス様は、かつて歴史的にそのような方が存在したというだけでなく、栄光の主、つまりこの世とご自身の教会にとってのあらゆる光の源であるお方です。イエス様が太陽として輝くことができない所は、どこでも寒さと冷たさがあります。むなしい空虚な冷たさがあるだけです。イエス様の光は本当に圧倒的な光であり、黙示録21章23、24節にあるようにその光があるところにはもはや太陽も月もいりません。変貌の山でのイエス様の輝きは主の栄光を現わしていますが、黙示録での主の輝きは、主の裁きの権威を現わしています。ヨハネに現われたキリストの特徴は、主が裁き主としてご自身を現わされているところにあります。裁き主の目、裁き主の足（黙示2・18）が記されているのです。

そしてさらに、裁き主の口（黙示2・16）、裁き主の判断（黙示3・2）、裁き主の診断（黙示

2・23)、怒り（黙示2・5)、拒絶（黙示3・16）などの箇所が、イエス様の特徴をよく現わしています。しかし、黙示録3章19節を見ますと、イエス様がすべてこれらのことを愛をもって行なっておられることがわかります。

わたしは、愛する者をしかったり、懲らしめたりする。だから、熱心になって、悔い改めなさい。

（黙示　3・19）

1章5節で見てきたように、イエス様は私たちを愛してくださったばかりでなく、今も愛していてくださるお方です。イエス様によって愛されていることは何というすばらしい特権でしょう。ですから、この19節によって、私たちはイエス様の裁きの上にもなおイエス様の愛があることを知ることができます。そしてこの場合には、恵みの時の裁きが語られているのであって、最後の審判の時の裁きが語られているのではありません。この審判の時の裁きについては、黙示録に次のように書き記されています。

また私は、大きな白い御座と、そこに着座しておられる方を見た。地も天もその御前から逃げ去って、あとかたもなくなった。また私は、死んだ人々が、大きい者も、小さい者も御座の前に立っているのを見た。そして、数々の書物が開かれた。また、別の一つの書物も開かれたが、それは、いのちの書であった。死んだ人々は、これらの書物に書きしるされているところに従って、自分の行ないに応じてさばかれた。海はその中にいる死者を出し、死もハデスも、その中にいる死者を出した。そして人々はおのおの自分の行ないに

応じてさばかれた。それから、死とハデスとは、火の池に投げ込まれた。これが第二の死である。いのちの書に名のしるされていない者はみな、この火の池に投げ込まれた。

（黙示　20・11～15）

しかしもちろん、ヨハネが1章10～16節を経験している間は、ヨハネはまだこのことについてはっきりとわかってはいませんでした。ここに現われたイエス様は、ヨハネに向かってそのことをまだ一言も語っておられなかったからです。

3　ヨハネが聞いたイエス様のみ声

16節までの箇所で、ヨハネはイエス様を見たと言っていますが、まだイエス様のみ声を聞いたとは言っていません。ヨハネはイエス様を見た時に、そのありさまに圧倒されてイエス様の足もとに倒れ伏したと書かれています。ヨハネは死ぬほど驚いて倒れました。これとよく似た体験は、ヨハネ以前の主のしもべたちも経験していました。

また仰せられた。「わたしは、あなたの父の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。」モーセは神を仰ぎ見ることを恐れて、顔を隠した。（出エジプト　3・6）

エゼキエル、イザヤ、ダニエル、サウルもやはり同じような経験をしていました。

その方の回りにある輝きのさまは、雨の日の雲の間にある虹のようであり、それは主の

栄光のように見えた。私はこれを見て、ひれ伏した。そのとき、私は語る者の声を聞いた。
（エゼキエル　1・28）

そこで、私は言った。「ああ。私は、もうだめだ。私はくちびるの汚れた者で、くちびるの汚れた民の間に住んでいる。しかも万軍の主である王を、この目で見たのだから。」
（イザヤ　6・5）

この幻は、私、ダニエルひとりだけが見て、私といっしょにいた人々は、その幻を見なかったが、彼らは震え上がって逃げ隠れた。私は、ひとり残って、この大きな幻を見たが、私は、うちから力が抜け、顔の輝きもうせ、力を失った。私はそのことばの声を聞いた。そのことばの声を聞いたとき、私は意識を失って、うつぶせに地に倒れた。
（ダニエル　10・7～9）

ところが、道を進んで行って、ダマスコの近くまで来たとき、突然、天からの光が彼を巡り照らした。彼は地に倒れて、「サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか。」という声を聞いた。
（使徒　9・3、4）

「地にひれ伏す」ということは、普通は礼拝を意味していますが、これらの箇所の場合にはそ

うではありません。17節の「倒れて死者のようになった。」という言葉は礼拝を意味するのではなく、驚き、あるいは、恐れを意味しています。ここに表現されていることは、「神と人との隔たり」、あるいは「天と地との隔たり」です。イエス様の見たこともない姿の前に、ヨハネはひれ伏したのです。

1　ヨハネの上にみ手がおかれ、みことばが語られた

しかし、その見たこともないみ姿は、恐れるヨハネを地に倒れ伏したままにはしないで、その手をヨハネの上におかれたのです。「右の手を人の上に置く」ということは、聖書の中ではその人に活力を与える、また、憐れみを与えることを意味しています。

私はそのことばの声を聞いた。そのことばの声を聞いたとき、私は意識を失って、うつぶせに地に倒れた。ちょうどそのとき、一つの手が私に触れ、私のひざと手をゆさぶった。

（ダニエル　10・9、10）

彼が私に語りかけたとき、私は意識を失って、地に倒れた。しかし、彼は私に手をかけて、その場に立ち上がらせ、そして言った。「見よ。私は、終わりの憤りの時に起こることを、あなたに知らせる。それは、終わりの定めの時にかかわるからだ。」

（ダニエル　8・18、19）

弟子たちは、この声を聞くと、ひれ伏して非常にこわがった。すると、イエスが来られて、彼らに手を触れ、「起きなさい。こわがることはない。」と言われた。
（マタイ　17・6、7）

これらのみことばは、主が人の上に手を置かれることが人に力を与えるということを示しています。そしてまた、「手を置く」ことは憐れみを意味している場合もあります。

さて、ひとりのらい病人が、イエスのみもとにお願いに来て、ひざまずいて言った。「お心一つで、私はきよくしていただけます。」イエスは深くあわれみ、手を伸ばして、彼にさわって言われた。「わたしの心だ。きよくなれ。」
（マルコ　1・40、41）

イエス様は、当時だれも手を触れることを許されていない、らい病人に手を触れられました。そして、これこそ、らい病人の救いに必要なことでした。

さらに、「手を置く」という言葉は、その人を受け入れることも意味していました。

ところが、風を見て、こわくなり、沈みかけたので叫び出し、「主よ。助けてください。」と言った。そこで、イエスはすぐに手を伸ばして、彼をつかんで言われた。「信仰の薄い人だな。なぜ疑うのか。」
（マタイ　14・30、31）

ダニエルにとっても、らい病人にとっても、そしてペテロや弟子たちにとっても、イエス様に

触れられることがただ一つの救いの道だったのです。

地に倒れ伏したヨハネは、ただ「手を置かれた」だけではなく、その方の言葉も聞きました。しかし、ヨハネはその方の言葉を聞いたとたんに、その方がイエス様だとわかったのです。ヨハネによる福音書21章7節を見ると、復活されたイエス様がテベリヤの湖畔に現われたとき、ヨハネが他の誰よりも先にわかったことが書かれています。その時ヨハネは「主です。」と叫んだのでした。また、黙示録1章17節で、主はヨハネに対して「恐れるな。」と言われています。すでに何度も主は弟子たちにこのように言われました。

しかし、イエスは彼らに言われた。「わたしだ。恐れることはない。」

（ヨハネ　6・20）

しかし、イエスはすぐに彼らに話しかけ、「しっかりしなさい。わたしだ。恐れることはない。」と言われた。

（マタイ　14・27）

主はいつでも恐れと戸惑いの中にある人々に「恐れるな」と語りかけておられます。イエス様の足元にひれ伏してへりくだる人は、イエス様の権威を恐れる必要がありません。イエス様を受け入れた人には、主を恐れる理由はないのです。ですから信者は、イエス様がたとえ裁き主であろうとも、主を恐れる必要はありません。なぜなら信者は裁かれることがないからです。

まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わ

した方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。（ヨハネ　5・24）

こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。（ローマ　8・1）

2　初めであり、終わりであり、生者と死者のかぎを持つお方

黙示録1章17、18節で、主は四つの事実によってご自身を現わしておられます。イエス様は、「わたしは最初であり、最後であり」と言っておられます。イエス様は、「わたしは生きている者である」と言っておられます。イエス様は、「わたしは死んだが」と言っておられます。イエス様は、「死とハデスとのかぎを持っている」と言っておられます。これから、この四つの事実について考えてみましょう。

旧約聖書の中にすでに、主はご自身を「最初であり、また最後である」と語っておられます。

イスラエルの王である主、これを贖う方、万軍の主はこう仰せられる。「わたしは初めであり、わたしは終わりである。わたしのほかに神はない。」（イザヤ　44・6）

「わたしに聞け。ヤコブよ。わたしが呼び出したイスラエルよ。わたしがそれだ。わたしは初めであり、また、終わりである。」（イザヤ　48・12）

神である主、常にいまし、昔いまし、後に来られる方、万物の支配者がこう言われる。「わたしはアルファであり、オメガである。」（黙示　1・8）

また言われた。「事は成就した。わたしはアルファであり、オメガである。最初であり、最後である。わたしは、渇く者には、いのちの水の泉から、価なしに飲ませる。」（黙示　21・6）

「最初であり、最後である方」は神ご自身です。神には始めも終わりもありません。つまりアルファであり、オメガです。このことは、私たちのような小さくて限りある人間には理解できないことです。

次に、イエス様は「わたしは生きている」と言われました。このような表現もまた旧約聖書の時代から主について使われていました。

ヨシュアは言った。「生ける神があなたがたのうちにおられ、…」（ヨシュア　3・10）

「まことに、わたしは誓って言う。『わたしは永遠に生きる。』」（申命記　32・40）

私たちがどのようにあなたがたに受け入れられたか、また、あなたがたがどのように偶像から神に立ち返って、生けるまことの神に仕えるようになり、…

（Ⅰテサロニケ　1・9）

イエス様はあなたの生活のすべての中心になろうとしておられます。そして、これも主が「初めであり、終わりである」ことの現われです。イエス様は生きておられる方として、私たちの生活の中にご自身のお姿を現わしてくださいます。

次に、イエス様は「わたしは死んだが」と言われました。しかしイエス様はよみがえられて永遠のいのちをもっておられます。イエス様は一度死ぬことによって悪魔と死の力を滅ぼされました。ですからイエス様は、神の力と権威によって死から私たちを解放してくださることができるのです。「私は死んだことがある」という表現は、イエス様の人としての面をあらわす言葉です。しかし、ヨハネが見たのは父なる神のひとり子である、「御子なる神」としてのイエス様でした。

さらにイエス様は「死とハデスのかぎを持っている」と言われました。これはイエス様が限りない支配権を持っておられるということです。ローマ皇帝といえども死を前にしては何と無力だったことでしょう。それに対してイエス様は死をも克服された勝利者でした。このイエス様がヨハネに「恐れることはない」と言われたのです。イエス様がおられなければ、人は死から解放され

ることはないのです。

イエス様は「私は死とハデスのかぎを持っている」と言われました。ハデスとは死の国のことです。かぎを持っているということは、その国の主人であるということです。かぎとはその国に対しての権威を表しています。

19節については前に学びましたが、この節は黙示録全体を解く特に重要な鍵で、黙示録全体はこれよって三つの部分に分けることができます。ここでもう一度おさらいをしておきましょう。

第一の部分は1章です。1章ではヨハネが見たイエス様の「み姿」が記されています。

第二の部分は2章と3章です。その当時、ローマの支配下にあったアジアには七つの教会がありました。これら七つの教会は教会時代の終わりに至るまでのすべての教会を代表しています。

第三の部分は4章から終わりまでです。この部分には教会時代が終わるときに何がおこるかが示されています。この部分では、神がその時にイスラエルとそのほかの諸民族をどのように取り扱われるかが記されています。

3　み使い、つまり教会の象徴

最後に1章20節について考えてみましょう。「七つの燭台」とは七つの教会のことです。これら七つの教会はほとんど異邦人の教会でした。これらの教会は、イスラエル人のものではなく、それまで聖書を知らなかった人々の教会だったのです。そして、イエス様はここで、「あなたがた異邦人は金の燭台であり、選ばれたものであり、解放されたものである」と言っておられます。

しかし、ユダヤ人たちにとっては、これは自分たちに対する一つの挑戦でした。多くのユダヤ人はこのことを認めたくなかったのです。また異邦人にとっても、これらの教会は一つの危険でした。というのは、当時は国家が信教の自由を認めていたのはユダヤ人だけでしたから、もし、異邦人とユダヤ人との関係が悪くなれば、当然の結果として異邦人の存在全体が危険にさらされるからです。

20節に「み使い」という言葉が出てきます。教会の「み使い」とは何を意味しているのでしょう。これには多くの説明がなされてきました。代表的な三つの説明について見てみましょう。

ある人は、この「み使い」は教会の代表者のことだと考えています。つまり、「七つの教会からヨハネのもとへ七人の代表者がつかわされてきた」という解釈です。その当時、すべてのユダヤ人の会堂では代表者が一人選ばれて、人々の前でみことばを読んでいたのです。そしてこの代表者のことを「使い」または「み使い」と呼んでいました。ダニエル書12章3節ではこのような「使い」、あるいは「み使い」を夜空に輝く星にたとえています。この箇所だけをみると、このような解釈でもよいように思われます。しかし、黙示録の中には「み使い」という言葉はこの箇所以外に六十七回出てきますが、人間を意味している箇所は一つもありません。たとえば、2章5節を見ると、これはエペソの教会の「み使い」に語られた言葉ですが、決してひとりの人間に対して語られたのではなく、教会全体に向かって語られていることがわかります。

アドルフ・シュラッターは、教会全体の霊的な状態にたいして、たった一人の人だけがすべての責任を負わされていることは、決して聖書的ではないと言っています。たった一人の信者がす

べてのことを行なうことができるでしょうか。みことばを宣べ伝えること、奉仕をすること、霊を見分けること、悔い改めにみちびくこと、兄弟姉妹に教えることなどをたった一人の信者ができるでしょうか。初代教会では、一人の人がすべてのことをするのではなく、兄弟姉妹全体が協力していろいろなことをしていました。これらを考えますと、20節に出てくる「み使い」が一人の信者をさしているとは言えないと思います。

第二の解釈は、この「み使い」が人間をさすのではなく、文字どおり天使をさすのだという解釈です。たとえばダニエルは、イスラエルの国の「君」を「ミカエル」と呼んでいますし、ペルシヤやギリシヤなどの異邦人の国にも悪霊の「君」がいると言っています。

その時、あなたの国の人々を守る大いなる君、ミカエルが立ち上がる。国が始まって以来、その時まで、かつてなかったほどの苦難の時が来る。しかし、その時、あなたの民で、あの書にしるされている者はすべて救われる。　（ダニエル　12・1）

ペルシヤの国の君が二十一日間、私に向かって立っていたが、そこに、第一の君のひとり、ミカエルが私を助けに来てくれたので、私は彼をペルシヤの王たちのところに残しておき、…　（ダニエル　10・13）

そこで、彼は言った。「私が、なぜあなたのところに来たかを知っているか。今は、ペルシヤの君と戦うために帰って行く。私が出かけると、見よ、ギリシヤの君がやって来る。

しかし、真理の書に書かれていることを、あなたに知らせよう。あなたがたの君ミカエルのほかには、私とともに奮い立って、彼らに立ち向かう者はひとりもいない。

（ダニエル　10・20～21）

多くの人々は、ちょうどそれぞれの国にその国の「君」がいるように、それぞれの地域教会にもそれぞれの教会の「天使、み使い」がいると考えています。しかし、これは正しい解釈でしょうか。もしそうならば、主は天にいるみ使いたちにみことばを与えるために、わざわざ地上にいるヨハネを通して天上のみ使いたちにみことばを書き送る、ということになります。それはおかしなことではないでしょうか。

第三の解釈は、ここに出てくる「み使い」とは象徴的な存在であるとする考え方です。ちょうど金の燭台を諸教会の象徴とするように、この「み使い」もまた象徴的なものとして解釈するのです。金の燭台は教会をあらわします。それとおなじように、「み使い」も教会をあらわします。つまり、教会は二つのものにたとえられているのです。まず、金の燭台ですが、この言葉によって教会と主との関係が特に強調されています。燭台に油を与えるのは主ご自身なのです。

彼は私に言った。「あなたは何を見ているのか。」そこで私は答えた。「私が見ますと、全体が金でできている一つの燭台があります。その上部には、鉢があり、その鉢の上には七つのともしび皿があり、この上部にあるともしび皿には、それぞれ七つの管がついています。また、そのそばには二本のオリーブの木があり、一本はこの鉢の右に、他の一本は

その左にあります。」　（ゼカリヤ　4・2、3）

彼らは全地の主の御前にある二本のオリーブの木、また二つの燭台である。
（黙示　11・4）

主ご自身が教会にその光のもとを与え続けてくださるのです。教会は主の愛と配慮の対象です。

また、忠実な証人、死者の中から最初によみがえられた方、地上の王たちの支配者であるイエス・キリストから、恵みと平安が、あなたがたにあるように。イエス・キリストは私たちを愛して、その血によって私たちを罪から解き放ち、また、私たちを王国とし、ご自分の父である神のために祭司としてくださった方である。キリストに栄光と力とが、とこしえにあるように。アーメン。
（黙示　1・5、6）

次に、教会は「み使い」、あるいは「星」にたとえられています。このたとえは教会と教会をとりまく人々との関係を表すときに用いられます。

それは、あなたがたが、非難されるところのない純真な者となり、また、曲がった邪悪な世代の中にあって傷のない神の子どもとなり、いのちのことばをしっかり握って、彼らの間で世の光として輝くためです。そうすれば、私は、自分の努力したことがむだではなく、苦労したこともむだでなかったことを、キリストの日に誇ることができます。

（ピリピ　2・15、16）

あなたがたは、世界の光です。山の上にある町は隠れる事ができません。

（マタイ　5・14）

あなたがたは、以前は暗やみでしたが、今は、主にあって、光となりました。光の子どもらしく歩みなさい。

（エペソ　5・8）

燭台は油をさされてはじめて光を放つことができます。惑星は自分で光るのではなく、輝く太陽の光を受けてはじめて光ります。私たちもイエス様との交わりを持ちつづけるときに主から光を受け、その光を反映することができるのです。教会はイエス様のための使いであり、道具でなければなりません。「み使い」が神に用いられているように、教会もまた神に用いられるものでなければなりません。教会の使命、つまり、「み使い」、「燭台」の使命については、エペソ人への手紙3章10節にこう記されています。

これは、今、天にある支配と権威とに対して、教会を通して、神の豊かな知恵が示されるためであって、…

（エペソ　3・10）

黙示録1章に現われるイエス様のみ姿は、裁き主です。イエス様が裁き主であり、教会は裁か

れるものです。裁きはこの世から始まるのではなく、まず、神の家から、教会から始まります。

なぜなら、さばきが神の家から始まる時が来ているからです。さばきが、まず私たちから始まるのだとしたら、神の福音に従わない人たちの終わりは、どうなることでしょう

（Ⅰペテロ　4・17）

しかし、教会にたいする裁きは、あわれみの裁きです。

わたしは、愛する者をしかったり、懲らしめたりする。だから、熱心になって、悔い改めなさい。

（黙示　3・19）

このあわれみの裁きが、終わりの日に私たちを神の怒りの裁きから守ってくれるのです。ローマの皇帝にではなく、イエス様に世界の支配権が与えられています。これがヨハネの見たところです。そしてヨハネはイエス様の足もとにひれふしました。イエス様の足もとは、もっとも安全な場所です。「世界の支配者であるお方が自分の主である」。これがヨハネの喜びでした。

私たちはこの箇所を正しく理解するために、教会の課題が何であるかということをいつも考えていなければなりません。教会の使命は、「暗闇を照らす」ことです。まことの光はイエス様ご自身ですが、イエス様はご自身の光をご自身の身体である教会を通してこの世に与えようとしておられます。イエス様は教会を、ご自身の道具として用いられたいのです。これらを表す言葉が「燭台」であり、「星」であり、「み使い」です。教会はちょうど「み使い」のようにイエス様の

ご用に仕えなければなりません。また、「燭台」のようにイエス様の前に光となり、「星」のように世の人々の光とならなければなりません。

私たちの内からは暗やみしか出てきませんが、イエス様の内からは光が輝きだします。イエス様が私たちをお用いになることができればできるほど、イエス様の光が私たちの内から輝きだします。イエス様が私たちを救われたのは、私たちをお用いになるためです。私たちの内からイエス様ご自身の光が輝きだすためです。これが教会の使命であり、また、課題です。

第2部

1　七つの教会への手紙

1　手紙を出したのは誰か
2　手紙を取り次いだのは誰か
3　手紙を受けとるのは誰か
4　イエス様の諸教会に対する愛
5　教会はどのようにして変えられるのか
6　教会に約束されていることは何か
7　イエス様の偉大さ

ここからこの本は、第2部に入ります。今まで学んできた第1部、黙示録の第1章のテーマはヨハネに現われたイエス・キリストについてでした。そしてそれは、ヨハネにとってすでに過去となった経験でした。しかし、これから学ぶ第2部は、当時の教会について告げられていると同時に、現在の教会についても告げられているのです。

第2部の内容は、黙示録の2章と3章、小アジアにある七つの教会にあてられた七つの手紙です。七つの教会についてその一つ一つをくわしく学ぶ前に、まず、七つの教会全体について少し見ておきたいと思います。はじめに、次の三つの問いについて考えてみましょう。

1　手紙を出したのは誰か
2　手紙を取り次いだのは誰か
3　手紙を受けとるのは誰か

1　手紙を出したのは誰か

この手紙を出したお方は、言うまでもなく天に上げられたイエス・キリストです。黙示録第1章において、私たちはイエス様のご栄光とその偉大さとを見てきました。この天に上げられた主イエス様については、三つのことが重要です。

まず第一に、天に上げられたキリストは、「永遠の人の子」です。ダニエル書の中ですでに、「人の子」という言葉が出てきます。

…見よ、人の子のような方が天の雲に乗って来られ、年を経た方のもとに進み、その前

に導かれた。

（ダニエル　7・13）

この「人の子」という言葉は、黙示録の中で何回も使われています。「人の子」とは永遠の神の御子のことであり、処女マリアによってこの世にお生まれになった方のことです。イエス様は「人の子」としてこの地上に生まれ、苦しみを受け、十字架につかれ、そして墓に葬られました。そしてこの「人の子」イエス・キリストは、栄光の体をもってよみがえられ、「人の子」として昇天なさいました。イエス様は今も「人の子」として神の右に座しておられ、後に「人の子」として再びこの地上においでになるのです。

そのとき、人の子のしるしが天に現われます。すると、地上のあらゆる種族は、悲しみながら、人の子が大能と輝かしい栄光を帯びて天の雲に乗って来るのを見るのです。

（マタイ　24・30）

第二に、イエス様は「人の子」であるだけでなく、「永遠の大祭司」でもあります。イエス様は「永遠の大祭司」としてご自身の血を携えて主なる神のご臨在の前に出られました。イエス様はご自身の貴い血によって、全人類の罪をあがなってくださったのです。

御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現われであり、その力あるみことばによって万物を保っておられます。また、罪のきよめを成し遂げて、すぐれて高い所の大能者の右の座に着かれました。

（ヘブル　1・3）

さて、私たちのためには、もろもろの天を通られた偉大な大祭司である神の子イエスがおられるのですから、私たちの信仰の告白を堅く保とうではありませんか。私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯されませんでしたが、すべての点で、私たちと同じように、試みに会われたのです。ですから、私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、おりにかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。

（ヘブル　4・14～16）

別の個所で、こうも言われます。「あなたは、とこしえに、メルキゼデクの位に等しい祭司である。」

（ヘブル　5・6）

しかし、キリストは永遠に存在されるのであって、変わることのない祭司の務めを持っておられます。したがって、ご自分によって神に近づく人々を、完全に救うことができになります。キリストはいつも生きていて、彼らのために、とりなしをしておられるからです。

（ヘブル　7・24～25）

第三に、天に引き上げられたイエス様は、永遠の「人の子」、また「永遠の大祭司」であるばかりでなく「永遠の王」でもあられます。イエス様は神の右に座して、世界をそのみ手におさめ

ておられます。黙示録を通して、主はまず私たちにイエス様の栄光とその偉大さとを示そうとしておられるのです。ですから、大切なのは「将来に何が起こるか」を知ることではなく、「イエス・キリストを見上げる」ことです。私たちはイエス様をもっとよく知らなければなりません。黙示録が書かれた目的は、私たちがイエス様をあますところなく知るようになることです。イエス様は勝利者であり、「王の王」、また「主の主」です。

福音書において、私たちはイエス様のへりくだった姿を見ることができますが、それでもイエス様の権威と力ははっきりと現われています。たとえば、嵐に向かってイエス様が「静まれ」と言われると、嵐はすぐに静まりました。汚れた霊に「この人から出て行け」と命じられると、悪霊はイエス様の言葉に従いました。人々がイエス様を崖から突き落とそうとした時に、イエス様は人々の真ん中を通って去っていかれました。誰一人として主を捕らえることはできませんでした。ゲッセマネでイエス様が人々に捕らえられようとした時に、イエス様が「わたしがそれである」と言われると、人々はイエス様の足もとに倒れ伏したのです。

このように私たちは、福音書の中でへりくだったイエス様の自から現わされる権威を見ることができますが、黙示録においては、ただ、主イエス様の「権威」だけを見ることができます。そこではイエス様の栄光があますところなく明らかにされているのです。イエス様は主なる神の右に座し、天においても地においても一切の権力をそのみ手の中に持っておられます。

このイエス様こそ、七つの手紙の差出人です。

2　手紙を取り次いだのは誰か

次に、この手紙を取り次いだのは誰かについて考えてみましょう。

旧約聖書では「神が言われた」という言葉がよく出てきます。しかし新約聖書では「これは、わたしの愛する子…彼の言うことを聞きなさい。」（マタイ17・5）とあります。つまり新約聖書では、イエス様が中心であり、この方の語られることこそが聞かれなければならないのです。

ところが、黙示録では「御霊の言うことを聞きなさい。」とあります。そしてこの言葉は2、3章を通じて七回出てきます。ですから、手紙の差出人はイエス様であり、これを取り次ぐのは聖霊です。そしてさらに、この聖霊は次の方法で語ろうとしておられます。

最初に、聖霊は個人個人に向かって語ろうとしておられます。そして聖霊はまず、神のみことばを生きたものにされます。

ところで私たちは、聖霊の声を聞く者なのでしょうか。それとも聖霊の声を聞くことができなくなっている者でしょうか。多くの信仰者たちは、聖霊の語る言葉が聞こえなくなっています。聖霊は信仰者に個人的に語りかけ、彼らを満たし、また、彼らを通して働こうとしておられます。私たちはこの聖霊の語る声を聞き、従おうとしているでしょうか。

私たちに個人的に語りかける聖霊はまず、「イエス様の十字架の救い」を語ろうとしておられます。イエス様は十字架上で「完了した。」（ヨハネ19・30）と叫ばれました。この時、全人類の救いが完成されたのです。「すべてが終わった」のです。つまり、イエス様は闇の力を破り、罪

の支配を打ち壊し、死と悪魔の支配に対しても勝利されたのです。聖霊は、このようなイエス様の勝利の力を信仰者たちの生活の中に実現しようとして、いまも語っておられます。私たちもまた、イエス様の経験されたことを経験しなければなりません。

わたしの上に主の御霊がおられる。主が、貧しい人々に福音を伝えるようにと、わたしに油を注がれたのだから。主はわたしを遣わされた。捕われ人には赦免を、盲人には目の開かれることを告げるために。しいたげられている人々を自由にし、主の恵みの年を告げ知らせるために。

（ルカ　4・18、19）

聖霊はまた、その「使い」を通して語ろうとしておられます。弟子たちは聖霊によって聖書を書き、聖霊は聖書を通して語っています。聖霊は、聖書のみことばが私たちの現実になることを望んでおられます。聖書のみことばが私たちの生活において現実のものとなるならば、それを通して私たちは聖霊の「使い」となるのです。聖霊はご自身のみことばを通して、私たち「使い」を用いようとしておられます。聖霊を通して書かれたみことばは、実際に体験されなければなりません。そしてこのように体験されたみことばこそが、福音として他の人々に伝えられていくのです。

そのように、信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによるのです。

（ローマ　10・17）

3　手紙を受けとるのは誰か

聖書全体を見ると、主なる神はいろいろな方法で語っておられるだけでなく、さまざまな人々に向かって語っておられることがわかります。まず、神は全人類に向かって語っておられます。主なる神は、天地の創造と、イエス・キリストの救いと、最後の審判について語られました。全人類が神に対して反抗しようとしたとき、神はアブラハムを選び、アブラハムを通してイスラエルを選ばれたのです。旧約聖書全体を通して述べられているのは、そのほとんどがユダヤ人に関することです。しかし、イスラエルの民は主が語られるみことばに耳を傾けませんでした。

しかし、彼らは聞かず、耳を傾けず、悪いかたくなな心のはかりごとのままに歩み、前進するどころか後退した。

（エレミヤ　7・24）

イエス様もユダヤ人のところに来られたのですが、彼らはイエス様を受け入れませんでした。

この方はご自分のくにに来られたのに、ご自分の民は受け入れなかった。

（ヨハネ　1・11）

ですからイエス様は次のように嘆かれたのです。

ああ、エルサレム、エルサレム。預言者たちを殺し、自分に遣わされた人たちを石で打つ者。わたしは、めんどりがひなを翼の下に集めるように、あなたの子らを幾たび集めよ

うとしたことか。それなのに、あなたがたはそれを好まなかった。（マタイ　23・37）

「それなのに、あなたがたはそれを好まなかった。」とあります。ここにユダヤ人の悲劇があったのです。ですから、主なる神のさばきが彼らの上にくだったのです。そしてそのために、イエス様はイスラエルとは別の人々を人類の中から選び集められました。この人々こそがイエス様のみからだである「教会」なのです。

聖霊降臨を通して、五旬節の日から「教会」が成立しました。「教会」には新しく生まれ変わりを経験したすべての人々が集まっていました。そして、これらの教会に対して七つの手紙が出されたのですが、それには三つの意味があります。

第一に、この手紙は当時の七つの教会に対して個人的に語られています。イエス様は多くの教会の中から七つの教会を選んで語っておられます。これら七つの教会の内的状態はそれぞれ異なっていました。イエス様がなぜこれらの教会を選ばれたかというと、これらの七つの教会は、後に現われるすべての教会のあらゆる内的状態を代表することがあらかじめわかっていたからです。

第二に、これらの手紙は、その当時の七つの教会にあてられただけでなく、あらゆる時代のあらゆる教会にあてて書かれた手紙でもあります。黙示録の2章7節、3章6節、また2章と3章の終わりにある「諸教会」という言葉は、そのことを表しています。イエス様のみことばを聞くべきなのは、当時の七つの教会の人々だけではありません。すべて「心の耳が開かれている者」は、イエス様のみことばを聞くべきなのです。

教会は、五旬節から携挙に至るまで、そしてさらに永遠に至るまで、すべてが一つです。イエス様はこれら教会の全歴史を、一望のもとに視野におさめておられます。それによって私たちは、教会が全歴史を通じて七つの時代に分けられていることを知り、またさまざまな教会の姿がイエス様によって予言的に告げられていることを知るのです。

まず、エペソにあった教会は、使徒の時代に典型的だった教会の姿を現わしています。次にスミルナにあった教会は、迫害の時代、つまり紀元一〇〇年から三一六年までの時代に典型的に見られた教会を現わしています。ペルガモの教会は、紀元三一六年から五〇〇年まで、この世と妥協した、つまり国家と妥協した教会の典型的な姿です。テアテラの教会は、紀元五〇〇年から一五〇〇年まで、カトリック全盛時代に現われた教会の典型です。それは、聖書の教えと異教的な儀式との妥協を現わしています。サルデスの教会は、紀元一五一七年の宗教改革以後の教会の典型であり、教会の内的な命は死んでいるが、その中に忠実な少数の信者がいる教会の姿を現わしています。フィラデルフィアの教会は、紀元一七〇〇年以後、敬虔主義の時代に現われた教会の典型で、霊的覚醒とリバイバルの教会の姿を現わしています。ラオデキヤの教会は、現代の教会の典型です。つまり、不熱心で堕落した教会の典型です。

このように、七つの手紙はその当時の七つの教会にあてられているだけでなく、あらゆる時代のあらゆる教会に与えられているのです。またそれらの手紙は、私たちが自分たちの教会の真実の姿を知るための鏡としても与えられています。

第三に、この手紙はすべての信者たちに対して個人的に語りかけています。「耳のある者は御

霊が諸教会に言われることを聞きなさい。」、「勝利を得る者に…」という言葉が出てきますが、これは、「者は」「者に」と書かれている通り、信者の一人一人に向かって語られています。イエス様はすべての信者に向かって注意を与えようとしておられるのです。さらにイエス様は、すべての信者に対して約束をしておられます。どのような信者も、教会にあって力となるか、あるいは死の影響を与えているかのいずれかです。天に上げられたイエス様のみことばを、私たちは「両刃の剣」として受けとらなければなりません。

神のことばは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髄の分かれ目さえも刺し通し、心のいろいろな考えやはかりごとを判別することができます。

（ヘブル　4・12）

私たち信者にとって、主のみことばほど大切なものはありません。主のみことばほど、私たちに助けになるものはありません。主のみことばは、単なる言葉ではなく、「いのちのことば」なのです。

これは、あなたがたにとって、むなしいことばではなく、あなたがたのいのちであるからだ。

（申命記　32・47）

もし私たちが、この主のみことばを受け入れて私たちの内に働くようにするなら、まことに幸いです。

こういうわけで、私たちとしてもまた、絶えず神に感謝しています。あなたがたは、私たちから神の使信のことばを受けたとき、それを人間のことばとしてではなく、事実どおりに神のことばとして受け入れてくれたからです。この神のことばは、信じているあなたがたのうちに働いているのです。
（Ⅰテサロニケ　2・13）

あなたのみことばは真理です。
（ヨハネ　17・17）

私はあなたのみことばを見つけ出し、それを食べました。あなたのみことばは、私にとって楽しみとなり、心の喜びとなりました。
（エレミヤ　15・16）

私が神の御子の名を信じているあなたがたに対してこれらのことを書いたのは、あなたがたが永遠のいのちを持っていることを、あなたがたによくわからせるためです。
（Ⅰヨハネ　5・13）

私は、大きな獲物を見つけた者のように、あなたのみことばを喜びます。
（詩篇　119・162）

主よ。あなたのことばは、とこしえから、天において定まっています。あなたの真実は

代々に至ります。あなたが地を据えたので、地は堅く立っています。それらはきょうも、あなたの定めにしたがって堅く立っています。すべては、あなたのしもべだからです。もしあなたのみおしえが私の喜びでなかったら、私は自分の悩みの中で滅んでいたでしょう。私はあなたの戒めを決して忘れません。それによって、あなたは私を生かしてくださったからです。

（詩篇　119・89～93）

4　イエス様の諸教会に対する愛

これまで、この手紙を出した方、取りついだ方、受けとる人々について見てきましたが、次は、イエス様が諸教会についていかによくご存知であるか、ということを考えてみましょう。まず、黙示録の2章、3章から必要な箇所を抜き書きします。

エペソにある教会の御使いに書き送れ。「右手に七つの星を持つ方、七つの金の燭台の間を歩く方が言われる。」

（黙示　2・1）

「しかし、あなたには非難すべきことがある。あなたは初めの愛から離れてしまった。それで、あなたは、どこから落ちたかを思い出し、悔い改めて、初めの行ないをしなさい。もしそうでなく、悔い改めることをしないならば、わたしは、あなたのところに行って、あなたの燭台をその置かれた所から取りはずしてしまおう。」

（黙示　2・4、5）

「耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。勝利を得る者に、わたしは神のパラダイスにあるいのちの木の実を食べさせよう。」また、スミルナにある教会の御使いに書き送れ。「初めであり、終わりである方、死んで、また生きた方が言われる。」

（黙示　2・7、8）

「耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。勝利を得る者は、決して第二の死によってそこなわれることはない。」また、ペルガモにある教会の御使いに書き送れ。「鋭い、両刃の剣を持つ方がこう言われる。」

（黙示　2・11、12）

「だから、悔い改めなさい。もしそうしないなら、わたしは、すぐにあなたのところに行き、わたしの口の剣をもって彼らと戦おう。耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。わたしは勝利を得る者に隠れたマナを与える。また、彼に白い石を与える。その石には、それを受ける者のほかはだれも知らない、新しい名が書かれている。」また、テアテラにある教会の御使いに書き送れ。「燃える炎のような目を持ち、その足は光り輝くしんちゅうのような、神の子が言われる。」

（黙示2・16～18）

また、サルデスにある教会の御使いに書き送れ。神の七つの御霊、および七つの星を持つ方がこう言われる。「わたしは、あなたの行ないを知っている。あなたは、生きている

とされているが、実は死んでいる。」（黙示　3・1）

「だから、あなたがどのように受け、また聞いたのかを思い出しなさい。それを堅く守り、また悔い改めなさい。もし、目をさまさなければ、わたしは盗人のように来る。あなたには、わたしがいつあなたのところに来るか、決してわからない。」（黙示　3・3）

「耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。」また、フィラデルフィヤにある教会の御使いに書き送れ。「聖なる方、真実な方、ダビデのかぎを持っている方、彼が開くとだれも閉じる者がなく、彼が閉じるとだれも開く者がない、その方がこう言われる。」（黙示　3・6、7）

「耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。」また、ラオデキヤにある教会の御使いに書き送れ。アーメンである方、忠実で、真実な証人、神に造られたものの根源である方がこう言われる。「わたしは、あなたの行ないを知っている。あなたは、冷たくもなく、熱くもない。わたしはむしろ、あなたが冷たいか、熱いかであってほしい。このように、あなたはなまぬるく、熱くも冷たくもないので、わたしの口からあなたを吐き出そう。あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、乏しいものは何もないと言って、実は自分がみじめで、哀れで、貧しくて、盲目で、裸の者であることを知らない。」

（黙示　3・13～17）

「見よ。わたしは、戸の外に立ってたたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところにはいって、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。勝利を得る者を、わたしとともにわたしの座に着かせよう。それは、わたしが勝利を得て、わたしの父とともに父の御座に着いたのと同じである。耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。」

（黙示　3・20～22）

黙示録の2章と3章は、ちょうど裁判官の尋問のようなものだと言えましょう。そしてまた、医者が下す診断のようなものでもあります。イエス様は諸教会について全てのことをご存知でした。良いことも悪いことも、彼らが中途半端だったことも、全てのことをご存知だったのです。2章2節と3章1節の中に、「わたしは、知っている。」という言葉が出てきます。そして、この言葉は試練の結果を見て語られた言葉です。それはマタイ7章16節から21節にあるように、「木の良し悪しが、その結ぶ実によって見分けられる」のと同じです。

裁き主は、教会に試練を与えて、その結果によって教会の状態を正確に見分けられます。たとえばヨハネ4章29節を見ると、サマリヤの女が「私のしたこと全部を私に言った人がいるのです。」と言っています。このような箇所は他にもあります。

「わたしは、ピリポがあなたを呼ぶ前に、あなたがいちじくの木の下にいるのを見たの

です。」

（ヨハネ　1・48）

しかし、イエスは、ご自身を彼らにお任せにならなかった。なぜなら、イエスはすべての人を知っておられたからであり、また、イエスはご自身で、人のうちにあるものを知っておられたので、人についてだれの証言も必要とされなかったからである。

（ヨハネ　2・24、25）

イエスは彼らに答えられた。「わたしがあなたがた十二人を選んだのではありませんか。しかしそのうちのひとりは悪魔です。」

（ヨハネ　6・70）

主はご自分に属する者を知っておられる。

（IIテモテ　2・19）

私たちはこれらの聖書の箇所によって、イエス様が全てのことをご存知だということを知ることができます。ところが、このイエス様に対して、教会は何も知らなかったのです。黙示録3章17節には、「あなたは、…知らない。」という言葉が出てきます。つまり教会は、現実の中に足をおろして生活していなかったのです。そしてイエス様は、このような教会に対して、手紙によって目を開かせようとしておられるのです。

あなたは私たちの不義を御前に、私たちの秘めごとを御顔の光の中に置かれます。

（詩篇　90・8）

このようなダビデの願いを、私たちもまた持つことが大切です。

3章2節には、教会の「なまぬるさ」が、また2章4節には教会の「愛のなさ」が指摘されています。これらはいずれも罪です。そしてイエス様は、私たちの罪を見逃すようなことはなさいません。ですからイエス様は教会を非難しておられるのです。たとえば2章4節に「しかし、あなたには非難すべきことがある。」というみことばが出てくるのは、そういう理由からです。

ところで、イエス様と教会との間には、どのような違いがあるのでしょうか。まず、イエス様は「全てをご存知」ですが、教会は「何も知りません」でした。黙示録1章全体を通して、イエス様の栄光が記され、2、3章では教会の欠乏、至らなさが記されています。

イエス様は全てをご覧になられ、全てのことをご存知です。私たちはイエス様からほめられるか、非難されるかによって、イエス様の私たちに対する判断を知ることができます。

スミルナとフィラデルフィアの教会は、イエス様から賞賛を受けました。ラオデキヤの教会はただ非難だけを受けました。その他の教会は賞賛と非難の両方を受けました。イエス様はラオデキヤの教会をほめることがおできになりませんでした。しかしそれにもかかわらず、イエス様はラオデキヤの教会に「愛」をお示しになられました。

わたしは、愛する者をしかったり、懲らしめたりする。だから、熱心になって、悔い改めなさい。

（黙示　3・19）

このように、どの教会に対しても、イエス様は怒りについては語っておられません。イエス様の「非難」は、いつも私たちに対する「訴え」なのです。

しかし、あなたには非難すべきことがある。あなたは初めの愛から離れてしまった。（黙示　2・4）

しかし、あなたには少しばかり非難すべきことがある。あなたのうちに、バラムの教えを奉じている人々がいる。バラムはバラクに教えて、イスラエルの人々の前に、つまずきの石を置き、偶像の神にささげた物を食べさせ、また不品行を行なわせた。（黙示　2・14）

しかし、あなたには非難すべきことがある。あなたは、イゼベルという女をなすがままにさせている。この女は、預言者だと自称しているが、わたしのしもべたちを教えて誤りに導き、不品行を行なわせ、偶像の神にささげた物を食べさせている。（黙示　2・20）

マタイ5章23節から24節に、「祭壇の上に供え物をささげようとしているとき、もし兄弟に恨まれていることをそこで思い出したなら、…まずあなたの兄弟と仲直りをしなさい。」とありますが、教会もまた、ある意味でイエス様に対して恨まれても当然のことをしていたと言えましょう。つまり、これらの教会の状態は、ローマ人への手紙8章31節から34節までに記されているのと

は全く正反対の状態にあったと言えるでしょう。

では、これらのことからどう言えるでしょう。神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。私たちすべてのために、ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された方が、どうして、御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがありましょう。神に選ばれた人々を訴えるのはだれですか。神が義と認めてくださるのです。罪に定めようとするのはだれですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、私たちのためにとりなしていてくださるのです。

（ローマ　8・31～34）

それゆえ、パウロは喜び、勝利の声をあげ、「だれが私たちに敵対できるでしょう。」と言っているのです。

しかし、黙示録2章においてイエス様は「あなたがたには、非難すべきところがある。」と言っておられます。ですから私たちは、ここでローマ人への手紙8章のことばを逆にして、「神が私たちの敵であるなら、誰が私たちを助けうるだろうか」と鋭く問われているのです。イエス様が私たちの敵となってしまったら、私たちを助けてくださる方は一体誰なのでしょうか。私たちを助けてくださるお方はイエス様をおいて他にはおられません。

5　教会はどのようにして変えられるのか

医者がそうするように、まず診断があり、その後でイエス様はそれに応じて教会に治療を施してくださいます。非難を受けている五つの教会は、同じ忠告をうけています。「悔い改めて、初めに帰れ」という忠告です。

これに対して、賞賛を受けた二つの教会は、「死に至るまで忠実でありなさい。」（黙示2・10）とか、「あなたの持っているものをしっかりと持っていなさい。」（黙示3・11）などといった励ましの言葉を受けています。また、テアテラの教会の中にいる忠実な信者たちも、同じ励ましの言葉を受けました（黙示2・25）。ですから、全ての教会が悔い改めなければならない状態にあったわけではありません。

しかし、全ての教会は、戦い、そして勝利を得なければなりませんでした。このために、全ての教会はイエス様の励ましの言葉を必要としていました。なぜなら、全ての教会は堕落する可能性と危険性をもっていたからです。

ですから、立っていると思う者は、倒れないように気をつけなさい。

（Ⅰコリント　10・12）

多くの教会は、悔い改めを迫られています。しかし、悔い改めるということは、決してそれが「目的」であってはならないのであり、あくまでも、「結果」でなければなりません。というのは、悔い改めは、決して何かをもらうためにすることであってはならないのです。悔い改めは、いつも、イエス様が伝えられたことに対する「当然の結果」でなければなりません。

あなたは、どこから落ちたかを思い出し、悔い改めて、初めの行ないをしなさい。
（黙示　2・5）

あなたがどのように受け、また聞いたのかを思い出しなさい。それを堅く守り、また悔い改めなさい。
（黙示　3・3）

だから、熱心になって、悔い改めなさい。見よ、わたしは、戸の外に立ってたたく。
（黙示　3・19、20）

また将来、これから来ようとしておられるイエス様に対しても悔い改めが必要です。
もしそうでなく、悔い改めることをしないならば、わたしは、あなたのところに行って、あなたの燭台をその置かれた所から取りはずしてしまおう
（黙示　2・5）

だから、悔い改めなさい。もしそうしないなら、わたしは、すぐにあなたのところに行き、わたしの口の剣をもって彼らと戦おう。
（黙示　2・16）

また悔い改めなさい。もし、目をさまさなければ、わたしは盗人のように来る。
（黙示　3・3）

ある教会は悔い改めを迫られ、また他の教会は奨励の言葉をいただいています。つまり、ある教会は警告の言葉をいただき、他の教会は約束の言葉をいただいているのです。悔い改めがなされていないところでは、約束も与えられず、希望も与えられないのです。警告、または戒めの言葉は、悔い改めのない者に向かって語られています。

それで、あなたは、どこから落ちたかを思い出し、悔い改めて、初めの行ないをしなさい。もしそうでなく、悔い改めることをしないならば、わたしは、あなたのところに行って、あなたの燭台をその置かれた所から取りはずしてしまおう。（黙示　2・5）

わたしは悔い改める機会を与えたが、この女は不品行を悔い改めようとしない。見よ。わたしは、この女を病の床に投げ込もう。また、この女と姦淫を行なう者たちも、この女の行ないを離れて悔い改めなければ、大きな患難の中に投げ込もう。（黙示　2・21、22）

だから、あなたがどのように受け、また聞いたのかを思い出しなさい。それを堅く守り、また悔い改めなさい。もし、目をさまさなければ、わたしは盗人のように来る。あなたには、わたしがいつあなたのところに来るか、決してわからない。（黙示　3・3）

このように、あなたはなまぬるく、熱くも冷たくもないので、わたしの口からあなたを吐き出そう。（黙示　3・16）

全ての教会は、主によって何を求められているのでしょうか。まず、イエス・キリストを宣べ伝え、そして、キリストの栄光を現わすことです。これらは全て、聖霊の働きによります。ですから、黙示録の2章、3章には「御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。」というみことばが七回も出てくるのです。このみことばによって、実は二つのことが語られています。一つは、「聖霊は教会に対して語っておられる」ということ、いま一つは、「教会は聞く耳を持っている」ということです。この二つが教会の特徴です。このことをもう少し考えてみましょう。

まず聖霊は、教会に向かって語ろうとしておられます。しかも、聖霊が語られる方法には次の方法があります。まず聖霊は、「訴え」の言葉をもって、次に「悔い改め」の呼びかけをもって、さらに「警告」の言葉をもって教会を裁いておられるのです。つまりこれらの言葉によって、この世の誤りが明るみに引きだされます。黙示録の中の、たとえば、ニコライ派の人々、バラムの教えに従っている人々、イゼベルなどがその例です。

その方が来ると、罪について、義について、さばきについて、世にその誤りを認めさせます。（ヨハネ　16・8）

さらに聖霊は、「奨励」と「戒め」と「約束」の言葉をもって信者に力を与えようとしておら

れます。そして聖霊は、ある特定の教会に向かって語っているのではなく、全ての教会に向かって語っておられます。聖霊は、ラオデキヤのような最悪の状態にある教会に向かっても語っておられます。聖霊がそれらの教会に向かって語っておられるということは、そこが教会であることの証拠です。また、その教会が神によって愛されていることの証拠です。

わたしは、愛する者をしかったり、懲らしめたりする。だから、熱心になって、悔い改めなさい。

（黙示　3・19）

次に教会は、「聖霊の声を聞いてこれに聞き従う能力」を持っています。言いかえると、神のみ声に聞き従う能力をもっている人々が、教会に属している人々なのです。

「神から出た者は、神のことばに聞き従います。」

（ヨハネ　8・47）

「わたしの羊はわたしの声を聞き分けます。またわたしは彼らを知っています。そして彼らはわたしについて来ます。」

（ヨハネ　10・27）

「…真理に属する者はみな、わたしの声に聞き従います。」

（ヨハネ　18・37）

ですから教会は、この神のみことばに聞き従う能力を持てば持つほど、神のみことばに対する責任をそれだけ多く感じるようになります。黙示録2、3章において、教会は七回も「聞きなさ

い」という言葉を与えられています。また、ヘブル人への手紙2章1節の中に、同じような「聞きなさい」という警告の言葉を見ることができます。

ですから、私たちは聞いたことを、ますますしっかり心に留めて、押し流されないようにしなければなりません。（ヘブル　2・1）

しかし教会は、聞く耳を持ち、聞き従う能力を持っていても、いつのまにか聞こえなくなってしまうことがあります。というのは、教会はこの世に属するものではありませんが、この世の中におかれているからです。ですから、教会はこの世と同じものに変えられてしまう危険性をもっているのです。

そして、耳の聞こえない者はまた同時に口のきけない者にもなってしまいます。この世と同じ者になってしまった教会や信者は、もはやこの世にあって主の証しとなることはできません。神のみ声に聞き従う耳が閉ざされてしまった者は、祈りをやめ、証しすることをやめてしまいます。ですから、「聞きなさい」という言葉が七回も語られているのは、「目をさましていなさい」という警告なのです。そうでなければ、教会は、すぐに聞こえない者となり、口のきけない者となってしまう危険性があるのです。

聖霊はまた、私たちに個人的に語りかけようとしておられます。聖霊は、私たちのことは何でもご存じです。聖霊は、信者の生活のどこに罪があり、冷淡さがあり、そして、不貞があるかをよく知っておられます。私たちは、聖霊によって語っていただかなければなりません。聖霊に語っ

ていただきたいという心の用意があるでしょうか。正しく聞くということは、私たちが悔い改める心の用意をもっているということであり、また、結果がどうであろうとも聖霊のみ声に従っていく、ということを意味しています。

聖霊のみ声に聞き従うという場合、私たちは二つの態度をとることができます。一つはサムエルのような態度です。

主よ、お話しください。しもべは聞いております。（Ⅰサムエル　3・9）

もう一つは、イスラエルの民のとった態度です。

しかし、彼らは聞かず、耳を傾けず、悪いかたくなな心のはかりごとのままに歩み、前進するどころか後退した。（エレミヤ　7・24）

教会は、どのようにして変えられるのでしょうか。それは、聖霊のみ声に聞き従うことによって、また、目標を目指して進むことによって変えられるのです。七つの教会への手紙を通して、私たちははっきりした希望が与えられています。「勝利を得る者は」という希望です。この希望とともに、私たちは次の主題に入りたいと思います。

6　教会に約束されていることは何か

黙示録2、3章には、「勝利を得る者には」という言葉が七回出てきます。それはつまり、教

会は「勝利を得る」というそのことのためにイエス様に召されているということを表しています。それでは、「勝利を得る」とはどういうことでしょうか。イエス様に従う者は、イエス様と共に時には深い所に下り、時には高い所にも登らなければなりません。私たちは、どんなことがあっても、イエス様に従っていかなければなりません。

黙示録2、3章には七つの約束が出てきますが、いつもイエス様ご自身が「わたしは、……をしよう。」と約束しておられます。これらの約束は、イエス様によって生まれ変わりを体験し、そのあとで勝利を勝ちえる人々の全てに与えられているのです。

イエス様は、ご自身の救いの完全さを教会に示され、そして教会がイエス様の完全な救いにあずかることを願っておられます。七つの教会への手紙を通して、私たちはイエス様の完全な救いがどのようなものであるかを見ることができます。

またイエス様は、それぞれの教会に対して、その時々の教会の状態に応じて、その教会にふさわしい、特別なことを約束なさったのでした。

エペソの教会に与えられた約束は、「神のパラダイスにあるいのちの木の実を食べさせる」ことでした。つまり、その門の前にはもはや剣を持った天使は立っていないのです。これは、信じる者がまことの故郷に、またまことのいのちに帰ることを意味しています。

スミルナの教会に対しては、走りぬいた者に対して与えられる「いのちの冠」、勝利の約束が与えられていました。

ペルガモの教会に対しては、「白い石」が約束されていました。「白い石」とは何でしょうか。

古代の裁判で無罪の判決をくだされた人には「白い石」が与えられましたが、ペルガモの教会に約束された「白い石」はこれでした。つまり、ペルガモに「白い石」が約束されたということは、ペルガモの罪が赦されたというだけでなく、ペルガモがイエス様の前に罪のない者として認められた、ということを意味しています。

テアテラの教会には、「鉄の杖」が約束されていました。これはテアテラの教会が世界の統治とさばきに関わりをもつ、という約束です。このことは、テアテラの教会がイエス様と共に裁き、イエス様と共に支配する、ということを意味しています。

サルデスの教会には、「白い衣」が与えられることと、「いのちの書から決して名前が消されない」ことが約束されました。それは、サルデスの教会が聖めと聖化にあずかるという約束です。

フィラデルフィヤの教会は、「神の聖所の柱とする」ことが約束されました。それは、積極的にイエス様と労を共にするということを意味しています。

ラオデキヤの教会に対しては、「主なる神の食卓につく」ということと、「神の御座につく」という約束が与えられました。これは、イエス様と共に交わる喜び、イエス様と共に支配する特権が約束されていることを意味しています。

全ての教会が、それぞれにすばらしい約束を与えられ、そして勝利を勝ちとることが期待されています。全ての教会に希望が与えられているのです。全ての教会は、教会を愛してくださるイエス様によって勝利を得ることができるのです。どんな教会も、もちろん自分の力では勝利を得ることはできません。しかしこれらのお約束から、私たちは私たちに力を与えてくださる方によっ

て、必ず勝利をいただけるということを知ることができます。

しかし、私たちは、私たちを愛してくださった方によって、これらすべてのことの中にあっても、圧倒的な勝利者となるのです。（ローマ　8・37）

また、私たちを王国とし、ご自分の父である神のために祭司としてくださった方である。キリストに栄光と力とが、とこしえにあるように。アーメン。（黙示　1・6）

次に私たちは、二つの言葉について考えてみましょう。イエス様は十字架上で「完了した。」（ヨハネ19・30）と言われました。また、黙示録21章6節には「事は成就した。」と書かれています。実はこれらの二つの言葉の間には、たいへん重要な関係があります。その間には、一つの戦いがあるのです。イエス様は勝利を得られましたが、悪魔も働いているのです。悪魔は打ち負かされましたが、しかし、今もなお戦いをいどんでいます。

愛する者たち。あなたがたを試みるためにあなたがたの間に燃えさかる火の試練を、何か思いがけないことが起こったかのように驚き怪しむことなく、むしろ、キリストの苦しみにあずかれるのですから、喜んでいなさい。それは、キリストの栄光が現われるときにも、喜びおどる者となるためです。（Ⅰペテロ　4・12、13）

七つの教会は、このような悪魔の攻撃に対する心の用意を持っていなければなりませんでした。

私たちは悪魔と戦うにあたって、戦いだけを見るのではなく、戦いの褒賞をも見なければなりません。七つの約束、つまり褒賞は、七つの面から、イエス様との完全な交わりを示しています。

褒賞は、当時の運動競技でもローマ皇帝によって授けられていました。そして悪魔もまた、褒賞を提供しています。

悪魔は…言った。「もしひれ伏して私を拝むなら、これを全部あなたに差し上げましょう。」（マタイ　4・9）

悪魔の提供する褒賞とは、この世のすべての国々とその栄華です。しかし、イエス様が提供なさる褒賞は、これら全てと比較にならないほどすばらしく、しかも、人間の側の働きとは何の関係もありません。ですから、これらの褒賞は、「報酬」ではなく「恵み」です。

7　イエス様の偉大さ

私たちは、イエス様の偉大さについて、どこまで知ることができるでしょうか。イエス様はあまりにも偉大なお方なので、私たち人間は生きている間にイエス様の完全さとその栄光のすべてを見ることなどとてもできません。

私たちは、この世にある間は、イエス様の偉大さのごく一面だけを見ることができるにすぎません。ヨハネはイエス様の完全さとその栄光とを目のあたりにしましたが、そのためにイエス様の足もとに倒れて死者のようになったと黙示録1章に書かれています。黙示録2、3章では、イ

エス様は、それぞれの教会の状態に応じて、その教会に必要なご自身の姿の一面だけを現わしておられます。

エペソの教会に対しては、イエス様は大祭司としてのご自身の姿を示されました。そして、燭台としての教会の中にご自身を現わされました。つまり、大祭司として燭台に油を注ぐ者、また燭台の灯りを消す者としてのお姿です。イエス様は、星として現わされている教会を、ご自身の手の中に保っておられるのですから、教会をご自身のみ手の中で守ることはもちろん、手の中から捨て去ってしまうこともできるお方として、ご自身を現わされたのです。

エペソの教会は、表面的に見るとすべてを所有しているように見えましたが、その根の所が病んでいました。そのためにイエス様との生きた交わりを失っていたのです。そこでこの教会に対して、イエス様は大祭司として、初めの愛を再び聖霊の油をもって注ぎ入れる者として、ご自身を現わされたのです。

スミルナの教会に対しては、イエス様はご自身を死に対する勝利者として現わされました。墓の入り口を塞いでいた石は、イエス様にとって何の障害にもなりませんでした。なぜなら、イエス様は死に打ち勝たれたからです。スミルナの教会は、迫害を受けたために、恐れと不安と死に脅かされていました。この教会に対してイエス様は、ご自身を死に対する勝利者として現わされたのです。そして、死に至るまで忠実であるように、また襲ってこようとしている苦難に恐れることがないようにと告げられたのです。

ペルガモの教会に対しては、イエス様はみことばの剣をもって戦う者としてご自身を現わして

おられます。この教会は外側に対する戦いのために、内側の戦いを忘れてしまっていました。そのため、この教会は妥協をする危険性があったのです。ですからイエス様は、両刃の剣の言葉をもって、本来一つになりえないはずのものをはっきりと区別なさる必要があったのです。

テアテラの教会に対しては、イエス様はご自身を裁き主として現わされました。全てのものを見通すことができる炎のような眼を持つ者として、また反抗するすべてのものを踏み砕くことのできる鉄の足を持った者として、ご自身を現わされたのです。

さらに、サルデス、フィラデルフィヤ、ラオデキヤの教会に対しても、イエス様は、それらの教会に必要なご自身の偉大さの一面を力強く現わしておられますが、それについてはそれぞれの章でくわしく学んでいきましょう。

天に上げられたイエス様が教会に与えられたみことば

2　初めの愛とエペソの教会

黙示録2章1節から7節まで

1　あいさつと励まし

1　エペソとパウロ

2　教会の使命

3　新しいいのちの七つの結果

2　非難と警告

3　称賛と約束

私たちはここから、黙示録の第2章に入っていきます。今回学ぶところは1節から7節までで、次のように記されています。

[1]エペソにある教会の御使いに書き送れ。『右手に七つの星を持つ方、七つの金の燭台の間を歩く方が言われる。[2]「わたしは、あなたの行ないとあなたの労苦と忍耐を知っている。また、あなたが、悪い者たちをがまんすることができず、使徒と自称しているが実はそうでない者たちをためして、その偽りを見抜いたことも知っている。[3]あなたはよく忍耐して、わたしの名のために耐え忍び、疲れたことがなかった。[4]しかし、あなたには非難すべきことがある。あなたは初めの愛から離れてしまった。[5]それで、あなたは、どこから落ちたかを思い出し、悔い改めて、初めの行ないをしなさい。もしそうでなく、悔い改めることをしないならば、わたしは、あなたのところに行って、あなたの燭台をその置かれた所から取りはずしてしまおう。[6]しかし、あなたにはこのことがある。あなたはニコライ派の人々の行ないを憎んでいる。わたしもそれを憎んでいる。[7]耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。勝利を得る者に、わたしは神のパラダイスにあるいのちの木の実を食べさせよう。」』　（黙示　2・1～7）

この部分の学びのテーマはいくつかありますが、それは「天に上げられたイエス様のエペソの教会へのみことば」、「よい働きと足りない愛」、また「イエス様に対する初めの愛」などです。

そして、1節から7節までは、「あいさつと励まし」「非難と警告」「称賛と約束」の三つの部分に分けられます。

1　あいさつと励まし

1　エペソとパウロ

エペソはその当時大きな商業都市で、多くの利益をあげていました。また、文化と学問の盛んな町で、そこに住む人々の知的水準はかなり高いものだったと思われます。一方では、宗教的な町でもあり、エペソには小アジアの女性神でアルテミスとも言うダイアナが祭られ、魔術も盛んに行なわれ、それについての書物も数多く出されていました。しかし、パウロがエペソに来たことによって、福音がはじめてもたらされました。現在でも一人の信者が学校や職場に入ると、パウロのような結果がもたらされるはずです。パウロは三年間エペソで福音を伝えたと使徒の働き20章31節にあります。その結果、対立が生じました。十字架につけられたイエス・キリストと、ギリシアの知恵との対立です。

しかし、私たちは十字架につけられたキリストを宣べ伝えるのです。ユダヤ人にとってはつまずき、異邦人にとっては愚かでしょうが、しかし、ユダヤ人であってもギリシヤ人であっても、召された者にとっては、キリストは神の力、神の知恵なのです。

（Ⅰコリント　1・23、24）

福音が伝えられる所では、人はいつも決断を迫られます。エペソにおいてもそうでした。多くの人々が信仰に入り、魔術の書物を焼き捨てました。燃やされた書物は金額にして銀貨五万枚以上に達しました。

また魔術を行なっていた多くの者が、その書物をかかえて来て、みなの前で焼き捨てた。その値段を合計してみると、銀貨五万枚になった。（使徒　19・19）

こうして、主のことばは驚くほど広まり、ますます力強くなって行った。（使徒　19・20）

しかし悪魔はこれに対抗し、銀細工人デメテリオを反逆の道具として用いました。彼は使徒の働き19章24節から28節にある通り、十字架につけられたキリストを選ぶか、あるいはエペソの女神ダイアナを選ぶかの選択をエペソの人々に迫りました。

しかし、主のみことばはますます広まったので、それを見たパウロは教会で長老を選び、エペソを去ることにしました。後に、パウロはこの時に選んでおいた長老たちをミレトに呼び集めて、次のように話しています。

益になることは、少しもためらわず、あなたがたに知らせました。人々の前でも、家々でも、あなたがたを教え、ユダヤ人にもギリシヤ人にも、神に対する悔い改めと、私たち

の主イエスに対する信仰とをはっきりと主張したのです。（使徒　20・20、21）

ですから、私はきょうここで、あなたがたに宣言します。私は、すべての人たちが受けるさばきについて責任がありません。私は、神のご計画の全体を、余すところなくあなたがたに知らせておいたからです。あなたがたは自分自身と群れの全体とに気を配りなさい。聖霊は、神がご自身の血をもって買い取られた神の教会を牧させるために、あなたがたを群れの監督にお立てになったのです。（使徒　20・26～28）

パウロは彼らに、自分自身と群れの全体とに気を配り、神の群れをよく牧するように忠告を与えました。パウロは教会に困難が襲ってくることを語り、長老たちに警告を与えたのです。

私が出発したあと、狂暴な狼があなたがたの中にはいり込んで来て、群れを荒らし回ることを、私は知っています。あなたがた自身の中からも、いろいろな曲がったことを語って、弟子たちを自分のほうに引き込もうとする者たちが起こるでしょう。（使徒　20・29、30）

エペソの教会は模範的な教会でした。エペソ人への手紙には、エペソの教会の人々が持っていた深い信仰への理解力が示されています。そこでは二十二回にわたって「愛」という言葉が用いられています。このことは、エペソの教会にはイエス様に対する純粋な「愛」が保たれていたこ

とを示しています。パウロは彼らにあてて次のように書いています。

こうしてキリストが、あなたがたの信仰によって、あなたがたの心のうちに住んでいてくださいますように。また、愛に根ざし、愛に基礎を置いているあなたがたが、すべての聖徒とともに、その広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解する力を持つようになり、人知をはるかに越えたキリストの愛を知ることができますように。こうして、神ご自身の満ち満ちたさまにまで、あなたがたが満たされますように。

（エペソ　3・17～19）

パウロのほかに、アポロ、テモテ、ヨハネがエペソで働きました。エペソの教会は多くのものを得ました。そしてパウロがエペソを去ってから三十五年後の教会の姿を、私たちはこの黙示録2章の1節から7節を通して見ることになります。

2　教会の使命

黙示録の2章は、「エペソにある教会の御使いに書き送れ。」という言葉で始まっています。私たちはかつて第1章で、天使あるいは御使いとは何であるかを学びました。そのことをもう一度ここで振り返っておきましょう。「御使い」はいつも神の使者であり、神のみ手の中にある道具です。教会もまた、神の道具でなければなりません。教会は、まず「燭台」のように世の中の暗やみを照らすことによって神の道具となります。また、神の前で仕え、神に礼拝を捧げることに

よって神の道具となります。さらに教会は、「星」のように世の中の人々に光を与えることによって神の道具となります。ですから「燭台」、「星」、「御使い」はともに教会を現わす象徴です。「御使い」というのは、ただ一人の人物を指しているのではなく、全体として神に仕えている教会を指しています。新約聖書では、長老とは、一人の人物ではなく、常に幾人かの人物を指しています。ですから、長老は一人ではなく、たくさんの人物によって代表されています。使徒の働き20章17節以下を見るとわかりますが、パウロの長老たちに対する呼びかけは「あなた」とはなっていません。いつも「あなたがた」となっています。

2章7節を見ると、御霊の語りかけは、一つの教会だけでなく「諸教会」に向けられたものであることがわかります。私たちはこの箇所を正しく理解するために、教会の使命が何であるかをいつも考えていなければなりません。教会の使命は暗やみを照らすことです。真の光はイエス様ご自身です。イエス様はご自身の光を、ご自身のからだである教会を通してこの世に与えようとしておられます。イエス様は、教会をご自身の道具として用いようとしておられます。イエス様の道具としての教会を表わす言葉が「燭台」であり、「星」であり、「御使い」です。教会は「御使い」のようにイエス様のご用に仕えなければなりません。教会は、「燭台」のようにイエス様の前に光となり、「星」のように世の人々のための光とならなければなりません。

私たちの内側からは暗やみしか出てきませんが、イエス様の内側からは光が出てきます。イエス様が私たちをお用いになられる程度に従って、イエス様の光が私たちの内から出てくるのです。イエス様が私たちを救われたのは、私たちをお用いになるためであり、私たちの内からイエス様

ご自身の光を世に与えられるためです。これが教会の使命であり課題です。

2章1節を見ると、イエス様は星を手に持って燭台の間を歩いておられます。つまりイエス様は、諸教会を手に持って諸教会の間を歩いておられるのです。これは諸教会に対するイエス様の権威を表わしているみことばです。イエス様はご自身の血をもって諸教会を贖われました。そして、どこにでもご臨在なさり、すべてを知っておられ、みずから「主」として諸教会を保っておられます。イエス様はすべてを見通され、イエス様の目の前に隠しおおせるものは何一つありません。私たちはイエス様の目を欺くことはできません。主はすべてを見ておられます。

この節の「歩く」という言葉について考えてみましょう。この「歩く」という言葉は、創世記3章8節にも使われています。

そよ風の吹くころ、彼らは園を歩き回られる神である主の声を聞いた。
（創世記　3・8）

これは神と人との交わりを意味しています。同じ「歩く」という言葉を、私たちはほかの箇所でも多く見ることができます。

わたしはあなたがたの間を歩もう。わたしはあなたがたの神となり、あなたがたはわたしの民となる。
（レビ　26・12）

あなたの神、主が、あなたを救い出し、敵をあなたに渡すために、あなたの陣営の中を

歩まれるからである。　（申命記　23・14）

主なる神は人々との交わりを求めておられます。あなたとの交わりを求めておられます。イエス様との交わりを持たなければ、人生は虚しく満足がありません。イエス様との交わりを体験している人々は、次のみことばにある通り、喜んで生活することができます。

私たちの見たこと、聞いたことを、あなたがたにも伝えるのは、あなたがたも私たちと交わりを持つようになるためです。私たちの交わりとは、御父および御子イエス・キリストとの交わりです。　（Ⅰヨハネ　1・3）

エペソという地名の意味は、「愛すべき者」、「愛している者」、「愛されている者」です。本当の喜びの源は、自分自身がイエス様によって愛されているということにあります。

…キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられた…　（エペソ　5・25）

…いま私が、この世に生きているのは、私を愛し私のためにご自身をお捨てになった神の御子を信じる信仰によっているのです。　（ガラテヤ　2・20）

このパウロのように言うことができる人は幸いです。

さて次に、黙示録2章2節を見ましょう。ここでは天に上げられたイエス様が、エペソの教会に向かって語っておられます。イエス様のみことばはいつもご自身の啓示です。イエス様は、しばしば「わたしは…です」という言葉を用いておられます。「わたしはいのちのパンです」、「わたしは世の光です」、「わたしは門です」、「わたしは神の子です」、「わたしはよみがえりです。いのちです」、「わたしは道であり、真理であり、いのちなのです」。これらはイエス様のみことばであるだけではなく、イエス様ご自身の啓示です。黙示録2章においても同じです。私たちはこの章の中に、「わたし」という言葉を非常に多く見つけることができます。

「わたしは、あなたの行ないとあなたの労苦と忍耐を知っている。」（黙示　2・2）

「…わたしは神のパラダイスにあるいのちの木の実を食べさせよう。」（黙示　2・7）

イエス様の目は炎のようであり、すべてのものを見通します。

「しかし、あなたには非難すべきことがある。」（黙示　2・4）

イエス様は、この場合、両刃の剣のように、みことばをもって、彼らに対する判断を下しておられます。

「わたしは、あなたのところに行って、あなたの燭台をその置かれた所から取りはずしてしまおう。」（黙示　2・5）

これは非常に厳しいみことばです。イエス様は、人のうわべだけを見ることはなさらず、キリスト者でさえも同じように裁かれます。イエス様は約束を実行されるだけでなく、裁きの言葉をも実行されます。

これらのみことばの中に、私たちはイエス・キリストの絶対的な権威を見ることができます。永遠のいのちを与えることができるのはイエス様だけです。もし私たちが、「わたし」というイエス様の言葉に注意をするなら、私たちはイエス・キリストの偉大さ、そしてすべてのものがイエス様の手の中におさめられていることを理解することができます。イエス様のみことばは真理であり、イエス様の判断は正しいのです。

3　新しいいのちの七つの結果

イエス様はエペソの教会を誇りとされ、この教会に喜びをもっておられます。それは1節から3節、6節を見るとよくわかります。パウロはエペソ人への手紙の中で次のように書いています。

あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。行ないによるのではありません。だれも誇ることのないためです。

（エペソ　2・8、9）

これがエペソの人たちが経験したことでした。私たちもこのような経験を、すでにしているで

しょうか。イエス・キリストが提供される救いを、自分のものとしているでしょうか。イエス・キリストの救いとは、私たちに何の働きがなくても、私たちに何のいさおがなくても、恵みとしてただで主なる神から与えられるものです。イエス・キリストの救いは、悔い改めるすべての罪人に、贈り物として与えられるものです。イエス様は、エペソの信者たちの罪をぬぐい去り、彼らの過去を精算してくださったばかりでなく、聖霊によって彼らに新しい人格を創り出してくださったのです。人々は新しい人格に生まれ変わり、まったく新しい生活を送ることができるようになったのです。

私たちは神の作品であって、良い行ないをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。

（エペソ　2・10）

エペソにいる信者たちはこのことをよく知っていました。私たちもこのことを知っているでしょうか。イエス様は私たちを救ってくださり、新しい生活を送るための聖霊を、大きな力としてお与えになりました。ですからイエス様は、新しい生活が私たちの間でなされているかどうかを見ようとしておられるのです。イエス様は私たちの生活の中に、実りを求めておられます。

すべて、多く与えられた者は多く求められ、多く任された者は多く要求されます。

（ルカ　12・48）

エペソの人々は、多く与えられました。彼らは主なる神のご計画のすべてをあますところなく

知らされました。その結果はどうなったでしょうか。主イエス様は、この教会を喜ばれたのです。

イエス様は、「新しいいのち」の七つの結果を、黙示録2章の2、3、6節で次のように述べておられます。

一番目は「わたしは、あなたの行ないを知っている」。イエス様は、彼らの行ないがよく、非難すべき点がないと認めてくださったのです。

二番目は「わたしは、あなたの労苦を知っている」。イエス様は、彼らが努力し、力を尽くし、自分を犠牲にしたことを認めてくださったのです。

三番目は「わたしはあなたの忍耐を知っている」。彼らは困難な時を耐え忍び、イエス様の御名のために苦しみを耐え忍んだのです。

四番目は「わたしはあなたが悪い者たちをがまんすることができなかったことを知っている」。彼らは霊を見分けることができました。彼らは使徒と自称している人たちが偽り者であることを見抜いて、彼らを追放したのです。

五番目は「あなたはわたしの名のために耐え忍んだ」。当時、エペソの教会にも信仰の弱い信者たちがいました。しかしエペソの信者たちは、信仰の弱い人々を耐え忍んだのです。

六番目は「あなたは疲れたことがなかった」。彼らは生きておられるイエス様の内にある隠された力の源を知っていたので、自分たちの力に頼ることをしないで、イエス様により頼みました。彼らはイエス様を伝えること以外には何もすることができませんでした。エペソの教会には多くの困難がありましたが、勇気を失うことも、疲れることもなく、信仰をなくすこともありません

でした。迫害も嘲りも、彼らにとって問題ではなかったのです。

七番目に「あなたはニコライ派の人々の行ないを憎んでいる。わたしもそれを憎んでいる」。エペソの信者たちはイエス様に敵対する者に徹底的に反対しました。

これらを見ると、イエス様はエペソの信者たちの行ないに対して「最高の称賛を与えられた」と言えます。イエス様は彼らの行ないを喜ばれたのです。彼らは持っている力を百パーセント出し尽くしました。

次に、2節の「労苦」という言葉は、最も困難な働きを意味しています。聖書の他の個所にも「愛の労苦」（Ⅰテサロニケ1・3）、「労苦と苦闘」（Ⅰテサロニケ2・9）、「労苦し…」（Ⅰテサロニケ5・12）とあります。

同じく2節の「忍耐」という言葉には、イエス様を待ち望むという意味も含まれています。イエス様に対する生き生きとした待ち望みが、その当時のエペソの信者たちの態度を決めたのです。それは決して現在のことをおろそかにして将来のことだけを考えるという態度ではありません。日々の活動は、イエス様が来られることを目指してなされなければなりません。彼らは次のみことばを体験していたのです。

しかし、主を待ち望む者は新しく力を得、鷲のように翼をかって上ることができる。走ってもたゆまず、歩いても疲れない。（イザヤ　40・31）

イエス様を待ち望まない者はたちまち走ることができなくなり、疲れてしまいます。しかしイ

エス様を待ち望む者には、現在のことがらは小さなものに見え、どうでもいいものになります。

偽使徒、つまり使徒と自称しているが実はそうでない者たちは、決して悪い人々ではなく、才能に恵まれ、そして魅力的な人々でした。しかし、エペソの信者たちはイエス様を待ち望んでいたので、偽使徒たちの影響を受けることなく、彼らを教会の外に追放しました。偽使徒たちは表面的には立派な人々でしたが、彼らの偽りは見抜かれたのです。

すべてのことを見分けて、ほんとうに良いものを堅く守りなさい。

（Ⅰテサロニケ　5・21）

彼らは偽使徒たちを、「人間の姿をとって地上に来られたイエス・キリストを、彼らの教えの中心にしているかどうか」によって試し、見分けたのです。人間の姿をとって地上に来られ、十字架を通しての救いを完成したイエス・キリストこそが、常に中心におられなければなりません。イエス様を告白するだけでは十分ではありません。その告白の内容が実は大切なのです。

あなたはよく忍耐して、私の名のために耐え忍び、…

（黙示　2・3）

イエス・キリストを待ち望む者は、悪を耐える者ではなく、「十字架を耐える者」です。偽使徒たちは、十字架なしの福音を伝えました。現代の多くの人々もまた、イエス・キリストの十字架と血潮のない福音を伝えています。イエス・キリストの血潮のない福音は、本当の福音ではありません。悔い改めのない信仰は、救いに至る信仰ではありません。

偽使徒たちの中には悪魔が働いていました。創世記3章では、悪魔は蛇の中に働いていました。いずれの場合においても、悪魔は偽りの父です。悪魔は企みをもって人を滅ぼそうと試みています。しかも悪魔は嘘つきであるだけでなく、人殺しでもあります。悪魔は企みや誘惑をもって彼の目的を果たそうとするか、あるいは暴力や迫害をもって目的を果たそうとします。悪魔の目的はいつも、いのちを消し去ることであり、神のパラダイスを破壊することであり、人を堕落させることです。

ヨハネの時代においては、悪魔は企みをもって、あるいは誘惑をもって、偽使徒を通して教会を堕落させようとしましたが、やがてその後迫害という手段による悪魔の攻撃がはじまりました。

エペソの信者たちの場合、その信仰は一時的なものではなく、約四十年たった後においてもなお燃え続けている信仰でした。彼らは少しの妥協もしないで偽使徒たちを追放しました。彼らは正しく偽使徒たちを見分けることができたのです。彼らは次のように吟味したことでしょう。「この人々を通して、主イエス様ご自身が語っておられるだろうか」、「この人々によって、イエス様が重んじられているのか、それとも人間が重んじられているのか」、「恵みが本当に救いの全面に出されているだろうか」、「この人々の言っていることは聖書全体に一致しているだろうか」。

イエス様の教会での私たちの生活は、決して終わることのない戦いの生活です。これは、信者がいつも自分を無にしているかどうかということに関係があります。すべてのキリスト者は、他の信者たちに対して責任を負い、他の信者たちに心を用いなければなりません。しかし私たちは、いつも他の信者たちに対する思いやりを失いがちです。他の信者に対する祈りが虚しく思えてし

まう誘惑があります。しかし、エペソの信者たちは「あなたは決して疲れることはなかった」と称賛されています。

また私たちは、他の信者に対してだけでなく、自分自身に対してもいかに疲れやすいものでしょうか。私たちは、自分の罪だけを見て希望を失いそうになります。しかし、イエス様は全てに勝利する力をもっておられます。私たちがイエス様により頼むなら、イエス様は私たちの人生を通してご自身の目的を成しとげてくださいます。

最後にイエス様は、七番目の称賛として、彼らがニコライ派に対して明確な態度をとったことをほめておられます。ニコライ派の人々は、自分たちが信者であると言いながら肉の生活を続けていました。彼らはキリストにある自由を乱用したのです。間違った教えが広まっている所においては、信仰生活の乱れも生じてくるのです。

ニコライ派の教えの中に、聖職者と平信徒を区別する、そもそもの始まりがあったという学者もいます。聖書の中には、聖職者と平信徒の区別はありません。どんなに教育をしても、聖職者を作りあげることはできません。全てのキリスト者が祭司です。イエス様による生まれ変わりを通して、全ての信者が祭司となります。現代多く見られる「牧師制度」は、聖書にはまったく書かれていない制度です。イエス様は「わたしもそれを憎んでいる」と言われます。（黙示2・6）

ただイエス様は、ニコライ派の行ないを憎んでおられますが、ニコライ派の人々を憎んでおられるのでは決してありません。「ニコライト」というのは「民の支配者」という意味です。この言葉からニコライ派は、特定の人による民全体の支配をとなえていたのではないかと思われます。

そしてその主張の当然の結果として、聖職者と平信徒という階級、制度などが生まれてきたと考えられます。

聖書には、全ての信者がキリストのからだに属していると書かれています。ですから、全ての信者が「祭司」なのです。イエス様は「わたしはニコライ派の行ないを憎んでいる」と言っておられます。私たちはキリストに敵対するものに対して、エペソの教会の人々のようなはっきりとした態度をとるべきです。イエス様はエペソの教会を見て喜ばれました。それと同じように私たちの集会も主に喜ばれるならば幸いです。

2　非難と警告

ここまで私たちは、エペソの教会がその働きに対して主から最上の称賛を受けたことを見てきました。1節から3節には、イエス様のご自身の教会に対する喜びが語られています。しかし4、5節においては、イエス様がご自身の教会に対して抱いておられる不安が語られています。

エペソの教会に対するイエス様の喜びは大変大きなものでした。私たちの集会に対してもイエス様が同じように喜んでくださることを心から願わずにはいられません。しかし悲しむべきことに、このエペソの教会はイエス様の非難を受けなければならないことがありました。イエス様は「あなたには非難すべきことがある。」と言っておられます。イエス様はエペソの教会に対して、一八〇度悔い改めることを呼びかけておられます。そして、もし「悔い改めることをしないならば、…あなたの燭台を取りはずしてしまおう。」と警告しておられます。教会が燭台のように光

を放つことができなくなれば、もはや何の値打ちもありません。イエス様から見捨てられてしまうだけです。実際に歴史は、エペソの教会がイエス様によって全く見捨てられてしまったことを伝えています。

私たちはエペソの教会の歴史から次のことを知ることができます。私たちは全てを自分のものとして持つことができます。たとえばエペソの教会が持っていた、非難されることのない働き、聖書の正しい教え、殉教に対する備えなどを持つことができます。しかし、それにもかかわらず、私たちが最も大切なことを見失い、もはや燭台としての働きをすることができなくなり、さまよい出てしまう、ということもありえるのです。

つまり、エペソの教会は「初めの愛」を失ってしまったのです。「初めの愛」というのはイエス様との交わりのことです。イエス様なしに何もしたいと思わず、何もすることができないという愛です。もし、神のみことばが、日々私たちの泉となり、私たちの慰めとなり、私たちの力となり、私たちの知恵となっているなら、そして私たちの考えと行ないの中心にいつもイエス様がおいでになるなら、それこそ私たちの「初めの愛」が生き生きと保たれていることの証拠です。そしてそれこそが、「燭台がその場に置いておかれる」ための大切な条件です。

ところがエペソの教会の人々の心は、もはやイエス様との親しい交わりの中にはありませんでした。その結果、イエス様は、「わたしはあなたがたと共にいる」とおっしゃることができず、「わたしはあなたと対立する」と言われざるをえなくなったのです。イエス様は人の「行ない」や「歩み」を見られるのではなく、人の「心」を見ておられます。

わが子よ。あなたの心をわたしに向けよ。あなたの目は、わたしの道を見守れ。
（箴言　23・26）

外面的に見ると、エペソの教会は全てがうまくいっているようでした。しかしイエス様は満足されなかったのです。確かに、エペソの教会には熱心さがあり、悔い改めをする備えがあり、また困難に耐える忍耐がありました。しかしこれらのものは、「初めの愛」、イエス・キリストに対する献身にとって代わられるものではありませんでした。

エペソ人への手紙を見ると、特に「愛」という言葉がよく出てきます。

すなわち、神は私たちを世界の基の置かれる前からキリストのうちに選び、御前で聖く、傷のない者にしようとされました。神は、ただみこころのままに、私たちをイエス・キリストによってご自分の子にしようと、愛をもってあらかじめ定めておられたのです。
（エペソ　1・4、5）

しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、――あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです。――
（エペソ　2・4、5）

こうしてキリストが、あなたがたの信仰によって、あなたがたの心のうちに住んでいて

くださいますように。また、愛に根ざし、愛に基礎を置いているあなたがたが、すべての聖徒とともに、その広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解する力を持つようになり、人知をはるかに越えたキリストの愛を知ることができますように。こうして、神ご自身の満ち満ちたさまにまで、あなたがたが満たされますように。

（エペソ　3・17～19）

謙遜と柔和の限りを尽くし、寛容を示し、愛をもって互いに忍び合い、

（エペソ　4・2）

むしろ、愛をもって真理を語り、あらゆる点において成長し、かしらなるキリストに達することができるためなのです。キリストによって、からだ全体は、一つ一つの部分がその力量にふさわしく働く力により、また、備えられたあらゆる結び目によって、しっかりと組み合わされ、結び合わされ、成長して、愛のうちに建てられるのです。

（エペソ　4・15、16）

ですから、愛されている子どもらしく、神にならう者となりなさい。また、愛のうちに歩みなさい。キリストもあなたがたを愛して、私たちのために、ご自身を神へのささげ物、また供え物とし、香ばしいかおりをおささげになりました。

（エペソ　5・1、2）

夫たちよ。キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられたように、あなたがたも、自分の妻を愛しなさい。（エペソ　5・25）

どうか、父なる神と主イエス・キリストから、平安と信仰に伴う愛とが兄弟たちの上にありますように。私たちの主イエス・キリストを朽ちぬ愛をもって愛するすべての人の上に、恵みがありますように。（エペソ　6・23、24）

イエス様は、何よりも、私たちの愛、私たちの心をご自分のものにしたいと望んでおられます。全てを捨ててイエス様により頼まない人は、「初めの愛」を捨て去った人です。

その「初めの愛」について、二つの点から見てみましょう。そのひとつは、「時間的な経過」であり、いまひとつは「重要さの変化」です。

エペソの教会の人々にとって、イエス様から憐れみを受け、受け入れられ、解放され、そして主に仕える者とされたということは、考えられないほどすばらしいことでした。しかし、このような恵みに対する驚きと感謝は、少しずつ消えていったのです。「初めの愛」を失うということは、決して愛を捨て去ることではなく、愛を忘れ去ることなのです。

私たちのキリスト集会では、エペソの教会の人々のように「初めの愛」を忘れることのないよう、毎日曜日、主の聖餐にあずかることにしています。私たちは主の聖餐を通して、主の苦しみ

と死と恵み、そして愛を思い起こそうとしています。私たちは聖日ごとに、主の恵みに対する感謝の思いを新たにし、心から主に礼拝を捧げています。このことによって、私たちは「初めの愛」に留まることができます。

次に、「重要さの変化」ということについて考えてみましょう。かつてエペソの教会では、イエス様が第一の立場を占めておられました。しかし後には、そうではなくなりました。エペソの教会の人々は、一体何に心を傾けるようになったのでしょうか。おそらく彼らは、それとは知らずに自分の利益を求める者になり、他の人によく思われることに熱中するようになったのではないかと思われます。

主は、イエス様を通して、私たち全ての者に愛を注いでおられます。そして私たち全ての者から愛を求めておられます。主は私たち全ての者が、主に対する愛から全てのことを、主のためだけにすることを求めておられます。もしそうでない時には、主は私たちに対立するものとなられます。ですから、私たちは、主に向かって毎日「私はあなたに対して何か対立するものをもっていますか？」と尋ねることが必要です。主の前に静かな時をもたない人に対しては、主は、その人に対して何か対立するものを持っておられるかどうかを明らかになさることができません。

多くの信者たちが主の前に静かな時をもつことをしないために、主は厳しい手段をお用いにならざるをえなくなります。例えば失敗や過酷な環境、あるいは病気などを与えられます。こういった手段を用いなければ、主は私たちに、主に対立すべきものがあるということを伝えることがおできになりません。これが、なぜ主が私たちに苦難の道を歩ませられるかの理由の一つです。

「初めの愛」は、イエス様を私たちの中心におきます。そしてこの愛は、私たちの過去における一時的なものではなく、私たちの全生涯を貫くものでなければなりません。世の中では多くの結婚が破綻していきます。それは、「初めの愛」が時とともに冷えてしまうからです。もし、夫が別の女性をつくるというような特別なことがなくても、初めの頃とは全てが変化してしまうのはよくあることです。これと同じように、イエス様と私たちの間にも愛の破綻が起こりえるのです。初めの頃には、イエス様に対するはっきりとした信仰告白があります。そしてその後にも聖書に従う訓練がなされたり、教会での熱心な奉仕がなされたり、聖書に基づいた証しがなされたりするかも知れません。しかし、これらの全てが、イエス様との親しい交わりから生じているということこそが最も大切です。エペソの教会では、外面的には全てが以前と少しも変わるところがありませんでした。しかし、何かが根本的に変わってしまったのです。

5節で、イエス様は「あなたはどこから落ちたかを思い出しなさい」と言っておられます。初めの頃には、イエス様の生き生きとしたご臨在が体験されたのです。そして、過去において体験されたことは、現在においても体験されなければなりません。また私たちは、ただ単に悔い改めをしなければならないと知っているだけでは十分ではありません。重要なのは「何から離れて、どこに向かって」悔い改めをするかということです。ですから、本当の悔い改めとは、いつも「思い起こす」ということに結びついています。悔い改めるということが、もし正しい道にそって行なわれていなければ、再び迷いの道に陥る危険性があります。大切なのは、あなたが「どこに向かって転落しているのか」ではなく、「どこから転落したか」です。それはつまり、「あなた

が置かれていた最初の状態を思い出しなさい」ということです。最初の状態とは、イエス様に対する初めの愛の中にいた状態です。エペソの信者たちは高価な魔術の書物の全てを焼き捨てました。これは初めの愛の現われでした。そしてエペソの教会が変わろうと変わるまいと、イエス様は永遠に変わることのないお方です。

あなたがたを召された方は真実ですから、きっとそのことをしてくださいます。

（Ⅰテサロニケ　5・24）

…イエス・キリストは私たちを愛して、その血によって私たちを罪から解き放ち、

（黙示　1・5）

イエス様は、たとえ私たち信ずる者たちに罪があろうとも、不真実があろうとも、愛してくださいます。エペソの教会の人々がその後どのように変わろうとも、あの初めに体験した恵みを消し去ることはできません。たとえ自分を見失い、イエス様だけを見上げる信仰が消え失せたとしても、初めの体験は消し去ることができません。

…悔い改めて、初めの行ないをしなさい。

（黙示　2・5）

悔い改めがなされたその後で、悔い改めの実が結ばれます。

…悔い改めにふさわしい実を結びなさい。

（マタイ　3・8）

これらの実は、イエス様との新たにされた交わりから生み出されるものです。「初めの行ない」は「初めの愛」から生まれ出ます。イエス様は「あなたがすべてのことを、わたしに対する愛から行なっていたあの時の心を思い起こしなさい」と言っておられるのです。イエス様は外側だけを見られるお方ではありません。イエス様は人の動機を見ておられます。

しかし主はサムエルに仰せられた。「彼の容貌や、背の高さを見てはならない。わたしは彼を退けている。人が見るようには見ないからだ。人はうわべを見るが、主は心を見る。」

（Ⅰサムエル　16・7）

全ての行ないの背後には必ず動機があるものです。そしてその動機が大切なのです。ところが、エペソの教会では、この「初めの愛」と、イエス様を仰ぎ見る信仰が失われてしまったのです。イエス様ご自身の行ないの動機は、愛でした。

…キリストが教会を愛し、教会のためにご自身をささげられた…　（エペソ　5・25）

イエス様は、私たちの行ないにおいてもその動機が愛であることを求めておられます。信仰とは、人と人、また心と心との間で取り交わされる献身です。もし、イエス様に対する熱烈な求めが失われていたとしたら、その人は「初めの愛」から遠く離れた所にきてしまっているのです。イエス様との交わりは育てあげなければなりません。それは、みことばと祈りとによって育てあ

げられるものです。

初めの愛の実例はまた、マリヤに見ることができます。

さて、彼らが旅を続けているうち、イエスがある村にはいられると、マルタという女が喜んで家にお迎えした。彼女にマリヤという妹がいたが、主の足もとにすわって、みことばに聞き入っていた。ところが、マルタは、いろいろともてなしのために気が落ち着かず、みもとに来て言った。「主よ。妹が私だけにおもてなしをさせているのを、何ともお思いにならないのでしょうか。私の手伝いをするように、妹におっしゃってください。」

主は答えて言われた。「マルタ、マルタ。あなたは、いろいろなことを心配して、気を使っています。しかし、どうしても必要なことはわずかです。いや、一つだけです。マリヤはその良いほうを選んだのです。彼女からそれを取り上げてはいけません。」

（ルカ　10・38～42）

マリヤはただ、ひたすらイエス様を愛していました。何ごとにもまさって愛していました。彼女はイエス様の足元に座り、イエス様のみことばに耳を傾けていました。彼女はまた後に、高価な香油をイエス様に捧げました。彼女は、彼女を批判する人々のことなど考えもしないで、ひたすらイエス様の御心に叶うことだけを求めていました。

何をするにも、人に対してではなく、主に対してするように、心からしなさい。

（コロサイ　3・23）

…私たちの念願とするところは、主に喜ばれることです。（IIコリント　5・9）

「初めの愛」というのは二心のないイエス様への愛であり、真の謙遜であり、直ちに従うことであり、イエス様の再臨を心から待ち望むことであり、みことばに対して無条件に服従することであり、兄弟姉妹に対して真心からの愛をもつことです。私たちは「初めの愛」を失ってはいないでしょうか。もしそうであれば、私たちはいのちの源へ立ち返らなければなりません。悪魔に勝利させてはなりません。

私の敵。私のことで喜ぶな。私は倒れても起き上がり、やみの中にすわっていても、主が私の光であるからだ。（ミカ　7・8）

悔い改めてイエス様のみもとに立ち返る者は、イエス様にあって罪の赦し、救い、力、勝利を得ることができます。イエス様が悔い改めを求められるみことばは、警告のみことばと結びついています。

…悔い改めることをしないならば、わたしは、あなたのところに行って、あなたの燭台をその置かれた所から取りはずしてしまおう。（黙示　2・5）

もし燭台が取り外されてしまうなら、教会は主のからだである教会ではなくなります。キリス

ト者の群れはそれでもなおしばらくの間は存在することができるかも知れませんが、本当の教会としての働きはできなくなります。もはや光を与えるものになりえないからです。

主なる神の前に容赦のない自己判断をくだすことがなくては、私たちの回復はありえません。自分を開け広げて自己批判をする者に対しては、悔い改めと恵みが与えられます。もし悔い改めることをしなかったら、私たちは神との交わりから捨て去られてしまいます。

こうして、神は人を追放して、いのちの木への道を守るために、エデンの園の東に、ケルビムと輪を描いて回る炎の剣を置かれた。（創世記　3・24）

エデンの園から追放されるということと、燭台を取り除かれるということは同じことです。どちらも主なる神との交わりから遠ざけられることです。

3　称賛と約束

最後に私たちは6、7節から「称賛と約束」について学びましょう。ここではニコライ派の行ないを憎んでいる人々がイエス様から称賛を与えられています。

一方で、「初めの愛」から離れてしまったエペソの教会の人々は、霊的な力と生気を失ってニコライ派の行ないに捉えられてしまいました。前に学んだように、ニコライ派というのは聖職者と平信徒との間に区別を設けるもので、後にペルガモの教会で一つの教義にまで発展しました。いつの時代にも同じことが起こります。始めは悪い習慣として行なわれていたことが、いつの

間にか悪いことではなく、一つの「教義」にまで高められてしまうのです。たとえば次のようなことがあったのではないでしょうか。一人の賜物を与えられた人がいて、その人があらゆることに関わり、それによって一人の人が教会の全てのことを行なうという体制ができあがっていきます。そしてこの体制が慣習として教会の中に定着してしまったと思われます。

また、何かの必要から一人の人が全てのことを行なわなければならない事態が起こったとも考えられます。そしてその結果、他の人々はそのような状態に満足するようになり、もはや他の人々にも奉仕の機会が与えられることを主に願おうとしなくなったのではないでしょうか。後にルターやシュペナーという人たちが、このような一人の人が全てを支配する教会体制を打破しようと試みましたが、その結果は成功しませんでした。

イエス様は「耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。」と言っておられます。御霊の声を聞き分けるためには、信ずる者にイエス様が与えられる「耳」を持つことが必要です。聞く耳を開かれている人だけが、御霊の語っておられることがよくわかるのです。

生まれながらの人間は、神の御霊に属することを受け入れません。それらは彼には愚かなことだからです。また、それを悟ることができません。なぜなら、御霊のことは御霊によってわきまえるものだからです。

（Ⅰコリント　2・14）

イエス様は今もなお、私たちにみことばを通して語ろうとしておられます。イエス様のみことばだけが私たちの行ないの基準となるべきです。決して教会の語ることや教会の考えることを基

準とするべきではありません。愛のない、また悔い改めのない教会は捨て去られるだけです。ですから教会が基準となることは決してできません。イエス様のみことばだけが基準となることができるのです。なぜなら、イエス様のみことばだけが、永遠に変わることがないからです。

7節に「勝利を得る者」という言葉があります。「勝利を得る者」が約束を得るのです。この「勝利を得る者」とは、教会全体に対してではなく、個々の信者に向けての語りかけです。勝利を得るということは、外的また内的な戦いにおいて勝利を得るということです。「勝利を得る者に、わたしは神のパラダイスにあるいのちの木の実を食べさせよう。」と書かれています。「食べる」とは「交わり」の証拠です。ここで、聖書の二つの箇所をちょっと比較してみましょう。

神である主は、その土地から、見るからに好ましく食べるのに良いすべての木を生えさせた。

（創世記　2・9）

神である主は仰せられた。「見よ。人はわれわれのひとりのようになり、善悪を知るようになった。今、彼が、手を伸ばし、いのちの木からも取って食べ、永遠に生きないように。」

（創世記　3・22）

こうして、神は人を追放して、いのちの木への道を守るために、エデンの園の東に、ケルビムと輪を描いて回る炎の剣を置かれた。

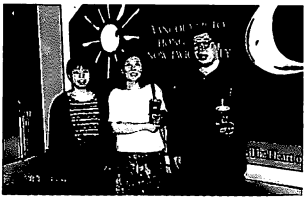
（創世記　3・24）

バンクーバーにも、主イエス様ご自身が、ご自身の集会をお建てになっています。
野田房男、洋子ご夫妻と、お知り合いになった方々。





















エデンの園における生活、そしていのちの木から取って食べるということは、主との交わりを表しています。しかし、人は主との交わりを失って、エデンの園から追放されてしまいました。

エペソの教会の人々にとって、イエス様との交わりは欠かしてはならないものでした。ですから、イエス様は彼らに向かって「あなたがたが昔の交わりを回復することができなければ、あなたがたをその所から追い出してしまおう。」と言われたのです。しかし、エペソの信者に対しては7節でイエス様との交わりの回復が約束されていたのです。

アダムは神に罪を犯したので、園のいのちの木の実を取って食べる権利を失いました。いのちの木については黙示録の22章に3回でてきます。

…川の両岸には、いのちの木があって、十二種の実がなり、毎月、実ができた。…
（黙示　22・2）

自分の着物を洗って、いのちの木の実を食べる権利を与えられ、門を通って都にはいれるようになる者は、幸いである。
（黙示　22・14）

この預言の書のことばを少しでも取り除く者があれば、神は、この書に書いてあるいのちの木と聖なる都から、その人の受ける分を取り除かれる。
（黙示　22・19）

新約聖書で「木」あるいは「十字架」と訳されている言葉は、ギリシャ語の原語を見ると同じ

言葉です。

私たちの先祖の神は、あなたがたが十字架にかけて殺したイエスを、よみがえらせたのです。（使徒　5・30）

私たちは、イエスがユダヤ人の地とエルサレムとで行なわれたすべてのことの証人です。人々はこの方を木にかけて殺しました。（使徒　10・39）

こうして、イエスについて書いてあることを全部成し終えて後、イエスを十字架から取り降ろして墓の中に納めました。（使徒　13・29）

キリストは、私たちのためにのろわれたものとなって、私たちを律法ののろいから贖い出してくださいました。なぜなら、「木にかけられる者はすべてのろわれたものである。」と書いてあるからです。（ガラテヤ　3・13）

そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。（Ⅰペテロ　2・24）

これらの箇所で、「木」と言われているところを「十字架」と言い換えることも、「十字架」と書かれているところを「木」と言い換えることもできます。イエス様の十字架の、あるいは木につけられての死を通して、全ての人が永遠のいのちを得られるようになったのです。そして、イエス様ご自身こそが、「いのちの木」そのものです。イエス様が、私たちの魂の故郷への帰り道を備えてくださいました。イエス様を通して、天国の父への道が開かれたのです。

そしてまたこれらのみことばは、堕落した信者に向かっても語られています。ドイツ語で「落ちた」、「堕落した」、「あなたはどこから落ちたかを思い出しなさい」という言葉は、男女の関係における失敗を意味しています。しかし、イエス様はこの言葉を「初めの愛から転落すること」がいかに大きな罪であるかを示すために用いておられます。最も大切なことは、「イエス様に対する純真な愛」です。そのほかの全てのことは、二次的な意味しかもちえません。

また、たとい私が持っている物の全部を貧しい人たちに分け与え、また私のからだを焼かれるために渡しても、愛がなければ、何の役にも立ちません。（Ⅰコリント　13・3）

イエス様に対する個人的な愛がなければ、いかなる熱心も奉仕も何の役にも立ちません。

主を愛さない者はだれでも、のろわれよ。主よ、来てください。

（Ⅰコリント　16・22）

イエス様は、私たち全てに対して「あなたは私を愛するか」と聞いておられます。私たちは、

ペテロのように「主よ、私があなたを愛していることはあなたがご存じです。」と言えるでしょうか。「初めの愛」を持たない信者は火の消えた灯火のようなものです。このような人は何の価値もなく、何の役にも立たないのです。

最も大切なことは、主の前で静まる時をもつことです。イエス様の元で静かな時間をもつことによって、私たちに新たな愛が回復され、イエス様との交わりが私たちの新しい喜びとなります。

イエス様との交わりの時をもつようにしてください。

イエス様に語っていただくときをもつようにしてください。

イエス様にあなたの罪を見てもらうようにしてください。

そうすることによってあなたは罪の赦しを体験し、イエス様の恵みを驚くほどにいただく者となり、イエス様を心から礼拝するようになります。

天に上げられたイエス様が教会に与えられたみことば

3　苦難に会うように定められていたスミルナの教会

黙示録2章8節から11節

1　教会の後ろ盾「イエス様のみそばに」
　1　初めであられるイエス様
　2　終わりであられるイエス様
　3　死んでまた生きておられるイエス様
2　教会への迫害「イエス様と共に」
　1　苦しみ
　2　貧しさ
　3　ののしり
3　教会の備え「イエス様のみもとに」
　1　限られている苦しみの時
　2　いのちの冠
　3　三種類の死

[8]また、スミルナにある教会の御使いに書き送れ。「初めであり、終わりである方、死んで、また生きた方が言われる。[9]『わたしは、あなたの苦しみと貧しさとを知っている。――しかしあなたは実際は富んでいる。――またユダヤ人だと自称しているが、実はそうでなく、かえってサタンの会衆である人たちから、ののしられていることも知っている。[10]あなたが受けようとしている苦しみを恐れてはいけない。見よ。悪魔はあなたがたをためすために、あなたがたのうちのある人たちを牢に投げ入れようとしている。あなたがたは十日の間苦しみを受ける。死に至るまで忠実でありなさい。そうすれば、わたしはあなたにいのちの冠を与えよう。[11]耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。勝利を得る者は、決して第二の死によってそこなわれることはない。』」（黙示　2・8～11）

これは、天に上げられたイエス・キリストがスミルナの教会に対して与えられたみことばです。はじめに、前に学んだエペソの教会と、これから学ぼうとしているスミルナの教会とを比較してみましょう。

エペソの教会への手紙の主なテーマは、「初めの愛」でした。これに対して、スミルナの教会への手紙の主なテーマは、「死に至るまでの忠実さ」です。

エペソの教会は、豊かで活動的な教会でした。ところがスミルナの教会は、貧しく悩んでいる教会でした。

エペソの教会には、熱心さ、よい働き、立派な教師たちと伝道者たち、そして、苦難にあって

も動かされない堅い信仰がありました。一方、スミルナの教会には、指導する力を持った人もいませんでしたし、財政的にも恵まれていませんでした。しかし、イエス様が心配しておられたのは、かえってよい働きをしているエペソの教会の方でした。そればかりではなく、イエス様はエペソの教会に対立さえなさいました。イエス様は「悔い改めなさい。そうしなければ私はあなたがたを捨て去る」とまで言っておられました。

これに対してスミルナの教会は、イエス様から少しも非難を受けることなく、ただ称賛だけが与えられたのです。

このスミルナの教会への手紙については、いろいろな題が考えられます。たとえば「死の陰にありながら、死に勝利する者」、「苦難への召命を受けている人々」、「迫害されている教会」などです。この個所を大きく三つの部分に分けて考えてみましょう。

1　教会の後ろ盾に、イエス様をもっていたこと
2　迫害された教会は、イエス様と共にあったこと
3　教会の備えは、イエス様のみもとに行くためのものだったこと

第一の項目はさらに三つに分けることができます。つまり、「初めであられるイエス様」、「終わりであられるイエス様」、「死んでまた生きたお方、よみがえられたイエス様」です。

神である主、常にいまし、昔いまし、後に来られる方、万物の支配者がこう言われる。
「わたしはアルファであり、オメガである。」
（黙示　1・8）

わたしは初めであり、わたしは終わりである。わたしのほかに神はない。
（イザヤ　44・6）

わたしは初めであり、また、終わりである。
（イザヤ　48・12）

1　教会の後ろ盾「イエス様のみそばに」

まずはじめに、スミルナという町について考えてみましょう。スミルナは「アジアの栄光」と呼ばれ、古代で最も美しい町の一つでした。また、皇帝崇拝の中心地であり、ユダヤ教も盛んな町でした。町中が活気に満ちていて、豊かに繁栄していました。

スミルナという言葉は「没薬」または「にがみ」を意味します。「没薬」は大変高価な物で、細かく砕くと高い香りがしました。スミルナの信者たちもまた、同じように細かく砕かれる備えがあり、苦難に対する用意ができていました。ですからイエス様に喜ばれる教会となっていたのです。「没薬」はまた、死者の体を腐敗させないために用いられる薬でもありました。しかし、スミルナの町は死のことなど少しも考えないで、ただ生きること、そして楽しむことだけを求めていました。この繁栄した町にイエス様の教会があったのです。このスミルナの町は、パウロが三年の間伝道したエペソから五十五キロの距離にありました。ですから、ここに住んでいた人々の中には、伝えられた福音を聞いて信じ、信者になる者がいたのです。

ここで、イエス様のからだである全ての教会について、二つのことを考えてみましょう。一つ

は「イエス様ご自身」について、もう一つは「イエス様の光に照らされた教会」についてです。

まず、「イエス様ご自身」について見てみましょう。イエス様はご自身について語られますが、それはいつもご自身についての啓示を私たちに与えるためです。イエス様はご自身を次の三つの事実によって啓示してくださいます。つまり、イエス様は初めであり、終わりであり、死んでまた生きかえられたお方、よみがえられたお方としてです。

1　初めであられるイエス様

「イエス様が初めである」ということは、言うまでもなく、全てのものがイエス様によって造られたことを意味しています。

この終わりの時には、御子によって、私たちに語られました。神は、御子を万物の相続者とし、また御子によって世界を造られました。御子は神の栄光の輝き、また神の本質の完全な現われであり、その力あるみことばによって万物を保っておられます。また、罪のきよめを成し遂げて、すぐれて高い所の大能者の右の座に着かれました。

（ヘブル　1・2、3）

御子は、見えない神のかたちであり、造られたすべてのものより先に生まれた方です。なぜなら、万物は御子にあって造られたからです。天にあるもの、地にあるもの、見えるもの、また見えないもの、王座も主権も支配も権威も、すべて御子によって造られたので

す。万物は、御子によって造られ、御子のために造られたのです。

（コロサイ　1・15、16）

「イエス様が初めである」ということは、つまり、進化論の誤りと終わりを意味しています。「イエス様は初め」であり、この地上に人間を創造されたお方です。イエス様は「わたしはある。」と言うことができる唯一のお方です。イエス様はただ一人、全てを実現することができ、全てを知っておられるお方です。

2　終わりであられるイエス様

また、イエス様は「終わりのお方」でもあります。このことは、全ての未来がイエス様の手の中に握られていることを意味しています。この方よりも力の強い者など一人もいません。この方によってのみキリスト者の群れは守られているのです。

3　死んでまた生きておられるイエス様

さらに、イエス様は「死んでまた生きておられるお方」です。いのちそのものであられるイエス様は、十字架の上で死なれました。その時、イエス様は全てが「完了した」と叫ばれ、その後、頭を垂れて息を引きとられました。イエス様は現実に、また文字通り、死なれたのです。イエス様は死を味わわれたのです。死は、本来罪人が味わうべきものです。しかしイエス様は、私たち

の罪のためにご自身を犠牲にし、なだめの供え物となってくださったのです。

そして、イエス様は生き返られました。死も彼を捉えることができなかったのです。イエス様は現実に、また文字通りよみがえられました。イエス様は死に打ち勝ったのです。死に打ち勝ったお方は全てに対する支配者です。パウロはイエス様の偉大さについて次のように記しています。

また、神の全能の力の働きによって私たち信じる者に働く神のすぐれた力がどのように偉大なものであるかを、あなたがたが知ることができますように。神は、その全能の力をキリストのうちに働かせて、キリストを死者の中からよみがえらせ、天上においてご自分の右の座に着かせて、すべての支配、権威、権力、主権の上に、また、今の世ばかりでなく、次に来る世においてもとなえられる、すべての名の上に高く置かれました。また、神は、いっさいのものをキリストの足の下に従わせ、いっさいのものの上に立つかしらであるキリストを、教会にお与えになりました。（エペソ　1・19～22）

スミルナの教会の人々は、このような「初めであり終わりであり、死んでまた生きておられる」イエス・キリストを見上げることがどうしても必要でした。この教会は迫害の中にあって、いつも死に直面しており、苦難と死を恐れてイエス様から離れていく危険があったのです。このためイエス様は「死に至るまで忠実でありなさい」と彼らに言われたのです。

死に打ち勝ったお方のご臨在を示されることによって、あらゆる不安は取り除かれます。スミルナの教会の人々は、死に打ち勝ったイエス様を知りました。私たちも死に打ち勝ったイエス様

を知ることによって、スミルナの教会の人々と共に死に打ち勝つことができるのです。

「死よ。おまえの勝利はどこにあるのか。死よ。おまえのとげはどこにあるのか。」

しかし、神に感謝すべきです。神は、私たちの主イエス・キリストによって、私たちに勝利を与えてくださいました。

（Ⅰコリント　15・55、57）

これこそがスミルナの教会の信者たちの確信でした。スミルナの教会はこの世の圧倒的な力に抵抗していました。スミルナの教会は弱くそして無力でした。しかし、イエス様が彼らの後ろ楯になっておられました。全てイエス様により頼む者は、あらゆる環境に打ち勝ちます。そして死に対しても打ち勝つのです。

イエス様は死の道を歩かれました。ですから教会もまた死の道を歩きます。しかし、イエス様は死に打ち勝たれました。そしてイエス様はご自身に従う人々を導き続け、その人々と共に歩み、力づけようとなさっています。この世にあっては多くの道が破局に終わります。しかしイエス様とそれに続く教会には、このような破局はありません。教会における最後は、死で終わるものではなく、いのちに至るものです。キリスト者はイエス様のみ手の内にあって、迫害からも、また死からも守られているのです。何者も、イエス様のみ手からその信者たちを引き離すことはできません。

2　教会への迫害「イエス様と共に」

次に、「迫害された教会は、イエス様と共にあった」ということについて考えてみましょう。

スミルナの教会は大きな建物を持たず、金持ちの信者もいない、たいへん貧しい教会でした。しかしこの教会は、イエス様に喜ばれていました。エペソの教会のような非難は少しも受けていませんでした。

黙示録を読むと、このスミルナの教会は何一つ目立ったことはしていないように見えます。この教会は、ただそこにあるだけのように見えます。そして人々の不正に対して、ただ耐え忍んでいるだけのように見えます。そしてスミルナの教会は、人々から圧迫を受け、持ち物を取り去られ、そしてののしられました。この教会は、ローマ人への手紙8章36節にある「ほふられる羊」のように見えます。しかし、イエス様は「わたしは、知っている」と言われています。イエス様はご自身の経験から、圧迫され、持ち物を取り去られ、ののしりを受けるということがどのようなことであるかをよく知っておられました。イエス様もまた、何もすることができず、ただじっと耐え忍ぶしかない、という経験をなさったのです。

「あなたがたは、わたしが毎日宮でいっしょにいる間は、わたしに手出しもしなかった。しかし、今はあなたがたの時です。暗やみの力です。」　（ルカ　22・53）

イエスは答えられた。「もしそれが上から与えられているのでなかったら、あなたにはわたしに対して何の権威もありません。ですから、わたしをあなたに渡した者に、もっと大きい罪があるのです。」　（ヨハネ　19・11）

1　苦しみ

十字架にかかる前、イエス様はピラトに対して「あなたはわたしに対して力を持っている」と言われました。イエス様は、もはやご自身の手を病んでいる人々の上におくこともできず、ただ、十字架に釘付けられるだけでした。その時イエス様は、もはや何もすることができず、ただ静かに耐え忍ばれるだけでした。イエス様ご自身が、このような苦難の道を通られました。ですからイエス様は、ご自身の教会の苦しみがおわかりになるのです。スミルナの教会はイエス様と同じ道を歩きました。同じ道とは、無一物にされ、圧迫され、ののしりを受ける道です。スミルナの教会の人々は、圧迫や迫害を受けたのです。まことの教会はいつの時代においても迫害を受けるものです。そして、だれからも認められることがないのです。

もしあなたがたがこの世のものであったなら、世は自分のものを愛したでしょう。しかし、あなたがたは世のものではなく、かえってわたしが世からあなたがたを選び出したのです。それで世はあなたがたを憎むのです。（ヨハネ　15・19）

イエス様も、この世の人々から憎まれました。ですから真のキリスト者も、この世の人々から憎まれるのです。

2　貧しさ

同じことが貧しさについても言えます。イエス様も貧しかったのです。

あなたがたは、私たちの主イエス・キリストの恵みを知っています。すなわち、主は富んでおられたのに、あなたがたのために貧しくなられました。それは、あなたがたが、キリストの貧しさによって富む者となるためです。（IIコリント　8・9）

多くのキリスト者たちは、イエスに従うためにその持ち物を奪い取られることになりました。

あなたがたは、捕えられている人々を思いやり、また、もっとすぐれた、いつまでも残る財産を持っていることを知っていたので、自分の財産が奪われても、喜んで忍びました。（ヘブル　10・34）

スミルナの教会の信者たちは、持ち物を奪われ、人々から拒絶され、無視されました。迫害を受け、身を守るものもない裸同然の者にされ、財産のない者にされたばかりでなく、さらにその名誉すら奪いとられたのです。

これが、この人々が受けていたののしりです。イエス様も同じ経験をなさいました。イエス様が十字架につけられた時、多くの人々はイエス様ご自身の罪のせいだと思っていました。つまりご自身の罪のために罰せられたのだと。しかしイエス様は「私たちの罪のために」罰せられたのです。

まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。だが、私たちは思った。

彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。

（イザヤ　53・4）

スミルナの教会は圧迫の中に置かれていました。ギリシャ語で「圧迫」とは、「絞ること」を意味します。ぶどうを絞ってジュースを作るときなどに、この言葉が使われます。

前に私たちはスミルナの名前の意味が「没薬」からきていること、そしてそれが細かく砕かれると良い香りを放つということを学びました。信者たちもまた、ぶどうの実のように絞られることによって、つまり圧迫を受けることによって、イエス様のためによい香りを放つ者に変えられていくのです。

スミルナのキリスト者の群れは、イエス様のために苦しむ備えができていました。この教会は無力で何もできず、ただできることは苦しみを耐え忍ぶことだけでした。これと同じことを未信者のご主人をもつ多くの姉妹がたが経験します。彼女たちは何もすることができず、ただ苦しみを耐え忍ぶだけです。しかし、イエス様のために苦しむこと、福音のために苦しむことは、イエス様が喜んでくださることです。

このスミルナの教会は、圧迫を受けたばかりでなく、その持ち物も奪い去られました。私たちにとって、生活を豊かにし、潤してくれる全てのものが奪い取られるということは、決してなまやさしいことではありません。しかしスミルナのキリスト者にとっては、イエス様こそが全てのものにまさって価値のあるものでした。スミルナの教会は、イエス様のために貧しさのほうを選びとりました。　もし、このキリスト者たちが妥協の道をとっていたら、経済的にはきっと恵ま

れていたことでしょう。しかし彼らのとった態度は、イエス様を悲しませることよりも、貧しさに甘んじることのほうでした。

3　ののしり

貧しさにもまして彼らを苦しめていたのは、ユダヤ人であると言いながら実際はそうでない人々からののしられることでした。ユダヤ人であるということは、主なる神から選ばれ、主なる神から遣わされ、神の民に加えられているということを意味しています。イエス様の時代のユダヤ人たちは、旧約聖書を守り、メシヤの現われを熱心に待ち望んでいる人々でした。しかしイエス様は、このようなユダヤ人に対して、彼らが神の子ではなく、逆に彼らが悪魔の子であると言われたのです。

「わたしは父のもとで見たことを話しています。ところが、あなたがたは、あなたがたの父から示されたことを行なうのです。」彼らは答えて言った。「私たちの父はアブラハムです。」イエスは彼らに言われた。「あなたがたがアブラハムの子どもなら、アブラハムのわざを行ないなさい。ところが今あなたがたは、神から聞いた真理をあなたがたに話しているこのわたしを、殺そうとしています。アブラハムはそのようなことはしなかったのです。あなたがたは、あなたがたの父のわざを行なっています。」彼らは言った。「私たちは不品行によって生まれた者ではありません。私たちにはひとりの父、神があります。」

イエスは言われた。「神がもしあなたがたの父であるなら、あなたがたはわたしを愛す

るはずです。なぜなら、わたしは神から出て来てここにいるからです。わたしは自分で来たのではなく、神がわたしを遣わしたのです。あなたがたは、なぜわたしの話していることがわからないのでしょう。それは、あなたがたがわたしのことばに耳を傾けることができないからです。あなたがたは、あなたがたの父である悪魔から出た者であって、あなたがたの父の欲望を成し遂げたいと願っているのです。悪魔は初めから人殺しであり、真理に立ってはいません。彼のうちには真理がないからです。彼が偽りを言うときは、自分にふさわしい話し方をしているのです。なぜなら彼は偽り者であり、また偽りの父であるからです。」

（ヨハネ　8・38～44）

「…またユダヤ人だと自称しているが、実はそうでなく、かえってサタンの会衆である人たちから、ののしられていることも知っている。」

（黙示　2・9）

イエス様はこのような人々のことを、「サタンの会衆」と呼んでおられます。

誰が本当に神の民に属し、誰が神の民に属していないのでしょうか。これを決定するのは、私たちがイエス様に対してとる態度です。イエス様を告白する人は、神の民に属しています。しかしイエス様を拒む人は、神の民に属していません。イエス様をののしる人は悪魔の道具です。イエス様をののしる人というのは詩篇2篇2節にあるように「主と、主に油をそそがれた者とに逆らう」人たちのことを言います。サタンは今日もなお、神の愛と神の義、そして神のみことばへ

の疑いを引き起こそうとしています。イエス様もまた同じようなののしりを体験されたのです。

あなたがたは、罪人たちのこのような反抗を忍ばれた方のことを考えなさい。それは、あなたがたの心が元気を失い、疲れ果ててしまわないためです。（ヘブル　12・3）

イエス様はご自身の教会に対して、「私はあなたの苦しみと貧しさと…ののしられていることを知っている」と言っておられます。

神が多くの子たちを栄光に導くのに、彼らの救いの創始者を、多くの苦しみを通して全うされたということは、万物の存在の目的であり、また原因でもある方として、ふさわしいことであったのです。（ヘブル　2・10）

そういうわけで、神のことについて、あわれみ深い、忠実な大祭司となるため、主はすべての点で兄弟たちと同じようにならなければなりませんでした。それは民の罪のために、なだめがなされるためなのです。主は、ご自身が試みを受けて苦しまれたので、試みられている者たちを助けることがおできになるのです。（ヘブル　2・17、18）

イエス様は全てのことを知っておられます。私たちの苦しみも知っておられます。ですから、私たちには、根本的には何の問題もありません。イエス様が私たちのことを考えていてくださり、私たちはイエス様の守りの中にいるからです。イエス様が全てのことを知っていてくださるとい

うことを、私たちが本当に知ることができたら、ものごとの外面上の見かけが少しも変わらなくても、私たちの全てのものに対する見方が、根本的に変えられます。

キリスト者たちが「苦しみのために召されている」ということは、私たちがあらゆる苦難を耐え忍んでなお、動かされることがないということです。

このような苦難の中にあっても、動揺する者がひとりもないようにするためでした。あなたがた自身が知っているとおり、私たちはこのような苦難に会うように定められているのです。あなたがたのところにいたとき、私たちは苦難に会うようになる、と前もって言っておいたのですが、それが、ご承知のとおり、はたして事実となったのです。

（Ⅰテサロニケ　3・3、4）

確かに、キリスト・イエスにあって敬虔に生きようと願う者はみな、迫害を受けます。

（Ⅱテモテ　3・12）

もしキリスト者たちが、仕事を見つけることができないとか、あるいは地位を失うとか、あるいは財産を失うとかの問題に直面する時、それは信者の一人一人が、自己の経済的な立場を救おうとしてイエス様を否定するかどうかを試みられている時なのです。

イエス様は全てを知っておられます。そして教会の迫害の時には、ご自身も教会と一つになって、同じ迫害を受けておられるのです。

イエス様のご臨在こそが、全ての困難を、耐えることのできるものにしてくださるのです。

スミルナの教会は、イエス様のゆえに、全ての貧しさにもかかわらず豊かでした。イエス様は「あなたは富んでいる」とスミルナの教会に言っておられます。

すべての聖徒たちのうちで一番小さな私に、この恵みが与えられたのは、私がキリストの測りがたい富を異邦人に宣べ伝え、…　（エペソ3・8）

彼は、キリストのゆえに受けるそしりを、エジプトの宝にまさる大きな富と思いました。彼は報いとして与えられるものから目を離さなかったのです。　（ヘブル　11・26）

…というのは、あなたがたは、ことばといい、知識といい、すべてにおいて、キリストにあって豊かな者とされたからです。　（Ⅰコリント　1・5）

悲しんでいるようでも、いつも喜んでおり、貧しいようでも、多くの人を富ませ、何も持たないようでも、すべてのものを持っています。　（Ⅱコリント　6・10）

あらゆる苦しみと貧しさとののしりにもかかわらず、スミルナの教会はその内側においては豊かだったのです。

彼らは、これら全ての苦しみが、目的に至る「手段」であることを知っていました。つまり、

苦しみが栄光に至る手段であることを知っていたのです。

もし子どもであるなら、相続人でもあります。私たちがキリストと、栄光をともに受けるために苦難をともにしているなら、私たちは神の相続人であり、キリストとの共同相続人であります。（ローマ　8・17）

スミルナの教会に対する迫害は、真のユダヤ人から来たのではなく、ユダヤ人と自称している人々から来たものでした。これらのユダヤ人は、パウロを捕らえた人々でもありました。ユダヤ人たちは、イエス様を拒むことが彼らの神に対する忠誠だと考えたのです。スミルナの教会では、かつてユダヤ人がローマ人と共にイエス様を殺してしまったのと同じように、ユダヤ人がローマの権力者たちと一緒になって真の教会を迫害したのです。この当時、まことの教会に対して彼らがしたことは、今日においても組織されたキリスト教によって行なわれています。

3　教会の備え「イエス様のみもとに」

次に、イエス様に属する教会の備えは、イエス様のみもとに行くための備えだったことについて考えてみましょう。

あなたがたが受けようとしている苦しみを恐れてはいけない。（黙示　2・10）

イエス様は決してキリスト者から苦しみを取り除いてあげようとは言っておられません。また

死なないように守ってあげようとも言っておられません。彼らがののしられないようにとも、悪魔を彼らの足の下にうち伏せよう、とも言っておられません。

イエス様にとって、そのようなことはしようと思えばおできになることでしたが、あえてそのようにはなさらなかったのです。なぜなら、それらの苦しみを取り除くことよりも、もっと大切なことがあったから、つまり「苦しみを通して信仰を本物にする」という目的があったからです。私たちは病気や困難からできるだけ早く逃れたいと考えますが、イエス様のお考えはそうではありません。

もしあなたがたがこの世のものであったなら、世は自分のものを愛したでしょう。しかし、あなたがたは世のものではなく、かえってわたしが世からあなたがたを選び出したのです。それで世はあなたがたを憎むのです。（ヨハネ　15・19）

苦しむことなくして、私たちがイエス様の栄光に至る道はないのです。迫害を受けることは決して恥ずかしいことではありません。むしろ誉れです。なぜならその時にこそ、上からの力が私たちに臨んでくるからです。

ですからスミルナの教会は、同情されるような教会ではなくして、むしろ、「おめでとう」と言われていい教会だったのです。イエス様は「恐れることはない」と、この教会に対して言っておられます。そう言われる理由は、三つあります。まず、「苦しみの時」が、イエス様によって定められた苦しみの時だったからです。次に、「苦しみの時」が、いつまでも続く苦しみの時で

はなかったからです。そして、「苦しみの時」が、イエス様によって用いられる苦しみの時だったからです。

次にこれらのことをくわしく考えてみましょう。

1　限られている苦しみの時

イエス様は、事が起こる前にすべてのことをご存知で、「見よ、悪魔はあなたがたをためすために、あなたがたのうちのある人たちを牢に投げ入れようとしている。」と言っておられます。もし、信仰のあつい熱心な信者が牢の中に入れられるようなことがあれば、それは悪魔の勝利だと思われがちです。しかしすべてのことは、イエス様が導いておられるのです。悪魔は、鎖につながれた犬のようなものです。悪魔は、イエス様が許される範囲を越えて人に迫ることはできません。苦しみの時は試練の時です。誰かが私たちを迫害する時、その人々は悪魔によって導かれているのです。したがって私たちは、それらの人々のためにも祈ることが大切です。

ピラトは、彼らの要求どおりにすることを宣告した。（ルカ　23・24）

人間の背後には、いつも悪魔がいます。しかし人間と悪魔の上には、はるかに高くイエス様が立っておられます。イエス様は迫害を許されますが、それは私たちを滅ぼすためではなく、私たちをためし、私たちの信仰を本当のものにしようとしておられるのです。つまり、「苦しみの時」は、イエス様によって定められているのです。

次に、この「苦しみの時」は限られた時です。もし、信仰のあつい熱心な信者が悪魔に捉えられると、その信者が悪魔のものにされてしまったかのように見えますが、それはただそのように見えるだけのことです。信者が悪魔の手に掴まれたとしても、イエス様はその時を限っておられます。イエス様は十日の間と言っておられます。その意味は、ほんの短い間という意味です。

あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。

（Ⅰコリント　10・13）

今の時のいろいろの苦しみは、将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べれば、取るに足りないものと私は考えます。

（ローマ　8・18）

あらゆる恵みに満ちた神、すなわち、あなたがたをキリストにあってその永遠の栄光の中に招き入れてくださった神ご自身が、あなたがたをしばらくの苦しみのあとで完全にし、堅く立たせ、強くし、不動の者としてくださいます。

（Ⅰペテロ　5・10）

イエス様は過去の苦しみを知っておられるばかりでなく、将来の苦しみについても知っておられます。イエス様は苦しみの時をはっきりと限っておられます。

あなたは、将来のことについて、病気のことについて、苦しみのことについて、孤独に対して、不安になっているかも知れません。そんな時には、「苦しみを恐れてはいけない」というみことばを思い出してください。イエス様は死に打ち勝たれた勝利者です。イエス様は悪魔の力を奪い取ったお方です。

そこで、子たちはみな血と肉とを持っているので、主もまた同じように、これらのものをお持ちになりました。これは、その死によって、悪魔という、死の力を持つ者を滅ぼし、

（ヘブル　2・14）

たとえどのようなことが起こっても、私たちはイエス様のみ手の内に守られています。苦しみの時はイエス様によって定められ、その期間も限定され、そして栄光に至る道としてイエス様によって用いられているのです。イエス様はいつもキリスト者の近くにおられ、ご自身の教会と共におられます。これこそが、恵みです。

イエス様は苦しみの道を一人で歩いていかれました。弟子たちは誰一人としてイエス様と共に目を醒ましていられませんでした。誰もイエス様を理解することはできませんでした。誰もイエス様を知っているとは言えませんでした。イエス様は私たちの誰も経験したことがないほどに、孤独を経験なさったのです。しかし、私たちは決して孤独ではありません。なぜなら、イエス様がいつも近くにいてくださるからです。そしてどんな時でも「恐れることはない」と言ってくださるからです。

イエス様は、「死に至るまで忠実でありなさい」と私たちに言っておられます。したがって私たちは、死に至るまで信仰を守るのは当然であり、死に至るまでイエス様を証ししつづけることがもっとも大切です。「忠実である」ということは、ヨハネ15章4節にあるように「わたしにとどまりなさい。わたしも、あなたがたの中にとどまります。」ということです。それは、イエス様の内にとどまり、死に至るまで、たとえ自分が殺されるようなことになったとしてもイエス様の内にとどまり続ける、ということを意味しています。

真のキリスト者であることは、殉教に対する備えを持つ、ということです。パウロは自分に対する縄目と苦しみが待っていることを覚悟していましたが、自分自身のいのちに対しては全く顧みることがありませんでした。

ただわかっているのは、聖霊がどの町でも私にはっきりとあかしされて、なわめと苦しみが私を待っていると言われることです。けれども、私が自分の走るべき行程を走り尽くし、主イエスから受けた、神の恵みの福音をあかしする任務を果たし終えることができるなら、私のいのちは少しも惜しいとは思いません。（使徒　20・23、24）

2　いのちの冠

2章10節に書かれている「いのちの冠」は、イエス様が誉れとして約束しておられるものです。ここで言われる「いのちの冠」とは、いわゆる「永遠のいのち」のことではありません。「永遠のいのち」はすでに信者の一人一人に与えられているからです。

まことに、まことに、あなたがたに告げます。信じる者は永遠のいのちを持ちます。
（ヨハネ　6・47）

「いのちの冠」は自分自身を惜しむことをしない人に対して、つまり、イエス様のために喜んでいのちを捧げる人に対して約束されているものです。

死の影にいるスミルナの教会に対しても、「いのちの冠」が約束されています。死に打ち勝ったイエス様がはっきりこのことを約束しておられるのです。苦しみは、私たちに失望をもたらすためのものではなく、私たちの心の眼を開いてくれるためのものです。

このように「いのちの冠」は、試みと圧迫に打ち勝った人々に対して約束されている冠です。「いのちの冠」は、信者の功績に対して与えられるのではなく、信者のイエス様への忠実さと愛、そして信仰から離れ落ちることがなかったというそのことに対して与えられるのです。

わたしは、すぐに来る。あなたの冠をだれにも奪われないように、あなたの持っているものをしっかりと持っていなさい。
（黙示　3・11）

兄弟たちは、小羊の血と、自分たちのあかしのことばのゆえに彼に打ち勝った。彼らは死に至るまでもいのちを惜しまなかった。
（黙示　12・11）

私たちの「忠実さ」は、私たちがイエス様を証しするかどうか、にかかっています。

試練に耐える人は幸いです。耐え抜いて良しと認められた人は、神を愛する者に約束された、いのちの冠を受けるからです。（ヤコブ　1・12）

ですから何よりも大切なことは、あれやこれやをして功績をあげることではなく、私たちがイエス様を愛するかどうかです。

今からは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。かの日には、正しい審判者である主が、それを私に授けてくださるのです。私だけでなく、主の現われを慕っている者には、だれにでも授けてくださるのです。（Ⅱテモテ　4・8）

私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。（Ⅱテモテ　4・7）

イエス様はスミルナの教会に対して、「死は全ての終わり」ではなく、「全ての終わりがいのちである」と言っておられます。彼らは死に定められているのではなく、いのちに定められているのです。

イエス様は、あらゆる苦しみと貧しさとののしりの中にあるスミルナの教会の信者たちに、「最も究極的なものを見つめなさい」と言っておられます。苦しみは、必要とされる以上長くは続きません。

11節に、「勝利を得る者」とイエス様は言っておられます。「勝利を得る」とは、どういうことでしょうか。それは、自分自身を顧みないでイエス様を見つめる、ということです。そして自分の弱さから眼を離して、主イエス様の勝利を見つめる、ということです。

3　三種類の死

勝利を得る者はまた、決して第二の死によってそこなわれることはありません。聖書には三種類の死が出てきます。それは次のような死です。

まず、「肉体の死」。次に「霊的な死」。そして「永遠の死」あるいは「第二の死」。

私たちは「肉体の死」についてはよく知っています。「霊的な死」というのは神に対する死のことです。つまり神との交わりを持たないことが霊的な死です。イエス様を個人的に知ることによって、人は霊的に生きるようになります。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。」（ヨハネ　5・24）

私たちは、自分が死からいのちに移ったことを知っています。それは、兄弟を愛しているからです。愛さない者は、死のうちにとどまっているのです。（Ⅰヨハネ3・14）

「第二の死」とは「永遠の死」、火の池、ゲヘナのことです。それは永遠に神から切り離されている場所です。

この第一の復活にあずかる者は幸いな者、聖なる者である。この人々に対しては、第二の死は、なんの力も持っていない。彼らは神とキリストとの祭司となり、キリストとともに、千年の間王となる。（黙示　20・6）

そして、彼らを惑わした悪魔は火と硫黄との池に投げ込まれた。そこは獣も、にせ預言者もいる所で、彼らは永遠に昼も夜も苦しみを受ける。（黙示　20・10）

それから、死とハデスとは、火の池に投げ込まれた。これが第二の死である。いのちの書に名のしるされていない者はみな、この火の池に投げ込まれた。（黙示　20・14、15）

「しかし、おくびょう者、不信仰の者、憎むべき者、人を殺す者、不品行の者、魔術を行なう者、偶像を拝む者、すべて偽りを言う者どもの受ける分は、火と硫黄との燃える池の中にある。これが第二の死である。」（黙示　21・8）

神の霊がその人の内に宿り、霊的に生きるようになった人にとっては、第一の死、つまり肉体

の死は、「イエス様の栄光に至るための手段」にすぎません。しかし、信仰のない人にとっては、肉体の死は栄光に至る手段となるどころか、死こそがその人の敵となります。というのは、この「肉体の死」の後で、その人は「第二の死」に引き渡されてしまうからです。「肉体の死」の後で、全ての人はイエス様の裁きのために復活させられるのです。

しかし、「第二の死」の後では、もはや復活させられることはありません。「第二の死」によって、信仰のない人は神から、つまり喜びの源である神から永遠に切り離されてしまうのです。

苦しみは私たちの前にあり、私たちの周りにあります。ただ人間だけを見、そして世の中の不正だけを見る人は、自分の心を損なうようになってしまいます。私たちは全ての事柄を越えて、主イエス様だけに目を注ぐことにしましょう。そして全てのことがイエス様のみ手の内にあることを知るようにしましょう。

スミルナの教会は、イエス様からどのような非難も受けませんでした。スミルナの教会は、初めの愛から離れませんでした。彼らのイエス様に対する愛は燃え続けていました。彼らはイエス様に対する愛によって、全てのことを忍ぶことができたのです。ペテロ第1の手紙には、彼らによく当てはまるみことばがあります。

あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、いま見てはいないけれども信じており、ことばに尽くすことのできない、栄えに満ちた喜びにおどっています。

（Ⅰペテロ　1・8）

イエス様をはずかしめるくらいなら、死んだ方がましだというのが、ダニエルと彼の友だちの態度でした。それはまた、モーセの決意でもありました。

彼は、キリストのゆえに受けるそしりを、エジプトの宝にまさる大きな富と思いました。彼は報いとして与えられるものから目を離さなかったのです。（ヘブル　11・26）

スミルナの教会も全く同じ決意をもっていたのです。スミルナの教会のもっとも有名な長老の一人ポリュカルポスは、西暦一五五年二月二十三日に火あぶりの刑を受けて殉教しました。彼は刑を受ける前に、ローマの地方総督にイエス様を否むように要求されました。「イエス・キリストをののしったら許してやる」と言われたのです。その時彼は次のように答えました。「八十六年の間、私はキリストに仕えてきました。その間イエス様は私に、ただ良いことだけをしてくださいました。今、どうして私は、救ってくださった私のイエス様をはずかしめることなどできるでしょうか」。そして彼は、イエス様を賛美する叫びをあげながら死んでいったのです。

ですから、すべての汚れやあふれる悪を捨て去り、心に植えつけられたみことばを、すなおに受け入れなさい。みことばは、あなたがたのたましいを救うことができます。（ヤコブ　1・21）

今の時の軽い患難は、私たちのうちに働いて、測り知れない、重い永遠の栄光をもたらすからです。私たちは、見えるものにではなく、見えないものにこそ目を留めます。見え

るものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。

（Ⅱコリント　4・17、18）

天に上げられたイエス様が教会に与えられたみことば

4　世俗化したペルガモの教会

黙示録2章12節から17節まで

1　偶像崇拝の中心地にあったペルガモの教会
2　ペルガモの教会に対するイエス様の啓示
3　ペルガモの教会に与えられたみことば
　1　警告のみことば
　2　約束のみことば

私たちはここで、イエス様がペルガモの教会に対して語られたみことばを学びましょう。

[12]また、ペルガモにある教会の御使いに書き送れ。『鋭い、両刃の剣を持つ方がこう言われる。[13]「わたしは、あなたの住んでいる所を知っている。そこにはサタンの王座がある。しかしあなたは、わたしの名を堅く保って、わたしの忠実な証人アンテパスがサタンの住むあなたがたのところで殺されたときでも、わたしに対する信仰を捨てなかった。

[14]しかし、あなたには少しばかり非難すべきことがある。あなたのうちに、バラムの教えを奉じている人々がいる。バラムはバラクに教えて、イスラエルの人々の前に、つまずきの石を置き、偶像の神にささげた物を食べさせ、また不品行を行なわせた。[15]それと同じように、あなたのところにもニコライ派の教えを奉じている人々がいる。[16]だから、悔い改めなさい。もしそうしないなら、わたしは、すぐにあなたのところに行き、わたしの口の剣をもって彼らと戦おう。[17]耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。わたしは勝利を得る者に隠れたマナを与える。また、彼に白い石を与える。その石には、それを受ける者のほかはだれも知らない、新しい名が書かれている。』（黙示　2・12～17）

この部分を学ぶ前に、今まで学んできたエペソとスミルナにあてた手紙と、このペルガモにあてた手紙とを比較しておきましょう。

まず、エペソの教会は、「愛のない教会」でした。そしてスミルナの教会は、「迫害された教会」でした。ここで学ぶペルガモの教会は、「世俗化した教会」です。

エペソの教会は、外面的に見て、「豊かで問題のない教会」でした。スミルナの教会は、「貧しく悩んでいる教会」でした。そして今回学ぶペルガモの教会は、「証ししながら戦っている教会」です。

また、エペソの教会には、「良い働きがありましたが、愛がありません」でした。スミルナの教会には、「死に対する不安と恐れ、そして勝利」がありました。しかし、ペルガモの教会は、別の問題、「この世と妥協する危険性」があったのです。

つまり、エペソの教会に欠けていたのは初めの愛であり、スミルナの教会の特徴は苦難のために召されていたことであり、これに対してペルガモの教会が必要としていたのは「きよめ」です。

ですからペルガモの教会についてのこの部分の主題は、「世俗化した教会」、「証ししながら戦う教会」、または「この世との妥協の危険性を持った教会」であり、また、「きよめ」です。

また、「ペルガモ」という名前には、二つの意味があります。ひとつは「結婚によって」という意味と、もうひとつは「高い城」という意味です。ですからこの部分の題名は、「結婚による高い城」とすることもできます。私たちはこの部分を「偶像崇拝の中心地にあったペルガモの教会」、「ペルガモの教会に対するイエス様ご自身の啓示」、「ペルガモの教会に与えられたみことば」の三つに分けて考えてみましょう。

1　偶像崇拝の中心地にあったペルガモの教会

ペルガモは、どのような都市だったのでしょうか。

ペルガモは、エペソで働いていたローマの役人の住んでいた町でした。ペルガモはまた、皇帝崇拝の、つまり偶像崇拝の中心地でもありました。特に、ゼウス、アポロ、アスキレピオスの神々が崇拝されていました。

巨大なゼウスの神殿が、ペルガモの町から三百メートル高い所に建てられ、遠くからもよく見えました。このゼウスの神殿の遺跡の一部は、今でもベルリンのペルガモン博物館に保存され、古代の七不思議の一つ、とされています。また、アスキレピオスは救主と呼ばれていました。アスキレピオスの神殿は、当時世界に二百以上もあり、ペルガモにあるアスキレピオスの神殿はそれらの中心だったのです。また、アスキレピオスに捧げられたいけにえは蛇だったので、蛇があがめられていました。

ペルガモの町は、このような皇帝崇拝と偶像崇拝、つまり悪魔の中心地だったのです。偶像崇拝と悪魔との間には、つねに密接な関係があります。

私は何を言おうとしているのでしょう。偶像の神にささげた肉に、何か意味があるとか、偶像の神に真実な意味があるとか、言おうとしているのでしょうか。いや、彼らのささげる物は、神にではなくて悪霊にささげられている、と言っているのです。私は、あなたがたに悪霊と交わる者になってもらいたくありません。（Ⅰコリント 10・19、20）

ペルガモの町では、ゼウスが全世界の支配者であり、アスキレピオスが救主であり、蛇が神聖な動物としてあがめられていたのです。

ペルガモの町はまた、文化と学問の中心地でした。前に学んだエペソは政治の中心地であり、スミルナは商業の中心地でした。しかし、ペルガモは文化と思想の中心地だったのです。ペルガモには二十五万冊の書物を蔵している図書館が建てられていました。そして、それらの書物はすべて手で書かれたものでした。それらの書物に使われた用紙は、この都市の名前にちなんで今日もドイツ語でペルガメントと言われています。

ペルガモはまた、富と人間的英知の中心地でした。言いかえれば、ペルガモの町は、「高い城」、「悪魔の王座」が置かれていた所だったのです。

この都市に、イエス・キリストの教会が建てられました。富と人間的英知、偶像崇拝、文化と学問の中心地だったペルガモの市民の中には、これらの人間的な「豊かさ」に満足を見いだすことができない人々がいたのです。そしてこのような人々は、イエス様の内にまことの救いと満足を見いだしていたのです。

イエス・キリストの教会は、生ける神の宮です。イエス様ご自身が教会の中に住んでおられます。このような神の宮は、偶像の宮に対立するものです。

まことの信仰に入ってきた人々は、ゼウスが世界の支配者なのではなく、「主なる神が世界の支配者」であり、アスキレピオスが救主なのではなく、「イエス・キリストこそが救い主」であると証ししたのでした。

まことの教会とはどのようなものでしょうか。イエス・キリストのまことの教会とは、霊の有機体です。まことの教会は、聖霊を通して生み出されます。聖霊の内住を通して信者は一つにさ

れるのです。この一致をもたらす力は、人間の内にあるのではなく、信者ひとりひとりの内に内住しておられるイエス様の霊によるのです。したがって教会こそが、神が成しとげられた最大の奇蹟です。

主なる神の創造はすばらしく、また偉大です。人間がきわめることのできない宇宙全体が、この神の創造のすばらしさをほめたたえています。イスラエルの民もまた、神によって造られ、神の栄光をほめたたえる存在ですが、イエス様の教会は、これら全宇宙とイスラエルの創造のすばらしさにまさるものです。

からだは一つ、御霊は一つです。あなたがたが召されたとき、召しのもたらした望みが一つであったのと同じです。主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つです。すべてのものの上にあり、すべてのものを貫き、すべてのもののうちにおられる、すべてのものの父なる神は一つです。（エペソ　4・4～6）

この中で、「すべてのもののうちにおられる、すべてのものの父なる神は一つ」とあるとおり、神ご自身は、聖霊を通してご自身の教会にお住みになられます。そしてイエス様は、すべての信者の内に宿ってくださるのです。これこそが神の栄光の現われです。

まことの教会とは「キリストの身体」です。まことの教会はそのかしらであるイエス様とつながって、有機的な一つの身体を形成するのです。

また、神は、いっさいのものをキリストの足の下に従わせ、いっさいのものの上に立つ

かしらであるキリストを、教会にお与えになりました。教会はキリストのからだであり、いっさいのものをいっさいのものによって満たす方の満ちておられるところです。

（エペソ　1・22、23）

主なる神は、旧約の時代にすでにイスラエルの民に向かって「あなたがたの神、主であるわたしが聖であるから、あなたがたも聖なる者とならなければならない。」（レビ19・2）と語っておられます。つまり主なる神は、聖なる民をご自身の民として求めておられるのです。

しかし、イエス様が満ちておられる教会は、イスラエルの民よりもさらにもっと深く、聖なる神との交わりを持つものです。ですから、「あなたがたも聖なる者とならなければならない」と聖書は言っています。

ご自身で、しみや、しわや、そのようなものの何一つない、聖く傷のないものとなった栄光の教会を、ご自分の前に立たせるためです。

（エペソ　5・27）

私たちはこの本の前の部分で、エペソの教会が使徒の時代における代表的な教会であること、また、スミルナの教会が迫害の中におかれた教会の代表であることを見てきました。それらの期間は、西暦百年から三百十六年まで続きました。そして、ペルガモの教会は、三百十六年から五百年にいたる時代の教会を代表しています。

三百十六年は、ローマ皇帝コンスタンチヌスによって、キリスト教が国の宗教として承認され

た年です。それが国家と教会との結びつきの始まりです。そして国家と教会との結びつきは、ひとつの結婚に、それも不幸な結婚になぞらえることができます。

三百十六年から五百年までの間に、教会はもはや迫害を受けることがなくなり、教会は外面的な平和を楽しむことができるようになりました。つまり、教会と国家との共存の時代が始まったのです。「集会」が「教会」になったのです。

ここで国家と教会との簡単な比較をしてみましょう。

国家はこの世的な権威を持っています。国家は武力を持ち、また、この世の法律に従います。国家がこの世を治めることは、しかし神のみこころなのです。

人はみな、上に立つ権威に従うべきです。神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、神によって立てられたものです。…それは、彼があなたに益を与えるための、神のしもべだからです。しかし、もしあなたが悪を行なうなら、恐れなければなりません。彼は無意味に剣を帯びてはいないからです。彼は神のしもべであって、悪を行なう人には怒りをもって報います。

（ローマ　13・1、4）

しかし、国家の支配と、イエス様の教会との間には、大きな違いがあります。国家はこの世のものであり、教会は天的なものです。教会はイエス様の支配のもとにおかれ、霊に従うものです。

「天の御国は、からし種のようなものです。それを取って、畑に蒔くと、どんな種よりも小さいのですが、生長すると、どの野菜よりも大きくなり、空の鳥が来て、その枝に巣

を作るほどの木になります。」　（マタイ　13・31、32）

国家と教会とがいっしょになってしまうとき、その結果は「堕落」です。本来、どんな種よりも小さいはずのからし種が、国家と結びついて巨大なものになってしまったとき、それは不自然な状態です。

この時代、教会は国家と結びつくことによって、この世的な権力を得ました。このような結びつきがどんな結果をもたらすかについては、黙示録17章に次のように記されています。

それから、御使いは、御霊に感じた私を荒野に連れて行った。すると私は、ひとりの女が緋色の獣に乗っているのを見た。その獣は神をけがす名で満ちており、七つの頭と十本の角を持っていた。この女は紫と緋の衣を着ていて、金と宝石と真珠とで身を飾り、憎むべきものや自分の不品行の汚れでいっぱいになった金の杯を手に持っていた。その額には、意味の秘められた名が書かれていた。すなわち、「すべての淫婦と地の憎むべきものとの母、大バビロン。」という名であった。そして、私はこの女が、聖徒たちの血とイエスの証人たちの血に酔っているのを見た。私はこの女を見たとき、非常に驚いた。

（黙示　17・3～6）

さて、ペルガモの教会では、このような危険な結びつきの一つが始まっていたのです。今日でも私たちは、これと同じような例を多く見ることができます。つまり、ペルガモの教会も妥協と

共存の危険性を持っていたのです。このような妥協を通して、ペルガモの教会では、この世に対しての明確な一線が失われてしまったのです。

2　ペルガモの教会に対するイエス様の啓示

イエス様のみことばは、いつもイエス様ご自身の啓示です。イエス様は鋭い両刃の剣を持つお方です。12節に、「また、ペルガモにある教会の御使いに書き送れ。『鋭い、両刃の剣を持つ方がこう言われる。』」と書かれてあるとおりです。

イエス様はご自身の教会に対して、「裁き主」として立っておられます。「剣」はイエス様のみことばを象徴しています。イエス様は死んだお方でも、また話すことのできないお方でもありません。イエス様は、ご自身の教会に対して語り続けておられます。

イエス様のみことばは力です。イエス様の裁きのみことばは、両刃の剣のように切り裂くものです。イエス様のみことばを通して、すべてのものは明るみに出され、はだかにされます。イエス様のみことばは、やわらげることのできない言葉です。

イエス様は、ご自身のみことばを通して、ご自身を明らかになさいます。イエス様のみことばは、助けといのちをもたらすと同時に、裁きと死とをもたらします。イエス様のみことばは、解放と守りを与えると同時に、裁きを与え、滅びをもたらすみことばです。

神のことばは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髄の分かれ目さえも刺し通し、心のいろいろな考えやはかりごとを判別することができます。

イエス様の武器は、ご自身のみことばです。

（ヘブル　4・12）

まことに、主が仰せられると、そのようになり、主が命じられると、それは堅く立つ。

（詩篇　33・9）

イエス様のみことばは、それだけで十分なものです。教会を勝利に導き、教会をあらゆる攻撃から守り通すことができます。

しかし、教会が罪と異端に傾くなら、イエス様はこのような教会を容赦なく罰せられます。イエス様が私たちを罪のなかに放置しておかれず、みことばの剣をもって目覚めさせてくださるということは、ほんとうに感謝すべきことです。イエス様は、すべての教会に対して、その教会が必要としているみことばによって、ご自身を啓示されるのです。

前に学んだエペソの教会は、すべてを所有していましたが、その根本に病を持っていました。エペソの教会は、イエス様との結びつき、つまり、初めの愛から離れてしまったのです。このエペソの教会に対してイエス様は、その教会の中、つまり、燭台の中を歩かれる大祭司としてのご自身を現わされたのです。悔い改めのある所においては、イエス様は大祭司として油をそそがれ、悔い改めのない所では、燭台を取りのけられます。

スミルナの教会は、迫害を受け、恐怖と死にさらされていた教会でした。この教会に対してイ

エス様は、死に打ち勝った方としてご自身を現わしておられます。イエス様は、スミルナの教会に向かって、「恐れてはいけない。死に至るまで忠実でありなさい。」と励ましておられるのです。

さて、ペルガモの教会は、外面的には証しをしながら戦っている教会でした。しかしこの教会は、外に対する戦いだけを行ない、内に対する戦いを忘れていたのです。この教会は妥協の危険にさらされていたのです。この教会に対してイエス様は、みことばの剣をもって裁かれる「裁き主」として、ご自身を現わしておられます。

3　ペルガモの教会に与えられたみことば

イエス様は、ペルガモの教会の働きや行ないについて語られる前に、まずこの教会の置かれている所について語っておられます。「わたしは、あなたの住んでいる所を知っている」。イエス様はいつも私たちの状態をすべてご存知です。イエス様は、私たちが置かれている所が私たちにとって何を意味しているかをよく知っておられます。

ペルガモにある教会は悪魔的な権力の集まっているところ、つまり「高い城」でした。しかし、イエス様はこのペルガモの教会に対して、「あなたは、わたしの名を堅く保って、…わたしに対する信仰を捨てなかった。」と言っておられます。この箇所は原書によると、「キリスト・イエスの名にすがりつく」とか「しがみつく」という意味になっています。「わたしの名を…」、つまり「イエス様の名」という言葉には、イエス様というお方と、そのお方がなしとげられた救いのみわざの両方の意味がこめられています。イエス様の名を堅く保っている人だけが悪魔の攻撃に抵

抗し、勝利することができるのです。

「また、わたしの名のために、あなたがたはすべての人々に憎まれます。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われます。」（マタイ　10・22）

「また、わたしの名のために、家、兄弟、姉妹、父、母、子、あるいは畑を捨てた者はすべて、その幾倍もを受け、また永遠のいのちを受け継ぎます。」（マタイ　19・29）

「そのとき、人々は、あなたがたを苦しいめに会わせ、殺します。また、わたしの名のために、あなたがたはすべての国の人々に憎まれます。」（マタイ　24・9）

「しかし彼らは、わたしの名のゆえに、あなたがたに対してそれらのことをみな行ないます。それは彼らがわたしを遣わした方を知らないからです。」（ヨハネ　15・21）

そこで、使徒たちは、御名のためにはずかしめられるに値する者とされたことを喜びながら、議会から出て行った。（使徒　5・41）

「彼がわたしの名のために、どんなに苦しまなければならないかを、わたしは彼に示すつもりです。」（使徒　9・16）

するとパウロは、「あなたがたは、泣いたり、私の心をくじいたりして、いったい何をしているのですか。私は、主イエスの御名のためなら、エルサレムで縛られることばかりでなく、死ぬことさえも覚悟しています。」と答えた。（使徒　21・13）

このバルナバとパウロは、私たちの主イエス・キリストの御名のために、いのちを投げ出した人たちです。（使徒　15・26）

もしキリストの名のために非難を受けるなら、あなたがたは幸いです。なぜなら、栄光の御霊、すなわち神の御霊が、あなたがたの上にとどまってくださるからです。（Ⅰペテロ　4・14）

「わたしは、あなたの行ないを知っている。見よ。わたしは、だれも閉じることのできない門を、あなたの前に開いておいた。なぜなら、あなたには少しばかりの力があって、わたしのことばを守り、わたしの名を否まなかったからである。」（黙示　3・8）

アスキレピオスがペルガモの救主なのではなく、イエス様が彼らの救い主でした。ペルガモの教会の信者は、アスキレピオスの蛇を拝むことをしませんでした。なぜなら、その蛇の背後には、

「古い蛇」と呼ばれる悪魔がひそんでいたからです。

こうして、この巨大な竜、すなわち、悪魔とか、サタンとか呼ばれて、全世界を惑わす、あの古い蛇は投げ落とされた。彼は地上に投げ落とされ、彼の使いどもも彼とともに投げ落とされた。（黙示　12・9）

彼は、悪魔でありサタンである竜、あの古い蛇を捕え、これを千年の間縛って、…（黙示　20・2）

彼らは、アスキレピオスの蛇が救いといやしとをもたらすどころか、滅びと死をもたらすものであることを知っていたのです。

ペルガモの教会の信者は、ローマの皇帝を崇めることをしないで、イエス・キリストだけを信仰し、救い主であると告白する人々でした。当時は、イエス様だけでなく、同時にほかの救い手、またほかの王を受け入れているふりさえすれば、だれも、どこからも攻撃を受けることはなかったのです。しかし、ペルガモの信者たちは、イエス様だけをすべてのものの上においていました。イエス様こそが主であり、唯一の正しい救い主であると確信し、言明していたのです。

そして、このイエス様に対する忠実さのゆえに、教会の一つの肢体が死に追いやられたのです。アンテパスはイエス様お一人を信じ通したために殺されました。アンテパスという名前は、「すべての者が一人の人に反抗している」という意味です。このアンテパスを、イエス様は「わたし

の忠実な証人」と言っておられます。

黙示録1章5節には「忠実な証人、死者の中から最初によみがえられた方、地上の王たちの支配者であるイエス・キリスト」とありますが、アンテパスはここで同じように「忠実な証人」と呼ばれています。ですから、この「忠実な証人」という名前こそ、信者に対して与えられる最高の栄誉です。

アンテパスは、だれか他の権威者の証人となったのではなくて、ただイエス様だけを証ししたのです。それゆえ、アンテパスは殺されなければなりませんでした。彼は人を恐れることをせず、また苦難から逃げることもしませんでした。

私たちはイエス様を告白する者でしょうか。それともイエス様を拒む者でしょうか。もし告白しなければ、それは拒むことです。

1　警告のみことば

2章14、15節では、イエス様は大変きびしいことを言っておられます。まず始めに、「あなたには少しばかり非難すべきことがある。」と語っておられます。しかし、「少しばかり」という言葉は決して「どうでもよい」という意味ではありません。むしろ、非常に重要なことを示しています。なぜなら、この箇所を通してイエス様は、悔い改めを勧めておられるからです。そして、悔い改めるということは、「百八十度の転換をする」ことです。

外から見ると、ペルガモの教会は、はっきりとした態度をとっていました。しかし、その内部

では、偶像や悪魔の問題があまり真剣には取り扱われていませんでした。つまり、二つのことがイエス様を大変悲しませていたのです。一つはバラムの教えを信じている人々がいたことです。もう一つは、ニコライ派の教えを信じている人々がいたことです。

もちろんそれは、教会の全ての人々がこれらの教えを信じていたということではありません。しかし、教会はこれら異教の教えを奉じている人々の存在と教えを黙認していたのです。これがこの教会の「罪」でした。

私たちは次に、バラムの教え、ニコライ派の教えについて、少し考えてみましょう。

まず、バラムの教えとは何でしょうか。14節には「バラムはバラクに教えて、イスラエルの人々の前に、つまずきの石を置き、偶像の神にささげた物を食べさせ、また不品行を行なわせた。」と書かれています。

バラムの物語は民数記22章から24章までに書かれています。モアブの王バラクはイスラエルから攻撃を受けました。バラク王はイスラエルの側に神がついておられることを知り、自分が無力であることを知りました。それで、バラク王は預言者バラムを自分のところへ連れてこさせました。預言者バラムは、バラク王から、呪いによってイスラエル側にある霊的な力を打ち破るように頼まれました。しかしバラムは、神がイスラエルを祝福しておられることと、来たるべき救い主についての預言を四回にわたって告げました。ところが預言者バラムは、実は二心のある人間でした。彼は、神とマモンの両方に仕えようとしたのです。バラムはイスラエルに呪いをかけることはできませんでしたが、しかし彼は自分の利益のために、イスラエルの霊的な力を打ち破る

ための恥ずべき助言を与えたのです。それは、モアブの娘たちをイスラエル人に近づけて偶像を拝むようにし向ければいい、という助言でした。モアブの娘たちとの結婚によってイスラエルの人々の力を失わせるようにし向けたのです。そして事実、民数記25章1節から3節にある通りになりました。

預言者バラムの助言は、「神の敵とひとつになれ」ということでした。彼の助言は、モアブとイスラエル、神とバアルとをひとつにしようとするものでした。

これによって、神の恵みが失われてしまいました。イスラエル人はモアブ人といっしょに食事をし、彼らと交際し、彼らと結婚し、ついには彼らの神々に仕えるようになったのです。異邦人とのあいだの分離が放棄され、イスラエルの民はもはや、神に選び分けられた民とは言えなくなってしまったのです。

バラムの教えは、外から見るとまったく無害で、とるに足りない小さなことに思われたのです。バラムは決して、イスラエルに大軍をさし向けたのではありません。娘たちをイスラエルにつかわしたのです。バラムはまた、モアブの祭りにイスラエル人を招待するようにすすめました。なぜなら、その祭りをともにすることによって、イスラエルの人々は偶像礼拝に誘われ、さらに不品行に誘われるようになると思ったからです。

バラムの教えは小さなものでした。しかし、それがわなだったのです。14節における「不品行を行なわせた」という言葉は、原書では「わなにかかるように誘われた」「罪に誘われた」という意味です。

その当時は、動物を偶像にささげ、その後でそれらを食べることが一般に行なわれていました。肉そのものは悪い物ではありませんが、それが偶像をあがめるために用いられている場合は、良い物であるとは言えません。

ですから、私の愛する者たちよ。偶像礼拝を避けなさい。（Ⅰコリント　10・14）

偶像にささげた肉を食べるだけではなく、別の不品行も行なわれていました。その当時、コリントには寺女と呼ばれる売春婦たちが千人以上もいて、その人々に「聖なる結婚」という名前のもとに不品行を行なわせていたのです。これと似たようなことを、私たちは今日、統一教会において見ることができます。そこでは不品行が「聖なること」としてとり扱われているのです。

「不品行を行なう」という場合には、二つの意味があります。イスラエルのバラムの教えには、モアブの女性と結婚するという意味と、偶像に仕えるという意味があったのです。神から離れるということは、常に神に対して姦淫を行なうことを意味しています。

十戒における第一の戒めと第六の戒めとは、お互いに密接な関係をもっています。第一の戒めは「あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない」とあり、第六の戒めは「姦淫してはならない」とあります。ほかの神々があってはならないということは、ほかの女性をもってはならないということと密接に関連しています。忠実であるということは、神に対してであれ、女性に対してであれ、いずれの場合においても、二心を持たないということです。自分の妻に対して忠実でない人は、神に対しても忠実ではありません。

ペルガモには、まちがったバラムの教えを奉じている人々がいました。彼らは、真の神の宮と異邦人の神の宮とのあいだに妥協の道を作ろうとしていた人々です。また神の知恵と、人の知恵のあいだに妥協の道を作ろうとしていた人々です。そして、神の言葉と人間の哲学の間に、また教会の聖なる生活と異邦人の肉的な生活との間に妥協の道をつくろうとしていた人々です。

この人々は、教会とこの世との混合を求めていたのです。しかしその結果、教会を毒することになったのです。もし、主を信じる心が、主を喜ばせることだけに向かっていないときには、偶像崇拝と不信仰とにつながります。

これがペルガモの教会の問題でした。しかし教会全体は教会の平和を保つために黙って忍耐するだけだったのです。教会はこの問題に対して、はっきりとした態度をとらず、中立的な態度をとったのです。

エペソの教会の場合には、人々はニコライ派のまちがった行ないに対して憎しみをもって対抗しました。また、テアテラの教会の人々は、イゼベルの行ないを忍耐しました。

そしてペルガモの教会では、正しいグループと間違ったグループとのあいだに「平和な共存」がはかられたのです。外面的に見ると、彼らは寛容な人々でした。しかし、このような二つのグループの間で中立を保つということは、必ず不忠実のはじまりとなります。

主に対する不忠実は、しばしばもっとも忠実に見える人々の中からおこります。悪魔は非常に狡猾です。ですから全ての人々は、自分自身をよく吟味しなければなりません。

ですから、立っていると思う者は、倒れないように気をつけなさい。

（Ⅰコリント　10・12）

悪魔は明確な態度をとらないように、また我慢するように、そして妥協しやすいようにしようとしているのです。

イスラエルの人々の中に、その当時、聖なるものと俗なるものとの混同が行なわれていました。そして西暦三百十六年から五百年に至るまでの教会でも、このような混同が行なわれていたのです。キリスト教が国家宗教となり、キリスト教が高い地位を得るようになり、異邦人の神殿がキリスト教の教会に利用され、キリスト教の祭りが強制されるようになったのです。

国家と教会との結びつきができあがり、このことを通して、教会の世俗化がはじまりました。

「わたしは彼らにあなたのみことばを与えました。しかし、世は彼らを憎みました。わたしがこの世のものでないように、彼らもこの世のものでないからです。彼らをこの世から取り去ってくださるようにというのではなく、悪い者から守ってくださるようにお願いします。わたしがこの世のものでないように、彼らもこの世のものではありません。」

（ヨハネ　17・14～16）

イエス様は、鋭い両刃の剣を持つお方です。剣は神の言葉であり、いっしょになってはならない物を二つに分ける剣です。国家と教会も同じです。これら二つのものは、一つになれないのです。ですからこれら二つのものを区分けするために、神の言葉が必要なのです。

真の教会は、この世のものではありません。この世といっしょにされるものではありません。真の教会は、この世に対して権力をふるうものであってはならないのです。

「真理によって彼らを聖め別ってください。あなたのみことばは真理です。」

（ヨハネ　17・17）

聖めることとは、聖別されることです。聖別はただ真理を通して与えられます。そして真理とは、神の言葉です。この世と結びつくことは、姦淫になるのです。

貞操のない人たち。世を愛することは神に敵することであることがわからないのですか。世の友となりたいと思ったら、その人は自分を神の敵としているのです。

（ヤコブ　4・4）

この世の神は悪魔です。したがって、この世と結びつくこと、この世といっしょになることは、悪魔と結びつくことになります。

世をも、世にあるものをも、愛してはなりません。もしだれでも世を愛しているなら、その人のうちに御父を愛する愛はありません。すべての世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父から出たものではなく、この世から出たものだからです。

（Ⅰヨハネ　2・15、16）

というのは、肉の思いは神に対して反抗するものだからです。（ローマ　8・7）

この世とのはっきりとした分離が必要であることを知らない人は、すなわち、バラムの教えを信じる人です。

しかし私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが決してあってはなりません。この十字架によって、世界は私に対して十字架につけられ、私も世界に対して十字架につけられたのです。（ガラテヤ　6・14）

次に第二番目のニコライ派の教えについて考えてみましょう。

ペルガモの教会の中にはまた、ニコライの教えを奉じている人々がいました。前に学んだエペソの教会の中にも、このニコライ派の人々がいました。しかしエペソの教会では、ニコライ派の人々の行ないはありましたが、ペルガモの教会のように「ニコライ派の教えを奉じる人々」がいるまでには至っていなかったのです。エペソの教会の人々は、ニコライ派の行ないを主が憎まれるように憎む心があったのです。

ニコライ派という意味は、国民の支配者という意味です。ニコライ派の人々は平信徒と聖職者のあいだに区別をもうけたのですが、それによって万人祭司制が無視されたのです。

ペルガモの教会においては、ニコライ派が唱えた階級制を主が作り出されたかのように誤って説かれ、それを奉じる人々がいたのです。

真の主のみからだである教会は、けっして牧師や監督や法制によって導かれるものではなく、直接、聖霊の導きを受けるものです。

後に、人間的な祭司制度をとる人々が、この制度に従おうとしない信者たちを迫害するようになりました。このことによって、多くの信者たちが組織された教会の迫害を受け、そして殺されたのです。

しかしペルガモの教会は、はっきりとした態度をとることをしませんでした。これこそ、非常に危険なことです。パウロはいつもはっきりとした態度をとった人でした。

しかし、私たちであろうと、天の御使いであろうと、もし私たちが宣べ伝えた福音に反することをあなたがたに宣べ伝えるなら、その者はのろわれるべきです。

（ガラテヤ　1・8）

この言葉は、間違った教えに対する寛容さを許さず、間違った教えに対して、はっきりとした分離を宣言するものです。

ペルガモの教会では、大部分の信者の良い行ないが、少数の信者のまちがった行ないによって、打ち消されてしまったのです。

あなたがたの高慢は、よくないことです。あなたがたは、ほんのわずかのパン種が、粉のかたまり全体をふくらませることを知らないのですか。

（Ⅰコリント　5・6）

イエス様はこのような教会に向かって悔い改めを求めておられます。イエス様は、「悔い改めて自分の債務のもとにへりくだり、妥協をしようとする人々に対して抵抗し、わたしの憎んでいるわざを憎みなさい」と言っておられます。

多くの信者たちが霊的な復興のために祈っています。それは大変大切なことです。そしていま述べたことは、この霊的な復興のための道です。悔い改めをし、はっきりとした態度をとり、妥協を排すれば、豊かな祝福が私たちの上にくだるのです。

イエス様はたしかに、ペルガモの教会の外面的な証しを喜ばれましたが、その教会内の誤った教えへの沈黙を喜ばれることができなかったのです。

そしてイエス様の非難のあとに、悔い改めに対する要求が続いています。イエス様は裁かれるだけではなく、悔い改めを求めておられます。非難の言葉のあとに悔い改めの求めが続いています。しかし、もし悔い改めがなければ、イエス様の次のような恐るべき言葉が待っています。

「だから、悔い改めなさい。もしそうしないなら、わたしは、すぐにあなたのところに行き、わたしの口の剣をもって彼らと戦おう。」（黙示　2・16）

イエス様の忠告と悔い改めのみことばを受け入れる者は、イエス様のみことばである剣によって解放されますが、悔い改めようとしない者に対しては、イエス様のみことばがその人に裁きをもたらすものとなるのです。

かつて繁栄し「高い城」と呼ばれたペルガモの町は、やがてモハメッド教の小さな町となりは

てしまいました。ペルガモの教会が悔い改めをしなかったために、イエス様はご自身のみことばである剣をもって、怒りをこの教会と町にもたらされたのです。

ここでは平和の神であるイエス様が、戦いの宣言をしておられます。イエス様の戦いの宣言は、この世との妥協を行なう人々に対して向けられています。その宣言は、一つにはバラムの教えを奉じている人々に向かってなされました。これらの人々は、主なる神に対する忠実さを失い、神に対して姦淫を犯した人々でした。さらに、イエス様の戦いの宣言は、ニコライ派の教えから離れない人々に対しても行なわれました。ペルガモの教会の信者たちは、しばしば主の憎まれるものを憎むことをしなかったのです。

イエス様は、「悔い改めることをしない人は、みことばの剣によって裁かれる」と忠告しておられるのです。

2　約束のみことば

もし私たちが、神のみことばによってこの世と分離するなら、それが私たちの救いになります。みことばによるきよめの後には、必ず祝福がともないます。

17節に「耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。」とありますが、このことによってのみ、私たちは救いを受けることができるのです。

私たちは、イエス様のみことばを聞く用意ができているでしょうか。正しく聞くということは、悔い改めをし、そして神のみことばに従うということです。私たちがもし危険を見抜き、いっさ

いの妥協を退けることができるなら、私たちは幸いです。

イエス様は勝利を得た者に対して三つのことを約束しておられます。勝利を得るということの意味は、悔い改めをするということ、服従するということ、そして、イエス様のみこころに対していっさいの妥協を排して従う、ということです。

第一の約束は、「隠れたマナ」です。

隠れたマナを食べるということは、イエス様との完全な交わりを持つ、ということです。イエス様ご自身が、この隠れたマナです。

「…というのは、神のパンは天から下って来て、世にいのちを与えるものだからです。」

そこで彼らはイエスに言った。「主よ。いつもそのパンを私たちにお与えください。」

（ヨハネ　6・33、34）

「わたしが天から下って来たのは、自分のこころを行なうためではなく、わたしを遣わした方のみこころを行なうためです。」

（ヨハネ　6・38）

「わたしはいのちのパンです。…わたしは、天から下って来た生けるパンです。だれでもこのパンを食べるなら、永遠に生きます。またわたしが与えようとするパンは、世のいのちのための、わたしの肉です。…わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠のいのちを持っています。わたしは終わりの日にその人をよみがえらせます。わたしの肉はま

ことの食物、わたしの血はまことの飲み物だからです。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、わたしのうちにとどまり、わたしも彼のうちにとどまります。生ける父がわたしを遣わし、わたしが父によって生きているように、わたしを食べる者も、わたしによって生きるのです。これは、天から下って来たパンです。あなたがたの先祖が食べて死んだようなものではありません。このパンを食べる者は永遠に生きます。」

（ヨハネ　6・48、51、54～58）

隠れたマナであるイエス様は、すでに来られたお方であり、常に臨在しておられるお方であり、そしてやがて来ようとしておられるお方です。イスラエルの民が荒野でマナによって養われたように、私たちもまたイエス様との交わりによって完全な満足を得なければなりません。

勝利を得る者とは、この世のあらゆる偶像との食事を拒絶して、イエス様の隠れたマナを食する者です。これによって、彼らはイエス様との交わりを持ち、そして真の満足を得るのです。

第二の約束は、「白い石」です。

この白い石にはいろいろな意味があります。その昔裁判では、黒い石は有罪を意味し、白い石は無罪を意味しました。また昔のオリンピックの勝利者には、冠のほかに自分の名前を刻んだ白い石が与えられました。ですからこの白い石は勝利のしるしでした。

17節にある白い石は、主なる神のみこころを満足させたということ、イエス様への忠実さが認められたということを意味しています。ここで私たちは、あらゆる迫害のさなかにあっても、イ

エス様が私たちを顧み、私たちのそばにいてくださるということを知ることができるのです。

第三番目の約束は、「新しい名前」です。

「新しい」という言葉が黙示録の中で出てくるのは、この部分が初めてです。黙示録の後のところでは、「新しい歌」とか「新しいエルサレム」とか「新しい天」という言葉が次々とでてきます。

「新しい」という言葉は、創造者である神のまったく新しい行為を意味しています。お互いに愛しあっている人々のあいだには、二人の間でしか通用しない名前を呼びあうことがあります。この「新しい名前」とは、イエス様と勝利を得た者との間の密接な関係を表わしています。誰からもさまたげられることのない、イエス様との交わりを意味しています。イエス様は二度までも「わたしが与える」と言っておられます。そしてイエス様は、私たちに向かっても「わたしが与える」と言っておられます。問題は、私たちがそれを受ける用意があるかどうかということです。

天に上げられたイエス様が教会に与えられたみことば

5　霊を見分けることを示されたテアテラの教会

黙示録2章18から29節まで

1　イエス様に賞賛された少数の信者たち

1　愛

2　信仰の忠実さ

3　奉仕

4　忍耐

2　イエス様の非難を受けた大多数の信者たち

1　主のみことばだけに聞き従わないこと

2　教会に規律がないこと

3　純粋な教えがないこと

3　勝利を得る者に与えられた大きな約束

1　世界の支配権

2　明けの明星

[18]また、テアテラにある教会の御使いに書き送れ。『燃える炎のような目を持ち、その足は光り輝くしんちゅうのような、神の子が言われる。「[19]わたしは、あなたの行ないとあなたの愛と信仰と奉仕と忍耐を知っており、また、あなたの近ごろの行ないが初めの行ないにまさっていることも知っている。

[20]しかし、あなたには非難すべきことがある。あなたは、イゼベルという女をなすがままにさせている。この女は、預言者だと自称しているが、わたしのしもべたちを教えて誤りに導き、不品行を行なわせ、偶像の神にささげた物を食べさせている。[21]わたしは悔い改める機会を与えたが、この女は不品行を悔い改めようとしない。[22]見よ。わたしは、この女を病の床に投げ込もう。また、この女と姦淫を行なう者たちも、この女の行ないを離れて悔い改めなければ、大きな患難の中に投げ込もう。[23]また、わたしは、この女の子どもたちをも死病によって殺す。こうして全教会は、わたしが人の思いと心を探る者であることを知るようになる。また、わたしは、あなたがたの行ないに応じてひとりひとりに報いよう。

[24]しかし、テアテラにいる人たちの中で、この教えを受け入れておらず、彼らの言うサタンの深いところをまだ知っていないあなたがたに言う。わたしはあなたがたに、ほかの重荷を負わせない。[25]ただ、あなたがたの持っているものを、わたしが行くまで、しっかりと持っていなさい。[26]勝利を得る者、また最後までわたしのわざを守る者には、諸国の民を支配する権威を与えよう。[27]彼は、鉄の杖をもって土の器を打ち砕くようにして彼らを治める。わたし自身が父から支配の権威を受けているのと同じである。[28]また、彼に明けの明星を与

えよう。耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。」』（黙示　2・18～29）[29]

黙示録のこの部分で、私たちはイエス様がテアテラの教会に与えられたみことばを学びましょう。天に上げられたイエス様は、ご自身の教会に対して決して沈黙なさることなく、今も語っておられます。

イエス様は、豊かで活発だったエペソの教会に向かって「悔い改めて初めの愛に帰りなさい」と語られました。

また、迫害によって苦しんでいたスミルナの教会に向かっては「死に至るまで忠実でありなさい」と語られました。

また、戦いながら証しをしているペルガモの教会に向かっては「この世と妥協しないでわたしに従っていなさい」と語られました。

そしてテアテラの教会に向かっても、イエス様はご自身を現わし、語っておられます。そのみことばは、次の三つの項目に分けることができます。

1　イエス様に賞賛された少数の信者たち
2　イエス様の非難を受けた大多数の信者たち
3　勝利を得る者に与えられた大きな約束

テアテラは、ペルガモの東南約六〇キロにある町で、今ではアキサールと呼ばれています。こ

の町は工業都市で、毛糸の染色で有名でした。この町は、ペルガモとサルデスの間に位置し、商業都市としても栄え、町には異邦的な宗教が広がっていました。

テアテラは、性道徳が乱れ、たいへん評判の悪い町でした。この町にどのようにして福音が伝えられたかはわかりませんが、パウロによって回心したルデヤはこの町の出身でした。

テアテラ市の紫布の商人で、神を敬う、ルデヤという女が聞いていたが、主は彼女の心を開いて、パウロの語る事に心を留めるようにされた。そして、彼女も、またその家族もバプテスマを受けたとき、彼女は、「私を主に忠実な者とお思いでしたら、どうか、私の家に来てお泊まりください。」と言って頼み、強いてそうさせた。（使徒　16・14～15）

ルデヤは家族とともにイエス様を信じ、きっとテアテラに行ってイエス様のことを証ししたことでしょう。ルデヤは彼女の経験したことを親戚や友達に語り伝えようとしたことでしょう。そして彼女の証しを通して、多くの人々は飢え渇きを感じ、救いを求めるようになり、救い主を見いだしたことでしょう。このようにしてこの町に教会ができたのです。この教会の目的は、主の宮となってイエス・キリストを証しすることでした。つまりこの教会は地の塩、世の光となるはずでした。

しかしこの教会は、内部分裂を起してしまったのです。なぜかというと、この教会の中に、異なった霊が入り込んだからです。

愛する者たち。霊だからといって、みな信じてはいけません。それらの霊が神からのも

のかどうかを、ためしなさい。なぜなら、にせ預言者がたくさん世に出て来たからです。
（Ⅰヨハネ　4・1）

このみことばの勧めは、特にテアテラの教会に対してあてはまります。

では、このテアテラの教会について、より深く考えてみましょう。

この教会の少数の人々は、イエス様の承認を得た人々でした。この人々は黙示録2章19節、24節にあるように、ほめられ、慰めを受け、そして忠告を受けました。これに対して、この教会の他の大多数の人々はイエス様の非難を受けました。この大多数の人々は、裁きを予告された人たちでした。そして勝利を得た人々に対しては、イエス様はご自身とともに諸国の民を支配する権威を与えると約束されたのです。

1　イエス様に賞賛された少数の信者たち

最初に私たちは、この教会の少数の人々について考えてみたいと思います。この教会の少数の信者たちだけが、イエス様からの承認を受けていたのです。ここでは、人間的な評価は問題となりません。「燃える炎のような目を持ち、その足は光り輝くしんちゅうのような、神の御子」の評価だけが決定的です。神の御子は、ご自身に従わない者たちへの裁き主として、ご自身を現わしておられます。神の御子はすべてを知り、すべてを見ておられます。

造られたもので、神の前で隠れおおせるものは何一つなく、神の目には、すべてが裸で

あり、さらけ出されています。私たちはこの神に対して弁明をするのです。

（ヘブル　4・13）

神の御子の目は、欺かれることのない、聖なる目です。イエス様はすべてを見ておられます。神の御子は、すべての罪とすべての汚れとを見ておられます。神の御子は罪を見逃すことがおできになりません。罪を見逃すことは、罪を肯定することですから。

私たちは、このようなイエス様の目の前に、自分をさらけ出すことができるでしょうか。私たちはイエス様が、私たち自身をさぐり、調べられることを受け入れることができるでしょうか。

神よ。私を探り、私の心を知ってください。私を調べ、私の思い煩いを知ってください。私のうちに傷のついた道があるか、ないかを見て、私をとこしえの道に導いてください。

（詩篇　139・23、24）

主よ。私を調べ、私を試みてください。私の思いと私の心をためしてください。

（詩篇　26・2）

私たちは、全てを見通すことができる目を持ってはいません。私たちが人を見る時、ただ人の表面を見るだけです。これに対してイエス様は、飾られた人の表面の内側を見通すことがおできになるのです。私たちは人の言葉によって簡単にだまされますが、イエス様は人の言葉によって

だまされるようなお方ではありません。

その頭と髪の毛は、白い羊毛のように、また雪のように白く、その目は、燃える炎のようであった。その足は、炉で精練されて光り輝くしんちゅうのようであり、その声は大水の音のようであった。（黙示　1・14、15）

「しんちゅうのような足」は、裁きが近づいていることを現わしています。イエス様は、すべての不従順な者たちを裁くために近づいておられるのです。イエス様は、「わたしは、…死病によって殺す」（黙示2・23）と言っておられます。

正しいさばきをし、思いと心をためされる万軍の主よ。（エレミヤ　11・20）

正しい神は、心と思いを調べられます。（詩篇　7・9）

神の御子は、目の見えないお方ではなく、すべてのものを正確に見、人の心の奥底までも探るお方です。神の御子は、口をきかないお方ではなく、教会に語りかけるお方です。神の御子は、動かないお方ではなく、行動するお方です。イエス様は裁かれ、そして判決を下されます。

燃えた鉄がすべてのものを焼き尽くすように、イエス様の裁きのみことばも、これに従わないすべての人々を討ち滅ぼしてしまうのです。

教会に対しても、イエス様は欺かれることのない裁き主です。

イエス様は私たちの罪に対して、妥協をなさることはありません。イエス様はご自身の聖さのゆえに、罪には裁きを加えざるをえないのです。

しかしイエス様は、すべての裁きを通して、救いと解放を与えようとなさっておられます。罪に対してはっきりとした態度をとらず、罪をもてあそんでいる人々はわざわいです。私たちの罪のせいで、神の御子が死ななければならなかったのです。ですから、私たちも罪を憎まなければなりません。

私たちはどうでしょうか。私たちとイエス様との交わりは断ち切られ、すべてのものが見せかけになってしまってはいないでしょうか。私たちは、はたしてイエス様を私たちの生活の中心にし、イエス様に私たちの生活の全てを導いていただいているでしょうか。

私たちは、私たちの霊をもう一度新しいものにしていただこうではありませんか。もしイエス様が私たちの生活の中心になられ、私たちがイエス様を愛するようになるなら、私たちは当然罪を憎むようになるはずです。

イエス様は、まずテアテラの教会の忠実な少数の人々をほめておられます。この少数の信者に対しては、イエス様は満足しておられます。これらの信者たちは、イエス様との生きた交わりを求めていました。そしてイエス様を、「初めの愛」をもって愛していたのです。そして彼らの心はイエス様によって満たされ、その結果、彼らの働きにはめざましいものがあったのです。

イエス様は、人の行ないと人の動機とを同じように見ておられます。つまり、人の外面的な行ないと、人の内面的な本質を同じように見ておられるのです。

テアテラの教会の忠実な信者の場合には、すべてのことがイエス様との交わりの結果として行なわれていました。ですからこれらの信者は証しをすることができたのです。

ここでイエス様と結びつくことの結果を、四つの項目に分けて見てみましょう。

1　愛

イエス様に対する愛が、この信者たちのしるしでした。イエス様への愛のあるところには、他の信者への愛も生まれてきます。イエス様への愛が他の何にもまして大きなところでは、全ての問題がイエス様によって解決されます。私たちの行ないが、イエス様への愛によって支配されているなら幸いです。

イエス様に対する愛は、三つの態度となって現われます。

・まず、イエス様をよりよく知ろうとする思いが強くなります。ですから私たちは、イエス様のみことばを、聖書を学ぼうとするのです。

・いつも「イエス様、わたしは何をするべきでしょうか」という問いかけが起こります。ですから私たちは、自分の考えや、感情や、そして思いを捨てて、いつもみこころに従おうとします。つまり「自己を否定する」ようになります。

・主の憎まれるものを、すべて憎むようになります。罪とこの世とサタンに対して、妥協のないはっきりとした態度をとるようになります。イエス様は、かつてペテロに「あなたはわたしを愛するか」と問われましたが、私たちにも同じことを問いかけておられます。

2　信仰の忠実さ

私たちがイエス様と結びつくことによって、私たちの内にはイエス様への愛とともに、イエス様への信仰の忠実さが現われてきます。

テアテラの教会の一部の信者たちは、イエス様にすべてを明け渡したために、他の人々から迫害され、誤解され、そして異分子にされてしまいました。しかしそれゆえに、彼らはイエス様への信仰に忠実であり、少しも迷うことがありませんでした。イエス様が彼らにとっての全てとなり、何ものも彼らをイエス様から引き離すことはできなかったのです。彼らを打ちのめそうとする全ての試みは、彼らをかえってイエス様のほうに近づける結果となりました。

3　奉仕

私たちがイエス様と結びつくことによって、イエス様への奉仕が生まれてきます。そしてイエス様に対する奉仕は、常に兄弟姉妹に対する奉仕に結びついています。ローマ人への手紙12章とコリント第1の手紙12章には、信者の奉仕のいろいろな賜物のことが記されています。そして、このような賜物がテアテラの教会の中にも見られたことは疑いありません。

信者たちは全力を尽くし、いっさいの安楽を退けていました。信者たちは自分のことは考えないで、イエス様のご栄光だけを考え、そして兄弟姉妹のことだけを考えていたのです。

そしてこのようなイエス様との結びつきの中から、イエス様への愛とともに、イエス様への信

仰の忠実さが現われ、イエス様への奉仕が現われただけではありません。イエス様との結びつきの中から、忍耐が生まれてきたのです。

4　忍耐

この忍耐は長続きする忍耐であり、どのような誘惑にもまどわされることのない強い忍耐でした。この忍耐には、経済的な貧しさに対する戦いがあり、友人のあざけりがあり、信者たちとの間での苦しい経験があり、自らの苦しみと弱さへの抵抗などがあります。しかし、テアテラの信者たちは、これらすべてのことに対して打ちのめされることのない強い忍耐を持っていたのです。

私たちの場合はどうでしょうか。私たちはイエス様によってこの点を試みていただこうではありませんか。なお、今まで学んできたような少数の信者たちについては、後に再び触れることにしましょう。

2　イエス様の非難を受けた大多数の信者たち

テアテラの教会の大多数の人々に対しては、黙示録2章の20節から23節で、裁きのみことばが与えられました。この裁きは、三つの非難に要約されます。

1　主のみことばだけに聞き従わないこと。
2　教会に規律がないこと。
3　純粋な教えがないこと。

テアテラの教会の大多数の人々には、非難されるべきところがあったのです。したがって、イエス様はこれらの人々に対して、「あなたには非難すべきことがある。」と言っておられます。誰かが私たちに対して、何か非難する心を持つということは重大なことですが、イエス様が私たちに対して非難すべきことがあると言われることは、もっともっと重大なことです。

神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。

（ローマ　8・31）

しかし、黙示録のこの箇所では逆のことが言われています。それは、イエス様がテアテラの教会の味方でなく、非難者だということです。この箇所でイエス様は、テアテラの教会を弁護するお方ではなく、逆に訴えるお方となっておられます。それはなぜでしょうか。「あなたは、イゼベルという女をなすがままにさせている。」とあります。なすがままにさせているということは、イエス様に対して悪いことを積極的に行なうということではありませんが、しかし、悪いことを「黙認する」ことです。

「黙認する」ことはつまり、「肯定する」ことです。悪いことを黙認していることが、このテアテラの教会の罪でした。この場合、間違った教えが教会の中に存在していただけではなくて、テアテラの教会を支配していたのです。

エペソの教会では、このような間違った教えが徹底的に憎まれていました（黙示2・6）。ペルガモの教会では、間違った教えに対して妥協が行なわれていました。しかし、このような

妥協を行なう者は、少数の者でした（黙示2・14、15）。

しかし、テアテラの教会では、このような間違った教えに従う人々が大勢いたのです。神のしもべたちが大勢だまされていたのです。どうしてこのようになったのでしょうか。

1　主のみことばだけに聞き従わないこと

それは、神のみことばだけに聞き従うということがなかったからです。人々は人間の言葉に聞き従うようになり、自己の心の語るところに従うようになり、また悪魔のささやきに聞き従うようになり、その結果、もはや神の御子のみことばに聞き従わなくなってしまっていたからです。これは大変危険なことです。その結果は常に混乱と、霊的な死です。

教会の惑わしは、いつも表面的には敬虔に見える人々から起こってきます。惑わしをもたらす人々は、話の巧みな人で、指導的な能力を持っていることが多いのですが、しかし、これらの人々は偽善者であり、詐欺師なのです。

しかし、神のみことばだけに聞き従う人々は祝福を受け、守りを与えられ、用いられます。

ここのユダヤ人は、テサロニケにいる者たちよりも良い人たちで、非常に熱心にみことばを聞き、はたしてそのとおりかどうかと毎日聖書を調べた。（使徒　17・11）

パウロはこのような人々のことを喜んでいました。これらの人々は、決してパウロが説くことを疑問に思って聖書を調べていたのではなく、彼ら自身が聖書によって真理の確信を得たいと心

から願っていたのです。

このようにして、これらの信者たちはみことばの中にしっかりとした土台を据えることができました。キリスト者は、すべて神のみことばの中に根を下ろしていなければなりません。

悪魔はいつも私たちを神のみことばから引き離そうとしています。

兄弟たち。私はあなたがたに願います。あなたがたの学んだ教えにそむいて、分裂とつまずきを引き起こす人たちを警戒してください。彼らから遠ざかりなさい。そういう人たちは、私たちの主キリストに仕えないで、自分の欲に仕えているのです。彼らは、なめらかなことば、へつらいのことばをもって純朴な人たちの心をだましているのです。

（ローマ　16・17、18）

間違った教えと誘惑は、テアテラの教会の場合には、イゼベルという女によってもたらされました。私たちは、このイゼベルがどのような人であったかを知ることはできませんが、おそらくこの教会の中心的な人物の妻ではなかったでしょうか。

この女性は自分が女預言者であると主張しました。つまり自分は神の口であり、特別な啓示を与えられている者であり、特別の霊を持つ者だと主張したのです。

しかし、彼女を支配した霊は、聖霊ではなくて人間的な霊、悪魔の霊でした。彼女は非常に話の上手な、そしてテアテラの教会でただ一人の教師だったように思われます。誰ひとり彼女に反対できる者はいませんでした。狂信の霊が彼女を捕らえていたのです。狂信は常に不品行をもた

らします。テアテラの教会の場合がそのようだったのです。

その原因は、信者が神のみことばだけに従うことをしなかったからです。ニコライ派の教えが、ここでは具体的な形をとったと考えられます。なぜならこの教会では、少数の者がほかの人々に対して権力を振るうようになっていたからです。もしニコライ派の教えが断固として拒絶され、責任ある兄弟たちがこの教えに対して戦っていたなら、この教えは大きな勢力とはならなかったであろうと思われます。

この女性は、あるいはイゼベルという名前ではなかったかもしれません。しかしこの女性の性格が旧約時代におけるイゼベルに似ていたために、主がそのように呼ばれたのです。

旧約時代のイゼベルは、シドンの王の娘でした。この王は偶像礼拝者でした。イゼベルの強い影響力によって、彼女の弱い夫であったアハブもまた偶像礼拝者となってしまいました。

オムリの子アハブは、彼以前のだれよりも主の目の前に悪を行なった。彼にとっては、ネバテの子ヤロブアムの罪のうちを歩むことは軽いことであった。それどころか彼は、シドン人の王エテバアルの娘イゼベルを妻にめとり、行ってバアルに仕え、それを拝んだ。

（Ⅰ列王記　16・30、31）

八百五十人の偶像に仕える祭司たちが、イゼベルの食卓に着き、アハブ王は以前の王よりもさらに悪い王となったのです。

アハブのように、裏切って主の目の前に悪を行なった者はだれもいなかった。彼の妻イ

ゼベルが彼をそそのかしたからである。彼は偶像につき従い、主がイスラエル人の前から追い払われたエモリ人がしたとおりのことをして、忌みきらうべきことを大いに行なった。
（I列王記　21・25、26）

イゼベルという名前は、「貞淑な処女」という意味だと言われています。しかし、実際のイゼベルは不品行な女性であり、のろわれた者でした。

ヨラムはエフーを見ると、「エフー。元気か。」と尋ねた。エフーは答えた。「何が元気か。あなたの母イゼベルの姦淫と呪術とが盛んに行なわれているかぎり。」
（II列王記　9・22）

彼は内にはいって飲み食いし、それから言った。「あののろわれた女を見に行って、彼女を葬ってやれ。あれは王の娘だから。」
（II列王記　9・34）

このイゼベルにつき従うことによって、イスラエルは偶像崇拝へと誘惑されていきました。神の預言者であると言った彼女は真の預言者を迫害し、そして殺害したのです。

イゼベルが主の預言者たちを殺したとき、オバデヤは百人の預言者を救い出し、五十人ずつほら穴の中にかくまい、パンと水で彼らを養った。
（I列王記　18・4）

あなたさまには、イゼベルが主の預言者たちを殺したとき、私のしたことが知らされていないのですか。私は主の預言者百人を五十人ずつほら穴に隠し、パンと水で彼らを養いました。（Ⅰ列王記　18・13）

イゼベルはまた、そそのかし、誘惑する者でした。

アハブのように、裏切って主の目の前に悪を行なった者はだれもいなかった。彼の妻イゼベルが彼をそそのかしたからである。（Ⅰ列王記　21・25）

彼女は神のしもべたちをも迫害し、そして殺害したのです。

あなたは、主君アハブの家の者を打ち殺さなければならない。こうしてわたしは、わたしのしもべである預言者たちの血、イゼベルによって流された主のすべてのしもべたちの血の復讐をする。（Ⅱ列王記　9・7）

同じ「わたしのしもべ」という言葉が、黙示録の2章20節の中に出てきます。「イゼベルは、…わたしのしもべたちを教えて誤りに導き、…」。アハブとイスラエルの人々もイゼベルの言葉に従い、それによってイゼベルの支配を受ける結果になったのです。

テアテラの教会にはイゼベルのような、その人の霊が神のみことばによって試されることがなく、人々から自分の言葉を信頼されたいと願う支配欲の強い女性がいたのです。

テアテラの教会のほとんどの人々が、少数の信者、イエス様との生きた愛の交わりを持っている人々を別にして、彼女の言葉に聞き従ったのです。

このように彼女の言葉に聞き従った多くの人々を、イエス様が非難しておられるのです。なぜなら、彼らは神のみことばだけに聞き従うことをしなかったからです。

2　教会に規律がないこと

ペルガモの教会では、正統と異端の二種類の教えが行なわれていましたが、テアテラの教会においては、ただ、イゼベルが唯一の教師でした。このにせの教師を通して、まちがった狭い道は広くされました。「サタンの深さを知った」と主張した人々が、かえって不信仰と異邦人の教えの中に転落していったのです。しかし教会は、この誘惑者だったイゼベルを追放することができませんでした。

あなたがたの高慢は、よくないことです。あなたがたは、ほんのわずかのパン種が、粉のかたまり全体をふくらませることを知らないのですか。（Ⅰコリント　5・6）

外部の人たちは、神がおさばきになります。その悪い人をあなたがたの中から除きなさい。（Ⅰコリント　5・13）

「天の御国は、パン種のようなものです。女が、パン種を取って、三サトンの粉の中に

入れると、全体がふくらんで来ます。」（マタイ　13・33）

イエス様は、イゼベルに対しても、悔い改めの機会をお与えになりました。しかし、黙示録の2章21節にあるように、彼女は悔い改めようとはしませんでした。

悔い改めをしようとしない。これもまた、人間の心が決めてしまうまちがいです。

「ああ、エルサレム、エルサレム。預言者たちを殺し、自分に遣わされた人たちを石で打つ者。わたしは、めんどりがひなを翼の下に集めるように、あなたの子らを幾たび集めようとしたことか。それなのに、あなたがたはそれを好まなかった。」（マタイ　23・37）

イエス様が悔い改めを求められる時は、「悔い改めが可能な時」です。私たちが悔い改めを拒むのは、決して環境のせいではなくて、私たちの心に問題があります。

間違った教えは、常に人の理性を鈍らせ、何も見えなくしてしまいます。間違った教えは、私たちを闇の中へと深く引きずりこみ、そこから抜け出すことは大変むずかしいのです。

イゼベルは、悔い改めようとしませんでした。そのため、悔い改めの時は過ぎ去り、ただ裁きのみが彼女に告げられることになったのです。

イゼベルの教えに従った人々は、かつては神のしもべでした。しかし、彼らはもはや、主との交わりを失ってしまった人々でした。聖書はこのような人々のことを「姦淫を犯す者」と言っています。彼らは主に対しての忠実さを失い、自らの結婚生活も乱れてしまったのです。

しかし、これらの人々のために、主は悔い改めの機会を与えておられました。

それゆえ、今、王たちよ、悟れ。地のさばきづかさたちよ、慎め。恐れつつ主に仕えよ。おののきつつ喜べ。御子に口づけせよ。主が怒り、おまえたちが道で滅びないために。怒りは、いまにも燃えようとしている。（詩篇　2・10～12）

もし、悔い改めて神に立ち返らなければ、神の裁きを受けるほかありません。イゼベルの息子たちは、すべて殺されてしまったのです。

その手紙が彼らに届くと、彼らは王の子どもたちを捕え、その七十人を切り殺し、その首を幾つかのかごに入れ、それをイズレエルのエフーのもとに送り届けた。（II列王記　10・7）

このように、大多数のテアテラの教会の人々がイエス様の非難を受けたのは、イエス様のみことばだけに聞き従わなかったこと、教会に規律がなかったこと、純粋な教えがなかったということがその理由でした。

イエス様のみことばに忠実に従うことが行なわれていない場合には、その結果は、常に「姦淫が行なわれる」ことになります。

「しかし、わたしはあなたがたに言います。だれでも情欲をいだいて女を見る者は、すでに心の中で姦淫を犯したのです。」（マタイ　5・28）

貞操のない人たち。世を愛することは神に敵することであることがわからないのですか。世の友となりたいと思ったら、その人は自分を神の敵としているのです。
（ヤコブ　4・4）

わたしの民は木に伺いを立て、その杖は彼らに事を告げる。これは、姦淫の霊が彼らを迷わせ、彼らが自分たちの神を見捨てて姦淫をしたからだ。
（ホセア　4・12）

彼らは自分のわざを捨てて神に帰ろうとしない。姦淫の霊が彼らのうちにあって、彼らは主を知らないからだ。
（ホセア　5・4）

聖書によれば、汚れた思いを抱くだけでも姦淫を犯したことになるのです。もしもイエス様が、私たちの生活の中で第一の場所を与えられていない時には、私たちは姦淫を犯す者となっているのです。

イゼベルの教えもまた、主のみことばに基づくものではありませんでした。

そのような知恵は、上から来たものではなく、地に属し、肉に属し、悪霊に属するものです。
（ヤコブ　3・15）

イゼベルの教えは、主のみことばによってためされたものではなく、その誤った教えを教会の大多数の人々は黙認していたのです。しかし聖書は私たちに、はっきりとした態度をとることを要求しています。

しかし、私たちであろうと、天の御使いであろうと、もし私たちが宣べ伝えた福音に反することをあなたがたに宣べ伝えるなら、その者はのろわれるべきです。

（ガラテヤ　1・8）

あなたがたのところに来る人で、この教えを持って来ない者は、家に受け入れてはいけません。その人にあいさつのことばをかけてもいけません。

（IIヨハネ　10、11）

しかし、御霊が明らかに言われるように、後の時代になると、ある人たちは惑わす霊と悪霊の教えとに心を奪われ、信仰から離れるようになります。

（Iテモテ　4・1）

終わりの日には困難な時代がやって来ることをよく承知しておきなさい。そのときに人々は、自分を愛する者、金を愛する者、大言壮語する者、不遜な者、神をけがす者、両親に従わない者、感謝することを知らない者、汚れた者になり、情け知らずの者、和解しない者、そしる者、節制のない者、粗暴な者、善を好まない者になり、裏切る者、向こう見ずな者、慢心する者、神よりも快楽を愛する者になり、見えるところは敬虔であっても、

その実を否定する者になるからです。こういう人々を避けなさい。こういう人々の中には、家々にはいり込み、愚かな女たちをたぶらかしている者がいます。その女たちは、さまざまの情欲に引き回されて罪に罪を重ね、いつも学んではいるが、いつになっても真理を知ることのできない者たちです。また、こういう人々は、ちょうどヤンネとヤンブレがモーセに逆らったように、真理に逆らうのです。彼らは知性の腐った、信仰の失格者です。

（IIテモテ　3・1～8）

そのような知恵は、上から来たものではなく、地に属し、肉に属し、悪霊に属するものです。

（ヤコブ　3・15）

しかし、イスラエルの中には、にせ預言者も出ました。同じように、あなたがたの中にも、にせ教師が現われるようになります。彼らは、滅びをもたらす異端をひそかに持ち込み、自分たちを買い取ってくださった主を否定するようなことさえして、自分たちの身にすみやかな滅びを招いています。そして、多くの者が彼らの好色にならい、そのために真理の道がそしりを受けるのです。また彼らは、貪欲なので、作り事のことばをもってあなたがたを食い物にします。彼らに対するさばきは、昔から怠りなく行なわれており、彼らが滅ぼされないままでいることはありません。

（IIペテロ　2・1～3）

愛する者たち。霊だからといって、みな信じてはいけません。それらの霊が神からのものかどうかを、ためしなさい。なぜなら、にせ預言者がたくさん世に出て来たからです。
（Ⅰヨハネ　4・1）

3　純粋な教えがないこと

さて、前に述べたように、このテアテラの教会への手紙は、七つの手紙の中では最長の手紙であり、この手紙によって代表される時代は、教会の歴史の中でも、もっとも長い時代です。

つまりこの時代は、中世の暗黒時代に当たり、西暦五百年から千五百年に至るローマ・カトリック教会の支配の時代に相当しています。ローマ・カトリック教会は、この世的な権力を持つことにより、多くの過ちを犯し、偶像崇拝を行ない、そして真の主にある信者たちを殺害するまでになったのです。

したがって私たちは、旧約時代におけるイゼベルのイスラエル人に対する関係と、テアテラの教会でのイゼベルと信者たちとの関係と、そして五百年から千五百年に至るローマ・カトリック教会の信者たちに対する関係を、比較して考えることができるのです。

ローマ・カトリック教会もまた、主のみことばに聞き従わなかったこと、教会の規律を守らなかったこと、純粋な教えを持たなかったことなどの特徴を持っています。

テアテラという言葉の意味は、薫香を絶やさない者、または、いけにえをささげる者、という意味です。

カトリック教会のミサにおいては、一回ですでに完成されているはずの神の御子の贖罪が、何度も何度も、死者と生きている者とのために繰り返されています。

また、やぎと子牛との血によってではなく、ご自分の血によって、ただ一度、まことの聖所にはいり、永遠の贖いを成し遂げられたのです。（ヘブル　9・12）

このみこころに従って、イエス・キリストのからだが、ただ一度だけささげられたことにより、私たちは聖なるものとされているのです。…キリストは聖なるものとされる人々を、一つのささげ物によって、永遠に全うされたのです。（ヘブル　10・10、14）

カトリック教会は、神と人との間の仲介者はイエス様ではなく、マリアであると教えています。イエス・キリストが中心ではなく、マリアが中心に置かれています。そして最大の誤りは、カトリック教会の教えです。カトリック教会は、常に教会の教えが間違っていないことを主張し強制しますが、しかし、これこそが最大の誤りです。

また、カトリック教会は、常に権力を追い求めています。中世では、いつも、世界の支配権をめぐっての戦いがありました。

聖書は、イエス・キリストのほかに救いはない、とはっきり言っています。

カトリック教会は、教会の外に、つまりカトリック教会の外に救いはない、と言っています。カトリック教会の目的は、人間の魂の救いではなくて、富と権力と名声なのです。

中世においてカトリック教会は、イゼベルと同じように、主にある真の信者たちを迫害しました。拷問や火あぶりや剣をもって迫害しました。人間の言葉よりも主のみことばを重んじたすべての信者たちは異端者として迫害を受けたのです。数えきれないほどの多数の信者たちがドイツ、スコットランド、イギリス、フランス、イタリア、スイス、スペインにおいて、投獄され火あぶりにされました。

イゼベルは悔い改めをしようとしませんでしたが、それと同じように、カトリック教会も、今に至るまで悔い改めを行なおうとはしていません。

カトリック教会は、将来においても悔い改めをしないでしょう。そして、黙示録の17章には、大バビロン、つまりカトリック教会に対して厳しい裁きが行なわれることが記されています。

イエス様は、テアテラの教会に対して、ご自身を神の子として現わしておられます。神の子であられるイエス様は、教会の真の基礎であり、柱です。この教会の基礎ということについて、少し考えてみましょう。

ペテロが、「あなたは、生ける神の御子キリストです。」（マタイ16・16）と言った時、イエス様はペテロに対して「あなたはペテロ（石のようなもの）です。」と言われ、次いで、「（ペテロが『あなたは、生ける神の御子キリストです。』と告白した）その岩の上にわたしの教会を建てます。」（マタイ16・18）と言われました。

ギリシャ語の原典によれば、この石と岩という言葉には、異なった単語が用いられています。カトリック教会は、ペテロが岩である、と言っています。しかし、聖書はイエス様ご自身が岩で

ある、と言っています。

ペテロはイエス様からかぎを与えられた人です。かぎは扉を開ける、つまり何かを始めることに用います。ペテロは、使徒の働きによれば、ユダヤ人と異邦人とに最初に福音を伝えた人です。しかし、その後ではペテロはもはや、かぎを用いること、つまり何も新しいことを始めなかったのです。

まことの教会の基礎である「岩」も、「建てた方」も、またその「かしら」も、すべて神の御子、イエス様ご自身です。

しかし、テアテラの教会では、イエス様は「岩」ではなく、その中心でもありませんでした。同じようにローマ・カトリック教会でも、イエス様が中心ではなく、マリアや法王やそのほか多くの者たちが、イエス様を押しのけて教会の中心にいました。

旧約時代のイゼベルは、悔い改めを欲せず、決して悔い改めをしようとはしませんでした。同じように、テアテラのイゼベルも、ローマ・カトリック教会も、悔い改めることを欲せず、決して悔い改めようとしませんでした。恵みの時は、すでに過ぎ去りました。

しかし、イゼベルの教えに従っていた者たちには、まだ悔い改めの機会が残されていました。旧約時代のイゼベルの時代に、エリヤは、「あなたがたは、いつまでどっちつかずによろめいているのか。」（I列王記18・21）と、イスラエルの民に向かって呼びかけました。しかし、イスラエルの民は、これに対して態度を明らかにしようとしませんでした。従うことも、また拒絶することもしなかったのです。

テアテラの教会においてもまた、イエス様は、何人かの人々が悔い改めに至るかどうかを待っておられました。

悔い改めとは、心が全く一新されることです。神に対しても、罪に対しても、自分自身に対しても、まったく新しい思いを持つようになることです。テアテラの教会へのイエス様の手紙は、私たちに、この世との妥協が行なわれるところでは、つまりこの世との姦淫が行なわれるところでは、イエス様との交わりが断ち切られることを教えています。

私たちは、黙示録2章19節において、このテアテラの教会の少数の人々がイエス様のみこころを喜ばせたことを見てきました。彼らはたいへんほめられました。そして、それは決してほめすぎではありませんでした。24節、25節では、彼らは「なぐさめ」られ、そして「忠告」を与えられています。

「なぐさめ」は、「わたしはあなたがたに、ほかの重荷を負わせない。」というみことばの中に示されています。

「忠告」は、「あなたがたの持っているものを、わたしが行くまで、しっかりと持っていなさい。」というみことばの中に示されています。

テアテラの教会の中に残された人々は、妥協しないでイエス様に従った人々でした。イエス様は彼らに、「イゼベルと彼女に従う者とを捨てなさい」という命令を与えられはしなかったのです。どうしてでしょうか。なぜなら彼らは、残されたごく少数の人々だったからです。彼らはこの教会の中で、内面的に非常に大きな苦しみを負っていたのです。しかし、彼らは少数でしたか

ら、教会の規律を全ての人に守らせることなどとてもできなかったのです。ですからイエス様ご自身が、それをしてくださったのです（黙示録2章22、23節）。

これと同じように、旧約時代のイゼベルの時代にもバアルとその教えに従わなかった人々が七千人残されていました。彼らは全体の中で非常に少数であったために、自らの考えを明らかに述べることができませんでした。彼らは心の中に大きな苦しみを持っていたのです。彼らができなかったために、主ご自身が彼らに代わって行ない、カルメル山の上でご自身を現わされたのです。

同じように、五百年から千五百年の間、この世の権力を持っていたローマ・カトリック教会に対して、真の信者たちはまったく無力でした。

しかし、この時代において、イエス様は裁きを行なわれました。その裁きとは、悔い改めを拒んだためにその機会がすでに「失われてしまった」ということです。

テアテラの教会の中の残された人々は、十分な苦しみを受けていました。そのために、イエス様は、「わたしはあなたがたに、ほかの重荷を負わせない」と愛の言葉をもって慰めておられるのです。

しかし、彼らは、慰めを受けただけではなく、忠告をも与えられていたのです。「持っているものを、しっかりと持っていなさい。」という忠告です。「しっかりと持つ」ということは、勇気を失ってあきらめることの反対です。エリヤは、かつてあきらめて「私のいのちを取ってください。」と主に願ったのです。ですから、「しっかりと持つ」ということは実に大切です。

また、ここでイエス様が残された人々に語っておられるのは、「新しい主の土地を得るために

戦いなさい。」ということではなく、「自分の持っているものをしっかりと守るために戦いなさい。」ということでした。「しっかりと持つ」とは、あなたがイエス様から与えられているものをしっかりと保つということです。

しかし、ここで私たちは、イエス様から何を与えられているかを、自らに問いただしてみなければなりません。まことの信者は、一人のこらず、自分の罪が赦されていること、自分が神の子であること、そして、永遠のいのちを持っていることについての「確信」を持っています。

しかし悪魔は、この「確信」を奪い去ろうとします。これに対してイエス様は、「あなたの持っているものを、しっかりと持っていなさい。」と言っておられるのです。

私たちは、どのようにして、「しっかりと持つ」ことができるでしょうか。それは、聖書に書かれているみことばだけに信頼することによってです。イエス様は私たちに、みことばによって、日々、より多くのものを与え、それによって私たちを満たしたいと思っておられます。

私たちは打ちのめされたとき、間違った方向に向かってしまいます。それは私たちが自らを見たり、ほかの人々を見たりして、イエス様ご自身を見ることをしないからです。

「あなたがたの持っているものを、わたしが行くまで、しっかりと持っていなさい。」、「わたしはすぐに来る。」…。「わたしは、来る」と言われるこの方を見上げましょう。

私たちの苦しみは、自分自身を見たり、自分自身に何かを期待したり、自分自身をよくしようとしたり、自分自身を救おうとしたりすることから起こってきます。

イエス様は私たちを打ち砕き、イエス様ご自身だけが私たちの生活の中心となるようにしてく

ださいます。イエス様を見上げ、イエス様にすがりつくことが、信仰の戦いに打ち勝つための秘訣です。私たちは今まで、イエス様が約束なさっておられることを、信仰によって受けとったことがあるでしょうか。「イエス様、私はあなたが約束してくださったことを、信仰によって受け入れます。そしてそのことに対して、私はあなたに感謝します」という態度こそが重要です。

私たちが悪魔によって取り囲まれる時、私たちは「イエス様、いま私たちを暗やみが取り囲み、私たちは何も見ることができません。しかし、あなたが私たちに約束を与えておられるので、私たちはあなたに感謝します」と言おうではありませんか。

主である神の目的は、私たちがイエス様により多くの場所を明け渡し、自分の力により頼むことをだんだん少なくしていくことにあります。ですから、イエス様により頼み、イエス様にしっかりと結びつくようにしようではありませんか。あなたがイエス様から与えられているものを「しっかりと保って」いなさい。まことの力は、ただイエス様だけにあります。イエス様の内に、私たちの必要としている全てのものが備えられています。

イエス様は、どのような状態に対しても困られることはありません。イエス様は、勝利者として私たちの中に姿を現わそうとしておられるのです。このことをしっかりと「保ち」、それにより頼み、期待を持とうではありませんか。

3　勝利を得る者に与えられた大きな約束

黙示録2章の26節から28節までは、天に上げられたイエス様が、完全な権威をもって、来たる

べきことがらについて語っておられます。イエス様は、ご自身が欲する人々に対して、力を与えることがおできになります。イエス様は、勝利を得、イエス様のわざを堅く守った人々に対して約束を与えておられます。イエス様の再臨まで、つまり終わりの日まで、耐え忍んでイエス様を待ち望むことが大切です。最後まで初めと同じような状態にとどまるということは、イエス様に対する初めの愛を保ち続けることです。これは大切なことであり、これこそが勝利を得るものの戦いの秘訣です。

「保つ」という言葉は、いつもイエス様と関連して用いられています。「保つ」とは、何よりもイエス様のみことばを守り、イエス様のわざを守りとおすことです。

しかしテアテラの教会では、イゼベルだけが「話をする者の中心」になっていたのです。忠実な信者たちは、話をする機会が与えられませんでした。イゼベルの話がきわめて巧みであったために、すべての信者たちは、彼女の話を信じ込まされてしまったのです。

ですからテアテラの教会は、イエス様のわざを堅く守ることを、イエス様によって要求されたのです。そしてイエス様のみことばを守るだけではなく、イエス様のわざを守ることが必要だったのです。なぜならイゼベルは、イエス様のみことばを伝えようとはしていなかったからです。

イエス様のわざを守るということは、イエス様の思いをいだくことです。パウロは、「主イエス・キリストを着なさい」と言っています。

あなたがたは、今がどのような時か知っているのですから、このように行ないなさい。あなたがたが眠りからさめるべき時刻がもう来ています。というのは、私たちが信じたこ

ろよりも、今は救いが私たちにもっと近づいているからです。夜はふけて、昼が近づきました。ですから、私たちは、やみのわざを打ち捨てて、光の武具を着けようではありませんか。遊興、酩酊、淫乱、好色、争い、ねたみの生活ではなく、昼間らしい、正しい生き方をしようではありませんか。主イエス・キリストを着なさい。肉の欲のために心を用いてはいけません。

（ローマ　13・11～14）

イエス様は、ご自身の幸せのためには何もなさいませんでした。イエス様は、ただ父なる神の命じられたことだけを行なわれたのです。イエス様は、父なる神のご栄光だけをお求めになりました。勝利を得る者とは、イエス様と同じような行ないをする人々のことです。私たちは、このような思いをもって、日々の行ないをしているでしょうか。

イエス様はこのような勝利者に対して、おもに二つのことを約束しておられます。

1　世界の支配権

ひとつは、諸国の民に対する支配権です。テアテラの教会は異邦的な教会でした。異教徒がこの教会の中で勝利を得、支配権を持ち、また命令を与えていたのです。そしてこの教会ではほかの宗教との融合が行なわれていたようです。このような教会の中に、残されたごく少数の人々がいたのです。そしてイエス様は、このような人々を喜びとし、そして、これらの人々を「勝利を得る者」と呼ばれたのです。

これら少数の人々は、あたかも滅ぼされてしまったように見えたのですが、イエス様は、むしろこれらの人々にこそ将来の勝利を与えることを約束されたのです。イエス様は多くの異教徒の中にあって勝利者となられるお方です。そして、テアテラの教会の少数の残された人々もまた、イエス様とともに勝利者となることが約束されたのです。

もし耐え忍んでいるなら、彼とともに治めるようになる。（IIテモテ　2・12）

もし子どもであるなら、相続人でもあります。私たちがキリストと、栄光をともに受けるために苦難をともにしているなら、私たちは神の相続人であり、キリストとの共同相続人であります。（ローマ　8・17）

イエス様の勝利にあずかるということは、イエス様とともに世界の支配権を与えられることです。つまり、勝利を与えられるとは、イエス様とともに異邦人に対しての支配権を与えられるということです。テアテラの教会の残された人々のように、圧迫されている少数の人々は、将来、勝利を得ることが約束されているのです。

あなたがたのうちにおられる方が、この世のうちにいる、あの者よりも力があるからです。（Iヨハネ　4・4）

あなたがたは、聖徒が世界をさばくようになることを知らないのですか。

（Ⅰコリント　6・2）

2　明けの明星

さて、約束のひとつは「異邦人に対しての支配権を与える」という約束でした。いまひとつの約束は「明けの明星が与えられる」という約束です。明けの明星、金星は、支配を象徴する言葉です。つまり勝利を得る者は、宇宙的な支配権までも与えられることが約束されているのです。そして黙示録22章16節によると、イエス様ご自身が、この明けの明星であると記されています。人類の将来が、次第に暗さを増してくるということは、恐るべき事実です。そして、ただひとつの望みは、イエス・キリストの再臨だけです。

しかし、わたしの名を恐れるあなたがたには、義の太陽が上り、その翼には、癒しがある。あなたがたは外に出て、牛舎の子牛のようにはね回る。あなたがたはまた、悪者どもを踏みつける。彼らは、わたしが事を行なう日に、あなたがたの足の下で灰となるからだ。

（マラキ　4・2、3）

これは、イスラエル民族のために与えられた約束です。イスラエル民族は、義の太陽を待ち望むように命じられているのです。

イエス様は、反抗する異邦人に対して裁きを行なうために再び来られます。しかし、太陽が上る前には、明けの明星が輝きます。明けの明星が、その日の始まる前に輝くのです。イエス様は、

異邦人に裁きを行なうために、またご自身の教会のために、明けの明星として再臨なさるのです。

イゼベルのような心の態度を持ち、悔い改めをしようとしない人々は、再臨の時には、後に残され、恐ろしい裁きにあいます。

現代は、霊的にはもっとも深い暗やみの時代です。しかし、明けの明星が来られるのです。これこそが生きる望みです。

イエス様の再臨は、イエス様との交わりを保っていない人々にとってはまことに悲劇です。暗やみの時代の中においてイエス様が再臨なさるということは、私たちにとってどれほど勇気を与えられることでしょうか。それはどれほどすばらしい光景でしょうか。

テアテラの教会の状態は、私たちに対して強い警告を与えています。テアテラの教会ではサタンが勝利を得ました。教会のほとんどすべての人々は、神のみことばの「下」に立つことをしないで、神のみことばの「上」に立ち、神のみことばを支配しようとしたのです。それと同じことを、カトリック教会は今日に至るまで行なっています。このような状態になると、もはや「イエス様が」信じる者を通して働かれることがなくなって、「人々が」中心となってイエス様のために働くことが生じてきます。イエス様はもはや信者に対して働きかけることができず、人々は「自分の力で」イエス様に仕えようとするようになってしまいます。そうなると、イエス様だけが栄光をお受けになるようにという要求がなくなり、自分自身の名誉を求めることが生じてきます。イエス様だけが中心になるのではなく、教えが中心に置かれるようになるのです。人々の魂を救いに導くということがなくなり、人々は惑わされ、あげくのはてに迫害され、殺されるよう

になってしまうのです。このようにして、聖霊によって結びつけられていた小さな群から、大きな「組織された教会」が生じてきたのです。

2章の最後、29節に、「耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。」と書かれていますが、前に学んだ三つの手紙の中においても同じみことばが出てきます。しかし、私たちは、このみことばが置かれている場所に注意しなければなりません。

前の三つの教会においては、このみことばは、勝利を得る者への約束のみことばの前に置かれていました。しかし、テアテラの教会から後の手紙においては、このみことばは、約束の後に置かれています。それはなぜでしょうか。この箇所から以後は、イエス様は教会の全体をご自身の証し、ご自身の道具と考えられることがなくなり、ただ残された少数の人々だけをご自身の道具として考えられるようになったからです。

イエス様は、教会が全体として悔い改めることをしないために、もはや教会の全体が悔い改めて救われるようになることを期待されなくなってしまわれたのです。

悔い改めようとしない人は、裁かれるだけです。

前の三つの教会においては、勝利を得る者は、まだ教会全体との交わりを保っていました。しかし、これから後の教会においては、勝利を得る者は、もはや教会全体との交わりを保つことができなくなり、いわば、のけ者、残された者のように取り扱われているのです。

勝利を得る者は、イエス様の声を聞き分ける耳を持っています。彼らは、イエス様の声を聞き、その声に従います。

勝利を得る者はまた、イスラエルの王であったダビデのように祈る者です。

主よ。私を調べ、私を試みてください。私の思いと私の心をためしてください。

（詩篇　26・2）

勝利を得る者は、自分の罪を隠すことなく、光の中に持ち出す者です。

勝利を得る者は、神のみことばの「下」に立ち、神のみことばによって自らを裁き、へりくだり、イエス様が流された血潮に心からの感謝をささげる者です。

さて、25節には「わたしが行くまで」とありますが、これは何を意味しているのでしょうか。イエス様がテアテラの教会によって示され、警告されたカトリック教会の制度は、イエス様の再臨の日まで続いていくことでしょう。後に来るサルデス、フィラデルフィヤ、ラオデキヤの三つの教会もまた、最後の日まで存続し続けることでしょう。

最後の審判に関しては、黙示録17章、18章に記されています。そこにおいて大きな都バビロンは、ひとりの女性として描かれています。イエス様から離れた教会は、「淫婦」という言葉で呼ばれています。

黙示録の2章、3章で、最初の三つの教会、エペソの教会からペルガモの教会に対しては、イエス様は悔い改めて初めの状態に立ち返ることを要求しておられます。しかし後半のテアテラの教会からラオデキヤの教会に至るまでの箇所では、教会へのイエス様の問いただしは、過去の状態に向かってではなく、将来の状態へと向けられています。イエス様は、組織された教会が悔い

改めに至ることがないことを、よく知っておられます。したがってイエス様は、ご自身の声に聞き従う耳を持つ者に対してだけ語りかけておられるのです。そして聞く耳を持つ者たちは、イエス様の「見よ。わたしはすぐに来る。」というみことばにはげまされ、また慰められるのです。

テアテラにおいては、今日もなお、アキサールと呼ばれるこの町に教会が建てられています。二世紀頃のテアテラは、当時異端と言われていたモンタヌス派の中心地でした。多くの教会史では、このモンタヌス派は異端とされ、悪魔と契約を結んだ人々とされ、また迫害を受けた人々として記されています。しかし実際には、このモンタヌス派は神のみことばのみを生活の規範とする人々の集まりでした。このモンタヌス派の人々こそ、教会が聖書に記されている規範からどれほど遠ざかっているかということを知っていた人々でした。つまりモンタヌス派は、教会の中で、どれほど多くの世俗化と、人間中心の制度と、罪に対する黙認とが行なわれているかを見ていた人々でした。ですからこの信者たちは、聖霊のみが教会を支配し、聖霊に自由な働きの場が与えられるようにと祈る人々だったのです。それによって多くの教会で霊的な覚醒が起こり、人々は妥協を廃した態度をとるようになったのです。

たとえばカルタゴでは、二人の若い女性の殉教者のことがよく知られています。二人の名前はペルペチュアとフェリシタスと言います。二人がイエス様のために殉教の死をとげる前に、二人が残した証しがあります。そしてその証しが今日も伝えられています。この二人の女性もまた、モンタヌス派に属する人々でした。

アフリカの教会の指導者であり、また文学者でもあったテルチュリアヌスもまた、モンタヌス

派の一人であり、カトリック教会から分離した人でした。

このモンタヌス派の運動は、テアテラの教会から出たものでした。それは、イゼベルの霊を持たない少数の人々から出たものでした。彼らは聖霊に満たされてイエス様の再臨を心から待ち望んでいたのです。この少数の人々によって、壁に押しつけられるような圧迫の中から、二世紀において大きな影響を与える運動が起こってきたのです。

私たちは、このことを通してもまた、イエス様の力の現われを見ることができます。

「わたしには天においても、地においても、いっさいの権威が与えられています。」（マタイ　28・18）

「確かに、わたしは、あなたがたに、蛇やさそりを踏みつけ、敵のあらゆる力に打ち勝つ権威を授けたのです。だから、あなたがたに害を加えるものは何一つありません。」（ルカ　10・19）

私たちもこの力を受けとり、この権威のために感謝し、そして、この力と権威をイエス様の御名の栄光のために用いようではありませんか。

天に上げられたイエス様が教会に与えられたみことば

6 実は死んでいるサルデスの教会

黙示録3章1節から6節まで

1 いのちのない教会
　1 信仰と生活の間に一致がない
　2 実を結ぶことがない
　3 みことばを聞こうとしない
2 汚れのない残された人々
3 勝利を得る者
　1 白い衣を着せられる
　2 その名をいのちの書から消さない
　3 父なる神の御前でその名を言い表わされる

[1]また、サルデスにある教会の御使いに書き送れ。『神の七つの御霊、および七つの星を持つ方がこう言われる。「わたしは、あなたの行ないを知っている。あなたは、生きているとされているが、実は死んでいる。[2]目をさましなさい。そして死にかけているほかの人たちを力づけなさい。わたしは、あなたの行ないが、わたしの神の御前に全うされたとは見ていない。[3]だから、あなたがどのように受け、また聞いたのかを思い出しなさい。それを堅く守り、また悔い改めなさい。もし、目をさまさなければ、わたしは盗人のように来る。あなたには、わたしがいつあなたのところに来るか、決してわからない。

[4]しかし、サルデスには、その衣を汚さなかった者が幾人かいる。彼らは白い衣を着て、わたしとともに歩む。彼らはそれにふさわしい者だからである。[5]勝利を得る者は、このように白い衣を着せられる。そして、わたしは、彼の名をいのちの書から消すようなことは決してしない。わたしは彼の名をわたしの父の御前と御使いたちの前で言い表わす。[6]耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。」』（黙示　3・1～6）

私たちは、今までに、イエス様が教会に示された四つの手紙について考えてきました。エペソ、スミルナ、ペルガモの諸教会は、イエス様によってそれぞれが「教会全体」として取り扱われていました。

エペソの教会は賜物が豊かで、熱心な教会でしたが、根本が病んでいました。「初めの愛を忘れてしまっていた」からです。

エペソの教会は、使徒の時代の教会を代表しています。私たちはこの教会に対する「悔い改めて、初めの愛にかえるように」とのイエス様の呼びかけを学んできました。「悔い改めて主の贖いのみわざへの感謝の気持ちを新たにし、主に心を明け渡すように」とのイエス様の呼びかけは、今日の私たちにもあてはまります。

スミルナの教会は、イエス様の御名のために恐ろしい迫害を受けた教会でした。この教会に対してイエス様は非難をされず、「死に至るまで忠実であるように」との警告を与えられただけでした。この教会は外面的に見ると貧しい教会でしたが、イエス様を中心とし、内側にはイエス様に対する熱い愛の心が残っていたのです。この教会は、西暦三百十六年に至るまでの殉教の時代を代表する教会です。

ペルガモにある教会は、外面的には全く迫害を受けない教会でしたが、その内側では悪魔が少しづつ侵略を始め、妥協することを通して霊的な力が眠らされてしまった教会でした。この教会は三百十六年から五百年に至る時代を代表する教会です。

これらの三つの教会に対して、テアテラの教会はもはや、一つの教会全体としては取り扱われていません。この教会では大多数の人々はイエス様の道具となることができず、ただ少数の人々だけが主の道具となっているだけでした。この教会は西暦五百年から千五百年に至るローマ・カトリック教会の時代を代表する教会です。しかもこの時代は、イエス様の再臨の日まで継続しているのです。

ローマ・カトリック教会の特徴は、偶像崇拝であり、生けるまことの神からの堕落であり、

「霊的な姦淫」です。ローマ・カトリック教会は、今までに悔い改めをすることがなく、またしようとはせず、したがって裁きを待つだけの教会です。この教会の中の少数の人々だけが、イエス様に心から従い、真の教会を形造っているのです。

さて、ここから先、私たちはサルデスの教会について学びましょう。サルデスの教会は、千五百十七年以降のプロテスタンティズムの教会を代表しています。

2章までに私たちは、それぞれの教会の中に改革と霊的な覚醒を祈り求めている少数の信者がいることを見てきました。それは、二世紀においてはモンタヌス派と言われる人々でした。十六世紀においてはルターやカルビンやツヴィングリと言われる人々でした。これらの人々は、組織された教会が救いのための最大の障害であることを知っていました。イエス様はこれらの人々に語りかけ、そしてこれらの人々をご自身の道具として用いられたのです。

霊的な覚醒は、常に、祈りと悔い改めと献身に対してイエス様からお答えとして与えられるものです。宗教改革の上にもイエス様は働きかけられ、そして力を現わされました。しかしその後で、人々は再び、全てのことを自らの手によって行なおうとし始めました。そしてその結果は、いわゆるプロテスタンティズムとなりました。プロテスタンティズムは、神のみわざではなく、人間の働きの結果です。このようなプロテスタントの教会を、私たちはサルデスの教会に見ることができます。

黙示録のこの部分の題名を、私たちは「イエス様がサルデスの教会に与えられたみことば」、または「見せかけの、本当でないいのち」、あるいは、「大きな偽り」とつけることができます。

さらに私たちは、この部分を「いのちのない教会」、「汚れのない残された人々」、「勝利を得る者」という三つに分けて、サルデスの教会のことを学んでいきましょう。

1　いのちのない教会

今まで私たちは、それぞれの教会が何らかの形で異端との関係を持っていたことを学んできました。これらの教会は、サタンの攻撃の的でした。

ところが、このサルデスの教会への手紙で、異端については少しも触れられていません。つまりサルデスの教会は正しい教えを守っていたのです。また、殉教、迫害、悪魔の攻撃などにも触れられていません。サルデスの教会は、にせ教師もいず、狂信者もいず、にせ預言者も見あたらなかったのです。

なぜ悪魔は、このサルデスの教会を攻撃しなかったのでしょうか。そのわけは、この教会が「死んでいた」からです。ここにはにせ預言者がいず、秩序が乱れず、しかしいのちがありませんでした。したがって、悪魔もこの教会を攻撃する必要がなかったのです。つまりこの教会では全てが見せかけであり、まことのいのちがなかったのです。それでも人々はこの教会が「生きている」と思っていたのです。この教会は「生きている教会」として知られていました。人々もよく集まり、説教の内容もすぐれたものでした。サルデスの教会の評判は悪くありませんでしたが、しかしその評判は「いつわり」でした。

前に学んだスミルナの教会は、「貧しい教会」と呼ばれ、悩みを持ち、持ち物を奪われた教会

でした。しかし、スミルナの教会は、いつでもイエス様の死を身に帯びていた教会でした。ですからこの教会は本当は「富んでいた教会」でした。しかしサルデスの教会は、「生きている」ようだが本当は「死んでいる教会」だったのです。

なぜ現代のキリスト者の多くは、霊的に貧しくなってしまうのでしょうか。なぜ、少数の人々しか霊的に満たされた生活をすることができないのでしょうか。なぜ、少数の人々しか他の信者に対して霊的な助けを与えることができないのでしょうか。

あなたは、私の苦しみのときにゆとりを与えてくださいました。（詩篇　4・1）

もし私たちに「苦しみ」が与えられなければ、私たちはかえってみじめな人間です。なぜなら、私たちは苦しみがなければ成長することができないからです。私たちはイエス様に対して、「多くの苦しみをもって、私を祝福してください」と祈ります。イエス様は苦しみや困難を通して私たちをご自身の近くへ引き寄せようとしておられます。「狭く」されることによって、私たちは「広い」ところへ導かれます。また「貧しく」されることによって、「豊か」にされます。イエス様は私たちを苦しめることが目的なのではなく、それは、目的に至る手段なのです。

ダニエルの三人の友だちもそれを経験しました。ゆるぎない信仰と妥協のない態度のために、彼らは燃える火の炉の中に投げ込まれました。すると、火の炉に投げ込まれた三人の人が、一瞬のうちに四人の人に増えました。これが、狭くされることによって広いところへ導かれるということの意味です。誰でも炉は狭いところと考えます。そしてその中から外へ出たいと思うでしょ

う。しかし、炉の中を決して狭いと感じない少数の人々がいるのです。そのような人々は、ダニエルの友だちと同じように、イエス様のために苦難を喜んで耐え忍び、狭い炉の中に広い場所を見いだすことができるのです。私たちが全ての困難を、イエス様の御手から与えられたものとして受け取るとき、私たちもこのような経験をすることができます。

あなたの目は、麗しい王を見、遠く広がった国を見る。　（イザヤ　33・17）

なぜ信者の態度にこのような大きな違いがあるのでしょうか。ある信者は困難を喜んで受け入れますが、他の信者はそれを嫌うためにかえって霊的に死んでしまいます。ある信者は狭くされることによって広くされ、ある信者はそれによって力を失ってしまいます。ある信者は苦しみの時につぶやき、そのために霊的な死に至ります。しかし他の信者は苦しみこそがイエス様に至る道であることを知り、広いところへ導かれ、満たされた生活に導かれ、そして解放を経験することができます。

スミルナの教会は、外面的には貧しい教会でしたが、苦しみを通して豊かにされた教会でした。これとは逆にサルデスの教会は、外面的には生きているように見えましたが、内面的には死んだ教会だったのです。他の教会から見ると、サルデスの教会は生きた教会に見えました。しかし実際は、それらは見せかけでしかなかったのです。そしてさらに悪いことには、サルデスの教会自身が「自分の内にはいのちがある」と確信していたのです。この教会は何かが欠けていただけではなくて、もともと教会が持っていないものを持っているかのように思い込んでいたのです。

サルデスの教会は、「生きている」という評判を持っていましたが、実際には「死んで」いました。ですから「生きている」という評判はいつわりでした。死人が、自分が死んでいることを自覚できないように、サルデスの教会もまた、自分が死んでいることを自覚できなかったのです。この教会のいのちは見せかけだけのものであり、それはいつわりでした。サルデスの教会では、全てのものが見せかけだったのです。人々の満足は間違ったものであり、人々の働きは間違ったものであり、人々の忠実さも間違ったものでした。

私たちは聖書の中で、絶対的な二つの原理を読むことができます。

なぜなら、キリスト・イエスにある、いのちの御霊の原理が、罪と死の原理から、あなたを解放したからです。　（ローマ　8・2）

第一の原理は、罪と死の原理です。人間の罪の性質から出てくる全てのものは、死の裁きを受けるのです。

第二の原理は、いのちの御霊の原理です。御霊からでるものはいのちであって、裁かれることはありません。

全ての信者は、自分の生活を通して、これら二つの原理を体験します。それは、全ての信者が二つの性質を持っているからです。

肉の性質は罪の性質であり、死の性質です。人はこの性質を生まれながらにして持っています。これに対して、御霊の性質は義といのちの性質です。この性質を、人は生まれ変わりによって持

つことができます。

「肉によって生まれた者は肉です。御霊によって生まれた者は霊です。」

（ヨハネ　3・6）

もしキリストがあなたがたのうちにおられるなら、からだは罪のゆえに死んでいても、霊が、義のゆえに生きています。

（ローマ　8・10）

生まれ変わりのないところでは、人間の霊は死んでいます。全ての人が生まれ変わっていない教会では、たとえどのような活動が行なわれていても、霊的には死が支配しているのです。

サルデスの教会では、信者たちは正しい教義を持ち、熱心でしたが、ほんの少しの人しか真の生まれ変わりを体験していなかったのです。何という悲劇でしょうか。

サルデスの教会では、「いのちの御霊」が支配しないで「罪と死」が支配していたのです。にもかかわらず、この教会には人々がよく集まり、悪魔はそれに満足していたのです。

教会が霊的に死んでいるということは、たとえ全てのことが秩序を保ち、全てのことがイエス様のために行なわれようとしていたとしても、その中には「イエス様とのいのちの交わり」がありません。サルデスの教会の人々は、生まれ変わりを体験せず霊的に死んでいました。彼らは名前だけのクリスチャンであり、しかも、イエス様の教会の肢体となってイエス様に有機的に結びつくことのなかった人々でした。

いのちのない教会は、化粧をして生きているように見せようとした屍のようなものです。いのちのない教会とは、実のない殻です。また内容のない形です。

サルデスの町はその当時、織物と宝石の町として知られていました。着物も宝石も、人が身を飾る装飾品です。人は着物や宝石で身を飾って人の目をごまかします。しかしイエス様は、人のうわべだけを見ることをなさいません。

「人はうわべを見るが、主は心を見る。」（Ⅰサムエル　16・7）

彼女の美しさを心に慕うな。そのまぶたに捕えられるな。（箴言　6・25）

美しいが、たしなみのない女は、金の輪が豚の鼻にあるようだ。（箴言　11・22）

耳をそむけておしえを聞かない者は、その者の祈りさえ忌みきらわれる。（箴言　28・9）

「忌わしいものだ。偽善の律法学者、パリサイ人たち。あなたがたは白く塗った墓のようなものです。墓はその外側は美しく見えても、内側は、死人の骨や、あらゆる汚れたものがいっぱいなように、あなたがたも、外側は人に正しいと見えても、内側は偽善と不法でいっぱいです。」（マタイ　23・27、28）

イエス様はあらゆる見せかけを憎まれます。礼拝が単なる型式となるとき、それはわざわいです。イスラエルの民においてもそのようなことが起こりました。

わたしはあなたがたの祭りを憎み、退ける。あなたがたのきよめの集会のときのかおりも、わたしは、かぎたくない。たとい、あなたがたが全焼のいけにえや、穀物のささげ物をわたしにささげても、わたしはこれらを喜ばない。あなたがたの肥えた家畜の和解のいけにえにも、目もくれない。あなたがたの歌の騒ぎを、わたしから遠ざけよ。わたしはあなたがたの琴の音を聞きたくない。（アモス　5・21～23）

「イスラエルの民は口先だけで神に仕え、実際の心は遠く神から離れている」というのが、主なる神のご判断でした。

外面的に見ると、サルデスの教会は活発な教会でした。しかしサルデスの教会は実のならない美しい木でした。実はいのちのしるしです。実のないところには、いのちがありません。種はいろいろな土地に蒔かれたが、良い土地だけが実をもたらしたのです。私たちは、サルデスには良くない土地に似た人々だけがいたことを知ります。

「岩の上に落ちるとは、こういう人たちのことです。聞いたときには喜んでみことばを受け入れるが、根がないので、しばらくは信じていても、試練のときになると、身を引いてしまうのです。いばらの中に落ちるとは、こういう人たちのことです。みことばを聞き

はしたが、とかくしているうちに、この世の心づかいや、富や、快楽によってふさがれて、実が熟するまでにならないのです。しかし、良い地に落ちるとは、こういう人たちのことです。正しい、良い心でみことばを聞くと、それをしっかりと守り、よく耐えて、実を結ばせるのです。」

（ルカ　8・13～15）

サルデスの教会は、はっきりと主イエス様のみことばを聞き、また受けとりました。しかし彼らはみことばを受け入れましたが、それを守ることをせず、したがって実を結ぶことができなかったのです。彼らのわざが「完全でなかった」ということは、彼らに証しがあってもみごもることも、産むことも、実をならせることもなかったことを示しています。

エフライムの栄光は鳥のように飛び去り、もう産むことも、みごもることも、はらむこともない。

（ホセア　9・11）

このサルデスの教会において、私たちは「プロテスタントの教会」を見ることができます。十六世紀のはじめ、ルターを通して、「律法の行ないによらず、神の御子イエス様が完成された贖罪を信じることによって人は義とされ、そして救われる」という神のみことばが明らかにされました。ヨーロッパでは多くの人々がこの新しい教えを喜んで受け入れましたが、少数の例外を除けば、多くの人々はなおも霊的に死んだ状態にとどまっていたのです。当時、イエス様への悔い改めと生きた信仰が欠けていたために、真の生まれ変わりがなされなかったのです。多くの人々

がこの新しい教えを知りましたが、しかし本当のいのちを得ることはありませんでした。多くの国王もまたこの新しい教えを受け入れ信仰の告白をしましたが、いのちを得ることはありませんでした。彼らは正しい教えを与えられましたが、真のいのちを得ることはなかったのです。

このことを通して私たちは、人間は正しい教えを知りながら、生まれ変わりに至らないことがあり得ることを知ります。人間は個人的に救いを受けることがなくても、いわゆる改宗者になることができるのです。

その当時、国民も国王も、カトリック教会に対して反抗しました。彼らは神のみことばを受け入れるようになり、カトリック教会の間違った教えと偶像崇拝に対して戦いました。しかし彼らは、神のみことばを受け入れたにもかかわらず、生まれ変わりを経験せず、実を結ぶこともなかったのです。当時のヨーロッパの人々の多くは、イエス様を個人的に受け入れることなしに信仰告白をしたにすぎませんでした。彼らは見かけ上は「生きて」いましたが、実際はほとんどが「死んで」いたのです。

正しい教えを知るだけでは十分ではありません。神によって与えられたいのちが必要です。神によって与えられたいのちがなければ、力もなく、喜びもなく、平安もありません。

サルデスの教会は大きないつわりの中に生活していました。サルデスの教会は「生きた教会」として多くの人に知られていました。しかしイエス様は、表面ではなくその内側をご覧になられます。そしてサルデスの教会では、重要なものが失われていることを見通されました。「あなたは死んでいる」というのが、イエス様のサルデスの教会に対する判断です。

そして、サルデスの死んだ教会に対して、イエス様は神の七つの御霊と七つの星を持つ方として、ご自身を現わされました。このことはイエス様が神の御霊を完全にご自分のものとしておられることを意味しています。イエス様のもとには、いのちがあふれています。星は教会の象徴です。ですからサルデスの教会も、イエス様の御手のうちに置かれているのです。イエス様の御手のうちには御霊が宿っています。ですからサルデスの教会もまた、イエス様の御霊の内に置かれているのです。このことは、サルデスの死んだ教会にも、望みが残されていることを意味しています。

イエス様の御手のうちには、神の御霊が完全に宿っています。イエス様の御手のうちには、完全な力と知恵と真理と聖さとが宿っています。イエス様は全てをご存知であり、イエス様に知られていないものは、何一つ残されていません。イエス様は全てを見ておられ、何ものによっても欺かれることがありません。イエス様は真実な判断をもって裁かれます。イエス様が教会に与えられるみことばは、真実なみことばです。霊的に死んでいる教会に対して、イエス様は全ての御霊を持つ方として、ご自身を現わしておられるのです。

「いのちを与えるのは御霊です。」　（ヨハネ　6・63）

霊的に死んでいる教会に対して、イエス様は決して無関心ではありません。無関心でないことの証拠に、イエス様は次の五つの命令を教会に与えておられます。

「目をさましなさい」、「死にかけているほかの人たちを力づけなさい」、「あなたがどのように

受け、また聞いたのかを思い出しなさい」、「それを堅く守りなさい」、「悔い改めなさい」。

霊的に死んでいる教会に対して、イエス様は「目をさましなさい」と命じておられます。イエス様は、教会の目を覚まさせ、まことのいのちへと導こうとしておられるのです。

神の霊と神のみことばによって生まれ変わることのなかった全ての人々は、霊的に死んでいる人々です。霊的に死んでいるということは、神に対して死に、罪とこの世と悪魔に対して生きていることを意味しています。

あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、…　（エペソ　2・1）

あなたがたは罪によって、また肉の割礼がなくて死んだ者であったのに、神は、そのようなあなたがたを、キリストとともに生かしてくださいました。　（コロサイ　2・13）

「この息子は、死んでいたのが生き返り、いなくなっていたのが見つかったのだから。」
（ルカ　15・24）

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。」
（ヨハネ　5・24）

私たちは、自分が死からいのちに移ったことを知っています。それは、兄弟を愛しているからです。愛さない者は、死のうちにとどまっているのです。（Ⅰヨハネ　3・14）

私たちは、真の生まれ変わりを経験しているのでしょうか。あるいは、そのように思い込んでいるだけなのでしょうか。

サルデスの教会は、外面的には模範的な教会でした。正しい教えを持ち、活動的でしたが、イエス様はこの教会に対して「死んでいる」と判断されたのです。この判断は私たちを驚かせ、自分たちの教会がほんとうはどんな状態であるかを深く反省するきっかけとなります。人々が自分では「生きている」と確信しながら、その実は「死んでいる」ということが、実際にあり得るのです。私たちは日々、心からの畏れをもって「私たちの教会が霊的に死んでいるのか、生きているのか」を問い続けなければなりません。

私たちが「霊的に死ぬ」危険にさらされるのは、どのような時なのでしょうか。

1　信仰と生活の間に一致がない

それはまず、私たちの信仰が、日常の生活において認められなくなってしまった時です。

多くの人々は、信仰は信仰、仕事は仕事だと割り切っています。これでは信仰と生活の間に一致がないのは当然です。私たちとイエス様との結びつきが、周囲の人々に主イエス様に対する飢え渇きを与えず、また、私たちが人々の中にあって異分子のような存在となっていないようなら、

私たちは何か根本的な欠陥があると言えましょう。

信仰とは、私たちが罪を犯した時に、イエス様のもとに急いで立ち返り、流された血潮に対して感謝をささげることです。信仰とは、自分の失敗をすなおに認めることです。

2　実を結ぶことがない

次に、「霊的に死ぬ」危険性があるのは、実を結ぶことがない場合です。

未信者が、私たちを通して真の信仰に導かれることがないとすれば、それは重大な問題です。私たちがイエス様との交わりを持っているなら、他の人々も新しい生まれ変わりへと導かれるはずです。「死にかけているほかの人たちを力づけなさい」。

私たちの周囲にいる人々は、死にかけている人々です。その中にいながら、他の人々に対して無関心であったり、他の人々に対して祈らないとしたら、その人自身がはたして生まれ変わっているかどうか疑わしいと言えましょう。もし、イエス様との交わりを持っているなら、信仰を自分だけのものにして、他の人々に分かち与えないということはあり得ません。自分のことだけを考えて、他の人のことを心配しない人は霊的に死んでいる人です。

3　みことばを聞こうとしない

次に、「霊的に死ぬ」危険があるのは、人々が神のみことばを聞こうとしなくなる時です。現在私たちは、みことばを通してイエス様に罪を指摘していただく備えができているでしょうか。

また、みことばによって、私たちはイエス様に導いていただく備えができているでしょうか。イエス様のみことばがその人の生活において権威を持たず、その人の生活を支配しないようであれば、その人は自分自身と周囲の人々に対して目が見えなくなっているのです。

では自分の場合はどうだろうかと、おののきながら自問自答するなら、それは生まれ変わっている証拠です。しかし、このようなおののきが自分自身と自分の教会に対してない場合には、私たちはまさに死の危険の中にいるのです。

サルデスの教会に対して、イエス様は、完全な御霊と完全ないのちの満たしを持つ方としてご自身を現わしておられます。イエス様はいのちを与えることができ、そしてそれを望んでおられます。サルデスの教会によく似た状態が、エゼキエル書の18章、33章から37章までに書かれています。エゼキエル書の中においても私たちは、霊的な死を見いだすことができます。この場合にも御霊がいのちを与えたのです。

「神である主はこれらの骨にこう仰せられる。見よ。わたしがおまえたちの中に息を吹き入れるので、おまえたちは生き返る。」（エゼキエル　37・5）

「わたしがまた、わたしの霊をあなたがたのうちに入れると、あなたがたは生き返る。」（エゼキエル　37・14）

前に述べた五つの命令は、心からの悔い改めへの呼びかけです。しかし同時に、これらは五つ

の約束でもあります。これらは人間的な行ないを私たちに要求するものではなく、全能の主の創造的な力の私たちへの提供なのです。イエス様は生まれ変わりを提供し、私たちの目を覚まそうとしておられます。生まれ変わっていない人々は、永遠の滅びに向かう人々を救い出すことができません。死のあるところに、いのちは起こり得ません。間違った見せかけだけのところにおいては、いのちも、力も、存在しえないのです。

見えるところは敬虔であっても、その実を否定する者になるからです。こういう人々を避けなさい。

（IIテモテ　3・5）

イエス様とのいのちの交わりを持たない人は、他の人をいのちに導くことができません。そして死からいのちへと生まれ変わった人には、死にかけている人を救い出す使命が与えられているのです。

捕えられて殺されようとする者を救い出し、虐殺されようとする貧困者を助け出せ。

（箴言　24・11）

これこそが全ての信者に与えられているイエス様の命令です。エゼキエル書の中においても、同じ命令が与えられています。

「人の子よ。わたしはあなたをイスラエルの家の見張り人とした。あなたは、わたしの口からことばを聞くとき、わたしに代わって彼らに警告を与えよ。わたしが悪者に、『あ

なたは必ず死ぬ。』と言うとき、もしあなたが彼に警告を与えず、悪者に悪の道から離れて生きのびるように語って、警告しないなら、その悪者は自分の不義のために死ぬ。そして、わたしは彼の血の責任をあなたに問う。もしあなたが悪者に警告を与えても、彼がその悪を悔い改めず、その悪の道から立ち返らないなら、彼は自分の不義のために死ななければならない。しかしあなたは自分のいのちを救うことになる。」

（エゼキエル　3・17～19）

近づいている裁きを宣べ伝えることは、教会の使命です。現在のような不信仰と絶望の時代にあって、近づいている裁きを宣べ伝え、人々をイエス様のもとへと導くことこそ、教会の使命です。ただ自分自身のことだけを考え、この使命を果たそうとしない人はわざわいです。まず自分が生まれ変わり、その後で、永遠の死に向かっている人を救いに導くことができるのです。

「あなたは死んでいる」というイエス様のみことばは、現在の全ての「ヒューマニズム」の上にもあてはまります。人々をより良いものにしようとするのではなく、人々に、裁きのもとにあること、生まれ変わりを通して新しいいのちが与えられることを伝えることこそが重要です。

さて、3節には、「あなたがどのように受け、また聞いたのかを思い出しなさい。」とあります。これは神のみことばだけに従い、神のみことばへと立ち返ることを意味しています。

続いて「それを守りなさい。」とありますが、これは神のみことばだけにより頼み、自分の考え、意志を捨て去ることを示しています。イエス様の前にこのような態度をとる時に、イエス様

は私たちの目を開けられます。霊的な覚醒とは、あらゆる見せかけの仮面を取り去ることです。そしてそれに続くのは悔い改めです。悔い改めとは百八十度方向を変えることです。自分からイエス様へと方向を変えることです。そしてイエス様との深い交わりを持つことです。

悔い改めとは、生きておられるイエス様に出会って、イエス様との交わりに入ることです。霊的に死んでいる者をいのちへと導こうとしておられるイエス様は、単なる道徳の教師ではありません。イエス様ご自身が、目を覚まさせ、力を与え、思い出させ、堅く守らせ、悔い改めを与えようとしておられるのです。これこそが恵みです。しかし、恵みが人間によって拒まれる時、裁きが与えられます。これが、「イエス様が盗人のように来られる」というみことばの意味です。

目を覚まさせようとして、イエス様は私たちに与え、満たそうとしておられます。しかし、眠る者が目を覚まされることを好まない時には、イエス様は目を覚まさせる方としてではなく、人の持ち物を奪い去る盗人のように来られるのです。これが裁きです。

目覚まし時計が鳴っていても、それを止めて眠り続けることはできます。イエス様は、悔い改めを呼びかける目覚まし時計のようなものです。これを聞く者はプレゼントをいただき、そして満たされます。しかし悔い改めようとしない者は、その人が持っていると思いこんでいる物までも取り去られてしまいます。

このように、イエス様が盗人のようにやって来られるということは、裁きを意味しています。新約聖書において私たちは、イエス様が盗人のように来られるというみことばを、七箇所で見ることができます。

兄弟たち。それらがいつなのか、またどういう時かについては、あなたがたは私たちに書いてもらう必要がありません。主の日が夜中の盗人のように来るということは、あなたがた自身がよく承知しているからです。人々が「平和だ。安全だ。」と言っているそのようなときに、突如として滅びが彼らに襲いかかります。ちょうど妊婦に産みの苦しみが臨むようなもので、それをのがれることは決してできません。しかし、兄弟たち。あなたがたは暗やみの中にはいないのですから、その日が、盗人のようにあなたがたを襲うことはありません。

（Ⅰテサロニケ　5・1～4）

盗人は気づかれないうちに、盗むために突然やってきます。ほんとうに生まれ変わった人々は花嫁です。イエス様はこれらの人々のためには盗人としてではなく、花嫁を迎える花婿として来られるのです。イエス様の再臨はまことの信者にとっては裁きではなく、限りない喜びです。

しかしサルデスの教会に対しては、イエス様は再臨のとき、花婿としてではなく盗人として来られるのです。つまりイエス様はサルデスの教会全体を、花嫁としてではなくこの世に属する者として見ておられます。サルデスの教会では、この世が支配しているのです。ここで私たちは、二重の意味、つまりカトリック教会がこの世を支配し、プロテスタントの教会がこの世の力に支配されている姿を見ることができます。

イエス様の再臨の時に、誰が霊的に生き、誰が霊的に死んでいるかが明らかにされます。ほんとうに生まれ変わっている信者はイエス様のもとに引き上げられ突然その姿が見えなくなります。

泥棒は不法を犯して物を盗ります。彼は自分のことだけを考えています。しかしイエス様は、ご自身の血をもって買い取られた人々をご自身のもとへと引き上げられます。イエス様はご自身のことを考えておられるのではなく、私たちの救いと私たちの栄光を考えておられるのです。

「わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。」

（ヨハネ　14・3）

「父よ。お願いします。あなたがわたしに下さったものをわたしのいる所にわたしといっしょにおらせてください。」

（ヨハネ　17・24）

「勝利を得る者を、わたしとともにわたしの座に着かせよう。それは、わたしが勝利を得て、わたしの父とともに父の御座に着いたのと同じである。」

（黙示　3・21）

2　汚れのない残された人々

私たちはサルデスの教会において、宗教改革の後で堕落していった教会の姿を見ることができます。宗教改革は、ローマカトリック教会の堕落と権力から多くの人々を解放しました。なぜなら「イゼベル」はもはや教えることができなくなったからです。そして信仰によって義とされるという教えが、唯一の真理として認められるようになりました。しかし多くの人々にとっては、

この教えが単なる正しい教えというだけにとどまっていて、この教えを真に自分のものとして体験することがなかったのです。

このような人々の中にも、イエス様が喜ばれる少数の人々の群れ、「残された者」がいたのです。サルデスという言葉は、「残された者」という意味です。エペソ、スミルナ、ペルガモの諸教会においては、忠実な信者はなお多数、存在していました。そしてこの忠実な多数の信者たちが、間違った教えを説く少数の信者たちに惑わされないようにと忠告していたのです。

しかし、テアテラの教会では、イエス様の側にはっきりと立つ人々は、多数ではなく、少数の人々になってしまっていました。サルデスの教会では、「残された者」はただ数人にしかすぎませんでした。このようなわずかな人々の持つ特徴とは、何だったのでしょうか。これらの人々は、イエス様の流された血潮のきよめる力を体験した人々でした。このような人々は赦しを知り、イエス様はもはや「私の罪を覚えておられない」ということを知っていたのです。

これらの人々はまた、聖い歩みをした人々でもありました。汚れた衣とは、罪を意味する言葉です。サルデスの教会では、異邦の宗教や習慣へ転落する罪がありました。「汚れた衣」とは、文字通りの姦淫と、イエス様に対しての姦淫の両方を意味する言葉です。

黙示録19章の7節から8節は、イエス様の花嫁のことが記されています。その花嫁は、「光り輝く、きよい麻布の衣を着る」とあります。この衣は、この人々の「正しい行ない」を意味しています。

「私たちは喜び楽しみ、神をほめたたえよう。小羊の婚姻の時が来て、花嫁はその用意

ができたのだから。花嫁は、光り輝く、きよい麻布の衣を着ることを許された。その麻布とは、聖徒たちの正しい行ないである。」（黙示　19・7、8）

これらの信者たちは、自分の力によって着物をきよく保ったのではなく、イエス様の流された血潮のきよめの力によって、自分の着物をきよく保ったのです。

そこで、私は、「主よ。あなたこそ、ご存知です。」と言った。すると、彼は私にこう言った。「彼らは、大きな患難から抜け出て来た者たちで、その衣を小羊の血で洗って、白くしたのです。」（黙示　7・14）

「兄弟たちは、小羊の血と、自分たちのあかしのことばのゆえに彼に打ち勝った。彼らは死に至るまでもいのちを惜しまなかった。」（黙示　12・11）

彼らは決して、自分の力によってではなく、イエス様の恵みによって白くされ、打ち勝つことができたのです。すべてはただイエス様の贈ってくださった恵みによる結果です。

私たちはみな、この方の満ち満ちた豊かさの中から、恵みの上にさらに恵みを受けたのである。（ヨハネ　1・16）

ですから私たちは日々新たに、イエス様が流された血潮の赦しと、きよめと、守りの力に、感

謝を捧げようではありませんか。

イエス様が私たちにくださった恵みだけが、全てに勝利することを可能にします。悪魔は今も、私たちが衣を汚すように攻撃を加えてきます。悪魔は、例えばテレビや週刊誌などを用いて、私たちの思いを汚そうとしてきます。悪魔に対して意識的に反抗することをせず、またイエス様の血潮による「守る力」に助けを求めようとしない人はわざわいです。私たちは、自分の力で着物をきよく保つことはできないからです。

いっさいの霊肉の汚れから自分をきよめ、神を恐れかしこんで聖きを全うしようではありませんか。

（IIコリント　7・1）

ここに書かれている聖さを全うすることは、私たちが意識的に悪魔に抵抗し、イエス様の血潮の守りを得ることによってだけ可能です。私たちは自分で自分を守ることはできません。ただイエス様が私たちを守ってくださるのです。

あなたがたを、つまずかないように守ることができ、傷のない者として、大きな喜びをもって栄光の御前に立たせることのできる方に、すなわち、私たちの救い主である唯一の神に、栄光、尊厳、支配、権威が、私たちの主イエス・キリストを通して、永遠の先にも、今も、また世々限りなくありますように。アーメン。

（ユダ　24、25）

3　勝利を得る者

私たちは今までに、「いのちのない教会」、「汚れのない残された人々」について学んできましたが、これから私たちは「勝利を得る者」について考えてみたいと思います。勝利を得る者については、5節で次の三つの約束が与えられています。それは、「白い衣を着せられる」、「彼の名をいのちの書から消さない」、「神の御前でその名を言い表わされる」という三つの約束です。

1　白い衣を着せられる

第一の約束は、彼らが「白い衣を着せられる」という約束です。白は勝利の色です。これらの勝利者はローマ人への手紙8章37節にあるように、「圧倒的な勝利者」としての体験をすることができます。しかし、ここで言う「白い衣」は、信者が生まれ変わったときに与えられるイエス・キリストの「義の衣」とは異なる衣です。人が義とされるのは、勝利を得たからではなく、イエス様の義に基づく信仰を持つようになったからです。

イエス様の「義の衣」は、決して汚されることはありません。勝利者の着せられる「白い衣」はイエス様の本質、つまりイエス様の光の本質を象徴する言葉です。

そして彼らの目の前で、御姿が変わり、御顔は太陽のように輝き、御衣は光のように白くなった。

（マタイ　17・2）

この時のイエス様の御姿は、イエス様の内側からの光によって輝いたのです。

織物と宝石の町だったサルデスは、外側を大切にする町でした。外側のものによって人はだまされます。サルデスの教会は外側から見れば生きていましたが、その内側は死んだ教会でした。しかし勝利を得る者の衣はこれとは逆です。それは本当の衣であり、全てにおいてイエス様ご自身であり、そこには人間的なものや、また人間の自己の力によるものは、全く残されていないのです。この衣を着せられるということは、イエス様との永遠の交わりを与えられることを意味しています。

「着物を着せられる」ということは、無罪の宣告を与えられること、永遠に受け入れられることを意味しています。

彼らはあなたの小高い家をくつがえし、高台をこわし、あなたの着物をはぎ取り、あなたの美しい品々を奪い取り、あなたをまる裸にしておこう。（エゼキエル　16・39）

あなたの裸の恥を現わさないために着る白い衣を買いなさい。（黙示　3・18）

見よ。わたしは盗人のように来る。目をさまして、身に着物を着け、裸で歩く恥を人に見られないようにする者は幸いである。（黙示　16・15）

2　その名をいのちの書から消さない

第二の約束は、「勝利を得る者の名前がいのちの書から消し去られることは決してない」という約束です。勝利を得る者は、勝利のための戦いが人間に対する戦いではなく、悪の霊に対するものであることを知っています。彼らは自分の力によって戦うことをせず、完全にイエス様により頼み、神の武具で身を固めて戦うのです。

古代においては、人々は死人の名前を名簿から消し去ることを習慣にしていました。それと同じように、「生きているというのは名前だけで実際には死んでいる人々」は、イエス様によっていのちの書からその名前を消し去られてしまうのです。つまり、神の国においては、その人の歩みの全てが消し去られてしまうのです。

また私は、死んだ人々が、大きい者も、小さい者も御座の前に立っているのを見た。そして、数々の書物が開かれた。また、別の一つの書物も開かれたが、それは、いのちの書であった。死んだ人々は、これらの書物に書きしるされているところに従って、自分の行ないに応じてさばかれた。（黙示　20・12）

生まれ変わった人々の名前は、ひとり残らず「いのちの書」に記されています。

その時、あなたの国の人々を守る大いなる君、ミカエルが立ち上がる。国が始まって以来、その時まで、かつてなかったほどの苦難の時が来る。しかし、その時、あなたの民で、あの書にしるされている者はすべて救われる。（ダニエル　12・1）

そのとき、主を恐れる者たちが、互いに語り合った。主は耳を傾けて、これを聞かれた。主を恐れ、主の御名を尊ぶ者たちのために、主の前で、記憶の書がしるされた。
（マラキ　3・16）

シオンに残された者、エルサレムに残った者は、聖と呼ばれるようになる。みなエルサレムでいのちの書にしるされた者である。
（イザヤ　4・3）

「だがしかし、悪霊どもがあなたがたに服従するからといって、喜んではなりません。ただあなたがたの名が天に書きしるされていることを喜びなさい。」
（ルカ　10・20）

ほんとうに、真の協力者よ。あなたにも頼みます。彼女たちを助けてやってください。この人たちは、いのちの書に名のしるされているクレメンスや、そのほかの私の同労者たちとともに、福音を広めることで私に協力して戦ったのです。
（ピリピ　4・3）

いのちの書に名前が記されず、またいのちの書から名前が消し去られる人々は、神の国から追放されているのです。

彼らがいのちの書から消し去られ、正しい者と並べて、書きしるされることがありませんように。
（詩篇　69・28）

全ての人々の名前が、いのちの書に一度は書き記された、と言えましょう。なぜなら、全ての人々が救いに召されているからです。しかし、せっかく提供された救いを個人的に受け入れず、またイエス様に自分の生活の支配権をゆだねようとしない人は、いのちの書から名前が消されるのです。これが、「滅び」です。

いのちの書に名のしるされていない者はみな、この火の池に投げ込まれた。

（黙示　20・15）

3　父なる神の御前でその名を言い表わされる

第三の約束は、イエス様が父なる神の御前で、その人の名を言い表わしてくださるということです。裁きにおける第一の証人は、イエス・キリストです。1節から2節の後半において、イエス様はサルデスの教会を訴えられましたが、5節においては、勝利を得る者に対して身代わりとなることを約束しておられるのです。

…主は彼らを兄弟と呼ぶことを恥としないで、こう言われます。「わたしは御名を、わたしの兄弟たちに告げよう。教会の中で、わたしはあなたを賛美しよう。」またさらに、「わたしは彼に信頼する。」またさらに「見よ、わたしと、神がわたしに賜わった子たちは。」と言われます。

（ヘブル　2・11～13）

イエス様は訴える時には「神の御前」という言葉を用い、身代わりを約束される時には「父の御前」という言葉を用いておられます。死んでいるサルデスの教会においては、裁かれる「神」が臨まれ、賞賛を与える「父」が臨まれるのではないのです。

「ですから、わたしを人の前で認める者はみな、わたしも、天におられるわたしの父の前でその人を認めます。」（マタイ　10・32）

全ての人の救いも誉れも、ともにイエス様にかかっています。イエス様を拒む人には、永遠の滅びがあるだけです。もしイエス様があなたの父になっていなければ、イエス様に罪の赦しを求め、イエス様に全てを明け渡し、そしてイエス様の霊に満たされるようにと願い求めてください。

こういうわけで、今は、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。（ローマ　8・1）

「耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい」。みことばを通して神が教会に対して言われることを聞く者は、希望を得ることができます。あなたの状態がどのようなものであったとしても、イエス様は「霊の満たし」を持っておられます。ですからイエス様のみもとにいこうではありませんか。イエス様はあなたを満たし、あなたをご自分の道具としてお用いになりたいと思っておられるのです。

天に上げられたイエス様が教会に与えられたみことば

7　勝利を得る者の誉れフィラデルフィヤの教会

黙示録3章7節から13節まで

1　イエス様ご自身の現われ
　1　力ある方
　2　真実な方
　3　聖なる方
2　真の試練――称賛のみことば
　1　小さな力　祈りへの開かれた扉
　2　イエス様の名を否まない　証しへの開かれた扉
　3　イエス様のみことばを守る　天国への開かれた扉
3　勝利を得る者の誉れ
　1　柱とされる
　2　新しい名前を与えられる
　3　冠を与えられる

1　イエス様ご自身の現われ

私たちが学んできたとおり、イエス様は七つの手紙を小アジアの七つの教会に与えられましたが、これらの手紙はいわば「鏡」のようなものです。私たちもこの鏡に照らして、私たちの時代がどのようなものかを真剣に考えてみる必要があります。これらの手紙は、手紙が与えられた当時から終わりの日までの教会の発展の姿を象徴的に明らかにするものです。くどいようですが、もう一度各々の教会の姿を振り返ってみましょう。

エペソの教会で私たちは、教会の堕落の始まりを見ることができます。「あなたには非難すべきことがある」、なぜなら「あなたは初めの愛から離れてしまった」からであるとイエス様は2章4節で言っておられます。

スミルナの教会で私たちは、迫害に直面した教会の姿を見ることができます。この暗い時代の教会はしかし、内面的には豊かな救いを経験していました。なぜならイエス様は「私は、あなたの苦しみと貧しさとを知っている。しかしあなたは実際は富んでいる」と言われ、この教会に対する非難はしておられないからです。

ペルガモの教会で私たちは、サタンが働いた結果として、教会がこの世と妥協していく姿を見ることができます。この世との妥協によって、この教会は世俗化してしまいました。

テアテラの教会では、この世との妥協によって教会が堕落し、階級制度、つまりイゼベルの支配体制が作り出されたのを見ることができます。

サルデスの教会では、神のみことばに帰ろうとする宗教改革の運動にもかかわらず、教会が見せかけのいのちしか持っていなかったことを見ることができます。そのために「あなたは死んでいる」と3章1節後半で言われたのです。

さて、フィラデルフィヤの教会においては、私たちは末の世の信者の姿を見ることができます。教会史的に見ると、この時代は敬虔主義の、また霊的覚醒の、いわゆるリバイバルの時代でした。特に、チンツェンドルフ、ウェスレー、ムーディ、フィニーという人たちが知られています。この教会もまた、ある特定の時代に限定されずに、終わりの日に至るまで継続し続けてゆく教会の一つの姿を現わしています。

[7]また、フィラデルフィヤにある教会の御使いに書き送れ。『聖なる方、真実な方、ダビデのかぎを持っている方、彼が開くとだれも閉じる者がなく、彼が閉じるとだれも開く者がない、その方がこう言われる。

[8]「わたしは、あなたの行ないを知っている。見よ。わたしは、だれも閉じることのできない門を、あなたの前に開いておいた。なぜなら、あなたには少しばかりの力があって、わたしのことばを守り、わたしの名を否まなかったからである。[9]見よ。サタンの会衆に属する者、すなわち、ユダヤ人だと自称しながら実はそうでなくて、うそを言っている者たちに、わたしはこうする。見よ。彼らをあなたの足もとに来てひれ伏させ、わたしがあなたを愛していることを知らせる。[10]あなたが、わたしの忍耐について言ったことばを守ったから、わたしも、地上に住む者たちを試みるために、全世界に来ようとしている試練の時

には、あなたを守ろう。
[11]わたしは、すぐに来る。あなたの冠をだれにも奪われないように、あなたの持っているものをしっかりと持っていなさい。[12]勝利を得る者を、わたしの神の聖所の柱としよう。彼はもはや決して外に出て行くことはない。わたしは彼の上にわたしの神の御名と、わたしの神の都、すなわち、わたしの神のもとを出て天から下って来る新しいエルサレムの名と、わたしの新しい名とを書きしるす。[13]耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。」』

（黙示　3・7～13）

この箇所のテーマは、「リバイバルの中心にある教会」です。

どの手紙を見ても、最初は必ずイエス様の自己紹介から始まっています。そしてイエス様の自己紹介は、いつも手紙がイエス様の啓示であることを示しています。

教会そのものよりも、大切なのはイエス様ご自身です。イエス様が教会に対して語られることができ、教会がイエス様の語られることを聞くことができ、そして教会がイエス様の道具として用いられるためには、イエス様が「ご自身を教会に向かって啓示する」ことが可能でなければなりません。

教会がもはや証しの場にならなくなったときには、イエス様はその教会を口から外へ吐き出してしまわれます。

天に上げられたイエス様は、当時のフィラデルフィヤの教会に対して、ご自身を三つの姿とし

て啓示なさいました。最初は「力ある方」として、次に「真実な方」、また「忠実な方」として、そしてさらに「聖なる方」として、ご自身を現わしておられます。

1　力ある方

イエス様は「力ある方」です。7節に出てくる「かぎ」とは、「力」を現わす言葉です。1章18節によると、イエス様は「死とハデスのかぎ」を持つお方です。このことはイエス様が死に打ち勝たれたこと、死に勝る力を持っておられることを意味しています。イエス様は無限の力を持つお方です。3章7節はイザヤ書22章20節から22節を思い起させます。イザヤ書22章に出てくるエルヤキムは、宮殿の責任者でした。その証拠として彼は大きなかぎを持っていました。エルヤキムは宮殿のすべての部屋に入ることができるかぎを持っていました。特に、彼は貯蔵庫のかぎを持ち、その中から必要なものを取り出して人々に分け与えていたのです。同じようにイエス様によって、つまりイエス様の「かぎ」によって、私たちにも天国の窓が開かれているのです。

——万軍の主は仰せられる。——わたしがあなたがたのために、天の窓を開き、あふれるばかりの祝福をあなたがたに注ぐかどうかをためしてみよ。（マラキ　3・10）

全て求めるものは与えられます。私たちには、イエス様によって全てのものが与えられているのです（ローマ8・32）。イエス様は完全な力を持ち、完全さを保っておられます。しかしイエス様は、弱い者や貧しい者たちを拒まれません。そしてイエス様の愛は、小さな力しか持ってい

なかったフィラデルフィヤの教会にも向けられていました。

力があり、そして強い方として、イエス様は、弱く貧しい人々のところに来られ、恵みを通してそれらの人々を強めてくださるのです。イエス様は、強いお方、力あるお方として、貧しい者や弱い者を愛し、それらの人々に勇気を与えようとしておられるのです。

あなたがたの鍬を剣に、あなたがたのかまを槍に、打ち直せ。弱い者に「私は勇士だ。」と言わせよ。

（ヨエル　3・10）

エフライムは勇士のようになり、その心はぶどう酒に酔ったように喜ぶ。彼らの子らは見て喜び、その心は主にあって大いに楽しむ。

（ゼカリヤ　10・7）

2　真実な方

イエス様は、「真実な方」であり、そして「忠実な方」です。イエス様はこの世が創られる前から、救いのみわざをもたらすお方として示されていたのです。イエス様の忠実さこそが私たちにとって慰めとなるのです。

私たちは真実でなくても、彼は常に真実である。彼にはご自身を否むことができないからである。

（IIテモテ　2・13）

イエス様は忠実であられ、私たちを決して見捨てることをなさいません。

こでイエス様は、どのような非難の言葉も語られていません。たとえば、「あなたがたは初めの愛から離れてしまった」とか、「あなたがたに反対する」といった言葉はここにはありません。

イエス様はフィラデルフィヤの信者たちを喜ばれたのです。これらの信者たちはイエス様から百パーセントの賛同を受けることができたのです。

次に、三つの事がらがこの教会に対して語られています。まず、彼らは小さな力しか持たず、そのため祈るようになり、「イエス様への祈りの開かれた門」を見いだすようになりました。次に彼らはイエス様の名前を拒まず、それゆえに「イエス様を証しするための開かれた門」を見いだすことができました。そして彼らは、イエス様のみことばを守り、それゆえに「天国への開かれた門」を見いだすことができました。これら三つの稱賛のみことばについて考えてみましょう。

1　小さな力

3章8節には「あなたには少しばかりの力があって」と書かれています。ギリシャ語で「力」を表す言葉はいくつかありますが、ここで用いられている「デュナミス」という言葉は「霊的な力」を表しています。ということは、フィラデルフィヤの教会は霊的な力を持っていたことを意味します。霊的な力は、人間的な力が働いていない場合にだけ働くのです。人間的に考えると、フィラデルフィヤの教会は弱い教会でした。その教会は集まる人々も少なく、経済的にも貧しく、そして教育も十分ではなかったと思われます。つまり、この教会は、他に影響を及ぼすことが少なかったのです。

今日でもまた、これと似た経験をなさる方々は多いことでしょう。たとえば、あなたは学校や会社で人々が救われるようにと努力するかもしれません。そして、その結果は悲しいことにまだ誰も救われていないかもしれません。また家庭にあって、子どもや主人をイエス様のもとに導こうといくら努力しても、皆が無関心な態度をとり、まだ誰も救われていないかも知れません。このような場合、あなたは自分には影響力がないといって嘆くかもしれません。しかし、あなたの力が弱いというわけではないのです。

フィラデルフィヤの教会の人々も、「我々は力が弱く何をやっても無駄だ」とか、「我々には望みがない」と言うことはやさしかったかもしれません。しかし、彼らは決してそうは言いませんでした。

今日でも、フィラデルフィヤの教会と同じ環境におかれ、攻めるための闘いがなく、守るための闘いもなく、ただ包囲され、追い込まれてしまっている教会が多くあります。

フィラデルフィヤの教会は悪魔に取り囲まれ、さらに信者たちは不信仰と無関心の壁の前に立たされていました。フィラデルフィヤの教会は、敵の圧倒的な力の前に影響力を及ぼすことができず、全く無力でした。しかし彼らは、イエス様に対する「開かれた門」を持っていました。この弱い教会はまた、「祈る教会」でした。それゆえ、彼らの問題は解決されたのです。

イエス様はこの教会を喜ばれました。私たちにとっても、一番大切なことはイエス様に喜ばれることです。

この教会の人々は、道徳的な力によってイエス様に喜んでいただこうとする努力が失敗に終わ

り、信仰的な努力もまた失敗に終わり、そして自信をなくしていました。つまり、自分自身がすっかり駄目になってしまっていたのです。しかし彼らは、祈りました。そしてそのことを通して「ダビデのかぎ」（黙示3・7）を持つことになったのです。つまり、力ある方、イエス様との真の交わりを得たのです。

フィラデルフィヤの教会には、誇れるようなものは何一つなかったのです。デュナミスという力は、人間の中にある力ではなく、神の力です。この力を人は祈りによって得るのです。

あなたもまた、「私は弱い。私は影響力をもっていない」と言うかもしれません。

パウロもまた、自分自身が弱いとき、神の力を体験した人でした。

私の最初の弁明の際には、私を支持する者はだれもなく、みな私を見捨ててしまいました。どうか、彼らがそのためにさばかれることのありませんように。しかし、主は、私とともに立ち、私に力を与えてくださいました。それは、私を通してみことばが余すところなく宣べ伝えられ、すべての国の人々がみことばを聞くようになるためでした。私はししの口から助け出されました。（IIテモテ　4・16、17）

パウロ自身は、弱さを感じていました。しかし、イエス様は彼と共に立っておられたのです。

また、その啓示があまりにもすばらしいからです。そのために私は、高ぶることのないようにと、肉体に一つのとげを与えられました。それは私が高ぶることのないように、私を打つための、サタンの使いです。このことについては、これを私から去らせてくださる

ようにと、三度も主に願いました。

しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。ですから、私は、キリストのために、弱さ、侮辱、苦痛、迫害、困難に甘んじています。なぜなら、私が弱いときにこそ、私は強いからです。

（IIコリント　12・7～10）

パウロは何度も捕らえられました。彼は捕らえられ、もはや影響を及ぼすことができないと見られていたときでも、実は大きな影響力を持っていました。彼は捕らえられているときに、多くの手紙を書いたのです。

小さな力しか持たないフィラデルフィヤの教会は、それゆえに祈りによってイエス様への門を見いだすことができました。フィラデルフィヤの教会はイエス様に近づき、イエス様から助けと力とを与えられたのです。

まことの祈りとは、弱さの現われ、イエス様へのより頼みの現われであり、また、その告白です。フィラデルフィヤの教会は祈る教会でした。この教会は、イエス様のみもとに至る門を知っていたばかりでなく、この門により頼んだのでした。彼らはそうせざるを得ませんでした。彼らは祈りながらみことばにすがりついていたのです。

もしあなたのみおしえが私の喜びでなかったら、私は自分の悩みの中で滅んでいたでし

よう。

（詩篇　119・92）

フィラデルフィヤの教会は、それ自身が無となり、破産したものとなっていたのです。しかし、祈りがなされるところに、イエス様はご自身を現わしてくださいます。それによって、失望や弱さは消えてなくなっていくのです。

敵に包囲された戦闘では、軍隊は食料や弾薬を飛行機によって空から運んでもらわなければなりません。フィラデルフィヤの教会は、熱心なユダヤ教徒や、この世の人々や、悪霊によって取り囲まれていました。しかし、これらの上には開かれた門がありました。この門が開かれていることは信者たちにとっては何物にもかえがたい大きな慰めであり、そして悪魔にとっては何という大きな敗北でしょうか。

8節で全能のお方であるイエス様は、「だれも閉じることのできない門を、あなたの前に開いておいた」と言っておられます。

多くの人々が「私には力がないから何もできない、自分は駄目だ」と言います。そして諦め、失望してしまっています。これは間違っています。私たちがどのように感じ、どのように考えるかということは、重要ではありません。どうしてかというと、イエス様が無限の力を持っておられ、祈りがなされるところにおいてはご自身を必ず現わしてくださるからです。イエス様を信頼する者は、失望させられることがありません。私たちがイエス様に信頼し、悪魔に立ち向かっていこうとするなら、どのような奇蹟でも起こりえるのです。

テアテラとサルデスの教会は、いつもフィラデルフィヤの教会に対立していました。つまりこれは後にカトリックの教会もプロテスタントの教会も、フィラデルフィヤのような教会を迫害することを意味しています。祈りのあるところでは、必ず悪魔の攻撃が起こるのです。しかし、祈る教会だけがイエス様の承認をいただけるのです。祈る教会に対してだけ、イエス様はご自身を現わされるのです。そして、祈る教会だけをイエス様は用いることがおできになるのです。

2　イエス様の名を否まない

イエス様の第二の称賛は、8節の後半にある、「わたしの名を否まなかったから」というみことばです。そのためにフィラデルフィヤの教会はイエス様を証しするという開かれた門をも持つようになりました。祈りの門が開かれる時に、人々に対しての門もまた開かれるのです。

イエス様は人の心を開かれます。人の心がイエス様に向かって開かれるとき、それはイエス様の奇蹟なのです。

イスラエルの民は、自分自身を神の民だと考えていましたが、実際は悪魔に仕える者となり、イエス様を十字架につけてしまいました。しかし、このように望みのないまでにかたくなにされた心であっても、イエス様は開くことがおできになります。もっとも救われにくいのは、観念論者や唯物論者や無神論者ではなく、自分自身が正しいと信じこんでいる人々です。悪魔に縛られ、悪魔に導かれている人々は、信者の祈りを通して新しく造りかえられなければなりません。

私たちはあらゆる方向から取り囲まれているかも知れません。しかし、私たちの上には門が開

かれています。そして同時に、証しの門もまた開かれているのです。

祈るとき、そして私たちが自らの無力さを知り尽くす時に、私たちはイエス様を証しすることができ、それによって人々の心がイエス様によって開かれるのです。

私たちは、自分という管を通して人々がイエス様のもとに導かれるように、イエス様に尋ね求めることが必要です。人々がイエス様のもとに導かれるかどうかは、決して人間の地位や才能によるのではなく、イエス様がその人の心をお開きになるかどうかによるのです。

私たちが人々をイエス様のみもとに導くことができるのは、私たちが砕かれているときだけです。ただ一つの妨げは、私たち自身の力が余りにも大きすぎるということです。自分自身でそれをしようとすると、失敗に終わります。

イエス様は、私たちがお金を持ち、能力を持っているかどうかではなく、私たちが砕かれているかどうか、つまり、ダビデのかぎをもつイエス様のみ手にすがりついているかどうかを見ておられるのです。もし、私たちを通して、人々がイエス様のみもとに導かれることがないとすれば、私たちはこのことをよく考えてみなければなりません。

フィラデルフィヤの教会の証しを通して、9節にあるとおり、彼らに反対していたグループの指導者たちも信仰に導かれるようになりました。彼らは、かつてはその教会をあざける者でした。しかし、彼らは今やその教会に属したことを喜ぶようになりました。

今はイエス様の敵である人々も、後にはイエス様の救いを喜ぶ者とされることがありえるのです。あなたのまだ救われていない家族たちは、あなたにとって暗黒の壁のように思われるかもし

れませんが、それらの人々も必ず救われるようになるのです。

祈る教会は同時に証しをする教会です。イエス様に至る祈りの門を通る人は、同時に人間に対する証しの門をも通ることでしょう。

さて、その頃、豊かで権力を持っていたユダヤ人たちは、イエス様を激しく拒んでいました。これに対して弱くて権力のない教会は、イエス様への信仰を言い表しました。その結果、この弱い教会の中に、イエス様がご自身を現わされることになったのです。

イエス様はこの弱い教会に対して、最も激しく反対している者もやがては救われる、と約束をなさっておられます。

これらの反対者は自分では神の民だと言っていましたが、実際はサタンの会衆に属する者たちでした。イエス様の霊によって満たされていない者は、悪魔の霊によって満たされているのです。しかし、イエス様は開かれた門を約束してくださっています。私たちは、自分の希望が満たされることが重要なのではなく、イエス様の御名があがめられること、そして、人々が救われることこそが重要なのです。

イエス様は壁に取り囲まれている人々を勇気づけておられ、そしてそれがこの人々にとっての力となっていたのです。

私たちが本当にイエス様により頼んでいるときに、私たちの前に証しの扉が開かれます。そして、人々が救いに導かれるのです。私たちを通して、イエス様の名前が汚されるか、あるいはあがめられるかのどちらかです。イエス様の名前を汚すということは、私たちの中でイエス様に恥

をかかせるようなことをすることです。私たちが祈りと信頼によってイエス様に従うことをしないで、自分の力でイエス様に従おうとするとき、私たちはイエス様の名前を汚すことになります。

フィラデルフィヤの教会に向かって、イエス様は、「あなたがたはわたしの名を否まなかった。つまりわたしを否定し、わたしを捨てさったこの世において、あなたはわたしを否まなかった。またあなたは学校において、職場において、家庭において、わたしが主であり、また導き手であるとはっきりと言い表わした」と言っておられるのです。フィラデルフィヤの教会は、イエス様により頼んだのです。イエス様の御名は彼らにとって、それだけで充分なものだったのです。

イエス様の名は、彼らにとってかけがえのない価値のあるものでした。どれだけ豊かな満たしがイエス様の中にあることでしょうか。イエス様の御名を呼び求める者は救われ、平安を与えられ、赦しが与えられ、永遠のいのちにあずかることができるのです。

イエス様の御名によって、私たちは全ての敵に打ち勝ち、全ての絶望に打ち勝つことができます。「イエス」という名の意味は、救い、慰め、よりどころ、力、喜び、希望です。イエス様は、私たちがイエスの御名、つまりイエス様ご自身に信頼を置くときに、私たちを喜んでくださるのです。

喜んでイエス様に身をささげることが、今の堕落の時代における何よりの証しです。9節にユダヤ人であると自称しながら実際はそうでない人々のことが書かれています。ユダヤ人であるということは、神の民に属していることを意味しています。カトリック教会は自分たちが神の民であると主張しています。またプロテスタント教会も自分たちがいのちをもっていると言っていま

すが、実際には死んでいることが多いのです。

今の時代、真に神の民である教会は、いかなる聖職者も持っていないし、いかなる聖祭も行なわないし、また、いかなる特別の神聖な場所も持っていません。特定の、限定された時間や空間だけの「聖」ということはありえないからです。

真の神の民である教会は、全ての救われた人々、全ての時間、全ての場所が主に捧げられ、その全てが「神聖」なものとされなければなりません。

3　イエス様のみことばを守る

三番目に、このフィラデルフィヤの教会は、イエス様の「みことばを守った」という称賛を与えられました。そのことを通して、この教会は天国へ至る開かれた門を与えられたのです。

フィラデルフィヤの教会はまた、終わりの時代の組織されたキリスト教の象徴です。私たちはこのような堕落の時代に生きているのです。私たちの時代は、多くの形式は持っていても、真の力を持っていないという特徴を持っています。多くのことが試みられていますが、イエス様ご自身のいのちがありません。また、多くの間違った教えにあふれていることも私たちの時代の特徴です（Ⅱテモテ3・1～5）。

このような時代において、私たちはどのようにして自分自身を守ることができるのでしょうか。それはただ、私たちがしっかりと主のみことばに結びつくことによってです。カトリック教会においては迷信が支配し、プロテスタント教会においては不信仰が支配しています。カトリック教

会では過去の人々による言い伝えが守られ、その反面、単純な福音の救いがないがしろにされています。また、プロテスタント教会の多くでは、聖書の多くの箇所は作り話であり、あるいは神話であると考えられています。カソリック教会とプロテスタント教会、つまり、迷信と不信仰の教会以外にも、多くの間違った教えが「統一教会」や「ものみの塔」、「セブンスデイ・アドベンチスト」、「原始福音」などによって広められています。このような間違った教えによって、多くの人々が誤りに導かれ、毒されています。

イエス様が私たちに、「あなたはわたしのことばを守った」と言うことがおできになるかどうか、これはとても重要なことです。イエス様のみことばを守るとは、どういうことでしょうか。それは、救いについてだけでなく、日常の問題についても毎日聖書を調べ、従うということです。私たちはあらゆる機会に、この世のこと、生活のことについて私たちの救い主であるイエス様がどのように言っておられるかを問い続けていかなければなりません。

私たちの霊性が決定的なのではなく、イエス様がみことばを通してどのように言っておられるかが決定的なのです。みことばを守るということは、みことばを信じるということだけでなく、みことばが私たちの導き手となっていなければなりません。私たちのみことばへの立場は、同時に私たちのイエス様への態度を意味しています。みことばを守るということはまた、みことばを他の人々に伝える、つまり、伝道するということでもあります。イエス様のみことばのみが私たちにとって決定的となっているでしょうか。みことばが守られている所では、イエス様が中心になっておられます。イエス様のみことばに全面的に立ち返るようにという呼びかけこそが毎日必

要です。

フィラデルフィヤの教会の人々について、かれらが誤りを犯さなかったとはイエス様は言っておられません。しかし、彼らは、誤りを犯した時には、みことばによって自らを改めたのです。9節後半には、イエス様はフィラデルフィヤの人々を愛している、と記されています。

> 見よ。サタンの会衆に属する者、すなわち、ユダヤ人だと自称しながら実はそうでなくて、うそを言っている者たちに、わたしはこうする。見よ。彼らをあなたの足もとに来てひれ伏させ、わたしがあなたを愛していることを知らせる。（黙示　3・9）

愛されているということは、過ちを犯さないということではありません。反対者たちが彼らの足下にひれ伏したのは、決して教会の立派さによるのではなく、ただこの教会を愛されたお方、イエス様によるのです。従ってみことばを守るということは、イエス様と愛の関係をもつということです。

教会がみことばとの交わりを保つことによって、イエス様もその教会との交わりを保ってくださるのです。教会がみことばを守ることによって、教会も守られるのです。教会がみことばを守ったからこそ、人々は天国への門を見出すことができたのです。

10節で、イエス様は将来のことを見ておられます。サタンがつまずきを与えようと試みています。人々がイエス様を「個人的」に知っていない所では、信仰の試みと攻撃とが起こってきて、信仰が揺らぎ、駄目になってしまうのです。それに反して御霊の住んでいないところ、闇の地に

対してはこのような抵抗も起こってきません。

次のイエス様のみことばが、今日現実のものとなってきています。

というのは、持っている者はさらに与えられて豊かになり、持たない者は持っているものまでも取り上げられてしまうからです。（マタイ　13・12）

信仰が単なる理論になっているところでは、その信仰は打ち破られてしまいます。しかし、イエス様はみことばを守っている教会を、反キリストの時代の苦難の前にご自身のみもとへと引き上げてくださるのです。反キリストの恐るべき時代が来る前に、イエス様はご自身の花嫁をみもとへと引き上げてくださるのです。

創世記5章24節で、エノクを大洪水の前に引き上げてしまわれたように、イエス様はご自身の教会を、その大いなる苦難の前に引き上げてしまわれるのです。

信仰によって、エノクは死を見ることのないように移されました。神に移されて、見えなくなりました。移される前に、彼は神に喜ばれていることが、あかしされていました。（ヘブル　11・5）

次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。（Ⅰテサロニケ　4・17）

聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう。私たちはみなが眠ってしまうのではなく、みな変えられるのです。終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。

（Ⅰコリント　15・51、52）

わたしが行って、あなたがたに場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。（ヨハネ　14・3）

そこで、買いに行くと、その間に花婿が来た。用意のできていた娘たちは、彼といっしょに婚礼の祝宴に行き、戸がしめられた。

（マタイ　25・10）

イエス様のみことばを守った人々は開かれた門の中へと導かれ、見せかけの信者たちは閉ざされた門によって閉め出されます。イエス様は全能のお方です。イエス様は悔い改めのないところ、祈りのないところ、自己中心的なところ、みことばだけを百パーセントその導き手としていないところ、御名が告白されていないところにおいては、門を閉ざされるのです。

しかし、イエス様は、みことばが守られているところ、祈りの中で全てのことがイエス様に語られているところ、自分自身が完全に破綻してしまっているところにおいては、門を開け、覚醒

を与えてくださるのです。

私たちは、イエス様のみことばを、全てにまさって価値のあるものとして受け取っているでしょうか。私たちは、イエス様のみことばを、決定的なものとして受け取っているでしょうか。イエス様との交わりがなければ、生きていくことができなくなっているでしょうか。みことばなくしてはただの一日も生きていくことができなくなっているでしょうか。

人々がみことばなしで生きていけるところにおいては、もはや、イエス様との交わりはありません。みことばに代わりうるものは、何一つありません。みことばは導きとなり、力となり、守りとなるのです。

イエス様は十九世紀に、ロシアにおいて真の信仰の覚醒をお与えになりました。その時中心となり、主の器となったのは、ロシアの皇室の責任者コッフ伯爵でした。やがて迫害が起こり、コッフ伯爵は、「伝道することと、祈禱書なしで祈ることをやめるか、さもなければ、ロシアを出ていくか」という選択を迫られたのです。彼は、ロシアを立ち去る道を選び、家族をロシアに残したままでロシアを去りました。その時彼の妻は彼の逃亡先にあてて一通の電報を打ちましたが、その内容は、「信仰においてイエス様にしっかりとより頼み、みことばから一歩も離れることがないように」というものでした。

三十八年後に、彼は次のような告白を書きのこしています。

「私たちはイエス様のものとなって以来、サタンの宣戦布告を受けています。罪とこの世とは

サタンの最大の軍勢です。しかし、私たちをあらゆる闘いにおいて勝利へと導かれた主は、誉められるべきお方です。主はあらゆる苦難の時において、ますます導きを堅くしてくださいました。私たちの富も宝も、ロシア革命によって全て取り去られました。しかし、私たちはパウロと共に、次のように告白することができます。

悲しんでいるようでも、いつも喜んでおり、貧しいようでも、多くの人を富ませ、何も持たないようでも、すべてのものを持っています。（IIコリント　6・10）

私たちの信仰の生活において、イエス様が私たちの慰めであり、そして力でした。そのことを私たちは八十五年の生涯をもって証しすることができます。私たちはどこでも、どんな時にもキリストの香りであり、イエス様が私たちを迎えに来てくださるそのときまで、生きた証し人となるのです…」。

ここで、今まで学んできたことをまとめておきましょう。

力あるイエス様は、砕かれた人々に対してだけ、ご自身を明らかにされます。自分のまわりに影響を及ぼすことのできない弱い人々も、祈りを通して、「開かれた門」を与えてくださるイエス様によって、奇蹟を体験することができます。

真実で忠実な方として、イエス様はご自身に忠実でその名を否まなかった人々に対してご自身を現わされたのです。このような人々には、他人の心を開き、イエス様のみもとに導く力が与えられるのです。

ヨハネ17章17節にあるように、イエス様は聖なるお方として、みことばによって汚れた人々をきよくしてくださいます。

みことばを守る人々はイエス様の姿に似たものに造り変えられ、そしていつまでもイエス様と共にいることができる「開かれた門」が与えられるのです。それは、比べるもののないほどの栄光です。力のあるお方が、力のない者を「力ある者」にしてくださるのです。真実で忠実なお方が、不真実な者を「真実な者」に変えてくださるのです。聖なるお方が、汚れている者を「きよい者」にしてくださるのです。このようなことができるのは、イエス様だけです。

「わたしは、すぐに来る。」（黙示　3・11）

イエス様が来られることは、間違いのない事実です。イエス様は今日にも来られるかもしれません。

夜はふけて、昼が近づきました。ですから、私たちは、やみのわざを打ち捨てて、光の武具を着けようではありませんか。（ローマ　13・12）

イエス様の再臨は大きな励ましであり、また慰めです。

…あなたの冠をだれにも奪われないように、あなたの持っているものをしっかりと持っていなさい。（黙示　3・11）

これはイエス様の大きな警告です。私たちは、聖書の全てのみことばとイエス様ご自身を、しっかりと自分の内に保っていなければなりません。神の敵と共存することなく、この世と妥協しないことが大切です。

永遠のいのちが失われなくても、「冠」が失われる、ということはありえることです。全ての新しく生まれ変わった信者は救われますが、しかし、全ての信者に「冠」が与えられるわけではありません。「冠」は、イエス様にあって共同の相続人となることを意味しています。

3　勝利を得る者の誉れ

次に勝利を得る者の誉れについてごいっしょに考えてみましょう。

勝利を得る者にたいしての報いは、「柱とされる」、「新しい名前を与えられる」、「冠を与えられる」の三つです。

1　柱とされる

フィラデルフィヤの教会では、人々は小さな力しか持っていませんでした。彼らは自分自身に破産をしてしまっていたために、自分の力をもはや用いようとはしませんでした。ですから彼らは、イエス様の力を持つことができたのです。力あるお方が、無力な者を、「力ある者」にすることがおできになるのです。影響力のない者が、突然影響力のある者になるのです。それは、彼らが「柱とされる」ということです。

柱には、二つの意味があります。一つは目じるしとしての働き、第二は支えとしての働きです。目じるしとしての働きについては、次のような聖書の箇所があります。

主は、昼は、途上の彼らを導くため、雲の柱の中に、夜は、彼らを照らすため、火の柱の中にいて、彼らの前を進まれた。彼らが昼も夜も進んで行くためであった。
（出エジプト　13・21）

見よ。わたしはきょう、あなたを、全国に、ユダの王たち、首長たち、祭司たち、この国の人々に対して、城壁のある町、鉄の柱、青銅の城壁とした。（エレミヤ　1・18）

柱は目じるしであり、遠くからも見ることができます。柱はまた、しっかりと立ち、倒れません。この世においてイエス様に忠実に仕える者は、目じるしとなり、天国においてその報いを受けるのです。

わたしに仕えるというのなら、その人はわたしについて来なさい。わたしがいる所に、わたしに仕える者もいるべきです。もしわたしに仕えるなら、父はその人に報いてくださいます。
（ヨハネ　12・26）

まことに、私のいのちの日の限り、いつくしみと恵みとが、私を追って来るでしょう。私は、いつまでも、主の家に住まいましょう。
（詩篇　23・6）

…このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。
（Ⅰテサロニケ　4・17）

イエス様は、ご自身に忠実な者は決して外に出て行かないことを知っておられます。

柱の第二の働きは、人々の支えとなることです。

そして、私に与えられたこの恵みを認め、柱として重んじられているヤコブとケパとヨハネが、私とバルナバに、交わりのしるしとして右手を差し伸べました。それは、私たちが異邦人のところへ行き、彼らが割礼を受けた人々のところへ行くためです。
（ガラテヤ　2・9）

それは、たとい私がおそくなったばあいでも、神の家でどのように行動すべきかを、あなたが知っておくためです。神の家とは生ける神の教会のことであり、その教会は、真理の柱また土台です。
（Ⅰテモテ　3・15）

柱は支える力を表わします。建築物では、垂直な柱と水平な梁とはお互いに助けあっています。梁は重さを負い、柱はこれを支えます。つまり梁は重荷を負い、柱がその重荷を支えます。教会の信者も、他の人の重荷となるか、あるいは他の人の重荷を支える者となるかのいずれかです。

勝利を得る者は、他の信者の重荷を負い、支え、他の信者の罪と咎との責任を負って自ら悔い改めをする「柱」のような者です。

人はどのようにして柱になることができるのでしょうか。柱になるための条件は、その信者が徹底的に破産を体験していることです。つまり、自分自身が残すところなく砕かれているということです。自分の力を完全に失った人だけが、神のダイナミックな力を体験することができます。つまり、力あるお方によって、力のない者が「力のある者」にされるのです。そのための秘訣は祈りです。弱く、自分の力を失った人は影響を及ぼすことがありません。しかし、このような人々は祈りによって強くされ、証しをする者にされ、そして影響を及ぼす者とされるのです。

2　新しい名前を与えられる

次に、勝利を得る者は、誉れとして三つの名前を与えられます。それは「わたしの神の御名」、「わたしの神の都」つまり「新しいエルサレムの名」、そして「わたしの新しい名」です。

…『わたしは、わたしの父またあなたがたの父、わたしの神またあなたがたの神のもとに上る。』（ヨハネ　20・17）

神の御名を持つということは、神のものとされることを意味しています。神のものとされ、神を自分の父として持つこと以上に大きな誉れがあるでしょうか。神の御名を持つということは、今より永遠に救いを受け、守りを与えられることを意味しています。主は「あなたはわたしのも

のである」と言っておられます。主はまた、「全て私のものはあなたのものである」とも言っておられます。イザヤ書22章20節から22節で、エルヤキムは王室の部屋の鍵を与えられていました。つまり彼は大きな財産への鍵を与えられていたのです。今日、イエス様は神の富へのかぎを持っておられます。イエス様の内に、神の豊かさがかたどられて現わされているのです。イエス様と共に、私たちには全てのものが与えられているのです。

キリストのうちにこそ、神の満ち満ちたご性質が形をとって宿っています。

（コロサイ　2・9）

私たちすべてのために、ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された方が、どうして、御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがありましょう。

（ローマ　8・32）

イエス様によって、神の満たしが私たちに与えられています。放蕩息子に向かってその父は、「全て私のものはお前のものだ」と言いました。イエス様も同じことを私たちに言っておられるのです。

次に、勝利を得る者は誉れとして「わたしの神の都」つまり「新しいエルサレムの名」が与えられます。その意味は、隠されていた国籍が明らかにされるということです。

けれども、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主として

おいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。（ピリピ　3・20）

しかし、上にあるエルサレムは自由であり、私たちの母です。（ガラテヤ4・26）

しかし、あなたがたは、シオンの山、生ける神の都、天にあるエルサレム、無数の御使いたちの大祝会に近づいているのです。また、天に登録されている長子たちの教会、万民の審判者である神、全うされた義人たちの霊、…（ヘブル　12・22、23）

新しい名前を与えられることは、その人が真の教会、新しいエルサレムにある真のイエス様のからだである教会に属する者とされるということです。

私はまた、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために飾られた花嫁のように整えられて、神のみもとを出て、天から下って来るのを見た。（黙示　21・2）

新しいエルサレムは、小羊であるイエス様の花嫁です。第三の名前とは、イエス様の新しい名前のことです。

その目は燃える炎であり、その頭には多くの王冠があって、ご自身のほかだれも知らない名が書かれていた。その方は血に染まった衣を着ていて、その名は「神のことば」と呼ばれた。（黙示　19・12、13）

その着物にも、ももにも、「王の王、主の主。」という名が書かれていた。

（黙示　19・16）

それは、全てのものに対する勝利者となることを意味しています。花嫁が結婚して新しい名前となるように、新しいエルサレム、つまり私たち信者は、小羊であるイエス様に公認され、イエス様の新しい名を与えられるのです。この名前は、イエス様との最も深い交わりの象徴です。これはイエス様がご自身の教会と、真に一つのものとなられることを意味しています。勝利を得る者は、この世においてイエス様の御名を否みませんでした。そのことへの報い、誉れとして、イエス様はご自身の新しい名を教会に与えられるのです。

イエス様が勝利を得る者に対して与えられる名前は、すばらしいものです。それはその人がもはや自我の奴隷から解放され、イエス様のものとされることだからです。私たちは、イエス様の御名を永遠に持つことになります。もはやこの世の奴隷ではなく、イエス様の体である教会の一部とされるのです。そして勝利を得る者は、永遠に新しいエルサレムの名を持つことになります。もはやサタンの奴隷ではなく、イエス様の花嫁とされるのです。勝利を得る者は永遠にイエス様の「新しい名」を持つことになるのです。

3　冠を与えられる

イエス様がくださる次の報いは、勝利を得る者に与えられる冠です。フィラデルフィヤの教会の信者は、周囲の人々、つまり神の民であると自称し、財産を持ち、強い影響力を持っていた人々から軽蔑されていました。しかし、フィラデルフィヤの信者たちは、人から認められたいとは思っていませんでした。

いま私は人に取り入ろうとしているのでしょうか。いや。神に、でしょう。あるいはまた、人の歓心を買おうと努めているのでしょうか。もし私がいまなお人の歓心を買おうとするようなら、私はキリストのしもべとは言えません。（ガラテヤ　1・10）

彼らは主のみことばの権威に従ったのです。彼らにとっては主のみことばだけが、全てだったのです。それゆえ、彼らは冠を受けたのです。

今からは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。かの日には、正しい審判者である主が、それを私に授けてくださるのです。私だけでなく、主の現われを慕っている者には、だれにでも授けてくださるのです。（IIテモテ　4・8）

冠は、用意されています。

また、朽ちることも汚れることも、消えて行くこともない資産を受け継ぐようにしてくださいました。これはあなたがたのために、天にたくわえられているのです。

（Iペテロ　1・4）

冠は、天国にたくわえられています。

また、競技をするときも、規定に従って競技をしなければ栄冠を得ることはできません。

（IIテモテ　2・5）

冠が授けられるのは将来においてです。ということは、信者は冠を授けられないかも知れないという危険をもっています。イエス様を心から喜んで待ち望むことをしない信者や、イエス様に認められることよりも人からよく見られたいと思う人々には、天にたくわえられている冠は与えられないのです。一方、イエス様のみことばを守る人々は、イエス様のみすがたに変えられ、人の心を開く力が与えられます。その人々には他の人々をイエス様のみもとに導くことが許され、そして、報いを受けることが許されているのです。

思慮深い人々は大空の輝きのように輝き、多くの者を義とした者は、世々限りなく、星のようになる。

（ダニエル　12・3）

イエス様は次のように私たちに向かって呼びかけておられます。

こういうわけで、もしあなたがたが、キリストとともによみがえらされたのなら、上にあるものを求めなさい。そこにはキリストが、神の右に座を占めておられます。あなたがたは、地上のものを思わず、天にあるものを思いなさい。

（コロサイ　3・1、2）

イエス様は、私たちの生活に、このような生き生きとした望みを与えようとしておられます。私たちは、今日起こることがらを長い目で見、そのために長い時間をかけなければなりません。力あるお方が、惨めで弱い私たちを、祈りという開かれた門を通して力づけ、「柱」にしようとしておられるのです。

聖なるお方イエス様が、私たちのように汚れている者を、ご自身のみすがたに似た者とし、冠を授けられるような者にしてくださるのです。

フィラデルフィヤの教会は、神の霊によって覚醒を与えられ、満たされている教会でした。私たちもまた、今日、あますところなくイエス様に全てをあけわたそうではありませんか。

主はその御目をもって、あまねく全地を見渡し、その心がご自分と全く一つになっている人々に御力をあらわしてくださるのです。

（II歴代　16・9）

天に上げられたイエス様が教会に与えられたみことば

8　満足し、自信を持っているイエス様なしのラオデキヤの教会

黙示録3章14節から22節まで

1　真の教会
　1　同じ性質
　2　同じ使命
　3　同じ態度
2　イエス様の三つのお名前
　1　アーメンであるお方
　2　忠実で真実な証人
　3　神に造られたものの根源であるお方
3　すべてを知るお方の、教会への批難
4　すべてをなすお方の忠告
5　常に臨在なさるお方は、交わりを求めておられる

[14]また、ラオデキヤにある教会の御使いに書き送れ。『アーメンである方、忠実で、真実な証人、神に造られたものの根源である方がこう言われる。[15]「わたしは、あなたの行ないを知っている。あなたは、冷たくもなく、熱くもない。わたしはむしろ、あなたが冷たいか、熱いかであってほしい。[16]このように、あなたはなまぬるく、熱くも冷たくもないので、わたしの口からあなたを吐き出そう。[17]あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、乏しいものは何もないと言って、実は自分がみじめで、哀れで、貧しくて、盲目で、裸の者であることを知らない。

[18]わたしはあなたに忠告する。豊かな者となるために、火で精練された金をわたしから買いなさい。また、あなたの裸の恥を現わさないために着る白い衣を買いなさい。また、目が見えるようになるため、目に塗る目薬を買いなさい。[19]わたしは、愛する者をしかったり、懲らしめたりする。だから、熱心になって、悔い改めなさい。

[20]見よ。わたしは、戸の外に立ってたたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところにはいって、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。[21]勝利を得る者を、わたしとともにわたしの座に着かせよう。それは、わたしが勝利を得て、わたしの父とともに父の御座に着いたのと同じである。[22]耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。』」

（黙示　3・14～22）

あなたがたとラオデキヤの人たちと、そのほか直接私の顔を見たことのない人たちのた

めにも、私がどんなに苦闘しているか、知ってほしいと思います。（コロサイ　2・1）

どうか、ラオデキヤの兄弟たちに、またヌンパとその家にある教会に、よろしく言ってください。この手紙があなたがたのところで読まれたなら、ラオデキヤ人の教会でも読まれるようにしてください。あなたがたのほうも、ラオデキヤから回って来る手紙を読んでください。（コロサイ　4・15、16）

イエス様が教会に与えられたみことばの七番めは、ラオデキヤの教会への手紙です。この箇所のテーマは、「満足し、自信を持っている教会」、または「豊かであると言っているが、実は貧しい教会」です。私たちは、終わりの時代における教会をここに見ることができます。

またこの手紙で、私たちはイエス様のこの教会における立場を知ることができます。つまり、イエス様は教会の外に立っておられるのです。さらに私たちは、イエス様のこの教会に対する思いを見ることができます。イエス様はこの教会をあきらめられずに、愛をもって呼びかけておられます。

今までに順に学んできた七つの教会は、教会が「世の光」や「証し」となる責任を、歴史の中でいかに果たしてきたかということについて、時の流れの一貫性を持っています。それは、使徒の時代からはじまって、イエス様が教会の無力と怠惰のゆえに教会から離れさってしまわれる時代に至るまでの歴史です。私たちは、この最後の時代を、ラオデキヤの教会に見ることができま

す。

くりかえしますが、私たちは七つの教会の中に、宗教としてのキリスト教の七つの状態を見ることができます。これら七つの状態は、それぞれの時代に姿を消してしまったものではなく、後の時代においてもその姿を残しています。ですから今日においても、私たちは、それぞれの教会の特徴を、いたるところで認めることができるのです。

私たちはまた、はじめの三つの手紙を一つのものとして見ることができます。イエス様は、エペソ、スミルナ、ペルガモの三つの教会全体を一つのものとして見られておられます。しかし、四番目のテアテラの教会からは、みこころにかなった教会というよりは、「宗教としてのキリスト教の教会」といったほうがよくあてはまります。しかし、もちろんそれらの教会の中にも少数の残された人々がいて、これらの人たちはイエス様に忠実に従っていたのです。そして、終わりの時代に現われるのが、まだ姿を見せてはいませんが、ただ一つ、ラオデキヤの教会なのです。

未来に起こるのは、教会の覚醒ではなく、教会の神からの堕落です。

私たちは今日、二つの大きな流れを見ることができます。ローマ・カトリック教会では、「この世を教会化」しようということが試みられ、プロテスタント教会では、「教会をこの世化」しようとすることが試みられます。これら二つの教会は、ともに一つになるのです。なぜそうなるのでしょうか。

1　真の教会

真の教会とは、生まれ変わった信者たちの教会です。真の教会は、イエス様をかしらとして信者が結び合わされている有機体です。しかしカトリック教会も、プロテスタント教会も、どちらもこのような意味での有機体ではありません。

確かに、いつの時代にも生きた信者がおりました。しかし全体的に見ると、今日の教会は、宗教としてのキリスト教、つまり、いのちのない人間的な組織になっています。

まもなくこれら二つの教会は、イエス様なしの教会になることでしょう。イエス様なしの教会ということになれば、二つの教会にはどのような区別もなくなり、二つの教会は一つになるのです。そして、教会とこの世との間にも、もはや何の区別もなくなります。これが反キリストの時代なのです。にせ預言者が統合された教会を支配し、反キリストの支配する国家と一つとなるのです。私たちは現在、そのような状態になる過程のまっただ中にいるのです。

ラオデキヤとは、「国民が決定する」という意味です。ラオデキヤという町は、妥協にあふれた町であり、しっかりとした個性をもたない町でした。ラオデキヤの人々は、あいまいな人々であり、しっかりとした態度をとることをしない人々でした。

これらの人々は、お互いに楽しく生きようとする人々なのです。未来の教会も、このような教会となり、信者も未信者もすべての人々を喜ばせよう、というようになることでしょう。

いま私は人に取り入ろうとしているのでしょうか。いや。神に、でしょう。あるいはまた、人の歓心を買おうと努めているのでしょうか。もし私がいまなお人の歓心を買おうとするようなら、私はキリストのしもべとは言えません。（ガラテヤ　1・10）

あいまいな教会とは、この世の人々から認められることだけを求めて、みことばと聖霊の声には聞き従おうとしない教会です。これは、キリストなしの教会であり、中心のない、形だけの教会です。

未来の教会では、聖書の真理について、自分の好きなような解釈をすればよい、と言われるようになるでしょう。たとえば、イエス様が処女からお生まれになられたこと、イエス様の死が救いに至る唯一の道であるということ、イエス様がよみがえられたこと、そしてイエス様の昇天のこと、イエス様が父の右に座しておられること、イエス様が再臨されること…。これらのことは、必ずしも絶対であるとされなくなります。

つまり、聖書が何を言っているか、ということではなく、人々がどのように考えどのように決定するか、ということの方が重要だと考えられるようになるのです。

ラオデキヤの教会についてくわしく学ぶ前に、私たちは真の教会とは何であるかをごいっしょによく考えてみましょう。

真の教会とは、イエス様の肢体です。イエス様が肢体のかしらであり、肢体はかしらといのちのつながりをもつものです。真の教会の特徴は、主イエス様とからだ、つまりイエス様と新しく生まれ変わった信者たちとの間に、「完全な一致」が保たれていることです。この一致について、三つの項目に分けて考えてみましょう。

1　同じ性質

かしらと肢体とは、同じ性質を持っています。

その栄光と徳によって、尊い、すばらしい約束が私たちに与えられました。それは、あなたがたが、その約束のゆえに、世にある欲のもたらす滅びを免れ、神のご性質にあずかる者となるためです。（IIペテロ　1・4）

新しく生まれ変わった信者たちには、このような天的な、自然を超えた性質が与えられているのです。

私たちはキリストのからだの部分だからです。（エペソ　5・30）

新しい性質の秘密は、聖霊です。

なぜなら、私たちはみな、ユダヤ人もギリシヤ人も、奴隷も自由人も、一つのからだとなるように、一つの御霊によってバプテスマを受け、そしてすべての者が一つの御霊を飲む者とされたからです。（Iコリント　12・13）

けれども、もし神の御霊があなたがたのうちに住んでおられるなら、あなたがたは肉の中にではなく、御霊の中にいるのです。キリストの御霊を持たない人は、キリストのもの

ではありません。　（ローマ　8・9）

2　同じ使命

かしらと肢体とは同じ性質を持つだけではなく、同じ使命を持つものでもあります。かしらの欲することを肢体が行ないます。ところで、かしらは何を欲しているのでしょうか。かしらは、失われているものを探しだし、救おうとしておられるのです。そのためにイエス様はこの地上に来てくださったのです。そのためにイエス様は十字架につかれ、血を流してくださったのです。そのためにイエス様は復活をなさり、今も生きておられるのです。そのためにイエス様はご自身の聖霊を送ってくださったのです。

イエス様は、かしらとしてその肢体に向かって、「世の中に出て行って、福音を宣べ伝えなさい」と命令を与えておられるのです。

それから、イエスは彼らにこう言われた。「全世界に出て行き、すべての造られた者に、福音を宣べ伝えなさい。」　（マルコ　16・15）

3　同じ態度

捕えられて殺されようとする者を救い出し、虐殺されようとする貧困者を助け出せ。

（箴言　24・11）

かしらと肢体とは、悪魔に対して同じ態度をとります。かしらも肢体も、ともに悪魔を拒否し、悪魔から自分自身を切り離します。

いや、彼らのささげる物は、神にではなくて悪霊にささげられている、と言っているのです。私は、あなたがたに悪霊と交わる者になってもらいたくありません。あなたがたが主の杯を飲んだうえ、さらに悪霊の杯を飲むことは、できないことです。主の食卓にあずかったうえ、さらに悪霊の食卓にあずかることはできないことです。

（Ⅰコリント　10・20、21）

ラオデキヤはコロサイの近くにありました。福音は、たぶんコロサイからラオデキヤへと伝えられたのでしょう。パウロは、ラオデキヤへ手紙を書き送ったのですが、それは今では失われてしまっています。

どうか、ラオデキヤの兄弟たちに、またヌンパとその家にある教会に、よろしく言ってください。この手紙があなたがたのところで読まれたなら、ラオデキヤ人の教会でも読まれるようにしてください。あなたがたのほうも、ラオデキヤから回って来る手紙を読んでください。

（コロサイ　4・15、16）

あなたがたとラオデキヤの人たちと、そのほか直接私の顔を見たことのない人たちのためにも、私がどんなに苦闘しているか、知ってほしいと思います。

（コロサイ　2・1）

パウロは、コロサイ人へあてた手紙が、ラオデキヤでも読まれることを望んでいました。ですからラオデキヤの教会の信者たちは、コロサイ人へ送られた手紙の深い真理を理解することができたはずです。しかしその後のラオデキヤの教会の堕落は、おそるべきものでした。

ラオデキヤの教会は、エペソの教会のように初めの愛を忘れたというだけではなく、彼らの初めの状態がどうであったかということさえ忘れ果てていたのです。ラオデキヤの教会は、イエス様との愛の関係を失ってしまっていました。そしてラオデキヤの教会は自ら独立したものとなり、イエス様の愛を欲しいとも思わなくなってしまったのです。つまり、ラオデキヤの教会は、外側の組織しか持たないものになっていたのです。

ここで、これから学ぶことの順序とテーマとを、あらかじめ要約しておきましょう。

私たちは、このラオデキヤの教会への手紙においても、イエス様のすばらしい啓示をみることができます。イエス様はご自身を「アーメンである方」、「忠実で真実な証人」、「神に造られたものの根源であるお方」の三つのお名前をもって言い表しておられます。それは、イエス様が「すべてを知るお方」、「すべてをなすことができるお方」、そして「つねに臨在なさるお方」であるということです。

「すべてを知るお方」として、イエス様は何も知らない教会に対立しておられます。イエス様

は、ご自身については「私は知る」と言われ、教会については「あなたは知らない」と言っておられます。

「すべてをなすことができるお方」として、イエス様は教会に対して忠告を与えておられます。それは救いに至る道です。イエス様はまったく新しい創造をすることがおできになるお方です。

さらに、「つねに臨在なさるお方」として、イエス様は戸の前に立ち、戸をたたき、そして交わりを求めておられます。

これら三つのお名前は、イエス様の偉大さと啓示を私たちに教えます。まず、教会に対して貧しいということ、裸であるということ、見えないということが語られます。そしてこの教会に対して、金と白い衣と目薬を買うという三つの忠告が与えられます。さらにイエス様はこの教会と、光の交わり、いのちの交わり、愛の交わりの三つの交わりを持とうとなさっておられます。

2　イエス様の三つのお名前

さてこれから、イエス様の三つのお名前についてくわしく学んでみましょう。この三つのお名前は、イエス様の啓示です。

1　アーメンであるお方

イエス様はアーメンであるお方です。ユダヤ教においては、「アーメン」は、神の呼び名です。

「この世にあって祝福される者は、まことの神によって祝福され、この世にあって誓う

者は、まことの神によって誓う。先の苦難は忘れられ、わたしの目から隠されるからだ。」（イザヤ　65・16）

ここの、「まことの神」とは、「アーメンである神」という意味です。

神の約束はことごとく、この方において「しかり。」となりました。それで私たちは、この方によって、「アーメン。」と言い、神に栄光を帰するのです。（IIコリント　1・20）

これは、主なる神がイエス様をとおして語られることを意味しています。

アーメンという言葉は、「間違いなく、確かである」という意味です。イエス様の言われることは確かで、誰も神のみことばを変えることはできません。イエス様は、ご自身のみことばと同じく、いつも変わることのないお方です。イエス様とイエス様のみことばとは、切り離すことができません。主なる神は、ご自身をイエス様に現わしておられます。イエス様のみことばは、イエス様が真理であると同じように、絶対的な真理です。

アーメンであり、真理であるイエス様ご自身が、見せかけにすぎないラオデキヤの教会に向かって語っておられます。他の教会においては、本物とにせ物との間にはまだ隔たりがありましたが、ラオデキヤの教会では隔たりさえもなくなってしまっていたのです。この教会は、傲慢になり、自分はすべてを持っている、自分には欠けたものが一つもないと言っていたのです。ラオデキヤの教会の信仰告白は、ただうわべの言葉にしか過ぎなかったのです。

この教会に対して、イエス様は、アーメンなるお方、真理そのものとして、ご自身を現わされました。何という対立でしょうか。イエス様は、偽りのない神の約束を成就なさるお方です。イエス様は、主なる神が約束されたすべてのことを成就し、与えようとしておられるのです。

ラオデキヤの教会も、アーメンなるお方のものとなり、主なる神の約束を成就するものとなるべきでした。しかし残念ながら、この教会はそのようにはなりませんでした。それゆえ、イエス様はこの教会から離れ、主なる神の約束をご自分で成就しなければならなくなったのです。ラオデキヤの教会は、主なる神がアーメンである、つまり真理であることを証明しなければならないはずでしたが、実際はイエス様がこれを証明なさらなければならなくなったのです。

2　忠実で真実な証人

イエス様は忠実で真実なお方です。イエス様は、黙示録1章5節において、すでにご自身を「忠実な証人」と表しておられます。イエス様は、ご自身の血をもって私たちを洗いきよめてくださった真実なお方です。

イエス様は、この同じ愛をもって、堕落したラオデキヤの教会に向かっておられます。イエス様はすべてのことを正確に知っておられる証人です。そのイエス様は、この教会の状態を知りながら、助けようとしておられるのです。イエス様は愛のゆえに、ラオデキヤに向かってその真の姿を明らかにしておられます。

イエス様が言われることを、私たちは絶対に信じなければなりません。イエス様が言われるこ

とを無条件に信じることこそが、私たちを堕落と罪から守ってくれます。

イエス様は、真実なるお方です。

しかし、神の御子が来て、真実な方を知る理解力を私たちに与えてくださったことを知っています。それで私たちは、真実な方のうちに、すなわち御子イエス・キリストのうちにいるのです。この方こそ、まことの神、永遠のいのちです。（Ⅰヨハネ　5・20）

イエス様は、私たちのことを真に思っていてくださるために、私たちの真の姿を明らかにし、そのことによって私たちを破滅から救おうとなさるのです。

ラオデキヤの教会は、真実で、忠実なものであるべきでした。それこそが、教会の使命です。しかしこの教会が「効き目のない塩」となってしまったために、イエス様はこの教会から離れざるを得なくなり、ご自身が真実なるお方、そして忠実なる証人となられたのです。

3　神に造られたものの根源であるお方

イエス様は、見える世界と見えない世界の造り主です。

すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもない。（ヨハネ　1・3）

なぜなら、万物は御子にあって造られたからです。天にあるもの、地にあるもの、見え

るもの、また見えないもの、王座も主権も支配も権威も、すべて御子によって造られたのです。万物は、御子によって造られ、御子のために造られたのです。御子は、万物よりも先に存在し、万物は御子にあって成り立っています。（コロサイ　1・16、17）

イエス様は、ご自身が造られた教会のかしらでもあります。

また、御子はそのからだである教会のかしらです。御子は初めであり、死者の中から最初に生まれた方です。こうして、ご自身がすべてのことにおいて、第一のものとなられたのです。（コロサイ　1・18）

また、忠実な証人、死者の中から最初によみがえられた方、地上の王たちの支配者であるイエス・キリストから、恵みと平安が、あなたがたにあるように。イエス・キリストは私たちを愛して、その血によって私たちを罪から解き放ち、…（黙示　1・5）

イエス様は、天と地をお造りになっただけでなく、信者をも新しくお造りになられたのです。

だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。（IIコリント　5・17）

私たちはすでに、イエス様の新しく創造される力を体験したのでしょうか。イエス様のみこと

ばだけが、新しい創造をもたらすことができます。イエス様のみことばにすべての権威が与えられていないところでは、貧しく、実りがなく、死が支配するのです。

すべての信者は、新しい創造の初穂なのです。

父はみこころのままに、真理のことばをもって私たちをお生みになりました。私たちを、いわば被造物の初穂にするためなのです。

（ヤコブ　1・18）

すべての信者は、自分の態度の中で、このことを証しするために召されているのです。

しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制です。

（ガラテヤ　5・22、23）

しかし、いわゆる「キリスト教」は、残念ながら、この点において失敗をしています。多くの教会で多くの人々が洗礼を授けられ、イエス様の信仰を告白しますが、その人たちの中に新しいいのちの現われが見られないのです。

見えるところは敬虔であっても、その実を否定する者になるからです。こういう人々を避けなさい。

（IIテモテ　3・5）

そこには、この世と、罪と、悪魔にうち勝つ力がありません。

ここまで私たちは、イエス様の三つのお名前が、イエス様の三つの啓示であることを見てきま

した。さらに、イエス様の三つの名前と、三つの啓示とについて、もっとくわしく学んでいきたいと思います。

3　すべてを知るお方の、教会への批難

イエス様は忠実で真実な証人です。イエス様は、すべてを知る証人として、教会の状態を知っておられます。イエス様は、15節で「わたしは知っている」と言っておられます。イエス様はすべてを知るお方です。反対に、敗北し、そして証しを失った教会は、「何も知らない」のです。

「あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、乏しいものは何もないと言って、実は自分がみじめで、哀れで、貧しくて、盲目で、裸の者であることを知らない。」
（黙示　3・17）

真の証人であるイエス様は、ラオデキヤの教会について、「少しのよいところも見い出すことがない」と、おそるべき証言をされています。

なまぬるいということを、イエス様はもっとも憎まれます。イエス様は、なまるいことよりも、冷たいことのほうを好まれます。熱いお湯、あるいは冷たい水ははっきりとしていますが、なまぬるく中途半端な状態は力にもならず、元気を与えるものにもなりません。「熱いか、冷たいか、どちらかであってもらいたい」とイエス様は言っておられます。

私たちはここに、主なる神の価値の尺度を見ることができます。一番上に、「熱い」人々、つ

まりローマ人への手紙12章11節にある、「勤勉で怠らず、霊に燃え、主に仕えなさい。」という言葉を守っている人々がきます。その次に、「冷たい」人々がきます。それはイエス様を拒絶する人々のことです。

そして一番下にくるのが、「なまぬるい」人々です。イエス様につくのかつかないのか、態度をはっきりさせない人々が、ここにくるのです。

前に学んだ四つの教会に対して、イエス様は、「わたしはあなたに対して責めるべきことがある。」と言っておられます。しかし、ラオデキヤの教会に向かっては、イエス様は、「わたしはあなたが嫌いです。」と言っておられます。たとえば、よく冷えた水が欲しいのに、飲んだ水がなまぬるく、すぐに吐き出してしまいたくなるような水だったからです。

なまぬるい水は、熱いお湯と冷たい水とを混ぜ合わせてできます。ラオデキヤの教会では、すべての人に対して席が与えられていました。生き生きとした信者に対しても、十字架に敵する人に対しても、同じように席が与えられていました。お互いに楽しく生きよう、というのが、ラオデキヤの教会のモットーでした。その結果は、イエス様とみことばとに対して無関心で中途半端な態度になってしまったのです。

そこには、統一がありました。なぜなら誰もが、すべての人の行く所へついて行こうとしたからです。そこには、平和がありました。なぜならすべての事がらについて、やりたいようにすることが許されていたからです。そこには、あいまいな態度がありました。そして人々は、それを愛であると言っていたのです。人に対する無関心は、大変失礼なことです。しかし、イエス様に

対する無関心は、さらに悪いことです。イエス様はむしろ、完全に否定されることの方を欲しておられます。なぜなら、イエス様をはっきり否定する人々の方が、イエス様に無関心な人々よりも早く救われるからです。

今日、何と多くの信者たちが、ラオデキヤの教会に似ていることでしょうか。イエス様に対して燃えるような愛がなく、イエス様に対する時間がなく、この世のことがイエス様のことよりも優先してしまっています。これらの人々にとっては、「イエス様に捧げられた人生」などは何か大げさで仰々しいものに思われ、イエス様を大胆に証しするなどということは大変押しつけがましいことに思われます。彼らは、何の犠牲もはらわなくていい信仰を正しいものだと考え、それで十分だと思っています。

イエス様は、こういう態度に対して、はっきりと拒絶なさいます。なまぬるいことは、イエス様にとって憎むべきことであり、イエス様はそれに耐えることがおできにならないのです。このような教会は、イエス様にとっては、ただ障害であるだけです。

なまぬるいことは、悔い改めの反対です。なまぬるいことは、黙示録3章17節にあるとおり、自己満足であり、おごり高ぶるものです。

ラオデキヤの教会は、自己に満足する教会であり、自ら富み、そして自分のことしか考えない教会でした。

現代の教会でも、多くの人々は自分自身のことだけを考え、自分自身を中心にして生活しています。それは、生きている生活ではなく、まさに死にかけている生活にすぎないのです。ですか

らイエス様は、自己満足している教会から見せかけの覆いを取りのけて、ありのままの姿を明るみに出そうとしておられるのです。

「あなたはみじめで、哀れで、貧しくて、盲目で、裸のものである。」と、イエス様は言っておられます。これはまさに、この教会が自分で思いこんでいた自己の状態の逆です。イエス様は、「あなたは富める者でなくて貧しい者であり、あなたは満ちたりた者でなくてみじめで哀れな者であり、あなたは見える者でなくて盲目であり、あなたは着物を着ている者でなくて裸の者である。」と言っておられます。

それは同時に、今日の教会に対するイエス様の判断でもあります。イエス様は、「あなたは目が見えず、耳が聞こえず、歩くことのできない人々の群れである。」と言っておられます。

ラオデキヤの教会は、生まれ変わりのない人々の集まりでした。にもかかわらず、この教会は自らを誇り、また自分のことを多くのものを得ていると思っていたのです。しかしこれらの人々は、霊の実ではなかったのです。霊の実りのない教会は裁きに向っているといえます。

「だれでも、もしわたしにとどまっていなければ、枝のように投げ捨てられて、枯れます。人々はそれを寄せ集めて火に投げ込むので、それは燃えてしまいます。」

（ヨハネ　15・6）

ラオデキヤの教会では、行ないの人々がその中心に置かれ、そのような人々が良く言われました。ラオデキヤの教会はただ自分のことだけを語り、イエス様のことは語りませんでした。そこ

がパウロと異なるところです。

それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくたと思っています。それは、私には、キリストを得、また、キリストの中にある者と認められ、律法による自分の義ではなくて、キリストを信じる信仰による義、すなわち、信仰に基づいて、神から与えられる義を持つことができる、という望みがあるからです。

（ピリピ　3・8、9）

真の教会の証しは、次のとおりです。

というのは、キリストの愛が私たちを取り囲んでいるからです。私たちはこう考えました。ひとりの人がすべての人のために死んだ以上、すべての人が死んだのです。また、キリストがすべての人のために死なれたのは、生きている人々が、もはや自分のためにではなく、自分のために死んでよみがえった方のために生きるためなのです。

（IIコリント　5・14、15）

つまり、イエス様だけが大切なのであって、人間は少しも大切ではないのです。しかし、ラオデキヤの教会は、イエス様を中心として生活していたのではなく、自分自身を中心として生活していたのです。

イエス様は、自分自身をむなしくして従う人でなければ、その人を用いることがおできになりません。イエス様にとっては、中途半端な人は用いることのできない人です。そのような人々がイエス様に従おうと思っても、すぐにこの世と妥協してしまい、その結果は悲劇に終わってしまいます。イエス様の口から吐き出されるという悲劇です。

ラオデキヤの教会は、イエス様の名をもって呼ばれていましたが、イエス様にとって役に立たないものでした。そしてこの教会は、イエス様から離れてしまい、イエス様が用いることができない状態にあったのです。

かつては、ラオデキヤの教会も貧しく、赦しを必要としていました。しかし今や、この教会は豊かになり、自らを誇るようになったのです。彼らはイエス様の敵ではありませんでしたが、イエス様とのいのちの交わりを持たない人々になってしまったのです。日常の生活において、彼らはイエス様のみこころをたずねることをせず、自らの道を歩む者となり、気付かずに妥協するようになったのです。

人々がそれと気付かずに自分自身に満足しているのは、悲劇的な状態です。彼らの良心は死んだも同然になってしまい、イエス様は彼らの良心に向かって語ることができなくなってしまいます。そして人々は、もはや自分がイエス様に従っていないことにも気がつかなくなってしまうのです。

私たちはイエス様の前にあって、つねに貧しく、つねに病んでいる者であることを知るように心がけましょう。私たちの富は、私たちの内にはなく、ただイエス様の内にあるのです。

自己満足をし、自分を正しいと思っている教会に対しては、悪魔も攻撃を加えません。なぜならそのような教会は、悪魔にとってまったく危険とはならないからです。ラオデキヤの教会は、誘惑も受けず、迫害も受けませんでした。黙示録のこの箇所には、ラオデキヤの教会がイエス様の御名を拒んだということも、また堕落したということも書いてありません。ラオデキヤの教会は、迫害も受けず、ボイコットも受けることがありませんでした。その理由はただ一つ、ラオデキヤの教会は、この世と全く異なるところがなかったからです。

17節にある、「私たちは乏しいものは何もない」という態度は、非常に危険な態度です。

そこで、目が手に向かって、「私はあなたを必要としない。」と言うことはできないし、頭が足に向かって、「私はあなたを必要としない。」と言うこともできません。

（Ⅰコリント　12・21）

ある兄弟に対して、「彼は私に何も与えてくれない。彼の言うことは重要なことではない」という態度をとるのは危険なことです。ラオデキヤの教会の人々は、主に対してこのような態度をとっているのです。この教会がとったのは、「私たちは主を必要としない、私たちは自分一人で全てのことをすることができる」という態度でした。

イエス様はヨハネ15章5節の中で、「わたしを離れては、あなたがたは何もすることができない」と言っておられます。ラオデキヤの教会は、イエス様とちょうど逆のことを言っていました。「私たちはあなたなしに何でもできる」と言ったのです。このような信者は、ラオデキヤだけ

でなく、コリントにもいました。

あなたがたは、もう満ち足りています。もう豊かになっています。私たち抜きで、王さまになっています。

（Ⅰコリント　4・8）

このように、イエス様に対して自己満足の態度をとること、そして恵みの御座に近づこうとしないことが悲劇の始まりとなります。ですからイエス様は、ラオデキヤの教会に対して、「あなたがたは何も知らない。あなたがたは、自分たちの霊的な状態に対して何も見えていない」と言っておられるのです。

イエス様は、彼らの真の姿を三つの言葉で表現しておられます。貧しいこと、裸であること、見えないことです。

すべてをご存知で、真実で、忠実な証人であられるイエス様が、私たちの目を開いてくださる時、私たちは自分たちがいかに思い上がっていたかということを体験的に知ります。私たちは自分が価値があると思っていても実は全く価値のない者であり、イエス様なしにはまったく貧しい者であり、自分では何一つ持っていない者であることに気がつくのです。

さらに、私たちは自分自身の破産を体験し、自分の持っているものがいかに実質のないものであるかを体験します。イエス様なしには私たちはまったく裸です。イエス様だけが、私たちの永遠のよりどころであり、また確かな避けどころなのです。

また私たちは、今まで何も見えない者だったことに気がつかされます。人間的な知識や物を見

る目など、イエス様の前には何も見えないのと同じであることに気がつくのです。

イエス様は、「わたしは知り、あなたは知らない」と言っておられます。「あなたのところにあるものは、すべてが見せかけであり、真なものは一つもない」と言っておられます。「あなたの持っている富は見せかけの富であり、あなたは実際は何も持たず、貧しい」と言っておられます。「あなたが着物で身を包んでも、何の役にも立たない。あなたは私の前に全く裸であり、あなたの裸は私の目に明らかだ」と言っておられます。「あなたが見えるというのは誤りで、実際はあなたは全く何も見えない」と言っておられます。

すべてを知るお方であるイエス様は、きびしさをもって、すべてのものを明らかにしておられます。

イエス様は、真実で忠実な証人です。そして、ご自身の血を流して、その愛と忠実さを証明してくださったお方です。そしてイエス様は、私たちに診断を与えられただけでなく、救われる道をもそなえてくださいました。イエス様は、私たちの貧しさと、裸と、見えないことをそのままにしてはおかれません。イエス様は、ラオデキヤの教会に対して、きびしい批判をされるだけではなく、愛をもって彼らに語っておられます。「あなたがたが救われたいと願いさえすれば、わたしはあなたを助けよう。私はあなたを助けることができる」と。イエス様はけっしてお見捨てになることはないのです。

4　すべてをなすお方の忠告

イエス様は、神に造られたものの根源であるお方です。それは、イエス様が全能のお方であるということです。全能のお方として、イエス様はラオデキヤの教会に忠告を与えておられます。

「わたしはあなたに忠告する。豊かな者となるために、火で精練された金をわたしから買いなさい。また、あなたの裸の恥を現わさないために着る白い衣を買いなさい。また、目が見えるようになるため、目に塗る目薬を買いなさい。」（黙示　3・18）

イエス様の忠告こそが、私たちの逃れ道であり、また救いへの道です。全能のお方であるイエス様は、私たちを完全に新しく造り変えることのできるお方です。

このことは、彼が信じた神、すなわち死者を生かし、無いものを有るもののようにお呼びになる方の御前で、そうなのです。（ローマ　4・17）

イエス様は、無から有をとり出される方です。ドイツには、「忠告を受けいれない者を助けることはできない」ということわざがあります。

さて、ラオデキヤはフルギアの首都で、紀元前三世紀にできたギリシヤの植民都市でした。ラオデキヤは三つのことで有名でした。まず、アジア地方全体の通貨を扱う銀行があり、裕福な都市でした。紀元六〇年にラオデキヤが完全に破壊された時に、ローマが復興のために資金を提供

しようとしました。しかし、ラオデキヤはその申し出を断ったのです。それほどまでに、この町は豊かだったのです。

次にラオデキヤを有名にしたものは、黒く染められた生地でした。そのためラオデキヤは非常に豊かになり、人々はそれを誇りとしていました。

さらに、ラオデキヤには医学校があったことでも有名でした。特にフルギアの鉱石を原料とする目薬が有名でした。この目薬を作った人は、ガレン博士といいました。

以上の、金と、布地と、目薬が、ラオデキヤの三つの特産物でした。

ですからイエス様は、彼らに対して、「あなたがたのところには、有名な銀行がある。しかしそれは真の富ではなくて、見せかけのものである。だからわたしのもとに来なさい。そして真の富を見いだしなさい」と言っておられます。

さらに、「あなたがたの布地はどこでも評判だ。しかしいくらいい布地の着物を着ても、あなたがたはわたしの前に立つことはできない。だからわたしのところに来てわたしの着物を着なさい。この着物を着れば、主なる神にいつでも受け入れていただけるのだから」と言っておられます。

また、「ガレン博士の目薬は、非常に有名でよく売れている。しかしその目薬は、あなたがたが霊的な盲目から解放されるためには何の役にも立たない。だからわたしのもとに来なさい。そして真理を見いだしなさい」と言っておられます。

ここでイエス様はラオデキヤに三つの物を提供しておられます。まず、火で精練された金です。

イエス様はそれをまことの富であると言っておられます。火で精練された金は、まことの信仰であり、イエス様との真の交わりであり、それらは迫害と試練とによって精練されるものです。

信仰の試練は、火を通して精練されてもなお朽ちて行く金よりも尊いのであって、イエス・キリストの現われのときに称賛と光栄と栄誉に至るものであることがわかります。

（Ⅰペテロ　1・7）

ご承知のように、あなたがたが先祖から伝わったむなしい生き方から贖い出されたのは、銀や金のような朽ちる物にはよらず、…

（Ⅰペテロ　1・18）

ラオデキヤの銀行の金貨は、その価値が安定していたために信用を得、大きな富が集中しました。しかしイエス様は、これらすべての金も貧しいものであり、にせものであると言っておられます。「わたしのもとに来なさい。そうすれば、あなたがたはほんとうに豊かになることができる」と言っておられるのです。人間が持てるものは、本来貧しいものにすぎません。なぜなら、すべての富はイエス様の中にあるからです。

このキリストのうちに、知恵と知識との宝がすべて隠されているのです。

（コロサイ　2・3）

すべての人間的な富は、いつかは価値のないものであることが明らかになります。イエス様に

あって、真に豊かになっている人は幸いです。

次にイエス様は、ラオデキヤの教会に対してご自身の「義の白い着物」を提供しておられます。私たちの着物、自分自身を正しいとする着物は、ラオデキヤの黒く染められた布地と同じように黒い着物です。それは、私たちの不義、私たちの恥を覆い隠すためには何の役にも立ちません。イエス様は、赦しとご自身の義を提供してくださいます。イエス様の義の衣を与えられてはじめて、私たちは主なる神の御前に出ることができるのです。

その当時、裁判で訴えられた被告人は、黒い着物を着て法廷に出ました。そして有罪判決を受けた人は、着物を脱がせられました。そのために、イエス様は17節で、「あなたは裸である」と言っておられるのです。イエス様もまた、十字架につけられる前に裸にされたのです。しかし、無罪の判決を受けた人は、白い衣を着せられました。

イエス様は教会に有罪判決を与え、教会を裸にすることを決して望んではおられません。逆に白い衣を提供し、教会を聖め、無罪の宣告を与えることを望んでおられるのです。

「ところで、王が客を見ようとしてはいって来ると、そこに婚礼の礼服を着ていない者がひとりいた。そこで、王は言った。『あなたは、どうして礼服を着ないで、ここにはいって来たのですか。』しかし、彼は黙っていた。そこで、王はしもべたちに、『あれの手足を縛って、外の暗やみに放り出せ。そこで泣いて歯ぎしりするのだ。』と言った。」

（マタイ　22・11～13）

またイエス様は、ラオデキヤの教会に対して、ものが本当に見えるようになる目薬を提供しておられます。自分で作った目薬など、何の役にも立ちません。

ラオデキヤの教会は、霊的なものの価値に対して目が開かれていませんでした。しかし彼らはイエス様から、目薬によってそれらが見えるようになりなさい、という申し出を受けていたのです。人の心の目は、聖霊の働きによってはじめて開かれます。聖霊を持つ人は自分の真の状態を知っているので、自分自身を決して大した者だと思うことはありません。

神の聖霊は、人のすべての自己満足を打ち砕きます。私たちは、イエス様に従えば従うほど、自分自身がいかにだめな者であるかがよくわかるようになります。

イエス様はラオデキヤの教会に対して、「あなたは目が見えない」と言っておられます。目が見えないということは、貧しく、そしてきれいな着物を着ていないことを意味します。貧しさと裸との理由は、目が開かれていないことにあります。

イエスは彼らに言われた。「もしあなたがたが盲目であったなら、あなたがたに罪はなかったでしょう。しかし、あなたがたは今、『私たちは目が見える。』と言っています。あなたがたの罪は残るのです。」

（ヨハネ　9・41）

イエス様を拒む人は、すべて霊的に目が見えない人です。ラオデキヤの教会も霊的に目が見えなくなっていて、イエス様を拒み、自分たちですべてのことができると思っているのです。この教会に向かってイエス様は、「あなたは貧しく、裸であり、目が見えない」と言っておられます。

そしてこの教会に対してイエス様は、金と、白い着物と、目薬とを提供しておられるのです。

金、つまりイエス様との交わりこそが、永遠の価値を持つものです。

白い衣、つまりイエス様の赦しこそが、私たちに永遠の平安を与える唯一のものです。

目薬、つまりイエス様から与えられる聖霊の働きが、私たちに、主なる神のきよさと、人間の債務と、救いについて目を開かせてくれる唯一のものです。それは何というイエス様のご忠告でしょうか。

「わたしはあなたに忠告する。豊かな者となるために、火で精練された金をわたしから買いなさい。また、あなたの裸の恥を現わさないために着る白い衣を買いなさい。また、目が見えるようになるため、目に塗る目薬を買いなさい。わたしは、愛する者をしかったり、懲らしめたりする。だから、熱心になって、悔い改めなさい。」（黙示　3・18、19）

ルカの福音書14章23節で、主人はしもべたちに、「無理にでも人々を連れてきなさい」と言っています。同じようにイエス様も、ラオデキヤの教会に向かって強い忠告を与えておられます。

「わたしから買いなさい。あなたはただ良いものだけを受け取る」と。しかし、良いものを受け取るために、ラオデキヤはいったい何を支払ったらいいのでしょうか。

ああ。乾いている者はみな、水を求めて出て来い。金のない者も。さあ、穀物を買って食べよ。さあ、金を払わないで、穀物を買い、代価を払わないで、ぶどう酒と乳を買え。（イザヤ　55・1）

御霊も花嫁も言う。「来てください。」これを聞く者は、「来てください。」と言いなさい。
渇く者は来なさい。いのちの水がほしい者は、それをただで受けなさい。
（黙示　22・17）

ここに書いてあるとおり、イエス様は、常にただで、価なしに与えようと言ってくださるのです。イエス様が求めておられるのは、私たちが罪を告白することと、支配権をイエス様に委ねることだけなのです。

この世では、私たちは何かをただでもらうことはありません。いつも代価を払って何かを買わなければなりません。そして人々は、つまらないことのために、健康や、名誉や、きよさを失ってまでも、それを手に入れようとします。

しかし、私たちがイエス様から受け取るものには、つまらないものは何一つありません。しかもそれらをただで受け取ることができるのです。イエス様との、つまりみことばとの交わりを通して、はかりしれない富が私たちのものとなります。

私たちが、貧しい者、裸の者、見えない者として、イエス様のところに来るとき、私たちは真に豊かになり、平安に満たされ、そして目が開かれるのです。イエス様のところに来て、何ももらえなかった人は、ひとりもいません。イエス様が与えてくださるものは、代価がいらない贈り物です。

ラオデキヤの教会は、イエス様に捨てられ、滅された教会ではなくて、イエス様に愛された教会でした。19節にこの愛が示されています。ラオデキヤの教会は、病気になった子供のようなものです。イエス様はこの子供を愛し、そして助けようとしておられるのです。

イエス様の愛は、あきらめるということがありません。イエス様は、みことばによって救うことができない時には、懲らしめによって救おうとなさいます。19節では、「わたし」という言葉が強調されています。それは、「わたし」だけがそれができるという意味です。イエス様のように愛してくださるお方はほかにはいないのです。

イエス様は、懲らしめのために懲らしめられるのではなく、すべてのことは、イエス様の愛と忠実さの現われであると言っておられます。イエス様は、裁きのために裁くのではなく、ご自身のみもとに立ち返らせるために裁くのだと言っておられます。イエス様の懲らしめは、外科医ががんを取り除くように非常に深くまで達するものです。それによってイエス様はうぬぼれを打ち砕き、悔い改めの実を要求し、悔い改めを命じられるのです。

最初に、私たちはイエス様の拒絶を見ました。「あなたがなまぬるいのでわたしの口から吐き出そう。」というみことばです。

次に、私たちはイエス様の真剣さを見ました。「あなたは貧しく、裸で、盲目である。」というみことばです。

そして最後に、私たちはイエス様が救いに導こうとなさる徹底した態度を見ました。「わたしから買いなさい。」というみことばです。

19節の終わりにある「悔い改めなさい」というみことばは、新しくやり直しなさいという意味です。ラオデキヤの教会は、自分自身に満足していました。しかしイエス様は、この教会に対して、新しいやり直しを提供しようとしておられるのです。

悔い改めとは、単に打ち砕かれるだけでなく、大きな喜びを与えるものです。ちょうど放蕩息子が父の家に帰ってきたように。全てのことが失敗し、そして罪に落とされてしまっている時に、再び新しくやり直すことができることほど、すばらしいことはありません。

イエス様は悔い改めを要求しておられます。そして間違った道から立ち返り、新しくやり直すことを求めておられます。イエス様は悔い改めて新しくやり直しなさいと言っておられます。そしてやり直した状態にいつもいることを求めておられます。ちょうど陸上選手が目標を目指して走り続けるように、そのようでありなさいと言っておられるのです。

イエス様は、目標を目指して走る者を探しておられます。決して散歩する者を探しておられるのではありません。イエス様は散歩する者を吐き出してしまわれます。

わが子よ。あなたの心をわたしに向けよ。あなたの目は、わたしの道を見守れ。

（箴言　23・26）

主はその御目をもって、あまねく全地を見渡し、その心がご自分と全く一つになっている人々に御力をあらわしてくださるのです。

（II歴代　16・9）

さて、黙示録の2章から3章にわたる七つの教会へあてた手紙は、私たちが学校でもらう通信簿のようなものです。これによって、人は自分の状態がどうであるかを知ることができます。これらの手紙の目的は落第させることではなく、忠告を与えることです。イエス様がラオデキヤの教会に与えられた手紙も、決して最終的な評価ではなく、この教会の状態を中間的に評価した通信簿であると言えます。イエス様はその通信簿で、「あなたは貧しく、裸で、目が見えない。そしてあなたはなまぬるい。」と言っておられます。ラオデキヤの教会は、おそるべき自己満足におちいっていたのです。しかし、イエス様の批判は決して愛のない、冷たいものではありません。イエス様は、「にもかかわらず愛しておられる」のです。

「わたしは、愛する者をしかったり、懲らしめたりする。だから、熱心になって、悔い改めなさい。」（黙示　3・19）

あなたの人生の最悪の時にも、あなたを愛するイエス様は、常にそのできごとの背後に立っていてくださいます。あなたの生活を新たにし、あなたの恥を覆い隠してくださるイエス様に、すべてを委ねるようにしてください。

5　常に臨在なさるお方は、交わりを求めておられる

黙示録3章20節から22節では、イエス様はアーメンなるお方、常に臨在なさるお方として、ご自身を現わしておられます。ご臨在なさるお方として、イエス様は戸の外に立ち、戸をたたき、

そして交わりを求めておられます。

イエス様との交わりには、三つの交わりがあります。「光の交わり」、「いのちの交わり」、そして「愛の交わり」の三つです。

「見よ。わたしは、戸の外に立ってたたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしは、彼のところにはいって、彼とともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする。勝利を得る者を、わたしとともにわたしの座に着かせよう。それは、わたしが勝利を得て、わたしの父とともに父の御座に着いたのと同じである。耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。」（黙示　3・20～22）

「戸の外に立ってたたく」とあるように、イエス様はその教会の戸の前に、見知らぬ人のように、忘れ去られた人のように、立っておられるのです。この教会は、高慢であり、目が見えず、自らに満ち足りている教会です。この教会の中にはイエス様の居場所がなく、イエス様は戸の外に立たされておられるのです。

イエス様の中にこそ、主なる神の栄光と富とがあります。イエス様は死とよみとのかぎを持つお方であり、また天国へのかぎを持つお方です。にもかかわらず、イエス様は戸の中に入ろうとはなさらないで、戸の外に立って、戸をたたいておられるのです。イエス様は、戸をたたき、そして待っておられるのです。

昔、家の中に入るためには、鉄の輪を打ち鳴らすか、あるいは声をかけるかしました。イエス

様は、その両方をなさっておられます。それは、イエス様がどうしても家の中に入りたいという気持ちを表しています。イエス様は、常に臨在しておられ、あらゆる権利が与えられているにもかかわらず、まるで中に入る権利を持たない客か亡命者のように、戸の前に立って懇願しておられるのです。

イエス様は、ご自身を受け入れることを誰にも強制されることはありません。

戸を開くということは、イエス様のみことばをよく聞くことであり、イエス様のことばを真剣に聞くことであり、そしてそのみことばに心から従うことです。

戸を開くと、そこに、奇蹟が起こります。懇願するイエス様が栄光ある王となられ、そのお方が私たちに食事を与えてくださるようになります。私たちが食事を差し上げるのではなくて、客が主人となり、イエス様の方から豊かに与えてくださるのです。

イエス様は、光であり、あらゆる恥を隠してくださるお方です。光であるイエス様を見つめる人は、イエス様の前に悔い改めをしないわけにはいかなくなります。真の悔い改めによって、私たちは喜びと自由とを与えられます。イエス様の光の中に、明るみに出されたものは、もはや罪ではなくて光なのです。ラオデキヤの教会と同じように、私たちもイエス様との光の交わりを必要としているのです。

しかし、もし神が光の中におられるように、私たちも光の中を歩んでいるなら、私たちは互いに交わりを保ち、御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。

（Ⅰヨハネ　1・7）

もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。（Ⅰヨハネ　1・9）

自分のそむきの罪を隠す者は成功しない。それを告白して、それを捨てる者はあわれみを受ける。（箴言　28・13）

ダビデは、このような光の交わりの祝福をよく知っている人でした。

幸いなことよ。そのそむきを赦され、罪をおおわれた人は。幸いなことよ。主が、咎をお認めにならない人、心に欺きのないその人は。私は黙っていたときには、一日中、うめいて、私の骨々は疲れ果てました。それは、御手が昼も夜も私の上に重くのしかかり、私の骨髄は、夏のひでりでかわききったからです。私は、自分の罪を、あなたに知らせ、私の咎を隠しませんでした。私は申しました。「私のそむきの罪を主に告白しよう。」すると、あなたは私の罪のとがめを赦されました。（詩篇　32・1～5）

光の交わりから、いのちの交わりが生まれてきます。つまり、イエス様との生きたつながりが生まれてくるのです。私たちにとって、この交わりに留まることほど大切なことはありません。イエス様なしに、私たちは何物も持つことはできません。イエス様なしには、私たちは何の進歩

もありません。私たちは、自分自身はぼろぼろですが、イエス様との交わりをとおしてのみ、満足と満たしとを体験することができます。イエス様は、すべての人が悔い改めて「戸を開く」ように、私たちにあわれみを与えてくださいます。光の交わりの中から、罪の赦しの喜びと、解放を受けた平安が得られるのです。そしてそこから、イエス様とのいのちの交わりが始まるのです。

イエス様とのいのちの交わりとは何でしょうか。それは、毎日イエス様のみことばを聞き、イエス様に自分を明け渡すことです。イエス様のみことばが、食べ物となり、力となり、喜びとなります。人は、イエス様のご臨在を体験し、そして主にあって喜ぶようになります。そして人は、見える物に依り頼むのではなくて、見えないイエス様に目をとめるようになります。人は自分の惨めさをますます知るようになり、イエス様にあって富むようになるのです。人は、自己中心の生活をしなくなり、イエス様のみこころを問うようになり、自分の思いではなくイエス様のみこころがなるようにと願うようになるのです。

光の交わりから、いのちの交わりが生まれ、その次に愛の交わりが生まれます。

悔い改めによって、人は恵みをいただき、イエス様とともに歩む特権を与えられます。そしてイエス様との光、いのち、愛の交わりによって、私たちは、イエス様とともに御座に着かせていただくのです。

「勝利を得る者を、わたしとともにわたしの座に着かせよう。それは、わたしが勝利を得て、わたしの父とともに父の御座に着いたのと同じである。」　（黙示　3・21）

このラオデキヤの教会への手紙は、最大の罪の告発、もっとも鋭い警告、もっとも激しい悔い改めへの呼びかけ、もっとも深い愛、そしてもっとも高い約束です。

イエス様は、十字架によって勝利を得、その時から全てを支配しておられます。教会は、今なお戦い続けています。しかしイエス様は、この教会をご自身の御座にまで高めようとしておられるのです。

「父よ。お願いします。あなたがわたしに下さったものをわたしのいる所にわたしといっしょにおらせてください。あなたがわたしを世の始まる前から愛しておられたためにわたしに下さったわたしの栄光を、彼らが見るようになるためです。」（ヨハネ 17・24）

イエス様は、まだご自身の御座には着いておられません。イエス様は、今は父なる神の御座の右に着いておられるのです。しかし間もなく、イエス様はご自身の御座にお着きになるでしょう。そして私たちもまた、イエス様の御座に、ともに着かせていただけるようになることでしょう。

ユダヤ教は、天国で座している方は主だけであり、その他の全ての人々は立っているのだ、と教えています。しかし、黙示録3章21節では、イエス様の花嫁である勝利を得る者は、イエス様のそばにともに座ることが約束されているのです。この約束は、私たちの想像をはるかに超えています。

神の御座については、黙示録の中で四十七回にもわたって述べられています。神の御座は、天と地におけるすべてのできごとの出発点です。イエス様は、このような御座をすべての勝利者に

備えていてくださるのです。そしてこのお約束を、イエス様ご自身に対してなまぬるい態度の教会に与えておられるのです。ラオデキヤのようなイエス様に無関心な教会に対して、イエス様は、「勝利を得る者を、わたしとともにわたしの座に着かせよう。」と約束しておられるのです。

「耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。」（黙示　3・22）

さて、この手紙をとおして、聖霊は何を語っておられるのでしょうか。御霊は、イエス様について語っておられます。御霊は、イエス様を全ての中心にし、イエス様に栄光を帰させようとしておられるのです。それによって、教会の真の姿も同時に明らかにされます。

アーメンであるお方、忠実で真実な証人であるお方、そして造られたものの根源であるお方であるイエス様は、私たちにご自身を啓示され、そして私たちの答を待っておられます。

イエス様は、私たちのなまぬるさを批難し、妥協する者を赦さず、私たちが自己満足を捨て去ることを期待しておられます。

イエス様のご支配に身をゆだねる者は、まわりの人々をイエス様のみもとに導こうとするようになります。

私たちは、フィラデルフィヤの教会にイエス様の再臨を待ち望んでいる少数の人たちがいることを学びましたが、ラオデキヤの教会は名前だけの教会であり、もうそこにはイエス様を待ち望む者は誰もいなかったのです。

フィラデルフィヤの少数の人々は黙示録22章20節のように「アーメン。主イエスよ、来てくだ

さい」と言っていましたが、他の多くの人々は「イエス様はまだまだ来ない」と言っていました。

「ところが、もし、そのしもべが、『主人の帰りはまだだ。』と心の中で思い、下男や下女を打ちたたき、食べたり飲んだり、酒に酔ったりし始めると、しもべの主人は、思いがけない日の思わぬ時間に帰って来ます。そして、彼をきびしく罰して、不忠実な者どもと同じめに会わせるに違いありません。」

（ルカ　12・45、46）

初めの人々は、油を用意して待っていた賢い娘たちのような人々であり、その他の人々は、外に出て戸をたたいたが開けてもらうことのできなかった愚かな娘たちに似ています。

ラオデキヤの教会への手紙の中で、イエス様は、ご自身の名を持つ教会への裁きを告げておられます。

「あなたがたは、地の塩です。もし塩が塩けをなくしたら、何によって塩けをつけるのでしょう。もう何の役にも立たず、外に捨てられて、人々に踏みつけられるだけです。」

（マタイ　5・13）

かつて、イスラエルの民はこの地上の塩であり、証し人でした。しかしこの塩は力をなくしました。そのために捨てられてしまったのです。

そして、イスラエルの民に代わって、教会が塩となる使命を与えられるようになりました。しかしラオデキヤの教会は、なまぬるく、力がなく、そのためにイエス様の口から吐き出されるよ

うになってしまったのです。パウロは、イスラエルの民と教会について、ローマ人への手紙11章20節から23節までに書き記しています。イスラエルの民が神の裁きを受けたのと同じように、名前だけの教会も神の裁きを受けるのです。

イエス様の口から吐き出される、という裁きがくる時に、真に生まれ変わった信者たちは天に引き上げられていくのです。大いなる苦しみの日がくる前に、これらの信者たちは引き上げられると約束されています。

そして、主の花嫁が取り去られた後には、いのちを持たない、名前だけのキリスト教徒が残されるのです。これらの人々がイエス様の口から吐き出されるのです。つまりこれは、イエス様に属していない人々だけが裁かれるということを意味しています。なまぬるさ、目が見えないこと、そしてうぬぼれとが、すでにいたるところに見られます。

まもなくイエス様は、真のいのちを持つ花嫁の所に来られ、ご自身の御座にまで高く引き上げてくださるのです。

聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう。私たちはみなが眠ってしまうのではなく、みな変えられるのです。（Ⅰコリント　15・51）

次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。（Ⅰテサロニケ　4・17）

「父よ。お願いします。あなたがわたしに下さったものをわたしのいる所にわたしといっしょにおらせてください。あなたがわたしを世の始まる前から愛しておられたためにわたしに下さったわたしの栄光を、彼らが見るようになるためです。」（ヨハネ 17・24）

しかし、私たちは、私たちを愛してくださった方によって、これらすべてのことの中にあっても、圧倒的な勝利者となるのです。（ローマ 8・37）

「勝利を得る者を、わたしとともにわたしの座に着かせよう。それは、わたしが勝利を得て、わたしの父とともに父の御座に着いたのと同じである。」（黙示 3・21）